

---

# 勇者指令ダグオンA's どっこい

ジャン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

勇者指令ダグオンA・S どっこい

### 【Nコード】

N3304R

### 【作者名】

ジャン

### 【あらすじ】

ナスカとの激しい戦いは決着を見たが

二年後

・・・この馬鹿の戦いは終わっていなかった・・・

・そう高校生活と言つ戦いが・・・

シリアスなバトルは無いよロボットバトルも無いよ

## 第一話 ダメ人間高校生

南家

「・・・暇だね」

「・・・暇だな」

新次郎とことはが文字通り暇を持て余していた。

「最近はやて姉ちゃん来ないね」

「・・・そうだな」

管理局の仕事が忙しくなったらしく最近南家を訪れていないはやて。

「ZZZZZZZZZZZZZZZZZZZZ」

そして呑気にリビングで寝ているぐうたら兄貴南力。

「そつえば冷蔵庫にスイカあったよね？」

「うん」

新次郎とことはが思い立ったのは・・・

「「スイカ割りしよう!」!」

リビングにシートを敷き季節はずれのスイカを置きゴルフクラブ（ドライバー）を構える新次郎。

「んじゃ目隠しして・・・」

「参加回って」

新次郎が目隠しをし回転する。

「もつと右右・・・」

「・・・よつとつと」

ことはの誘導に新次郎が従うが回りすぎて気持ち悪い。

「そこそこ!!」

「おりゃあああああああ!!」

新次郎がゴルフクラブを思いつきり・・・

「うぎゃあああああああ!!」

眠っている力の頭に振り下ろした。

「痛・・・」

力の頭に包帯を巻くことは。

「たく・・・俺だからかすり傷で済んだんだぞ！！並の人間じゃ大怪我だぞ！！」

「・・・ごめんなさい」

二人して謝る新次郎とことはだった。

スイカ割りは大人の人とルールを守って正しくやりましょう

## 第一話 ダメ人間高校生

### 征西学園高等学校

「くそ昨日は酷い目にあつた」

頭に包帯巻いて力は机にダウンしていた。

「うゝん最近不幸の手紙が着たんだよね」

「嫌だ」

「不気味」

何やらクラスの女子達が不幸の手紙が来たと話している。

「どうしよう、不幸の手紙なんて送らないと」

「けどそれって迷信でしょ」

「気にし過ぎだつて」

「けど」

困っている女子。すると

「んあ、そんなに気になるなら俺に出せ。俺別に気にしないから」

ダルそうに言う南力20歳・職業高校生兼ヤクザ。

「え？けど」

「良いの良いの俺今更不幸が増えた事じゃ気にしねえから」

楽観的に言う力。

翌日

南家

新次郎が郵便受けを覗くと・・・

「兄ちゃんまた不幸の手紙着たぞ」

「ああ・・・またか」

南家の居間のテーブルにびっしりある不幸の手紙。力の発言はクラス中に響いたらしくクラスの悩める生徒が力に不幸の手紙を出したのだった。

「で？これどうすんの？」

久しぶりに訪ねてきたはやてが呆れて聞いてみると力は答えた。

「燃せ燃せ。んなゴミいらねえ」

庭で焚き火やる力。

「たく資源の無駄遣いを・・・」

「そろそろ焼けるかな？」

新次郎とこととは不幸の手紙の焚き火に季節はずれの芋を入れていた。早い話がついでに焼き芋をやるうということになった。

「不幸の手紙で焼き芋なんて乙だね？」

「うんうん」

何食わぬ顔で焼く新次郎とこととは。そして

「おいことはおめえにも不幸の手紙着たぞ」



「はい」

と言っことはは焚き火に不幸の手紙をくべた。

「まさか・・・ことはちゃんも力君と一緒に事言ったの？」

「うん 私不幸の手紙なんて気にしないもん」

「俺も・・・」

新次郎とことはの反応に呆れるはやて。力の家族を長年やっている  
と神経図太くなるようです。

「つんつくつん・・・出来た」

棒で突っついて見事に焼き芋が完成した。

「うわ〜ほっかほか」

「美味しい〜」

「う〜ん寒い時にはこれだね」

南家、八神家は不幸の手紙で焼いた焼き芋を頬張っていた。

だがこの出来事が後に凄まじい事が起こるのだった。

翌日

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

何やら苦い顔をしている力。はやてが心配そうに答える。

「力君どないした？」

「ああはやて・・・・・・・・なんだろう・・・・・・・・俺最近幸福な事が起きて」

「え？」

「近所で札束拾ったし・・・・・・・・交番に届けたら貰えたし・・・・・・・・この間の小テスト満天だったし・・・・・・・・宿題忘れても先生が熱出して休んでセーフだったし・・・・・・・・」

不幸の手紙を貰ってから何故か幸福な事が起こるようになった力。

「それええことやん・・・・・・・・」

「アホか・・・・・・・・逆に不気味なんだよ・・・・・・・・」

普段不幸と言う名の不幸を体験している男にとって逆に幸福が来ることは不気味以外にないようだった。

「おう南〜今日は良い事あったか〜」

「・・・・・・・・うるせえ」

クラスメイトAが力に幸福を尋ねてくるが力自身は幸福は不気味らしい。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「力君？」

「!!!!」

びつくりした顔で振り返る力。それを見たはやては大層驚いた。

「な・・・なんや・・・」

「ああ・・・悪い」

「挙動不審やな」

・ 普段不幸体質の人には幸福は不気味らしい。それを見たはやては・・・

「・・・・・・・・こうなったら・・・来い」

「え？ちよつと」

何故か校舎裏に連れ出された力。

「は・はやてちゃん・・・な・なにやんの？そんな物騒なもの持つて」

巨大鎖鉄球『金平糖』を構えるはやて。

「決まってるやろ〜これで力君の幸福をぶっ飛ばんすんや・・・」

何処にそんな腕力があるのか金平糖をブンブン振り回すはやて。

「え！ちょっと待って・・・そんなもんだたつたら！！」

「安心せい・・・お前は当たったくらいじゃ死なん・・・」

「ちよいま「ウジウジせん」と男らしゅう観念しいや！！」「うぎゃあ  
ああああああ！！！！」

金平糖で壁に叩き付けられる力。すると力の身体から何かが飛び出  
した。

「あ・・・なんかいつもの体質に戻ったような」

その後力は元の不幸体質に戻った。

因みに何故かに幸福が訪れたかと言うと・・・

天界

「あの男不幸じゃビビらないからな」

という神の気まぐれだったらしい。

チャララッラッラ〜ン

楓

「はいどうも〜皆さんお久しぶりです！南楓です！さあ何で私がここに現れたというと・・・」

テロップ『勇者指令ダグオンA'sどっこいお便りコーナー』

楓

「と言うわけです。私この番組のパーソナリティを勤めさせていただく事になりました〜またお前かよと言うそのあなたはまあ置いておいてください・・・」

楓

「では！気を取り直して・・・このコーナーは読者の皆様から頂いたお便りを一話につき1回と言うペースで発表させていただくコーナーです。早速お便りを発表させていただきます！」

ズバリ質問します

力とはやてつてあれでフラグ立ちましたよね

つて事は何時夫婦になるんですか？

んでもって二人の式はやるんですか？

楓

「そうですね〜やるんですかね〜結婚婚。え？作者さんから手紙が・  
・・」

渡された紙を見る楓。

楓

「何々『私はロマンスが出来ません』の一言ですね〜と言うより・  
・あのあの人達結婚するのでしょうか？やるとしたら原作ファン  
から苦情の雨霰になりそうですね〜と言うよりも誰なんでしょうね  
〜私のお婆ちゃん。明確に明かす気があるんでしょうかね〜うんう  
ん」

一人頷く楓。

楓

「とまあ適当に私が喋り続けましたが！今回はここでお開きにさせ  
ていただきます！質問のお便りはメッセージボックスまでどしどし  
ご応募ください！一人一回ではありません！出来る限りお答えしま  
す！それではまったね〜・・・まってね〜って私のキャラじゃない  
か・・・」

## 第一話 ダメ人間高校生（後書き）

北斗

「ん？キャラロがデート？」

紫

「そうそう なんかわからないけど最近どうもおめかししちゃってね  
もう可愛いなのって・・・ダーリンなに銃持ち出してんの？」

北斗

「ウチの娘たぶらかすとは・・・殺しに行く」

紫

「ダーリン・・・いくらなんでも子供相手に銃向けるなんて大人気  
ないんじゃないじゃキ 拳銃突きつける音

北斗

「お前が先に死ぬか？」

次回！勇者指令ダグオンA's どっこい 北斗対エリオ

霧風

「・・・父上子離れしろよ」

## 第二話 北斗対エリオ

キャラクターのおさらい

名前 南力

年齢 二十歳

好きな物 焼肉 野球

容姿 大道寺炎のBボタンカラー

職業 高校生兼八神組構成員

留年がたたり二十歳で高校生のまま。学年的には高校三年生であり進路を決めなければならぬ。

本人曰くはやてとの関係は進展したわけではないらしく。平行線を保っていると思っている。

大の野球好きが祟り時速160キロの球を投げることができ拳句の果てにはXサンシャインという魔球を投げる事までできてしまう。

現在警察官採用試験に合格するべく勉強中。

ボイス 鈴村健一

名前 東飛鳥

年齢 二十歳

好きな物 酒、パチンコ

容姿 直死の魔眼を持つ人

職業 時空管理局員兼八神組構成員

管理局の暴れん坊。直属の上司を神経性胃炎で何度も病院送りにし時空犯罪者のボスを何度も病院送りにした。悪党に対しては徹底的にDSになる。理由は「なんで悪党に容赦してあげなきゃならんよ」らしい。一度目を着け完全に悪人認定された人物は何処に居よ



うが探し出し徹底的に痛めつける。意図的に外相を全身数十箇所  
骨折内臓はズタズタ、打撲は数え切れず生きているのが奇跡に止  
める事ができる。

言い訳は「生かして捕らえているだろ」ととりあえず生きている事  
を主張している。

大体の犯罪者は最低ランクの最低階級で舐めてかかるが返り討ちに  
あう。

なおお仕置きで最も治安が悪い場所に転属されたが3日でもっとも  
治安の良い場所に変えてしまった。

問題行動が多いが検挙率だけは異常に高くそのせいかクビは免れて  
いる。

ボイス 坂本真綾

名前 北斗

年齢 26歳

好きな物 魚料理 拳銃

容姿 たれ目の金髪の坊主

職業 漁師兼八神組構成員

戦闘民族羅刹一族の一人だが力との戦いやキャロとの出会いを得  
て離脱。最近本当に金髪の坊主のようになり口癖が「死ね」「殺す  
ぞ」になり拳銃の果てには銃まで撃つという人間の風上にも置けな  
い男。八神組唯一の子持ちのダメ親父。

ボイス 関俊彦

名前 サイモン

年齢 14歳ほど

好きな物 映画 遊園地

容姿 幼い頃の毛の色が違うユーノ君

職業 無職兼八神組構成員

ラディ星の王子であり同胞を探している。宇宙人であるがゆえ物凄い怪力の持ち主。見た目が9歳児くらいにしか見えず子供容姿のためによく女装させられた。そのせいか最近変装の名人になってしまった。なお彼の持つタクティカルコマンダーは同じボイスの人間なら誰でも使う事ができるためヴィヴィオやセインが悪戯でタクティカルスーツを装着して遊んでいる。

ボイス 水橋かおり

## 第二話 北斗対エリオ

何処かのとある漁師町

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

無愛想な顔で釣り船を捜査する北斗。地球文化に溶け込む事ができず何処かで隠居する事になったのだった。

「うーん」

自宅にて日々のやりくりで苦労する紫。

「母上・・・慣れないことしないで遊んだら？どうせ姉来るし」

北斗と紫の一子、霧風2歳がそう告げた。この霧風は両親&姉が天

然のため必然的に2歳児でありながら精神年齢30歳だった。

「うるさい。たまには母親らしい事させんかい!」

「・・・へいへい」

母紫の姿に呆れる霧風。

「あ!ただいま・・・」

フエイトに保護されているキャロだが・・・何故か北斗の家に入りするようになった。

「えつと・・・その・・・」

「ん?」

キャロの様子が変な事に気づいた北斗。

翌日

いつも通り魚釣って帰ってくるとキャロと玄関でぶつかった。

「ん?どうした?キャロ」

「え?あ・・・その・・・大丈夫・・・」

ソワソワしているキャロを見送る北斗。

「・・・」

キャラの行動に考える北斗。

(キャラの様子がおかしい・・・まさかデート?)

頭の中で葛藤する北斗。

(は・ははははは・・・年頃の小娘にはよくある事だ・・・く！  
いかん！付いていつてはいかん！！)

更に気になる北斗。

(い！いかん！！絶対にいかん！！あとを着けるなど！！！！)

頭抱えている北斗。こうなってはただの心配性のお父さんです。

その時

「あれ？父上。姉上見なかった？」

「なに？」

「いや姉上買い物目も忘れていったから」

「よし！俺が届に行こう！！」

口実ができて喜ぶ北斗。

「とか何とか言って本当は姉上のこと気になるだけじゃないの？」

精神年齢30歳のセガレ霧風は甘くなかった。

「ば・馬鹿なことを言うな・・・俺は別に・・・」

「・・・・・・・・・・」

北斗の顔をジーツと見る霧風。

「んじゃ行ってくる」

拳銃を持ちキャラ口を追いかける北斗だが・・・

「わかった〜姉上の事は黙っておいてやるから街中でまた拳銃撃つなよ〜」

「・・・・・・・・うるせえ・・・」

頭に筋浮かばさながら北斗は町に向かった。

「ん？」

早速キャラ口を見つける北斗。妙にめかし込んで何かを待っている。

「・・・なんだ？様子が変だぞ・・・」

その時北斗が見たのは・・・

「!?!」

キャラ口と同じ年くらいの赤毛の少年だった。

家に帰る北斗は頭を抱えていた。

「キャラが男と歩いていやがった・・・何が起きた・・・」

頭抱える北斗その姿は完全に年頃の娘を持った心配性の親父だった。

「まあ〜良いじゃないの〜デートの一つくらい〜」

「・・・デート」

紫の言葉にぼそりと呟く北斗。

「まあ思春期の女の子にとってお父さんって一番八つ当たりの対象になるのかもね〜んで彼氏のところであらすんよ」

ガーン！！

演目生涯の嘆きになった北斗。

BARフェニックス

「~~~~~」

力、飛鳥成人組を引き連れて飲んだくれる北斗。もうこうなればただのダメ親父である。

「そりゃね〜キャロだって年頃なんだしね〜」

同じ女性である飛鳥はうんうんと頷く。

「まあ・・・そのうちお父さん嫌いとか言っと思春期がくるんじゃないかね？」

「!?!」

その言葉にガーンとなる飲んだくれ親父。

翌日

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

殺伐とした雰囲気、橋の陰に隠れ、キャロを見る北斗、力、飛鳥。隠れているつもりだが道行く人は気配に気づき視線を向ける人々。

「あ・・・キャロ」

「あ・・・エリオ」

キャロとエリオの姿を見る力と飛鳥。

そして

・・・チャキ・・・チャキ・・・

「北斗さん・・・なんで拳銃に弾込めてんの？」

「・・・うちの娘たぶらかすとは良い度胸だ・・・」

「ちよつと待て!!」

北斗を羽交い絞めにする力と飛鳥。

「いいか！落ち着け!!」

「そうそう!!いくらなんでも子供に銃向けるっていうのは大人気ないチャキ」おめえが先に死ぬか？」

飛鳥の脳天に銃突きつける北斗。

(・・・不味い!!このままではエリオの奴北斗に殺される!!)

力と飛鳥の脳裏で血だまりに沈むエリオの姿が・・・

「あ！移動したぞ・・・」

キヤロとエリオの後を追う3馬鹿。

「はあ・・・心配させちゃったかな」

「キヤロどっしたの？」



「うづん。気にしないで」

勘が鋭くなったのか3馬鹿の尾行にとっくに気づいているキャラ口だ  
った。

いつもたむろする喫茶店

何やら楽しそうな雰囲気のエリオとキャラ口をジーツと見ている3馬  
鹿。

「・・・楽しそうね」

「そうだね」

銃を持っている北斗は冷静さを保とうとしている。

その時

「これがウチの義父です」

「」「！」「」

何故か3馬鹿の間近に居るキャラ口とエリオ。キャラ口に義父と紹介さ  
れる北斗。

「どっしたの？」

「あーはい！この子私と同じ家族です！」

「家族？」

キャロの言葉に？マークの飛鳥。

「は・はじめ・・・まして・・・」

北斗と対面しているエリオ滅茶苦茶ビビってますそれもそのはず・・・

「あの・・・冷静に話し合いませんか？」

「・・・安心しろ・・・俺は冷静だ」

「じゃあ！銃下ろしてふんぞり返るのやめてください！..！」

北斗の態度に頭を抱える力、飛鳥、キャロ。思いつき上から目線でエリオを見る北斗。

「んで？ウチの義娘とはどういう関係だ？」

「どつって・・・家族と言つか・・・なんとと言つか・・・」

拳銃片手にふんぞり返っている北斗を見ながらエリオは出来るだけ冷静に答えた。

「もう～お義父さん・・・照れちゃって～」

「・・・照れてんのかあいつ？」

「さあ？」

もう見慣れたと言わんばかりのキャロに力と飛鳥はお手上げ状態だった。

「むゝあなたみたいな過保護な親始めて見ました！」

「エリオ君お義父さん別に過保護じゃないよ？」

「え？」

銃持ちながら話聞いている北斗のことを見たエリオは驚いている。

それもそのはず・・・普段の北斗は放任主義の最低ダメ親父である。キャロに至っては信頼してるんだと思っている。

「・・・嘘だな・・・あいつ絶対過保護なダメ親父だな」

「あんあん」

首を縦に振る力と飛鳥。

平行線が保たれるその時・・・

飛鳥に警察無線情報が入った。

「え？楼上事件？犯人がこの店に向かってうつひゃー！！」

何故か店にトラックが突っ込み店内がパニックになる。

「な・・・なんなんだよ・・・」

ウザそうに起き上がる力その時・・・

「え？」

トラックから降りてきた犯人がキャロにナイフを突きつけ人質に取った。

「何あいつ？」

「銀行強盗だって・・・トラックで逃げてる最中にここに来て・・・人質は」

今人質として居るのは力、飛鳥、北斗、エリオ、キャロだけだった。他の客は上手いタイミングで逃げたようだった。

「車用意しろ！赤い車で滅茶苦茶スピードが出る奴だ！！」

表に居る武装警官に向かって要求する犯人。

「・・・こういう場合って人質の命のために税金出してくれんの？」

「無理無理・・・こういう場合ってセオリーだと問答無用で強行突入されんのがオチよ」

「じゃあどつするんですか？」

力の質問に答える現場活動が長い飛鳥。エリオが飛鳥の冷静な状況判断に抗議したその時北斗が立ち上がった。

「キヤロ・・・北斗さん？」

犯人の前に立つ北斗は拳銃を構えた。

「てめ・・・デカか？」

「いや・・・そこら辺に住んでる通りすがりのただの漁師だ・・・」

「そこら辺に住んでる通りすがりのただの漁師がなんで拳銃持つてんだよ！」

キヤロを人質にとりながら犯人は叫ぶ。そして銃を向けられているのにキヤロは全く動揺していない。

「ねえ・・・投降した方がいいよ・・・ウチのお義父さん本気出したら、やたらめつたら撃つから」

「へー！そんな脅しに乗るかよ！撃てるもんなら撃つてみるよ！」

キヤロの冷静な説得を無視し強がる犯人。その言葉を聞いた力と飛鳥は・・・

「なんて言った？」

「撃てるもんなら撃つてみるだって・・・その言葉後悔すんなよ」

顔を見合わせる力と飛鳥。そして耳を塞いだ。犯人は何のまねだと思った瞬間。

ズドン！！

「！！！」

キャラを人質にしている犯人に向かって北斗が発砲を始めた。

「うい d w q j h ぴ h u n d x 9 u p e z x a y e O B Z e y U  
K B D S Y X U G」

パニックになる犯人にキャラは・・・

「ねえ今からでも遅くないから私の事放しましょうよ」

全く動揺していない。北斗が発砲するのはもう慣れてしまったようだった。

「黙れ！お前を人質にすれば絶対に」

次の瞬間キャラの髪の毛の隙間から銃弾が飛び出し犯人の顔を掠める。

「！！！」

ゾツとする犯人。

「あっはっは・・・お義父さん私の事お構い無しで撃ってますから・・・」

ガンガンガンガンガンガンガンガン！！！！

キャラや他の客が居るのにも係らず全弾発射する北斗。そして弾が切れると楽しそうに弾を装填し始める。その光景で店の中は蜂の巣になりつつある。

「ギブギブギブ！！」

銃弾の雨の中犯人は両手を上げ降参の姿勢をとった。そして警察にそのまま御用になった。北斗に駆け寄るキャラ。そしてエリオは・

「あなた最低です！娘ごと犯人を撃つなんて！！」

人質に取られたキャラもろとも発砲した北斗を睨むエリオかし・

「・・・こいつは最低限の自分の身ぐらい自分で守れる」

言い切った北斗の目を見たエリオはその瞳の中にあるキャラへの絶対の信頼を見てしまった。その目は過保護なダメ親父ではなかった。

「お父さんは強いんですか？」

「ははは」

エリオの問いに渴いた笑いをするキャラ。

「そつういえばお前キャラを嫁にするのか？」

「よー」

「ボン！！」

北斗の嫁と言つ言葉にボンとなるキャロ。

「お嫁さんってそういうわけじゃ・・・」

「・・・てめえその程度の覚悟か？・・・俺を倒してキャロを物にしようとは思わねえのか？」

拳銃抜く北斗だが・・・

「だから子供に拳銃向けんじゃねえ！！」

「ごめんエリオ君！ウチのお義父さんこういう言い方しか出来ないの！」

北斗を押さえつける力とエリオに必死に謝るキャロ。

そしてエリオは思った。

(・・・僕・・・あの人が倒さなくちゃいけないんだ・・・)

「・・・んまあ・・・男の覚悟は決めるんだな・・・」

北斗の言葉にエリオはムカついたのか打倒北斗を誓うのだった。

なお後にできる翼を持った友達勇者ロボが北斗を襲撃したのは言う



までもない。

チャラララッチャッチャーン

「はいどうも」『勇者指令ダグオンA's』どっこいお便りコーナー  
「パーソナリティの南楓です」すい〜い」

ドンドンドン！パフパフパフ！！

一人ブースの中で寂しく玩具の楽器鳴らして盛り上げようとする楓。

「う〜寂しいです・・・またここで一人でしゃべり続けなくちゃいけないんだな〜と思います・・・切ないです・・・ともかく！お便りを紹介します！」

質問ですが、カと楓はいつたいどうやって戻ったんでしょうか？

恐らく楓が絡んではいると思いますがその辺を教えてください。

「との事です！どうやって助かったんでしょうね私達？え〜今！作者さんからFAXが届きました」

あれは神様のご褒美です

「との事です・・・え？神様のご褒美？と言う事はあれですか？生還方法は読者の皆様のご想像にお任せしますって奴ですか？うーん こういう事ですかね？物語を受ける人間にとって10人居れば10通りの答えがあるから答えはあえて書かないって奴でしょうか？もっともらしい言い分ですね！アイデアないだけじゃないですか？」

再びFAX

「はいはい・・・作者からです」

アイデアはないわけじゃないよ

「とまあ作者が生還方法送られてきました！と言うわけで！作者があえて描かなかったお爺ちゃんの生還方法！いつてみましょう！Q  
！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

暗闇の中力は一人佇んでいた。

「・・・暗いな・・・ここ・・・」

目を覚ます力は暗闇の中まばゆい光を見つけた。まるで力呼んで  
いるかのように・・・

「なんだ？・・・来いって言うのか？」

力がその光に向かって歩こうとしたその時

(・・・力・・・)

「!?!」

突然響いた声に足を止める力。

「・・・この声・・・まさか」

(・・・お前はその先に行くつもりなのか?)

「・・・父さん・・・」

死んだ父の声・・・そして

(・・・小僧・・・お前が居なくなったら誰がはやてを守る)

「・・・ダイノガイスト・・・」

(・・・あなたは主を見捨てるのですか?)

「・・・リインフォース」

力に言葉をかける声達。

(・・・力・・・その光の先にはいつでも行ける・・・だがな・・・  
お前は自分で地獄の道を生きる決意をしただろ・・・)

「・・・父さん」

(・・・お前はまだこちらに来るのは早すぎる・・・それに・・・  
3年後・・・ドライアスはどうする?)

「!?!」

力の脳裏に浮かぶ宇宙皇帝ドライアスの姿。

(・・・ふん・・・ドライアスに借りがある・・・小僧・・・お前  
はドライアスの手からはやてを見捨てる気か?)

ダイノガイストの言葉に力は・・・

「・・・ざけんな・・・俺ははやての家来だ!!・・・主はどんな  
事があっても絶対に守る!!それだけは譲れねえ!!」

(・・・ふん・・・生意気な小僧め)

闇の道が開かれる。

(・・・行つてこい・・・力)

「ああ!?!」

新吉、ダイノガイスト、リインフォースに見送られながら力は戦いという命ギリギリの地獄の道に舞い戻った。

「ん・・・あ・・・」

何処かの海岸で目を覚ます力。

『力!!!』

近くを搜索していたエクスカイザーが力を保護した。

「ああ・・・エクスカイザー・・・悪いんだけどさ・・・海鳴まで直行してくんない？はやてとの約束に遅れちまう・・・」

『力!力!!!』

「というシーンでした。因みに私も何処かにぽつりと現れました。いや、消えていた間の記憶ないんですね。これが」とまあ今日はここで開きにさせていたただきます！！質問のお便りはメッセー。ジボツクスまでどしどしご応募ください！一人一回ではありません！出来る限りお答えします！では！君のうちにも宇宙人・・・居る？なぐんちゃって・・・寂しいよ」

## 第二話 北斗対エリオ（後書き）

いや〜今日も楽しかったな〜え？何々・・・俺を殺しにあの砲台と死神が襲撃してきた・・・え？管理局の強いやつらやはやてファンまで襲撃に来た！勘弁してくれよ〜

次回！勇者指令ダグオンA's どっこい 力抹殺大作戦4 初代、二代目、三代目ダグオン対管理局

こうなったらダグオン総当りじゃ！！

楓

「因みに三代目は私！」

### 第三話 力抹殺大作戦4

管理局で

「んでね〜聞いてよ〜」

食堂ではやての話を聞かされているなのはとフェイト。

「んでね〜これがまた可愛くてね〜」

(眼科に行つてほしいのはやてちゃん)

そう・・・はやてが語っているのは早い話が惚気話だった。

5時間後

「う〜〜」

「ぐ〜〜」

はやての惚気話を聞かされてお腹いっぱいと言った様子なのはとフェイト。

そして思った。

なのはは最近ユーノと遊ぶなくてイラっとしているのに、いつでも



逢えてイチャイチャしているはやてに正直絞め殺したい衝動にかられた事もあった。最近のユーノも仕事が忙しいらしくなのはもとに來れない・・・ユーノにオーバーワークを仕掛けているクロノを襲撃した事もあった。

フェイトに至っては年齢〓彼氏居ない歴であり、決して悪いとは言わない容姿・・・なんで浮いた話がないか・・・それは美人過ぎる、魔力ランク高すぎる、エリート過ぎる・・・早い話が高嶺の花過ぎるのだ・・・本人の意思関係なく一般人の男性など地べたを這い蹲るような者・・・ナンパしようとするのは余程の愚か者しか居ない。

そして二人は全ての原因を

「あの馬鹿男許すまじ!!」

力にぶつけるのだった。

### 第三話 力抹殺大作戦4

全ての恨みを込め・・・

なのはとフェイトは力を殺しに行くメンバーを集結させた。

「うっす！影の守護者のノアだ!!」

再び現れるノア。何しに來たかという・・・

「へっへっへく楓くまた新しい技作ったんだ・・・覚悟しろ!!」

と言ってノアが持ち出したのはボロボロになった物を繋げた楓人形。

「行くぜい!!」

楓人形を投げ飛ばすノア。すると特訓に特訓を重ねたジャンプ力で楓人形の上を取った。

「スピニングドライバー!!!」

楓人形の足をとり大回転しながらパイルドライバーをお見舞いするノア。楓人形が地面に刺さると引っこ抜き完全に力を抜けた状態にし人間の全ての急所を的確にパンチで殴りまくった。

「バスター・・・スマアアアアツシュ!!」

楓人形の心臓部分を殴りつけるノア。すると楓人形は粉々になった。

「前に比べるとシンプルになったの・・・」

「けど一発のパンチ力は前の倍くらいだね」

「へへへ・・・スピードが死んだ分今回はパワーが上がったぜ!!  
覚悟しろ楓!!」

ロケットから楓の写真を見て闘争心を露にする。

「・・・問題は数だね・・・」

「それなら」

なのはのバックにズラリと並ぶ男性局員達。

「誰だこいつら？」

「はやてのファン・・・二束三文ではやてがあゝの馬鹿男とあゝんなことやこゝんなことしたって嘘ついたら簡単にのった」

男性局員を詐欺にかけたフェイトだった。

「「じゃららん!!!」」

珍しく肩組んで遊んでいる力と非番のお巡りさん炎。

同じ顔が並んでいると異様だった。

その時天啓が・・・

「ん？」

「あぶね!?!」

空から来る砲撃を咄嗟に回避する力と炎。二人が恐る恐る空を見上

げると・・・

「・・・また着やがったよ・・・歩く砲台と死神」

半ば呆れている力。炎に至ってはパニックになっていた。

「え？な！なんなんだよ！」

なのはとフェイトは炎の顔をジーツと見た。

「・・・同じ顔が二つ・・・」

「・・・憎らしさが倍になった」

力と炎の顔を見て魔力のボルテージが上がっていくなのはとフェイト。

「・・・お・おいなんなんだよこいつら・・・」

「俺の事を毎回毎回殺そうとしてるんですよ」

「おっかね」

なのはとフェイトの事がおっかなくなつて来る炎。

「さてと・・・死ぬ前になんか言う事あるの？」

なのはがレイジングハートを構えると力が叫んだ。

「なめるな！今回こつちには国家権力が居るんだぞ！！」

国家権力・大道寺炎さん。炎の後ろに隠れる力だが・・・

「だから？」

「は！」

国家権力が居ようと居まいと力を殺すためならお構いなしらしい。

力と炎に向かってレイジングハートマシンガンの如くぶっ放すのは。

そして

「力！！楓をだせええええええ！！！」

力に殴りかかるノア。

「げえノア！！！」

「あ！おめえ！げ！って言ったろ！！！」

「ミツキさんに言っぞー！！！」

「安心しろ！今日はミツキは出張だ！！！」

更には管理局のはやてファンの男性局員が力と炎に一斉射撃を繰り出した。避けまくる力と炎。

「！！！」



毎回毎回巻き込まれる可愛そうな相棒東飛鳥さん。

「とりあえず……」

力と飛鳥は大きく息を吸うと……

「ああ！こんなところに腐った饅頭が「え！どこ！」確保！！」

「ふぎゅー！」

変な物に釣られてしまった三代目ダグオン南楓。

「おいノア！楓呼んだぞ！受けとれ！！」

「うぎゃああああああああ！！」

ノアの下に投げ飛ばされる楓。

「……楓お前の犠牲は無駄にしないから成仏しろ……」

「ナンマイダナンマイダ」

「死んでませんって！！」

楓の悲鳴も虚しく手を合わせる力と飛鳥。

「ファイヤーストラトス！！」

炎がダグコマンダーでファイヤーストラトスを呼ぶと炎、力、飛鳥は乗り込む楓を見捨てていくのだった。

「あの・・・ノアちゃん？」

「楓くおめえのせいであたいミツキにひでえ目にあっただぞ・・・」

「ノアちゃん？」

「食らえスピニングドライバー！！」

「うぎゃあああああ！！！！」

楓の足をとり大回転しながらパイルドライバーをお見舞いするノア。楓が地面に刺さると引っこ抜き完全に力を抜けた状態にし人間の全ての急所を的確にパンチで殴りまくった。

「バスター・・・スマアアアアッシュ！！」

楓の心臓部分を殴りつけるノア。

「うぐ・・・あは・・・」

悶絶する楓。

「くっそ！！やっぱり一発じゃ無理か！！」

「殺される！！雷さん！！」

楓の叫びに飛来する宇宙警察機構刑事・宇津美雷。どうやら楓の友達勇者の一人のようだ。



「あれ？楓さんどうしたんですか？」

「雷さん助けて！！」

「へ？」

「行くぜえええええええ！！」

楓と雷に襲い掛かるノアだった。

一方

ファイヤーストラトスでなのはとフェイトはやてファン達に攻撃されながら逃げ回る力達。

「おい！あいつ等普通じゃねえぞ！！」

流星の炎も驚いている。

「お前何やったの！？」

「知りませんよ！怒まれる事なんてやりつくしているから一々覚えていません！！」

「あゝこいつは人に怒まれるような人間だからね」

飛鳥のとどめにゾーっとなる炎。とりあえずファイヤーストラトスを加速させる。

だが

「うっひゃ〜」

ファイヤーストラトスを撃墜しようとするなのは。正直言ってなのは達がやる事の方が被害が凄いです。

「逃げないでよ！消し炭に出来ないじゃない！！」

空から物凄いことをほざくのは。

現代森林地帯を逃げ回っていた。

「そうだ！止める！！」

力達はファイヤーストラトスを乗り捨て近くの森に逃げ込んだ。

「うあああああああ！！」

力、飛鳥、炎は森の中を逃げ回る。

「くそこうなったら・・・竜！！」

炎が叫ぶとなのはとフェイトに向かって手裏剣が飛んできた。

「な！！」

「嘘！！！！」

手裏剣は正確になのはとフェイトのデバイスを打ち落とした。なのはとフェイトがデバイスを拾っている内に力達は逃げた。

木の上で

「・・・何か知らないが・・・これで良いのか？」

森林警備員・刃柴竜が力達を援護してそのまま去った。

再び町に逃げる力達。

そして

逃げている道で大きな研究所のようなものがあつた。

「おい！ここに逃げるぞ知り合いの研究所だ！」

「は・はい！」

力達は『風祭生物研究所』という場所を訪れた。

「あれ？炎じゃないですか？あ！あなたは二代目の」

研究所の責任者・生物学者・風祭翼が力達を迎え入れた。

「翼！今追われてんだ！頼むぜ！」

「え？ちよつと炎！！」

力達が奥を逃げようとしたその時。

「逃げるな！殺せないじゃない！！」

「悪魔め覚悟！！！！」

なのはとフェイトが翼の研究所で暴れようとしていたその時。

「はあくしょうがないですね・・・」

ガチャンとレバーを引く翼すると研究所の警備システムが作動したのはとフェイトを足止めした。

「今度はここに行くぞ！！」

「「ええ！！！！」」

今度はスポーツジムに入ると・・・

「お？炎じゃねえか？どうした？」

「森！！！！」

スポーツインストラクター・沢邑森が力達を迎え入れると・・・

「まあてええ！！！！」

翼のところでもボロボロにされたのはとフェイトが力達を襲撃しようとするが……

『うおおおおおおおおお！！』

管理局のはやてファンが襲撃してきた。

「あゝあ……またムサイ男ばかり着やがって……」

はやてファンの一人に足をかける森。

「へっへっ女の子には手は出さねえけど……野郎には容赦しねえぜ！！」

森に襲い掛かるはやてファン。

「あとドンだけ逃げればいいんじゃない？！」

いい加減炎も逃げるのがウンザリしてきた様子である。

「おう！炎ではないか？ん？おお飛鳥！」

「激さん！」

「激！！」

トラックに乗って現れる酒屋さん黒岩激。

「激！ちょうど良かった！乗せてくれよ！」



何処からともなく竜が現れ・・・

「あの二人の凶悪生物は興味をそそられますね」

翼が助っ人に現れ・・・

「全く女の子の扱いがなってねえな」

森が駆けつけ・・・

「助けて〜ノアちゃんに殺される〜」

「ヘルプ」

楓と雷も駆けつけた。そして全員がダグコマンダーを構えた。

「トライダグオン！」

力がダグコマンダーを起動させると水色のダグテクターが装着されフルフェイスのマスクで覆われる。

「ブレイブリキー!!」

「トライダグオン！」

飛鳥がダグコマンダーを起動させると紅のダグテクターが装着されフルフェイスのマスクで覆われる。

「ウィザーアスカ！」

「トライダグオン!!」

楓がダグコマンダーを起動させると翡翠色のダグテクターが装着されフルフェイスのマスクで覆われる。

「ストームカエデ!!」

「トライダグオン!!」

炎がダグコマンダーを起動させると赤いダグテクターが装着されフルフェイスのマスクで覆われる。

「ファイヤー・・・エン!!」

「トライダグオン!!」

森がダグコマンダーを起動させると緑のダグテクターが装着されフルフェイスのマスクで覆われる。

「アーマー・・・シン!!」

「トライダグオン!!」

翼がダグコマンダーを起動させると銀色のダグテクターが装着されフルフェイスのマスクで覆われる。

「ウイングヨク!!」

「トライダグオン!!」



竜がダグコマンダーを起動させると紫のダグテクターが装着されフルフェイスのマスクで覆われる。

「シャドー・・・リユウ!!」

「トライダグオン!」

激がダグコマンダーを起動させると黒いダグテクターが装着されフルフェイスのマスクで覆われる。

「ドリルウウゲキ!!」

「トライダグオン!」

雷がダグコマンダーを起動させると黄色のダグテクターが装着されフルフェイスのマスクで覆われる。

「サンダー・・・ライ!!」

約一名を除き初代、二代目、三代目ダグオンが集結した。

「うおおおおお!!」

楓を倒すためにノアが駆け付け・・・

「ちーダグオンになりやがったの!!」

「今回は数が多い・・・」

なのは、フェイト、そしてはやてファンが集結し両者全面戦争開始・

・  
その時だった。

「トライダグオン!!」

海がダグコマンダーを起動させると青いダグテクターが装着されフルフェイスのマスクで覆われる。

「タアアアボ!!カイ!!」

山海高校教師・生活指導の広瀬海がなのはとフェイトの首根っこを掴み取った。

「な!なにをするの!!!」

「はなせ!!!」

「ええい黙れ!!!」

「「ビク!!!」」

海の怒声にギョッとするなのはとフェイト。

「・・・平和な管理局の風紀を乱し・・・悪に手を染める虫けらどもめ!!!」

「な!!!」

「虫けら?」

虫けら呼ばわりされた事が気に入らないようだったが、元鬼の風紀院長の剣幕に押されてしまう。

「貴様らこの私が徹底的に指導してやる!」

「な!余計なお世話」

「Don't say four or five!」

本家四の五の言うなに黙って海に連行されてしまうのはとフェイト。

そして

「うっしゃ!!こんな美味しいシチュエーション!!はやくおw」  
「ノア」ビク!!」

ノアが振り返るとメガネを光らせ黒化したミツキが立っていた。

「んもう!こんなところまで着ちゃうなんて!それに新技ね!何なら私が徹底的に指導してあげようか?」

「え?出張中じゃ...ちょっと!話せば分かるって!!うひゃあ  
あああああああ!!」

ミツキに首根っこつかまれ連行されるノア。

そしてそそくさと逃げようとする管理局員。

だが

「さあ皆さんお話ししましょうか？」

八神組会長ノルウェールに睨まれるはやてファンはそのまま連行された。

そして

その時邪神が舞い降りた

「さあ〜力君〜どういうことや？」

「.....」

既に言い訳が無用といわんばかりに手を上げる力。

「潔ええなあ〜覚悟はええ？」

リミットブレイク発動

「え？何リミットブレイクって？」

炎の質問に力が答えた。

「説明しようリミットブレイクとは八神はやてに秘められた全魔力が感情の高まりとともに頂点を振り切った時に発動し身体能力を限

界なしで増大させる恐ろしい現象である!!」

「せつめいおわったか〜りきくん〜かくごはいい? (超低音)」

手加減のての字もないはやて。

「これがお仕置八神スペシャル! 豪華特盛フルコース! インフィニティじゃああああああああああああああああああああああああああああ!!」

この後各々がどういふ運命で終わったかはご想像にお任せします。

そしてそれを見たダグオン全員がはやてには逆らわない方が言いと感じたようだ。

その後管理局には海が出入りするようになり徹底した風紀委員ぶりを疲労したという。

チャララッチャ〜ン

楓

「やってきました〜勇者指令ダグオンA's どんこいお便りコー  
ナー！パーソナリティの南楓で〜すイエエエ」

一人盛り上げようとする楓。やっぱり寂しいようです。

楓

「ん〜また私が一人で喋り続けるのでしょうか？う〜ん」

大地

「おい馬鹿姉・・・」

楓

「あ！大地〜来てくれたの〜？」

大地に抱きつく楓。

大地

「うるせえ・・・てめえ忘れもんしてっただろ・・・ほれよ」

楓

「あ〜届けてくれたんだ〜私のお弁当〜」

大地

「てめえが食堂で食べば破産するだろうが・・・」

楓

「ははは・・・じゃあお便りを紹介します！ええっと・・・ペンネ

「ム！ミツキ・サエグサさん！」

ミツキ

感想で言いましたが、早速私からの質問です。本編での力君の紹介で「南力20歳・職業高校生兼ヤクザ」とありましたがいったい彼のみに何があつたんですか？

楓

「そうですね、ウチの作者の説明不足でした。ウチのお爺ちゃんは前作！勇者指令ダグオンA'sにて！ウチのお爺ちゃんは既に2年間留年していたのでした！！」

大地

「なんでだよ・・・」

楓

「そうですね、ウチのお爺ちゃん喧嘩で入院して出席日数足りなくて留年しました！！で！何でお爺ちゃんが進級できたか！それはシヤマル先生が居たからです！シヤマル先生がウチのお爺ちゃんの怪我を最低限まで治してくれたのでお爺ちゃんは出席日数ギリギリで進級できました！」

大地

「あのクソ爺・・・」

楓

「はい！今日はここで開きにさせていただきます！質問の御便りはメッセーシボックスまでとしどしご応募ください！一人一回ではありません！出来る限りお答えします！次回も！世界平和だ！！」

大地

「ん？なんだこれ？」

お便り見る大地。

「力とはやての結婚式の話ですが、もしよかったらこっちでやってもいいですか？」

楓

「へ？何このお便り・・・けけけけ結婚婚！？」

大地

「IF話ていう形ならOKだと・・・ん？作者からFAX？」

希望が多いようなのでやりますか？結婚式？

楓・大地

「「おいおいおい結論を変えるなよ」「」

再びFAX



それじゃやめよう

楓・大地

「「どっちなんだよ!!」」

### 第三話 力抹殺大作戦4（後書き）

何？町内会のイベントに戦隊を呼ぶって？うんそういうの呼ぶと高いんだよな。何！ドタキャンされたって・・・勘弁しろよえ？なにそのいやらしい目は・・・まさか・・・

次回！勇者指令ダグオンA's どころい 勇者戦隊ダグレんジャ  
ー！海鳴公園で僕と握手！！

勘弁しろよ

#### 第四話 勇者戦隊ダグレんジャー！海鳴公園で僕と握手

とある日のダグベース

チャカチャカ

某偉大なる携帯ゲーム機でリリカルなのはの対戦ゲームやってる力、  
飛鳥、楓、炎、シャマル先生。

「思ったんだけどさ」

「なに？」

「誰シャマル先生プレイヤーキャラにしたの？」

全員ゲームをやっている手が止まった。

「シャマル先生あえて言うなら投げキャラだよね？これ・・・」

「だから？」

「んな遠距離から滅多打ちするのに投げキャラは滅茶苦茶泣きを見るんだよー!!」

「それはこれじゃない？私は上級者向けとか？」

必死に自分を弁護するシャマル先生。

「とうよりこのゲーム格闘系のキャラ冷遇されてるよね」

「「あんあん」」

「ていうかつつあん自動で格闘防御あるからある意味余計に格闘特化泣きみるよね」

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

その一発で沈むシャルマル先生を見る3馬鹿と炎。

そして力は話題を変えた。

「そついや思ってたんだけどさ」

「何？」

いつも反応するのは飛鳥しか居ない。

「ハーレム物の主役って何であんな都合よくモテるの？」

「なんだよ・・・ハーレム物も気に入らないのかい・・・」

「だって毎回毎回なんで都合よく周りが女だらけで男一人なんだよ  
！」

「まあまあ自分がモテないからって僻まない・・・っていうかさ・・・  
モテなかったら話始まんねえじゃねえか！！・・・ていうか！その  
辺は夢見させといてやれよ！！」

「いやさ・・・なんかバトルものハーレムものとかつてさ・・・あんな無駄にモテる必要があるか？大体ああいうハーレムものつてモテるだけモテておいて結局最後に誰とくっ付いたかボカすじゃん！」

「・・・お前ハーレム物のコンセプトに喧嘩売るような事を・・・他のキャラのファンから苦情来るからじゃね？」

「ていうか毎度毎度何で主人公つて優柔不断なんだよ？あんなもんな・・・恋愛を軽く見てるようにしか思えねえんだよ！」

「・・・いやさ・・・どこの早乙女なんちゃらの如く公開二股宣言しろってか？気に入らないなら見るなよ・・・」

「見たくなくても最近そういうのが多すぎるの・・・そもそも最近の主人公なんて・・・」

「まあいいじゃないのどこのナンチャラだつて全然そんな設定なかったのにヤンデレとかにされるし・・・それで特別にスピノフ作られたり・・・大正時代物のなんちゃらだつてゲームとアニメでアニメがキャラの性格とか丸換えして中身の人困ったなんて話あるし・・・早い話がアニメ化の時の設定変更なんていい加減なんだよその辺の流行に適当に合わせるし」

「前者は俺主人公以外の人間と幸せになつて欲しかったな」

力のくだらない発言に呆れながらも律儀にツツコミを入れる飛鳥だった。

一方その光景を見ていた楓と炎は某偉大なるゲームをまだやっていった。

「・・・お前のじいちゃんアホだな」

「アハハハ〜もしかして最近都合よくモテるのが多すぎるから反動でウチのお爺ちゃん嫌われ者なんですかね？大体はギャグ補正ですし〜それに強いつて言われてもお爺ちゃんが強いのであくまで『暴力』だけで大切なもの欠けてるみたいだし〜」

「・・・いや冷静に分析するなよ・て！ハメ技仕掛けてきたな！」

一瞬の隙をつかれ楓に無限コンボ食らう炎。なお楓は一度ハマったら抜け出せないようなコンボ考えるのが得意だったりする。

そしてはやてからダグコマンダーに通信が・・・

第四話 勇者戦隊ダグレンジャー！海鳴公園で僕と握手

ダグベースのオペレーティングルーム

「んでな・・・今回のミッションなんやけど・・・」

「ミッションってなんだよ・・・」

炎が聞いてみると、ここ数日町内会でヒーローショーをやることに

なったらしく最近人気の『特警戦隊パトレンジャー』を呼ぼうという事になったらしいがキャラクター版権料高すぎるため代わりの者で代用しようという事になるのだった。

そこで白羽の矢がたったのが・・・

「俺ら？」

「あん！」

「俺達がオリジナルの何か着ろって？」

八神組体力担当達が聞いてみると・・・

「何言ってるの？着る必要ないじゃん みんな持ってるし」

「」「」「まさか」「」「」

「あん」

はやての指令それはヒーローショーをダグテクターをつけてやれという事だった。

「ちょっとまってよ・・・お前さ良いのかよ！ヒーローショーに勇者の力使って！」

「もう宇宙人来ないんだしええやん」

(・・・言えない来年ドライアスが来るなんて・・・)

未来を知らせると歴史が狂うため教えられないダグオンチーム。

「んでな〜炎さんがファイヤーストラトスで来てもらってな〜ダグコマンダーで変身ってな!」

もう勝手に話が進み何がなんやらの力達だった。

海鳴公園

ワイワイガヤガヤ

ヒーローショーが始まるという事で子ども達が集まり始めた。

「うわ〜凄い人」

「・・・緊張するな」

数に驚く飛鳥と緊張する楓。

「たく何故ワシまで?」

ちよつど定休日の激も登場しスタンバイしていた。

「どうも〜差し入れで〜す」

「ん?」

力達の楽屋に差し入れを持ってくる女性。すると炎が女性の隣に立った。



「あ！紹介するよ！俺の嫁さん」

「大道寺真理亜です」

二代目、三代目ダグオンに挨拶する真理亜。

「真理亜さん！久しぶりです！」

「激じゃない！元気にしてた？」

初代ダグオンのメンバーと知り合いの真理亜。そして真理亜が力の顔を見た。

「うわ〜炎に聞いてたとおりそっくり〜」

「へ？」

「炎が昔の自分にソックリだって」

「んじゃ炎さんも嫌われてたの？」

「違うわい！」

「し！始まるよ！」

飛鳥が黙らせるとはやてがマイクを持ってステージに立った。

『良い子のお友達！こんにちは！今日は【八神はやてプロデューサー！勇者戦隊ダグレンジャー！海鳴公園で僕と握手】に参加してくれてありがとうー！』

子ども達の歓声が響くとアトラクションがスタートした。

『キヤーー!』

ナレーションの最中に悪役に扮したザフィーラがはやてを誘拐しようとしたその時。

「まてい!!--」

『あ!あれは!』

はやてが指を差すと何故か外灯の上に立っている力の姿が・・・

「お姉ちゃん今助けるぞとお!!--」

と外灯から力がステージに向かって飛び降りるが・・・

ガッシャーン

ステージの耐久力がもたず下に抜けてしまう力。

(・・・ああ・・・はやてさんだからセット代ケチらない方がいいって言ったのに)

出演兼大道具の楓はぼやいた。

「.....」

予定が狂ってしまうはやてとザフィーラ、するとはやてが両手で引

つ張るジエスチャーをやった。

(伸ばせ!? 間を伸ばせと言うのですか主!!)

いきなりの無茶振りに頑張るザファイラ。そして

「・・・待たせたな」

既に登場からズタボロになっている力と次々と駆けつける飛鳥、楓、  
炎、激。

野郎三人を見た子ども達の反応は・・・

「あ! 変身するのはおじさんだ!」

力、炎、激をおじさん呼ばわりする子ども達。

「な! わし等おじさんかい!」

「なんでだ?」

考える激と炎。

「お二人さんちよつとこつちへ」

「?」

力が手招きし炎と激をあ部屋に連れて行くのだった。

・・・人には物語を暴露する場所がある・・・

・・・ここはその部屋・・・

・・・通称『楽屋』・・・

超懐かしい楽屋

「何だこの部屋？」

初めて楽屋を訪れる炎と激。そして堂々と立つ力の姿。

「いや、大分使ってなかったからホコリ舞っちゃってるよ・・・まあお茶でも」

「「あどうも・・・」」

ミツキが置いていったお茶セットでとりあえずお茶を出す力。

「いいですか？我々の年齢は何代ですか？」

「まあ・・・俺達20代だよな？」

炎が答えると力が説明する。

「それではガガガの凱さんは？」

「二十歳・・・あ！」

何かを閃いた炎。

「そうなんです・・・ブレサガでガク君指摘したとおり彼らが大きくなる時は我々は立派なおじさんになる・・・そう勇者シリーズの20代男は・・・おじさん認定されるんです！！」

「「そうだったのか？」」

力の指摘に思わず納得してしまう炎と激だった。

楽屋から出ると力達は気を取り直しダグコマンダーを構えた。

「「「「トライダグオン！」」」」

ダグテクターを装着する力達。リアル変身に驚く子ども達。

「ダグレッド！」

と炎。

「ダグブルー！」

と力。

「ダググリーン！」

と楓。

「ダグブラック！」

と激。

「ダグルージュ！」

と飛鳥。

「勇者戦隊！」

「…………ダグレンジャー！！…………」

炎を中心に打ち合わせ通りのポーズを取るとバッグが爆発した。だが

「…………ぐはあ！！…………」

爆風に吹っ飛ばされてしまうダグレンジャー。

（ありやく火薬の量誤ったかな？あと2サジくらいかな？）

どうやら勝手に火薬を調合したらしいはやて。

良い子の大人はやらないでね

「ぐむむなんじゃ・・・ダグテクター付けとらんかったら死んどつたぞ！」

起き上がる激そして全員は思った。

（ ）（ ）（ ）早く終わらせないと怪我じゃ済まん！（ ）（ ）（ ）

そこで全員がとつた行動は・・・

「ビッグバンシュート！！」

「ストームシューターライジングショット！！」

「ぬがあ！！！」

自らの命惜しさにザフィーラに八つ当たりするメンバー。

「ドリルクラッシュ！」

「がは！」

激に吹っ飛ばされるザフィーラ。

そして

「ブレイブライオ・・・」

「ファイヤーバード・・・」

「ちょっと待てそれは流石に死ぬぞ！」

「ダブルアタアアック!!」

ライオンに変形する力と不死鳥に変形する炎がザフィーラに突撃したその時。

ザフィーラに当たる瞬間

邪神が二人舞い降りた

「力君!!」

「炎!!」

「あおっっっっ!!」

「うぎゃあああ!!」

はやてに金平糖で叩き潰される力と真理亜に巨大ハリセンで叩き潰



される炎。

「まったくもう！何でそんな無茶な事やるん！！」

「炎！あんたね！」

「ガミガミガミガミ！！」

はやてと真理亜の前で正座させられながら怒られまくる力と炎。

「あの二人は顔以外も似た者同士だな」

「うんうん」

飛鳥の言葉に楓と激は頷くのだった。

(・・・助かった)

とりあえず命が助かったザフィーラは飛鳥たちを誘導し段取りどおり倒され話は終了するが・・・力と炎はずっとはやてと真理亜に怒られて終わるのだった。

余談だが勇者戦隊ダグレンジャーは大層ウケたらしく各地で公演があったが、大道具は全て楓が徹底したらしい。

チャララチャツチャチャーン！

楓

「はいどうも！勇者指令ダグオンA's だっ！こいお便りコーナー！  
パーソナリティの南楓です」

シズマ

「ゲストのシズマだ」

楓

「いや〜どうも寂しくて呼んじゃった〜」

シズマ

「うるせえとっくと読め」

「はいはいではペンネームノアちゃんからのお便りを紹介します」

ノア

「今回はあたいからの質問だ！！なんでも力のヤツ、野球好きでXサンシャインって魔球を投げるらしいけどアイアンリーガーに出てるマグナムエースと一打席勝負をしたらいつたいたいどうなるんだ？まあ、ダグオンとは関係ない質問だがつい気になってな。よろしく頼むわ（笑）」

楓

「そうですね〜お爺ちゃん野球好きですからね〜今度甲子園ネタやるみたいですけど・・・あの超次元的に死傷者が出まくる甲子園・

」

シズマ

「そうなのか？と言うか・・・マグナムエースは？」

楓

「すっかり忘れてました！というわけで特別ゲスト・・・マグナムエースさんです！！」

マグナムエース

「こんにちは・・・マグナムエースです」

楓

「あれ？今日はスバルと合体してないんですね？あれがなのは世界のフルパワー以上の力なのに。あ！作者が滅多打ちに会うのが嫌だったんですかね？」

マグナムエース

「はは・・・あまり苛めないでくれよ」

楓

「まあとにかく・・・スタジアムまで行きましょう!」

スタジアムでバッターボックスに立つ力とピッチャーマウンドに立つマグナムエース。そしてキャッチャーになる楓と審判のシズマ。

「一球勝負!」

「来い!」

マグナムエースが大きく振りかぶった。

「44おおおソニック!」

マグナムエースのフルパワーの魔球。

「うおりゃあああああああああああああああああああ!」

！」

力がバットでボールを捕らえるが・・・

「ぐ・・・ぐぐぐぐぐぐ!!」

あまりもパワーで押し返すことが出来ず地面が削れ始める。

「ぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ!!」

それでも44ソニックを打ち返すべく踏ん張ると地面後と削れバットを構えたままボールに押される。

「ぐぐぐぐぐ!!ああ!!」

バットを振り切れずフェンスにバットとボールがヒットしてしまう。

そしてキャッチャーの楓と審判のシズマは吹き飛ばされた。

「これって」

「俺の負けだな」

自らの敗北を感じる力。

そしてマグナムエースは・・・

「凄いな・・・人間が俺の44ソニックを捕らえるとは思わなかった・・・」

力の底の強さに頷くのだった。

楓

「はい！今回はこういう結果になりました！作者も性懲りもなくアイアンリーガーの続編書いてるみたいですね！」

シズマ

「て俺来る必要あったのか？」

楓

「まあ気にしないの〜というわけで！質問のお便りはメッセージボックスまでどしどしご応募ください！一人一回ではありません！出来る限りお答えします！では！ここはアイアンリーガーにしたがつて！正々堂々と！試合開始！まったね〜」

第四話 勇者戦隊ダグレんジャー！海鳴公園で僕と握手（後書き）

え〜我々三蔵一行は天竺にありがた〜い美味しい物を食べに行くべく旅に出た！えつと北斗が三蔵法師でサイモンが八戒で飛鳥が沙吾浄で？楓が悟空？じゃあ俺は？え？三蔵法師の馬！？

次回！勇者指令ダグオンA's どっこい 西遊記だよ全員集合！  
北斗・・・お前銃撃つ三蔵まんまじゃん

## 第五話 西遊記だよ全員集合！

時は云年

舞台は中国の何処か自由気ままな5人の旅が始まった。

第五話 西遊記だよ全員集合！

何故か徒歩で歩いている北斗の三蔵法師、飛鳥の沙悟浄、サイモンの猪八戒、楓の孫悟空、力の玉龍。

「玉龍って何だ？」

サイモンの猪八戒が言う答える力の玉龍。

「玉龍って言うのは三蔵法師様の馬の名前よ」

「へえ、あの馬名前あつたんだ」

飛鳥の沙悟浄が答えると北斗の三蔵法師が言った。

「……んじやてめえが俺の馬になるのか」

「なれるか！」

まんまたれ目の金髪坊主の北斗の三蔵法師。



「んで？今日は何しに行くの？」

「何でも天竺には大層美味しいものがあるんだって」

「何でもはやてのお釈迦様のご馳走用意してくれるんだって」

「楽しみ」

ワイワイガヤガヤ

「うるせえてめえら！！」

北斗の三蔵法師が怒りのあまり銃を乱射する。当たらないように必死に避ける4人だった。

だがこの五人は天竺でご馳走にありつくために何も食べていなかった。

「それにしてもお腹空いた」

楓の孫悟空がお腹を抱え始めると道端に・・・

「・・・う・・・う・・・」

何やら干乾びた狼が居た。

「なんだこれ？」

「・・・ザフィーラだ」

群れから外れて息絶えそうなザフィーラそれを見た5人は・・・

「和尚様！」

「なんだ？」

「これ水に戻して食っちゃまいやしょうぜ！」

楓の孫悟空の提案を聞いたザフィーラは・・・

「食われてたまるか！！！」

命の危機を感じ取り逃げた。

死ぬ間際だと思えないほどのスピードで逃げ始めた。

「逃がすな！確実に仕留めろ！！経は俺が唱えてやる！」

「「「「おう！」「」「」」

数々の武器を持ってザフィーラを追いかける。

「死ね！！！」

北斗の三蔵法師が銃を乱射しザフィーラの足を止めると飛鳥の沙悟浄が蹴り飛ばしいつの間にかお湯を張っていた鍋にザフィーラを投下した。

「南無南無南無」

木魚叩きながら念仏を唱える北斗の三蔵法師。

「うおおお俺は三分で出来る乾燥麺じゃねぞ!」

『いっただきまゝす!』

と言つて沸騰した鍋の中に入る馬鹿しかし・・・

『おええええええええええええええええ』

あまりの不味さに気持ち悪くなつてしまつたようだ。

「おえええ! ！つて俺はそんなに不味いのか!？」

ショックを受けるザフィーラだった。

そして山を越え森を越え、マージャンやったりトランプやったりしながら遊んでいると再び森に入った。

その時

「何これ？」

すぐ近くで眠っている少女の姿が・・・

「これヴィータだよね？」

「なんで森で寝てんだ？」

「差し詰め眠れる森の美女ってどこか？」

そんな感じで眠れる森のヴィータを退かそうとするが

「・・・重い」

「ていうか何で寝てんに物掴んでんだ？強情な寝ててもヴィータソックリだな・・・」

ここで北斗の三蔵法師が提案を・・・

「そう言えば・・・絵本で見たな・・・眠れる森のヴィータは王子様がキスをして王子様と結婚するって話」

「・・・うんうん」「・・・」

「問題はこの中の誰とキスするかだ」

青ざめる4馬鹿。

「俺は！嫌だぞ！！ていうか馬と人間がチューしちゃだめだぞ！！」

と力の玉龍。

「「あたしら（私ら）女じゃ！」「」

と飛鳥の沙悟浄と楓の孫悟空。

「俺は未成年だからチューしなきゃいけないんだぞ！！」

とサイモンの猪八戒。

「俺は妻子がいるからな」

と北斗の三蔵法師。

そして目が行ったのは・・・

「お！俺！！」

サイモンの猪八戒だった。

「サイモンの猪八戒・・・おめえの口は眠れる森のヴィータとチュ  
ーするのに丁度いいんだよ」

「嫌だあああああああ！！」

4馬鹿にとっ捕まるサイモンの猪八戒。クレーンで吊り上げられて  
いる。

「怨むぞてめえら！！」

「もつと右！少し下！！」

ギギギギと眠れる森のヴィータに向かってサイモンを落とすが。

ガシ

眠れる森のヴィータが起きた。

しかもサイモンの頭を掴みながら涙流している。

「ヴィヴィータちゃん？」

「・・・そんなに嫌か？」

「へ？」

「そんなにあたしとチューすんのが嫌かアアア!!!」

『て!おめえはして欲しいのかよ!!!』

何処かからハンマーを持ち出し馬鹿を追い掛け回した。

「畜生思いつきり殴りやがって」

スタボロにされたサイモンの猪八戒。

「ていうか何で西遊記のノリなのに眠れる森の美女出てくるでしよ  
うね？」

「きゃ〜」

再び

「けっけっけ〜」

何故か現れたフェイトの金閣となのはの銀閣。

「お！これが噂に聞く三蔵法師か！」

「何やら貴様を食えばえらい長生きするみたいだな」

その言葉に北斗の三蔵法師は・・・

「け！小 館の小説と同じ事言いやがって」

ブチ

「へ・へえ〜流石金髪の坊主ね〜綺麗な顔して同じ事と言って」

「・・・けっよく見るとしわしわのババアだな」

「「ブチ」」

その言葉にキレたフェイトの金閣となのはの銀閣。

「・・・上等だ・・・殺す」

「「死ねよやああああああああああああああああああ！！！！！！」」

「死ね！！」

砲撃するフェイトの金閣となのはの銀閣を応戦する北斗の三蔵法師。  
はつきり言っただけの銃撃戦である。

「ねえ・・・普通の三蔵法師って守られるタイプだよ」

「「うんうん」」

力の玉龍の言葉に頷く楓の孫悟空とサイモンの猪八戒。

「良いんじゃないのうちの三蔵法師は銃撃つ三蔵法師だから」

飛鳥の沙悟浄の言葉に自分達の三蔵は守るだけ損だと感じるのだった。

激しい銃撃戦は続き何とか決着を見た。

「・・・次行くぞ次・・・」

フツと硝煙を吹き消す北斗の三蔵法師。こいつは女であろうと情け容赦はしないようであった。

蜂の巣にされたフェイトの金閣となのはの銀閣を尻目に天竺に向かう三蔵一行。

「さあついたぞ」

何だかんだ端折って天竺に着いた三蔵一行は寺院を物色し始めるそして。

「ああ！御飯！！」

「美味しそう！！」



サイモンの猪八戒と楓の孫悟空が中華テーブルの上にある天津料理を食べ始める。

「いったただきまゝす!!」

力の玉龍と飛鳥の沙悟浄もがつついて食べ始めた。

「酒だな」

北斗の三蔵法師も坊主のくせに酒飲み始めた。

そして奥から

「よお来たな〜三蔵一行〜これがうちの・・・」

天竺のはやてのお釈迦様がもう既に食べ始めている三蔵一行を見て目元が消えた。

「・・・あんたらまずはお参りが先ってルール知らんのか？」

「てめ!俺の餃子!!」

「へっへ〜ん食つのが遅い〜あ!あたしのカニチャーハン!!」

「んぐんぐ・・・てめえ・・・俺の肉まん」

「だっはっは!!あ!俺のから揚げ!!」

「がつがつがつ!!あ!私のシユウマイ!!」



この後三蔵一行ははやてのお釈迦様の肅清を食らうのだった。

チャララッチャターン

楓

「はいどうも！勇者指令ダグオンA's『お便りコーナー』パーソナリティの南楓です。というより！収録が終わったばかりなので！まだ孫悟空のままです！さあ！さ今日お便りは！ペンネーム！本堂大悟さん」

大悟

はやてと力はどこまでいったんだ？デートぐらいはしているのか？後一人でお便りコーナーをやるのが寂しいならゲストでも呼んでみたらどうだ？

楓

「ゲストですか？うーん今回は皆さんスケジュールが合わなかったですね。誰か着てくれないかな。まあお答えしましょう！はいウチのお爺ちゃん滅茶苦茶初心な人であって！！デートどころか手すら握ってません！！うーんなんだろうな。お爺ちゃん意識すると照れるタイプなのかな。なんであんな初心なんだろうな。週刊誌の水着のグラビアすら直視できないし。」

頭を捻る楓。

楓

「うーん実際恋人同士って何やるんでしょうね。私もてないからな。」

楓の考える主なイベント？

『お宅訪問』

力

「はやて飯！」

はやて

「まちい」

『甘える』

はやて

「力君疲れた〜」

力

「ほいよ。ココア」

『デート？』

近所のスーパー

はやて

「夕飯のおかず何にする？」

力

「コロッケ」

楓

「・・・何でしょう・・・もうイベントみたいな事はあらかたやっていますね〜何をやってももう今更〜ですね〜」

一人納得する楓。

楓

「まあ今日はここまでで！質問のお便りはメッセージボックスまで

どしどしご応募ください！一人一回ではありません！出来る限りお答えします！それではまたね〜」

第五話 西遊記だよ全員集合！（後書き）

戦いが終わった後に旅行する事になった俺達。サイモンとヴィータとリインのトリオが地球文化の勉強で神社に立ち寄った。温泉にも入って・・・てちょっと待て！北斗ちゃん何エリオに銃向けてんの？次回！勇者指令ダグオンA's どころい      トラベラーズパニックウチはまともな旅行は出来んのかい！

## 第六話 トラベラーズパニック

時は勇者指令ダグオンA'sから3年後

ある日の八神家

「ず〜ず〜ず〜」

「スウ〜スウ〜」

八神家のソファで居眠りしているサイモンとサイモンの頭で寝ているリイン。

そして

「むぎゅ〜！」

ヴィータに顔踏まれるサイモン。

「ん？親びん？」

「親びんじゃねえよ！なんだよ毎回毎回家に入り浸って食っちゃ寝く飲んじゃ寝くおめえは何様のつもりだ！」

「お客様だけど？」

いけしゃあしゃあと応えるサイモンに激怒するヴィータ。



「なにもしねえただ飯くらいをお客様って言わねえんだ！！居候って言うんだ！！」

「そんな親びん白状な」

「誰が親びんだ誰が！！」

大層暇を持て余しているサイモン、ヴィータ因みにリインはプレスされている。そして空気を読まないご主人が・・・

「というわけで今回の旅行プランや！！」

## 第六話 トラベラーズパニック

高速道路を走る車が3台とバイクが一台。1つはブレイブエラゴ、1つはワゴン車1つは天野博士のマイカー最後の1つはストームバンディットだった。約2台は既に自家用車である。

天野カーにて

シグナムの運転に助手席に北斗後部座席にサイモン、キャロ、紫、霧風、エリオ、フリードが乗っている。

「それにしてもミラクルウォータークリーナーの時は世話になったな北斗」



「安心しろ。私の勘を信じろ」

「信じられるかあああああああああああああああああああああ  
！」

「うるせえテメエら！！」

ズドンズドン！！

シグナムの勘&北斗の銃乱射に大層仰天した道中になった。

温泉宿に着いた八神組&天野家&宇宙警備隊。

「ふ〜パトカーの後部座席に乗るなんてうち悪いことしたみたいや  
な〜」

「やってもおかしくねえけど」

「なあああんやてえええ！！」

「いって！！ギブギブ！！」

はやてにコブラツイスト食らう力。メンバーは次々とチェックイン  
するのだった。

男部屋と女部屋に別れそれぞれの荷物を置いた。

「ほお〜中々の部屋じゃの〜」

「そうですね〜博士」

腰を下ろしながら言う天野博士と火鳥。

「ほいお茶」

「どうも」

備え付けのお茶を煎れる力と受け取るジエイル。

そしてはやてが男部屋に入ってきた。

「みんな〜」

「あ。はやてさん」

「火鳥さん。うち等お風呂は入ってくるからな〜」

「そっかんじゃ俺達も入ってくるか?」

「覗くんやないで〜」

その言葉にメنزは・・・

「んなお決まりのパターンイベントなんてやるかよ」

大層興味無さそうな様子。

「へ?」

「おめえの素っ裸なんて興味ねえよ」

と力。

「んなガキの身体見て何が面白い？」

と北斗。

「俺美女しか興味ないし」

とサイモン。

この3馬鹿にとっては八神組の女の裸など興味の欠片すらないようだ。

なおはやてが邪神化して力達を大層ぶん殴った。

露天温泉にて

「「「「わいわいがやがや」」」」

列作って背中流しあっている力、サイモン、北斗、火鳥、ケンタ。

「北斗さん！お背中流します」

「あ？なんでてめえが俺の背中流すんだ？」

思いつきりエリオにガン飛ばす北斗。

「さぞ博士どごうぞ」

「おゝすまんのゝ」

温泉に入りながらキュツと一杯やってる天野博士とジエイル。

「でさゝ今度の新作のブラのことなんやけど!!」

女湯でわざと聞こえるように下着の話やら破廉恥な話題を振るはやて。レディースは引いている。

「きゃは!飛鳥胸が・・・」

「揉むんじゃねえ!!」

「はやてさんそんなところ触らないでください!」

「うっひょゝデイドの胸柔らかいっす」

「や・止めてくださいウエンディ」

この程度の会話で赤面してしまう力。はっきり言ってこの男の初心は底が知れません。

あまりにもデリケートな会話の為サイモンはエリオの耳を塞いでいる。

霧風は呆れながらケンタの耳を塞いでいた。

「もっゝそんなところ触ったらあかんよゝ」

ブチ

ついに北斗の中の何かがキレ脱衣所に戻り何かを持ってきて・・・

「うるせえ teme いら！！もっと品のある会話しろ！！」

ガン！ガン！ガン！ガン！

女湯に向かって銃を乱射するのだった。

「お父さんいくら何でも銃撃つのhチャキ

「・・・だからてめえにお父さん呼ばわりされる筋合いはねえ」

エリオの鼻先に銃突き付ける北斗。

なお北斗に銃撃され女湯（飛鳥、紫、キャロ以外）は物凄くパニッ  
クに陥ったらしい。

翌日

地球文化の見学の為に神社に来たサイモンと頭の上にはリンとヴィ  
ータ&北斗一家+エリオ。早い話が宇宙人組で地球文化の見聞を広  
めようとのことだった。

因みに寝不足

理由は・・・

「昨日からダーリンやたらめったら銃撃つし〜」

すると霧風は・・・

「大丈夫。そろそろ父上弾切れ起こすから・・・ほれ」

霧風が手帳を出すと北斗が撃った弾丸の数がきつちり数えられていた。

「んじゃ北斗倒すなら今じゃ・・・チャキ

「なんなら試してみるか？」

サイモンの頭に銃突き付ける北斗。

「北斗さんあそこ行きましようよ」

火鳥が神社の境内に向かおうとするが

チャキ

「うるせえ黙れ」

と火鳥の顔に銃を突き付けると・・・

クニ

「人に向けて銃を突き付けちゃいけません」

北斗の銃の銃口曲げる火鳥。それを見た北斗は・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」



クニ

再び銃口を正位置に戻した。凄まじく不機嫌になり……

「……ほお……てめえ死にたいらしいな……」

「ストップストップ!!」

サイモンが持ち前の怪力で北斗を羽交い絞めにする。

「離せクソガキ」

「声にドス入れてんじゃねえ!!」

「ああそろそろ行こうよ」

そして

「うわあ大きな境内だな」

「火鳥はこういうの初めてか？」

「はい！文化の勉強は良いですね、感動だな」

何やら火鳥の事が気に食わない北斗。

観光に来ていた家族連れと一緒に境内を見学し始める。

「いいかまず賽銭入れてお参りだ」

『ふお〜い』

グイータの忠実なる下僕と北斗一家&火鳥家が賽銭箱に小銭を入れてお参りをし巫女さんが観光客に何やら説明をしている。

そして

「ジー」

キャラロが目の前で肩車されている少年を見ると北斗の方を見た。

「あ？」

娘にガン飛ばす北斗。

(やっぱりウチのお義父さんはやってくれないよね)

その時

「え？」

何やらウザそうに北斗がキャラロを片腕で吊り上げると自分の肩の上に置いた。

「え？ちよ！お義父さん？」

「あ？こうして欲しいんじゃないのか？」

大層ウザそうに言う北斗。

「え？ふふ」

北斗に肩車してもらって嬉しそうなキャロ。それを見ていたヴィヴィオは……

「ねえパパヴィヴィオも」

「よし」

火鳥に肩車されるヴィヴィオ。

「うわ〜高い」

「はははは」

ヴィヴィオの喜んでいる顔が嬉しい火鳥。

「ではここで質問ありますか？」

巫女さんが参拝方法などを説明してくれる。

「なあ親びん」

「なんだよ」

「あの女の人なんで坊主頭じゃないの？」

「は？」

サイモンの言葉に驚くヴィータ。

「だって神社の女ってみんな坊さんじゃないの？」

「あほ！それは尼さんじゃ！！あれは巫女さんだ！！」

サイモンの頭にアイゼン食らわせるヴィータ。しかもリインも潰れた。

「いてて・・・え？尼さんと巫女さんはどう違うんだ？」

地球文化に疎いと尼さんと巫女さんの違いが分からないらしい。

「いいかおめえらよく聞け！」

「「「「ふお〜い」「」「」

ヴィータから地球文化の指導を受ける宇宙人達。

「あ！そつだ！」

キャロが北斗から降りると売店に行った。

「家内安全の御守りください」

一家が仲良しでいられるように御守りを買って北斗の元へ帰ろうとするが・・・

「きゃー！」

どっかのチンピラにぶつかってしまったキャラ。

「あー！ごめんなさい！」

「ああ！このガキ！何処見て歩いてんだ！！ああ！！」

キャラに掴みかかるようにするチンピラその時チンピラの腕を誰かが掴んだ。

「な！」

「お義父さん！」

「……………」

チンピラの腕を掴んでいる北斗。

「…………てめえウチの娘になにしてんだ？」

「うるせえ！離せよ！血だるまのおっさんにしてやるつか！？この若ハゲ！！」

「ほお……貴様死にたいらしいな？」

「なんだと？」

「…………吼えてねえで血だるまのおっさん作ってみろよ」

「この腰抜けのおっさんがああああ！！」

キャロを突き飛ばすとチンピラは北斗に殴りかかるが・・・

ズバシユン!!

カウンターで北斗のパンチが入りチンピラを殴り飛ばした。

「・・・どうだ?・・・若ハゲの・・・腰抜けの・・・おっさんのパンチは痛いかな?」

懐から拳銃取り出しチンピラの頭に突き付ける北斗。

「・・・良かったな。ここは神社だ・・・今すぐ神の元へ送ってやる・・・ありがたく思うんだな」

「ひ!ひiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!」

北斗から逃げ出すチンピラ。

「もうお義父さん!人に銃向けちゃダメって火鳥さんが・・・」

キャロに向かって銃を撃つ北斗。すると

カチン

「え?」

突然の空撃ちに目をぱちくりさせるキャロ。

「・・・安心しろ弾切れた」

「あははは……まあ昨日からあんなに撃ってたら……」

昨日から500発以上発砲している北斗にキャロは呆れるのだった。

「はぁ……またミツキに弾発注しておくか」

「え？あの銃特別なんですか？」

「ああ……あれは弾に俺の気力を込めてんだ……おめえらのカ  
ートリッジと似たようなもんだ」

その頃サイモンは

神社の裏

「おう小豆洗い久しぶりじゃねえか！お！ヤマビコも」

「さささサイモンおめえ誰だよこいつら！」

サイモンの周りにはいる半透明生物達。何やらビビリまくってるヴイ  
ータ。

「こーこれこれ！おばおばおばお化け！」

「違う！こいつらはお化けじゃない！アヤカシだ！」

「あ！アヤカシって妖怪か？」

「おう！夏の肝試しのバイトで手伝ってもらってんだ」

「おおまえ幽霊苦手じゃ」

「あ？こいつらアヤカシだろ？」

サイモンの脳内では幽霊とアヤカシは別物らしい。

なおリインは気持ち悪くなったようだ。

「わ！父さん人の頭の上で吐くなよ！！」

と絶叫するのだった。

おまけ『親父達の雑談』

「いや〜キャラも可愛いですね〜どっいつ教育をしているんですか？」

火鳥の言葉に応える北斗。

「・・・ほっとく」

「え？放っておいてるんですか？」

「あの執務官が甘やかしているから俺はほっとく」

「放任主義という奴ですか」



「大体あの女甘やかしすぎなんだよ。てめえは？」

「僕は一緒に居ます」

「父親として見守ってるってことか・・・俺のガラじゃねえ・・・  
つかあの執務官たまに俺の命を狙ってくるんだ・・・」

その時

「北斗さん！今日こそは」

「ああ・・・うぜえな」

ストライダ振り下ろすエリオを銃で応戦する北斗。

すると

ガシ

「火鳥さん」

「・・・てめえはなさねえと殺すぞ」

火鳥に摘み上げられるエリオと北斗。

「ダメです！お二人には仲良くなってもらわないとキャロが悲しみます！！」

その時だった。

『バトルアップ！チェンジ！ガードウイング！！』

北斗の前に降り立つガードウイング。

「……てめえ」

『やい！水晶野郎！てめえよくも坊主をやってくれたな！』

「……おもしれえ……相手になってやるぜ！！」

この後北斗とガードウイングの乱闘を八神組と宇宙警備隊が総力を上げて止めたのだった。

チャララッチャチャ〜ン

楓

「どうも〜勇者指令ダグオンA's どのこいお便りコーナーパーソナリテイの南楓ですまあ。今日もお便りを紹介させていただきますます〜ええっとペンネーム！兜甲児さん！」

甲児

「今回の話して力の奴がハーレムは良いって愚痴ってたな。俺も分かるぜその気持ち」

嘘こけ！DYNAMIICじゃ思いっきり七股してるじゃねえか！

甲児

「いやあ参ったなあ、俺つてもてもてだしなあ」

後でさやかに半殺しになれば良いんだ

甲児

「御託は良いよ・・・それより、思ったんだけど・・・確か楓つて力の居た時代から300年後の世界から来たんだよな・・・となると力は『お爺ちゃん』じゃなくて『ひいひいお爺ちゃん』じゃねえの？」

また返答しづらい事聞いたなあお前

甲児

「良いじゃん、後もう一つ質問。はやてちゃんが使ってる『金平糖』って一体どんな奴？良く分からなかったから教えてくれ」

知ったら知ったで後でさやかがそれ使うかもな

甲児

「・・・・・・・・」

青ざめた甲児くんは放って置いて以上でえす

楓

「はいはい来ましたこの質問・・なんで私がひいひいお爺ちゃんと呼ぶはないのか・・それはドラえもんやセワシ君にあやかり・・いちいちひいひい付けていると呼びづらいんだもん！というわけで私はひいを端折ってます！ところで次の金平糖なのですがこれ実物持ってきました！」

ドン

置かれた巨大な鋼鉄の鎖鉄球しかもイボイボ

楓

「はい！この鎖鉄球はこの鉄球部分が棘がいっぱいあってゆえにその姿金平糖の如し！！近い武器はモーニングスターです！！因みに重さは1兆トンあります！！こんなの食らってばかりだからお爺ちゃん馬鹿になっただんでしょね〜うんうんという訳で今回はここで開きにさせていただきます！！質問の便りはメッセージボックスまでどしどしご応募ください！一人一回ではありません！出来る限りお答えします！それではまたね〜」

## 第六話 トラベラーズパニック（後書き）

ええつと征西学園が甲子園の予選をやるみたいだな？あ？なに？俺に野球部に入部してピッチャーやれ？ちよつと待つてよ俺の弾捕れるの居ないって

次回！勇者指令ダグオンA's どっこい 野球大会

このとき俺達は気づかなかつた・・・あの重傷者だらけになる甲子園を・・・

## 第七話 野球大会

### 第七話 野球大会

放課後のとある野球部の練習風景。

「ファイトファイトファイト!!」

ランニングしている野球部員達をグラウンドの外で見ている通りすがりの力とはやて。

「そっかゝそろそろ甲子園の予選だったっけ？」

「そっやな」

「うちの野球部毎回毎回初戦敗退なんだよね」

「はははは・・・」

征西学園高等学校野球部・今まで予選に出たことはあるが勝利した事がない全戦全敗の最弱の野球部だった。

「・・・今年も初戦敗退か？」

「んまあ・・・ん？」

はやてがある事に気づいた。

「そつえば・・・力君野球部に入らへんの？」

「へ？」

大の野球好きの力。疾風アイアンリーガーを見て真似し始めたのがきっかけだが・・・

練習内容がアホだった。

何故かファンを回した扇風機の隙間にボールを投げる

車椅子に座ったままのはやてを担ぎ上げスクワットする。

車椅子に座ったままのはやてを引き上げ筋力トレーニング。

真上に投げたはやてを落ちてくるまでに遠くのトランプをめくり再び戻りキャッチする。

はやての関節技を強引に解除する。

ある意味人間の限界に挑戦するような意味のないトレーニングを積み重ねてきた

「んじゃ行くぞ〜」

「うん」

はやてに向かってボールを投げると・・・

「うぎゃあああああー!!」

ミットを持っていたはやての手が痺れた速度を量った結果。

「160キロ……」

直球だけなら大リーグ選手並みのボールを投げる事ができてしまった。

「ていうか……毎回毎回ウチが力君の練習に付き合わされたんやん……」

力のアホなトレーニングの犠牲になったはやて。

「そつえば……今投げるとどうなるん?」

「うん」

放置されていたボールを持って遊びで投げてみる力すると……

「んじゃいくぞ」

「うおーい」

力がピッチングフォームに入るとミットを構えたはやてに向かって投げた。



ブンー!!

凄まじい真空波と共に渾身のストレートが投げられる。

「ぬがあああああああ!」

根性で受け止めるはやて。

因み測定結果

「・・・190キロ・・・」

人間の限界を超えてしまった力の球。はやても手が痛い。

「なして?」

「宇宙人と戦ってきたから鍛えられたんじゃない?」

宇宙人と戦ってきたせいかわたけ物じみた力の身体能力が更にかつたようだ。

「んじゃもう一球行くぞ逆フォークボールだ」

「はいはい」

再びピッチングフォームに入ると低めに投げ始めた力。

普通のフォークボールは落ちるが・・・力の逆フォークボールは上がる。

その為に研究に研究を重ねた力だった。

「は！」

力の逆フオークボールを捕るはやて。

「うん．．．力君って野球に使うための頭は持ち合わせてるんよね」

うんうんと頷くはやて。

すると何やら熱い視線を感じる力。

「ん？」

見ると野球部員達の姿が．．．

「な．．．なんですか？」

「お願いします！我が野球部に入ってください！！」

「「は？」」

いきなりのフリに戸惑う力とはやて。

既に力達の溜まり場と化したダグベース

「野球部に入る？」

北斗がうくと唸っていた。

「そつなんだよな」ウチの野球部って毎回毎回初戦敗退なんだよな」

「・・・何なら俺が相手の選手を狙撃してやるつか？」

「やめんかい!!」

銃取り出す北斗を金槌で殴る嫁、紫。

ピンポン

良い大人はダンナの頭を金槌で殴ってはいけません。

「そつだ！野球に見立てて乱闘大会にすれば！」

「ドアホオオオオオオ!!」

サイモンをラテーケンで頭の上のリインもろともホームランにする  
ヴィータ。

「それより・・・なんで毎回初戦敗退なの？」

シヤマルの言葉に考えた力達。

「そういえば・・・ウチの野球部って監督居たっけ？」

「あ」

征西学園野球部の致命的な弱点。それは顧問の先生は居ても監督が居ない事だった。

「うーん指導者がいないんじゃダメかな？」

「うーん監督が必要という事か」

考えるはやて。だがもっと致命的なことがあった。

「・・・別に力君が野球部に入るのはええ・・・が!!」

「なによ?」

「・・・力君の球を捕れる人がおらへん」

「あ」

肝心な事を忘れていた。直球なら190キロの力の球も捕れる人間が居なければ意味がない。野球部員は全員挑戦してみたがもの見事に吹っ飛ばされてしまった。

「飛鳥は!」

力の相棒を唯一勤められる飛鳥。

だが

「二十歳の飛鳥に高校生やらせるん？」

「うーん俺の球取れるのあいつしか居ないんだけどな」

「ようは年齢設定が高校生で力君と同じような化け物で怪力で死んでも生き返れる悪魔みたいな奴がおればええんやろ」

(そんな奴がいるのか?)

力とはやての言葉に啞然とする組員達。

「」「」「あ」「」

一人居た心当たり。

翌日

征西学園野球部

「で？なんで私なんですか？」

やっぱり呼ばれたこの物語ー便利な人間楓。力と同じような化け物で悪魔で身体が頑丈なのは子孫である楓しかいない。

「大丈夫やゝすでに入学手続きや入学金やら全部偽造しておいたから」

「え？はやてさん？今さらって凄いいこと言いませんでした？というか・・・それ私の専売特許なんですけど・・・」

「細かい事はええからええから」

と言ってはやては監督と書かれた帽子を被った。

「え？なんですかそれ？」

「ああこれ？今日からウチが征西学園野球部の監督やー！」

（はあくはやてさんは何かにつけてハッスルしたがるんだから）

頭を抱える楓。

「ん？お前野球の指導なんて出来るのか？」

「大丈夫や」

親指立てて『バカでも出来る漫画で野球指導の方程式』という安っ

ばい本を取り出すはやて。

「大丈夫やてみんなバット振ったら真空波出せるくらいに鍛えたるわ」

「いや俺達普通の人間には無理ですよ」

「大丈夫や〜力君だって元々普通の人間やったんやから〜」

（果てしなく不安だ）

そう部員全員は思った。

このとき気づかなかった。この甲子園で凄まじい重傷者の山を作る事に……

## 第七話 野球大会（後書き）

はあ、何だかんだで祝野球部に入りました。で、イベントは・・・  
何はやておめかしして・・・は？デートしろ？なんで俺が？

次回！勇者指令ダグオンA's どっこい デートマル秘大作戦  
何で俺がこんなことせなければならんのだ！！



## 第八話 デートマル秘大作戦

ある日のダグベース

いつも通りたまり場で遊んでいる力達。

「そついえばさブレサガって本当にやるの?」

「さあ〜作者の気まぐれ次第じゃない?」

茶をすすりながら言う力と飛鳥。

「ていうか時代設定どうなるの?」

「多分Forceの後ぐらいじゃないの?」

「今更ながらエクスカイザーや火鳥さんどうなるんだ?」

「許可もらえば出るんじゃないの?」

「甲児さんたちは出るのか?」

「許可もらえば出るんじゃないの?」

「ユウヤミツキさんは?」

「許可もらえば出るんじゃないの?」

「大悟は？」

「許可もらえば出るんじゃないの？」

「ガガガは？」

「出ない・・・当面はウチの面子だけじゃ」

「ダグオン、マイトガイン、ゴールドラン、バーンガン、シズマか・・・」

会話が弾む力と飛鳥。ふと時計を見ると・・・

「あ！そろそろ」

ダグベースを出発する力。

## 第八話 デートマル秘大作戦

いつも待ち合わせする海鳴公園。

「はあくまだかなって30分くらい前に来てるんだけど」

力と待ち合わせしているはやて。約束の時間の30分前に来たはやては缶ジュースを飲んでいと・・・

「はやてちゃん」

「ん？」

誰かに呼ばれて振り返るはやて。すると一人の女性の姿が・・・

「あ。ご近所の鎌田さん！」

「探したわよはやてちゃん！ちょっとこっち来て！」

「え？ええええ！？」

訳が分からず連れて行かれるはやて。

いつもたむろする喫茶店

「お見合い？」

「うん！いや〜はやてちゃんって良い子いなくな〜って探してみたらね〜」

お見合い写真出されるはやて。

「いや・・・私まだ高校生ですよ！」

「許婚の一人くらい居た方が良いつてこついうのは早い方がいいのよ〜」

一人勝手に話を進める鎌田さん。内心はやても困っている。

(うわあ〜どう断ろうかな・・・)

その時

「は〜や〜て〜」

少し怒りながらはやてと鎌田の前に現れる力。

「たく探したぞ何やってたんだ？」

「あ！ちよつどええ所に！」

「は？」

力の腕に組み付くはやてはそのまま鎌田の元に連れてきた。

「彼南力君！ウチの彼氏や！」

ドンガラガツシャンガン！！

はやての一発にずっこける店内の人々。

「は？お前何言ってるんだよ！！」

「今日もこれからデートなんや！！なあ〜力君！」

「て！お前図書館で勉強おしえろぎや！！」

力の背中をつねるはやて。それを見ていた鎌田は・・・



「てめえ・・・俺の名誉はどうなるんじゃ!!」

「は!はしたない」

呆れる鎌田さん。そしては yet は追い討ちをかけてきた。

「まだあるで・・・うち力君と一緒に風呂まで入りました!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

もう反論する気力もない力と一々反応するのに疲れたその他のお客さん。

(・・・そりゃ確かにガキの頃はいらされたけどさ)

南家では yet をお世話している時に一緒に風呂に入らされた力。あながち嘘でもない為反論できない。

因みに寝たというのも冬の寒い日に力の布団には yet が潜り込んだ。

「よし!!」

鎌田が何かを提案した。

服屋

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

鎌田に無理矢理ペアルックにされてしまった力とは yet。しかも超嫌そうだ。

「ペアルックは基本！」

（（いつの時代のカップルだ？））

そしてそのまま町に出されてしまう力とはやて。

「くっそ・・・何で俺がこんな事しないといけねえんだ？」

「・・・ごめん」

「・・・警官採用試験落ちたらお前のせいだからな」

「ははは」

苦笑いするしかないはやて。そもそも今日は力の警官採用試験合格の為図書館で勉強を教えるという予定だったのだが・・・

「別に落ちてもおめえのせいにしねえよ」

「まあ・・・鎌田さんも納得したら帰るはずやから」

ため息を吐きデートする事になる力とはやて。

「っーか・・・デートって何やるんだ？」

「さあ〜ウチも実演は始めてやからな・・・」

とりあえず公園で散歩する力とはやて。

そのまま散歩しアイス食べたり昼ごはん食べたりゲームセンターに行ったり・・・そしてカラオケボックスに入り・・・

「　　」

持ち歌歌うはやて。力はひたすらジュース飲んでいる。

「ていうか・・・力君ウチにばかり歌わせてないで力君も歌え！」

「いやちよつと」

「なんや？ウチのマイクが受け取れへん言うのか！！??」

思いっきりガン飛ばしながら迫るはやて。

「わかったよ・・・」

何かをリクエストする力。するといきなりブルースが流れた。

「な・・・なんやこの渋い歌？」

「夏の～～上に～～広々と～～」

「て！演歌やん！」

あまりにも熱唱している力に何故か空想でスポットライトが見えた。

カラオケボックスから出ると・・・



「てめえら何やってんだ？」

力とはやての前に通るかかかる北斗一家。

「うわ〜パールック」

紫が力とはやての格好を茶化した。

（これには色々と事情があんだよ）

黙ってる力とはやて。

「ねえダ〜リン私たちもペア」うるせえ殺すぞ」もうダ〜リンのい  
けず〜」

超しかめっ面の北斗にじゃれ付く紫。そしてファーストフード食  
っているキャラロが言った。

「う〜お義父さんもうニンジン食べらんないよ〜」

嘆くキャラロだが・・・

「ニンジン食べるのとシヤマルの料理食べるのと好きなほうを選  
べ俺はどっちでも構わん」

「う〜食べる」

スパルタの北斗。なおここで第3の選択肢は無かった。そして選  
ばない理由は・・・

(ニンジン残したくらいで撃たれたくないな)

そう言っただがばってニンジン食べるキャラ。

その時

「この金髪タレ目のハゲ坊主!!」

フェイトがプラズマザンバーで北斗に斬りかかると北斗は銃を抜いた。

「なんだよまたてめえか」

「うつさいハゲ! 今日こそお前を殺し! キャロを取り戻す!!」

「……うるせえ……殺すぞ」

フェイトに銃を向ける北斗。そしてキャラが仲裁に入る。

「もう! お義父さんもフェイトさんも止めてください!」

ブチ

「え? 何今の音」

「何で?」

「へ?」

手がプルプル震えてるフェイト。

「なんでその凶悪ハゲは『お義父さん』で私は『フェイトさん』なの！！」

血の涙を流すフェイトに北斗は……

「てめえは『お義母さん』っていうより『お姉さん』なんじゃねえのか？」

「うつさい！！私だって『お義母さん』って呼ばれたーい！！！」

そう言つてプラズマザンバーを北斗に振り下ろそうとするフェイトに霧風がキャロの耳元でゴニョゴニョと呟いた。そしてキャロが・

「……お義母さーん」

「ズツキヨーン！！！」

キャロの一発で胸キュンになり嬉しさのあまり走り去ってしまったフェイト。

「ほい一件落着」

「「「「「おお〜」「」「」」」」

霧風の機転に拍手する力達。

北斗一家が帰ると鎌田が出てきた。

「ん〜ここまででは普通の友達でも出来るわね〜」

厭らしい顔でいう鎌田。

「これ以上何しろと?」

「キス!」

「「は!?!」」

「やっぱり恋人のしめはキスでしょ〜」

啞然とする力とはやてその時ダグコマンダーがなった。

「ん?お!はやてもうこんな時間だ!?!」

ダグコマンダーの時計を見せる力。

「あ!もうこんな時間やん!?!」

急いで帰ろうとする力とはやて。それを見た鎌田は・・・

「ちょっと二人ともどこに行くの?」

「「もう4時!?!スーパーのタイムセール!?!」」

「は?」

二人の言動についていけない鎌田。

「力君！今日は牛肉の特売や！！」

「んじゃすき焼きが良い！！」

「あいあいさ！」

夕飯も決まりスーパーに走る力とはやて。それを見た鎌田は・・・

「最近の子は進んでるのね。もう恋人の段階すつ飛ばしちゃって。ま、邪魔者は消えましようかね」

一人納得する鎌田は帰るのだった。

南家

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

すき焼きを囲む南家と八神家。

「なぐにしてみた？はやて」

御呼ばれされた飛鳥が聞いてみるとはやては放心して答えた。

「いや・・・なんか物凄く誤解されたような・・・なあ愛ってなんなんやろうな？」

「うわ〜珍しくはやてちゃんが考え事してる」

その事に笑うシャマルそして飛鳥とシャマルがはやてを別の部屋に呼び出すと・・・

「な！なんや？」

「まずな・・・夜、力が寝てる時にな力の布団に入るだろ・・・」

「それでもって〜」「待て待て待て待て！！」

いきなりのアホぶりに呆れるはやて。

「大体な〜力みたいな男にはそれでいちころじゃ」

「かあ〜品が無い！ロマンが無い！！そんでもって夢が無い！！」

「まあまあはやてちゃん聞いてよ〜それで〜はやてちゃんがあの格好でもすれば〜」

「嫌や！あんたらに愛だ恋だなんて語らせたウチが馬鹿やったわ・・・」

飛鳥達の面白半分の言葉聞かないことにするが何かを考えるはやて。

夜

「づつぎゃああああああああああああああああ！！！！」

力の絶叫が響いた。

律儀に実行しようとしたはやてから頑張っ  
て純潔を守りきった力は  
楓に頼んで部屋に防御システムをつけた。

## 第八話 デートマル秘大作戦（後書き）

くっそ・・・最高に酷い目にあつた・・・こんな時は野球だ！！甲子園に向けて特訓じゃ！！え？何はやてその格好・・・え？この特訓内容・・・おいちよつと待て！野球に関係あるのか？

次回！勇者指令ダグオンA's どっこい 地獄の大特訓

お前は野球を何だと思ってるんだ！！



## 第九話 地獄の大特訓

### 第九話 地獄の大特訓

ある雨の日

「はあく・・・たく何でこんな雨模様なんや・・・洗濯物乾かんしやっつてられんわ」

人間雨になると性格沈むようです。

そして

キュッピーン

はやての毛のアンテナが立った。

「な！なんや！？力君が何かやらかしそつな・・・い！！」

はやての目の前にある警察署そしてそこには何やら佐津田刑事ともめている力の姿が・・・

「はやてキック！！」

「ぬがあああ！！」

キック力1000tのはやてキックを食らい壁をぶち抜く力。そしてはやてが佐津田刑事に土下座体制に入った。

「すみません！すみません！ウチの馬鹿たれが何やったか知りませんけどとにかく私が謝っておきます！！すみません！すみません！」

「・・・八神・・・頭を上げてくれ」

「すみません！すみません！！」

「まあ・・・訳を話すとだな・・・」

ものの9分37秒前

「くっそー雨がよこれじゃ外で遊べねえじゃねえか・・・野球の練習も出来ねえし・・・ゲームも飽きた」

不貞腐れながら帰っている留年生南力。そしてがしつと肩を掴まれた。

「こら！！南力！！貴様そんなに暇なら勉強でもせんかい！！」

「佐津田のおっちゃん・・・そうだ！佐津田のおっちゃん！！」

佐津田刑事の両肩をがしり掴む力。

「な！なんだ！？」

「この雨逮捕しろ！！！」

「は？」

無茶振りに一歩引く佐津田刑事。

「貴様！警官をおちよくるのか！！？」

「お巡りなら市民の生活の保障の為に雨ぐらい逮捕しろ！！！」

「できるか！！！」

「根元さんは逮捕してくれたぞ！！！」

「は？」

目を丸くする佐津田刑事。

さらに過去にさかのぼり

「たく・・・雨ばかりかよやってらんねえ・・・」

不貞腐れて帰ろうとする小学生南力。そこに

「おお？力君じゃないか！どうしたんだい？」

根元の勤めている交番の前でばったりでくわした力と根元巡査。

「根元さん……この雨逮捕してくれ!!」

「は？」

「こんな雨ばかりじゃ外で遊べないじゃねえか!!」

「うん」

純情な子どもの頼みを無碍に出来ない根元さんは頭を捻らせると・

「とりあえず」

万国共通テルテル坊主を吊り下げ……

『こらああ!!雨!さつさと止まないと逮捕するぞ!!』

と空に向かって拡声器で叫んでみると……

1分後

「おお!雨が止んだ!!」

見事に止んだ雨。こうして根元はしばらくの間子ども達の間で『雨を逮捕した伝説の警察官』として称えられた。

それを聞いた佐津田刑事は・・・

「出来るか!!」

「なに!? おっちゃんには人情つてもんがないのか!!」

「貴様! 警官侮辱罪で逮捕する!!」

「あに!!」

「「ギャギャギャギャ!!」」

警察署の前でもめ始める力と佐津田刑事になり冒頭に戻る。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

流石のはやても開いた口が塞がらない。

「まあ・・・所詮人間に雨を逮捕するなどふか「聞いたぞ!!」え  
?」

佐津田刑事が振り返るとそこにはたくさん子ども達が・・・

「おっちゃん! 雨逮捕してくれよ!!」

「そつだそつだ! 根元のおじさんは逮捕してくれたぞ!!」

外で遊びたい子ども達の為に再び根元が一肌脱いだらしく伝説が復

活したようだ。

「市民の生活を守る警察官が市民のお願いを無碍にするのか!！」

今時の子どもはすぐこつこつという言葉を感じる・・・佐津田刑事はタジタジになるが・・・

「こつなったら・・・炎さんに逮捕してもらおう!!行くぞ!!！」

「」「おおお!!」「」

そう言っつて子ども達引き連れて炎の勤務する交番に走る力だった。

「ダメなら冴島総監だ!！」

「炎さんまでに止めておこつね力君」

笑顔で金平糖構えるはやてだった。

翌日

炎の凄まじい努力(?)の結果により翌日は晴れ渡り絶好の練習日和となった。

そして監督と書かれたタスキをかけているはやてが自転車に跨った。

「んじゃ・・・練習行くよ!!！」

『うおおい!!!!』

ランニングを始める征西学園野球部だが……コースが問題だった。

「八神さん」監督とお呼び「監督……ここ通るんですか？」

野球部員Aが立ち止まると其処はどう見ても民家。

「大丈夫や！ばれなければ！」

そう言っつて民家の庭を通るはやて。

「住居不振法乳で訴えられるんじゃないかねえか？」

「お爺ちゃんそれを言うなら住居不法侵入です」

民家を次々と抜ける野球部員達すると豪邸に入った。

「海鳴の民家にこんな豪邸があったのか」

等と感心していると……

「うぎゃああああ！！」

何故か絶叫する部員たち理由は……

「があああ！！」

庭で豹が放し飼いにされていたのだった。

「逃げるおおお!!」

野球部員が逃げ回ると池がありそこから・・・

「フカアアア!!」

「ワニ!?!」

ワニが放し飼いにされていた。

「いるよねこついう金持ち・・・って語ってる場合じゃねえ!!」

そう言っただけから豪邸から逃げるのだった。

「げえ・・・げえ・・・あの家絶対に空き巣に入られねえぞ」

「なんやこれぐらいで情けない・・・力君なら倒せたんじゃないの?」

「一般人と俺を一緒にするな!!」

等と絶叫していると今度は坂があった。

「この坂登るんですか?」

どうみても垂直にしか見えない坂を見た野球部員。

「何おじけづいとるんやいくで〜」

と言っただけ垂直の坂を上るはやて。



「こつなりややけじゃ!！」

『おつ!!!』

そう言つて野球部員たちも登るが半分まで登ると・・・

「ぜえ・・・ぜえ・・・」

ばて始める部員達。

「大丈夫か？」

「こんな地獄坂登つてられるか!！」

其処に平然と登る楓が・・・

「なんでお前平気なの？」

「みんな坂に逆らつて登るからダメなんだよ。坂に逆らわないで坂と平行に走れば平面なのだ!！」

重力の法則を無視した楓の理論に野球部員達はバテバテだった。

何処かの川原・・・

野球部員達もグロッキー状態になりへばっている。

「んじゃ仕上やで」

指ばっちんするはやては何かを召喚したそこには10メートルに

乗ったシグナムの姿が・・・

「あの・・・主・・・本当に良いんですか？」

「かまわへん。それじゃ最後の練習くトラックを受け止めるんや」

『なに！！？？』

絶叫の中トラックが部員達に向かって走った。

「こら！逃げるんやない！！」

「はやて！これは何の特訓なんだ！？」

「野球の特訓に決まってるやないの！？これぐらいできんと勝てへんて！！」

「アホおおおおおおお！！」

そう言つてトラックを受け止める力と楓だった。

結果

「あああああ」

無茶な特訓で打つ倒れている野球部員達。

「うん教えてもらった効果やとみんな野球のスキルが上がるはずなんやけど」

「誰に教わったの!？」

「なのはちゃん」

黒い笑みを浮かべる魔王の姿が・・・

「ふふふ・・・あの悪魔あの特訓で今頃死んでいるはずなの!?!?!  
「ヤアッハッハッハッハ!!」

「因みにコース考えたのものはちゃんです。ウチも力君ができればこれくらい出来るかな」と

「あの砲台今度あつたら覚えてるよ」

だがこれが甲を制したのか凄まじい技術を得た野球部員だった。

## 第九話 地獄の大特訓（後書き）

ん？父さん何作ってんだ？は？ロボットを作るって？いや、父さんには無理じゃねえか？は？やってみなきゃわかんないって・・・それは

次回！勇者指令ダグオンA's どっこい ロボットサイモン

何でこんな格好を？

## 第十話 ロボットサイモン

「  
」

漫画を買って帰路につく力。

「いや〜最新刊・・・あ！」

正面から買い物に出かけたはやてがやってくると

「うわ〜はやての奴どうっせなんか絡んでくるからな〜ここは何食わぬ顔して通り過ぎるのも待つか」

そうやって近くの電柱に身を潜める力。するとはやては通りすぎた。

「言ったか「もし〜」ビク!！」

何故か通り過ぎたはずのはやてが正面の民家の壁の隙間から顔を現した。

「もしかあなたは南力君では？」

力の至近距離に顔を突きつけるはやて。力が知らん顔をして溝の方向を見ると

「力君私の目を見んかい」

何故か今度は溝から顔を現すはやて。そして力が違う方向を見ると・

「ジー」

力の顔面に己の顔面を突きつけるはやて。

「あおーん」

犬の誤魔化しをして四つんばいで逃げる力。

すると

「逃げても無駄や・・・あおーん!!」

狼のまねで四つんばいで力を追っかけるはやてそしてそのままジャンプすると・・・

「アオオオオオオン!!」

「うぎゃ ああああああ!!」

力の尻に噛み付いた。

「ほのほえはひゃっぱりひひふんひゃ（その声はやっぱり力君や）」

力の尻に噛み付きながら喋るはやて。

「痛つて〜お前なんでそんなしつこいんだよ!？」

「ひひふんふあふえふあいなほほふえんひょうひふふあめふや。  
ふいふえふあふあふあふあふい（力君がけつたいなことせんように  
するためや。逃げたのが悪い）」

「お前のこりやいつたい何なんだよ!？」

往來の場で力の尻に噛み付いているはやて。

「とうか・・・早く放せよ!！」

「ふおふえが〜ふあずふえんようふいふあつふえふいもつふえ〜  
それが外れんようになってしもつて〜」

スッポリはまってしまったはやての口。この後力は尻を噛み付かれ  
たまま屈辱的に家に帰宅しはやてを尻から外すのに苦労した。

## 第十話 ロボットサイモン

ある日の八神家

『キングロオオオダアアアア!!!』

エクスカイザーが合体するシーンを見ているリインはお茶碗を持っ  
たままテレビに釘付けだった。

「おいリインタ飯くらいちゃんと食べるよ」

「そつだぞ父さん」

ヴィータとサイモンに注意されるとリインは立ち上がった。

「決めたです！！リインは将来ロボット博士になるです！！」

それを聞いたサイモンが・・・

「だっはっは〜父さんにロボット作るなんて無理無理〜」

「サイモン君の・・・馬鹿〜〜」

「あうち！！」

リインに氷漬けにされるサイモンだった。

その夜

トンテンカンテン

リインの部屋から黙々と聞こえてくる金槌の音。

「おいリインとつとと寝ろよ」

凍っているサイモンにお湯をかけながら言うヴィータ。

「嫌です！完成するまで寝ないです！リインにだってロボットの一個や二個作れるんです〜」



金属を打ち付けているリイン。

「体壊すなよ〜」

そう言つてサイモンを溶かすヴィータだった。

翌日

「う〜寒い・・・な!!」

と氷漬けから解けたサイモンがリインの部屋を訪れると・・・

そこにあつたのは金属でできた物体。ジーツと見るサイモンは・・・

「やい動け!・・・動かない・・・ん?」

金属でできた何かを覗いてみると・・・

「空っぽだ・・・動かないじゃん「動くです!!」!!」

寝言で叫んだリインを見たサイモンは・・・

「ん?」

寝ぼけ眼をリインが目を覚ますと・・・

ギギギ

ラインの作ったロボットが動いた。

「ヴィータちゃん、ラインのロボットが動いたです!!」

階段をくだりヴィータにロボットが動いたことを報告するライン。

「あ?んな馬鹿な・・・あ」

ヴィータが降りてきたロボットを見ると・・・

(あ、サイモンが入ってたな)

実はラインロボットに入っているサイモン。

「そつだ!サイモン君にも見せるです!」

「「ギク!!」」

ギクリとするサイモンロボットとヴィータ。

「な・なあロボットにサイモン探してこさせればいいんじゃないかねえか?」

「そつです!ロボットさんサイモン君を探してくれます!!」

敬礼するサイモンロボットは玄関を出ると・・・

「は!!」

すぐに脱ぎ捨て玄関から再び入った。

「おっ父さん！どうしたい？」

サイモンが玄関に入ると頭にダイブするリイン。

「サイモン君リインのロボットが動いたです！！帰ってくるまで待つてるです」

「あ！俺用事思い出した！！」

「だめです！！リインと一緒にロボットさん待つです！！サイモン君の頭からロボットさん見るです」

余程気に入ったのかサイモンの頭から離れようとしないうリイン。困ったサイモンとヴィータが出した結果。

選手交代

「これがリインのロボットさんです」

ヴィータがこっそり庭から出るとサイモンが脱ぎ捨てたロボットに着替え参上した。満足そうなリイン。

「あれ？ヴィータちゃんは？」

「「ギク！！」」

「ヴィータちゃんが来ないとご飯が食べられないです」

「あ！俺探してくる！ロボットお前も来い！！」

ヴィータロボットを引き連れ玄関を出ると・・・

選手交代

食卓に着くサイモンロボットとリインとヴィータ。サイモンロボットが朝食を食べようとすると・・・

「だめです！これはサイモン君の分です」

「いやリイン食わせてやれよ」

「ロボットさんはご飯食べなくても生きていけるはずですよ！！」

あまりにも理不尽な言葉にあんぐりになるサイモンロボット。

「そつだこれを食べさせるですよ！！」

するとリインが自宅用のコンセントに配線を繋ぎサイモンロボットに繋いだ。

結果

「# “&\$#\$(%)&##\$%#%&\$」

サイモンロボットの身体に数億ボルトの電流が流れた。もがき苦しむサイモンロボット。

「なんか嫌がつてるみたいですよ」

「いや多分喜んでるんだ」

必死にごまかすヴィータそれを聞いたリインは・・・

「じゃあ電流倍にします」

「（ ） ・ 「 （ ） （ & & \$ % & # ” “ # \$ ” # \$ & “ & ） % ’ & ’ % & \$ \$ % ” # \$ “ # \$ ” & % （ ’ % & % % & # \$ % “ ’ \$ # % & ） \$ & \$ % ’ % （ % （ % % ”

倒れるサイモンロボット。

庭

「まったく死ぬところだったぜ・・・」

おにぎり食べながらぼやくサイモン。

「リインもすぐに飽きるってそれまでだよ」

「身体もたねえよ」

「んじゃリインの夢ぶっ壊すのか?」

しびしびロボットを続けるサイモン。

「ロボットさん掃除してください〜テレビつけてください〜お菓子持ってきてください〜」

ものすごく顎でこき使われるサイモンロボット。

「もうこれからは全部ロボットさんに任せてはやてちゃんを楽させるです〜あ！木に風船が引っかかったですロボットさんジャンプで取ってください」

ラインにそう言われると10メートルはあろう木の鉄片に向かってジャンプするサイモン。この着ぐるみに仕掛けでもあるのかサイモンの身体能力が高いのか謎である。

「ロボットさんお買い物行ってきてください」

休み無しで18時間以上働かされているサイモン。

「大丈夫です！ロボットさんは休まなくて生きていけるです」

そう言われ買い物に出たサイモンロボットは・・・

「やってられるか！！」

着ぐるみをゴミ捨て場に捨てるサイモン。

買い物を終わらせ帰宅すると

「おかえりです〜あれ？サイモン君？ロボットさんは？」

「父さんがこき使うから出てった」

「ガーン!?!」

夕暮れの土手

「ロボットさん!もうこき使わないから帰ってきてください」

どこにいるかもわからないロボットに向かって叫ぶリインを見たヴ  
イータは・・・

「おめえ何でもうちよつと我慢できなかつたんだよ?」

「だって親びん俺にだって人権があるぞ!」

「おめえにそんな大層なもんは無い。見るよあのリインの寂しそうな顔」

物凄く泣いているリインを見たサイモンは

「俺にだって人権くらいあるもん!?!」

そう言って走り去って行ってしまった。

「おいもう帰るぞ。ロボットだって羽伸ばしてるって」

「嫌われたままさよならは嫌です」

その時

ガシャコン

リインとヴィータの前に現れるサイモンロボット。

「あゝロボットさん帰ってきてくれたです」

フルサイズになりサイモンロボットに抱きつくリイン。

「うわゝ汚れちゃったですゝ帰って一緒にお風呂です」

( (え?) )

八神家のお風呂

「ブクブクブクブク」

サイモンロボットを湯船に沈めているリイン。

「もっと浸からなくちゃ駄目です」

「ブクブクブクブクブクブクブク!!!」

風呂上りの溺死寸前のサイモンはこう思った。

( 子供の夢を守るのは大変だあ!!! )





## 第十話 ロボットサイモン（後書き）

今日は俺の誕生日って何？俺の誕生日に八神家でどっか出かける？断る！！俺が八神家と一緒に旅行すると必ず死ぬんだ・・・て？なんで倒れてる俺を俺自身が見てんだ？まさか！！

次回！勇者指令ダグオンA's どっこい 南力殺人事件名探偵シヤマルの事件簿2

ユウに甲見さん何で死んだ俺が見えてんの？まさか！！

第十一話 南力殺人事件名探偵シャマルの事件簿2

古今東西ミステリーには掟がある

主人公の名探偵は華麗な推理を披露し見せ場を作らなければならない  
脇役の刑事はとぼけた推理を連発し主人公の見せ場を作らねばなら  
ない

ヒロインの女性とはロマンスが生まれることも

第十一話 南力殺人事件名探偵シャマルの事件簿2

5月5日の南家

「そついで・・・今日は」

5月5日ごどもの日・・・それは力がこの世に生を受けた日・・・つまり誕生日だった。尚南家では大したイベントではない。

理由は

「この日から母ちゃんの苦勞が始まったな」

「うんうん」

新次郎とことには頷かれるダメ兄貴。

「そういえば・・・今日はシグナムさんに剣道教えてもらうんじゃないかったのか？」

「いや〜今日はシグナムさんから兄ちゃんを足止めしろって言われてて」

「は？」

シグナムが足止めをしるといわれ嫌な予感がする力。その時だった。

「力君誕生日おめでと〜」

力の背後から現れるはやて。そして思った。

「逃げ「さへんで!」」

逃亡を図ろうとした力を押さえ込むはやて。

「はなせ!...!」

「まあ今日は力君の誕生日じゃん？だからうち等で祝ってあげよう  
思ってたな〜これから温泉いか「断る！！」な！！」

温泉の提案を断る力。

「なんでや!？」

「おめえと温泉行った遠出すると俺は死ぬんだよ!!」

はやてと温泉に行つて大概死んでしまう力。

「そもそも・・・なんで毎回毎回お前は温泉に連れてくんだよ!!」

「な〜に力君うちのナイスな身体見たくないん？」

くねつて見せるはやてに力は・・・

「おめえの素っ裸なんて見たら俺はムスカみたいに目がー！目がー  
！！て絶叫してやるよ」

物凄く興味無さそうな力。

「そんな見たくないんかい!!」

懐から金平糖を取り出し力に向かって投げつけた。

「つぎやあ！いつも思っただけどおめえどっからそれ出してんだ？」

「こん中しまつてるんや」

アンダーシャツさすはやて。

「どつやってしまったんだ？」

「いっぺん見てみたいよね」

さっきからすべりまくりの力とはやてのショートコントを傍観していた新次郎とことはははやてのシャツの中が気になってしまう。

## 結局

八神組、宇宙警備隊、マジンガーチーム、影の守護者チーム、おまけ二名と一緒に温泉に向かうのだった。

部屋に着くと・・・

「それじゃあ〜私たち温泉はいつてくるからね〜覗くんじゃないわ  
よ」

さやかに念を押される甲児と剣児。そして女性陣が温泉に行くと・・・

「よっしや！覗きにズドン！！」

覗きに向かおうと発言した甲児の顔面に向かって銃を撃つ北斗。

「・・・くだらねえ事やってんじゃねえ」

「いや北斗！けどな・・・覗きはロマズドン！！」

二発目が発射され甲児の頬を銃弾が掠めた。

「て！北斗マジで当たるぞ！！」

「心配しなくても日ごろの行いに自信があれば当たんねえよ」

思いつきりガン飛ばす北斗。嫁と娘も一緒なのでいつもより気が立っていた。

「ああそつか！北斗てめえそついう趣味ズドン！！」

今度は剣児が撃たれた。

「いっぺん死ぬか？てめえら」

「おう！死ぬのが怖くて覗きが「ほお」「ビク！！」」

剣児の背後から出てくる元鬼の風紀委員長兼現鬼の生活指導・広瀬海。

「貴様ら・・・この私の目が黒いうちは不埒なことはさせん・・・」

「」「」つっぎゃあああああ！！」「」

そう言って甲児と剣児は海に連行されるのだった。

尚

「北斗さん〜甲児君と剣児君が覗きに来ようもんなら容赦なく撃つて良いからね〜」

そう言ってミツキは巨大なアタッシュケースを置いていくのだった。アタッシュケースを開けるとそこにはびっしり入っている弾。

「ああ・・・これで弾切れは当分無いな」

覗きにいけば確実に射殺されることを確信した甲児と剣児だった。

「くら！話はまだ終わってないぞ！！」

「」「うっひゃ〜」

再び海に連行される甲児と剣児だった。

温泉

仲睦まじく談笑している女性陣。

「全く・・・覗きなんていやらしい〜」

「力に夜這いしたおめえが言っつか〜」



「な!!」

はやての一発に赤面する成人組。

「そんなことやったんだ」

「はやてちゃん不潔」

ノーヴェとつばきに呆れられるとミツキが・・・

「あの後楓さんの罨外すの大変だったのよもう肩こっちゃって」

肩こり解消の温泉に浸かるミツキ。

「ていうか・・・ミツキさんよく休暇取れたね」

飛鳥の質問にミツキは・・・

「ふっ・・・上の連中なんてコネと建前と実績でチヨロまかしたわ」

手をひらひらさせるミツキのおそろしい発言に・・・

(あゝこいつだけは絶対に敵に回してはいけない・・・)

などと思う女性陣だった。

温泉のカウンター

「「かんぱい」」

成人した記念として初代ダグオンである炎と一緒に初酒を飲もうとする力。

「それじゃあ、成人に乾杯ん？なんか入ってるな・・・捨てちゃえ」

コップから根っこのような物を取り出す力は飲み干すと・・・

「あ……………」

横に倒れた。

「ん？どうした？力？酔ったのか？・・・おい！！」

その時

「ういゝマッサージ器良いねゝあ」

マッサージ器の飛鳥があるものに気づいた。それは

「よー！！」

チーン

南力享年20歳 死因毒殺

「やっぱり死んだか・・・」

「恥ずかしながら・・・」

「とつとと生き返ってこいよ・・・」

「うーん今回もまだお迎えが来ないから戻れないんだよね」

頭を抱える飛鳥。そして

「ここは私の出番ね」

「あ！」

力と飛鳥の目の前にコスプレしたシャマル。

「ここは・・・頭脳明晰！容姿端麗！行動力抜群の名探偵・・・シヤマル・ホームズの出番ね」

「んじゃああたしはまた刑事なの？もう一人巻き込め・・・」

そう言つて飛鳥が呼んだ助っ人は・・・

「それじゃあ捜査を開始しましょう」

捜査を開始するミツキ。この中では一番プロであろつ。

名探偵と二人の刑事は力の死体を調べ始めた。

「鑑識さん、ちょっと調べて」

「はいはい」

足が消えかかっている便利人間南楓このまま力が死んでしまうと運命が成立せず消滅してしまう。

「それじゃあ、足跡を化学分析しますね」

「ちょっと待って・・・機材が・・・」

飛鳥のツッコミに楓は・・・

「もうまんたい！」

五分後

「やっつと」

五分でパソコンを作ってしまった楓。エンジニアとしての才能は高いようです。

こうして化学分析が始まる。

別ではシャマルが力の死因を調べた。

「毒殺ね〜力君のお酒のコップから毒ダインが検出されたわね〜これは無色透明無味無臭の毒よ・・・この辺の植物の根っこにその成分がとれるのよね」

ポスターにも抜くなど書いてあった。

「私は医学に精通してるからね〜あらゆる毒を私は『舐めて』その種類を特定できるの」

シャマルの一発に青ざめるメンバー。

「え？なに・・・シャマル先生。力君が死んだ毒舐めたんですか？」

「大丈夫〜私は現代医学にも精通しているから」

シャマルの身体に変調が無いことに驚くメンバー。

「てことで〜容疑者〜」

「らじゃ！〜！〜」

そう言って容疑者として連れてこられた組長とおまけ二人。

「人権無視や！〜！〜」

「ひどいの！〜！〜」

「そつだ！〜！〜」

毎度おなじみの容疑者。そしてそれには誰も納得する。

「動機はこれかしらね〜複雑な三角関係のもつれでユーノ君がなのはちゃんに子供を作ってフエイトちゃんとも付き合っているってことかしら」

「うわ〜最低だな司書長・・・警察は力に慣れんぞ」

炎がサジを投げた。

「え!?!なに!?!私のユーノ君を捏造に使わないでほしいの!」

「私ユーノと付き合っていないもん!」

と各々反論するなのはとフエイト。

「じゃあ〜うちはここぞ〜」

「はやてちゃん?はやてちゃんが一番力君のこと殺しかねないよね〜」

「シヤマル?それが主に言うこと?」

打つ手なしのはやて。

「検索結果でした〜」

シヤマルに分析結果を提出する楓。

「これ監視カメラの映像」

とミツキ。

「はい、目撃証言」

と飛鳥。

「なるほど・・・謎はすべて解けたわ」

「ちよつと勝手に話が進んでるんですけど!!」

はやてを尻目に話が進んでいくシヤマル。

「犯人は・・・フェイトちゃんなの!!」

「えええええ!!」

身に覚えの無いフェイト。

「ちよつと待つて私本当に殺してないよ!!」

「そうこれは・・・不幸な偶然が重なった事故なの・・・」

「は?」

「まずこのカウンター・・・足跡が関係者だけに絞ると・・・炎さん力君・・・そしてフェイトちゃんしか居ない」

「そ!それはお風呂上りの飲み物を取りにいかうと思つて・・・」

「更に監視カメラの映像・・・ここでフェイトちゃんは変なものを拾って投げ捨てた・・・」

「根っこ拾ったのよ!!」

「そうその捨てた根っこは力君のお酒のコップにダイブした・・・周りのお客さんはそう証言してるわ・・・フェイトちゃんが拾った根っこ・・・それは誰かが偶然抜いた毒ダインの根っこ・・・そして偶然が重なり・・・力君が死んだ原因は!!フェイトちゃん!あなたです!!」

「がーん!!」

そう言っつて崩れ落ちるフェイト。

「そう・・・あれは一昨日の夜だった・・・」

「え?フェイトちゃん何やってるの?」

「いや・・・推理ものの最後つてな・・・犯人の胸のうちを明かして終わるやろ」

「偶然でそんなものがあるの?」

フェイトの語る動機に疑問を持つのはだった。

「あの男は散々私を弄んだ拳句捨てたのよ!!」

物凄く犯人に酔いしれているフェイト。



「・・・いや・・・力君がフェイトちゃん相手にそんなことできるわけないやん」

「あつてそうそう殺しにかかるのが落ちよ」

「ていうかさっきの三角関係のもつれからどうしてここまで妄想できるの？」

三者三様の意見もつともである。

「さっいきましようか」

こうして最後に立ち去る犯人を演じきったフェイト。

5分後

「ぶはあ!」

何とか成仏できた力がんばって生き返るのだった。

尚この出来事は脚色されドラマ化されたいらしい。

第十一話 南力殺人事件名探偵シヤマルの事件簿2（後書き）

ふゝ俺は人生で何回死んだんだ？うゝんわからん・・・あ！佐津田のおっちゃんが検挙率悪くて首になりそう？しょうがねえ捕まってるか

次回！勇者指令ダグオンA's どっこい 佐津田刑事奮闘記

え？俺一人逮捕したくらいじゃダメなの？

## 第十二話 佐津田刑事奮闘記

### 第十二話 佐津田刑事奮闘記

ある日の南家

「ないない！！誰が黙って食べたんだ夕飯のおかず！！」

力の皿の上にあった夕飯のおかずがごっそり無くなっていた。

力の絶叫に台所に集まるはやて、新次郎、ことは。

「なんや？私食べてへんで」

「俺も食べてないよ」

「私も」

「じゃあ何で俺の夕飯のおかずがなくな・・・」

ある事を思い出した力。

30分前

「・・・美味そう・・・もう我慢できない！！」

そう言うっておかず食べる力。

現在

「俺だった」

「ドアホオオオオオオオオオオオ！」

「うぎゃああ！！」

はやてに金平糖で叩き潰される力。

「兄ちゃん！自分で食べて忘れるなよ！！」

「そうだよ！！私たちに濡れ衣着せて！！」

プンス力怒る新次郎とことは。

「ま・・・間違えは誰にでもある・・・」

「「ぶ」

「静かに！」

そこではやてがストップをかけると手を上げて懺悔した。

「うちは力君の財布から黙って千円借りた」

「な！はやてひどいよ！俺のおこづかいたただでさえ少ないのに！！  
ん？新次郎・・・おめえもなんかあるんじゃないかねえ？」

新次郎が手を上げて答えた。

「俺兄ちゃんのゲーム勝手に借りた〜」

「あーやりたいと思ったのにないのはお前のせいか！」

今度はことが手を上げた。

「私お兄ちゃんのカップ麺勝手に食べたのとはやて姉ちゃんの香水勝手に使った〜」

「ああ〜楽しみにしてたのに」

「香水くらい買ってあげるのに・・・」

はやて、新次郎、ことはの順に自分の罪を告白すると・・・

「う〜んみんな色々やってるんだな・・・ようし！一家を代表して俺が自首しに行くぞ〜」

と言って警察署に向かう力だがここで全員思った。

（（あれ？被害にあってるのって全部力じゃ（（）

そう思ったヴォルケンスはスルーを決め込むのだった。

そこでシグナムが何かを思い出した。

「ああそつだ新次郎お前今日の剣道の練習終わったら私の背中流せ」

「は！！！何で俺が！！！！ことはにやらせろよ！！！！」

「つべこべ言わずやれ」

「いやああ人殺し〜」

等とシグナムに風呂に連行される新次郎13歳だった。

警察署

「全く人がまじめに仕事してんのに所長の頑固もん〜」

等と愚痴を言う佐津田刑事その時。

「よお！佐津田のおっちゃん〜」

「ん？南力・・・なんか用か？」

「自主しに来たぞ！」

その言葉を聞いた佐津田刑事は・・・

「貴様今度は何をやらかしたああ！？」

「夕飯のおかずのつまみ食い」

「・・・ぐ！貴様警察舐めてんのか！！」

あまりにもものくだらない罪で自首してきた力に頭に筋浮かべ眼球血走る佐津田刑事。

「自主しに来た犯人の気持ちを無碍にするのか!!」

「貴様警察を教会かなんかと勘違いしてるのか!？」

「炎さんはちゃんと調書とつてくれたぞ!!」

「なに・・・あいつは警察業務なめてんのか!!」

等と炎に文句を言う佐津田刑事。

「もういい帰れ」

「え？俺を許してくれるの珍しい」

「ああ許す許す・・・」

もう力に付き合つのが疲れた佐津田刑事は力を逃がすと・・・

「佐津田君」

「所長？」

「君は犯罪者を何逃がしているんだ」

「いや、しかしあいつのやった罪はですね・・・」

「このところ検挙率落ちてるし・・・検挙率上げないとクビだし  
ちやこよ」

「クビ!!」

何故か力を連れ戻し調書を取る佐津田刑事。

「てなんで急に逮捕したの？」

「検挙率上げないと俺がクビになるんだよ!!」

あまりにも個人的な理由でとっ捕まった力は

(まあいつも迷惑かけてるし・・・ここは捕まってやるか)

等と思った。

「で？お前は何をやったんだ？」

「今回は夕飯のつまみ食いしかやってない」

「貴様もつと何かやってないのか！？銀行強盗とか誘拐とか」

「・・・おっちゃん今回はやってないって」

「うゝ！もつと検挙しなきゃクビに・・・」

「しょうがねえな」

日頃佐津田刑事に迷惑をかけてるので電話する力は・・・

「呼んだか」



佐津田刑事の下に駆けつける飛鳥、北斗、サイモン、楓。

「貴様ら・・・何やった？」

「傷害罪」

と飛鳥

「・・・銃刀法違反」

と北斗

「グイータに寸借詐欺」

とサイモン

「違法改造！に違法開発！！」

と楓

そして力が・・・

「まあこの際だ！このままおっちゃんの前で自首して罪を償っちゃ  
お〜」

「お爺ちゃん佐津田さんの検挙率ぐらいなら私が偽造しちゃいます  
よ〜」

等と楓の違法行為を止める力。

「貴様ら全員を検挙したところで俺のクビは免れんだ!!」

「てかどんだけ仕事してないのよ」

飛鳥のツツコミに佐津田刑事は・・・

「ああ！最近天野とかいう奴に三億円強盗の疑いがあったてな！」

「そんな根も葉もない情報信じてるんだ」

呆れる飛鳥その時楓のアイディアが・・・

「お母さんを題材にした歌でも歌って犯人さんを自主させるのは？」

「そんなんで来るの？・・・あたしも良く使う手だけどさ・・・」

カラオケセットを表に置く楓はマイクを構えた。尚何故中身が某偉大なる歌姫の飛鳥じゃないかという飛鳥は超絶的な音痴だからであつた。

そしてサイモンが趣味のサクスを構えて吹き始めた。

「　　」

町中に楓のお母さんを題材にした歌が響き渡ると・・・

「うおおおおお！！母ちゃん！！！！」

次々と警察署に駆けつける犯罪者達。

「泥棒しました！」

「痴漢しました！」

「置き引きしました！」

「かつ上げしました!!！」

「強盗しました!!！」

と母親を思い出し泣きながら次々と自首してくる犯罪者。30人くらいは居たであろう。それを見た佐津田刑事は・・・

「市民の協力に感謝します！」

そう言って次々と逮捕した佐津田刑事は何かクビは免れるのだった。

尚この結果力達の犯罪はすっかり忘れてしまった佐津田刑事だった。

第十二話 佐津田刑事奮闘記（後書き）

ケンタ

「そついえばフェイト先生ってなんで教師になったの？」

フェイト

「それはね・・・聞くも涙・・・語るも涙の苦労話があるんだよ・・・」

海

「何やってるフェイト！」

フェイト

「広瀬海！！また私の事を散々引っ張りまわすの！？」

次回！勇者指令ダグオンA's どころい フェイトの教育実習日誌

フェイト

「やってられるか！ストライキだ！！」

海

「ほお貴様いい度胸だな」

## 第十三話 フェイトの教育実習日誌

ある日の天野平和科学研究所

珍しくお茶をしにきたフェイトをもてなすケンタ。

「そういえばフェイト先生前から聞きたかったんだけど」

「なに？」

「フェイト先生って何で先生になったの？」

持っているティーカップを握りつぶしてしまうフェイト。

「ふえふえふえふえフェイト先生どうしたの？」

「……聞きたい」

低音で言うフェイトにケンタは聞くしかないと思ってしまう。

「それはね……聞くも涙……語るも涙の話があるのよ……」

涙目になりながら語り始めるフェイトさん

第十三話 フェイトの教育実習日誌

鬼の生活指導員広瀬海登場

二年前の山海高校

教壇に立つ生活指導の教師広瀬海。

「ええ！今日はみんなに新しい仲間を紹介する。入って来い」

海に指示されて教室に入ってくる金髪の少女。

「自己紹介」

「今日からここで勉強させていただくフェイト・T・ハラオウンです」

そう言ってフェイトは生徒達に挨拶をするのだった。

さらに遡る事数週間前

「山海高校に通え？」

突如ノルウェールに呼び出されたフェイト

「そうです。仕事ばかりじゃなく学業で青春を謳歌するのもいいものですよ」

「ですが私には仕事が・・・」

「その辺は停職にしておきましたから安心を」

「な!」

ノルウェールの権力により山海高校に通う事を余儀なくされてしまったフェイトだった。

そして山海高校でフェイトは海のクラスに編入された。

「さあ!他の生徒と同じように特別扱いはしないぞ!いいな!」

「はい!」

そう言うフェイト。クラスメートとは持ち前の社交性で打ち解けるが管理局がフェイトにSOSを求めてくると海が止めた。

「なんで!」?

「学生の本分は勉学だ!」

「けど困って!」心配ない!」

海の指示により翼と森が出撃させられた。早い話がフェイトの抜けた穴はダグオンのメンバーがカバーしているらしいので困らないらしい。

「私の存在価値って!」

愕然とするフェイト。

翌日

「マズイ！遅刻だ！！」

朝寝坊してしまったフェイトは急いでバスに乗り山海高校へ向かうが……

「あゝ」

校門は閉まっていたため遅刻は確実である。そこでフェイトは遅刻を誤魔化す為に壁からの進入を試みた。

「よっこいせ！！」

フェイトが山海高校の壁をよじ登ったその先に……

「は！」

「……………」

壁をよじ登るフェイトの姿をジーツと見る海の姿が……

「他の先生は誤魔化せてもこの広瀬海は誤魔化せん！……貴様は遅刻だ」

ヒュンと竹刀をフェイトに向ける海。

「がぐん……一番見つかりたくない人に見つかった」



「つべこべ言うな！生徒手帳！」

「はいはい……」

「返事は1回！」

「は〜い!〜!」

そう言つてカバンを探るフェイトだが……

「しまった！忘れてきた！！んべ!〜!」

その瞬間海に竹刀で顔面を叩かれるフェイト。

「貴様……学業を甘く見ているのか？」

「私だつて執務官やつて必死なんです！なのに急に学業なんてハゲア!〜!」

再び顔面を竹刀で叩かれるフェイト。

「貴様……管理局の仕事を言い訳にするな……貴様この広瀬海が徹底指導してやる!こい!」

「ちよつと離してよ!」

「貴様をのさばらせておくと生徒に示しがつかん!こい!」

「離してつたら離せ!〜!」

等ともめていると・・・

「広瀬先生」

海とフェイトの前に現れる老人の姿が・・・

「朝日山校長！」

「何事ですか？」

「はあ。この生徒が遅刻をしまして生徒手帳なども忘れたために私が指導を」

「いや！今日は！」

「ハラオウン！」

「は！はい！」

言い訳を試みるフェイトに朝日山校長力を込めフェイトの名前を呼ぶと笑顔になり・・・

「元気かね？」

「は！はい！」

「なら良かった・・・さ！授業がもう始まっている。早く行きなさい」

「は！は！いい！」

そう言っつて海から逃れるフェイト。

「校長宜しいのですか？初日から甘やかすと示しが」

「広瀬先生・・・元気が一番！はっはっはっはっ！！」

そう笑いながら朝日山校長は去っていった。

昼休み

「それ私の！！」

「ああ！それは俺のじゃ！！！」

熾烈な購買のパン合戦。フェイトも本日は弁当を忘れた為に争奪戦に参加していると・・・

「とっつたああ！あ！！！」

掴み上げたクリームパンだが勢い余つてとある人物の顔面にダイブした。

「ほお・・・貴様いい度胸だな」

海だった。

「ちよつと待って今のは事故！！んべ！！！」

すかさず顔を竹刀で叩かれるフェイト。

「言い訳無用こい!!」

「ああえええ!!」

そして処遇について朝日山校長に直訴する海。

「そうですね……ではハラオウン……君は罰として……向こう一週間放課後の校内全てのトイレ掃除を命ずる」

「えええ!!トイレ掃除!!」

放課後

「うんしょ!うんしょ!!こんな事になるなら!停学になったほうが!!んしょ!マシ!!」

「ぼやぼやするな!」

海に竹刀を向けられながら必死にブラシで床をこするフェイト。それをみた海は……

「違う。そんなやり方では完璧とは言えん……貸してみろ!」

「あ!」

フェイトからブラシを取り上げる海は構え・・・

「よく見る。こうだ！ふん！ふん！！」

精一杯磨き始める海。

結果

「ま！眩しい！！！」

目が眩むほど綺麗になったトイレ。そして海はフェイトにブラシを差し出した。

「さ！やってみろ！！！」

「うぎゅゆゆ！！！」

海に徹底的に指導されるフェイトだが・・・

「もう嫌だ！！！」

バリアジャケットを装着するフェイトはそのまま裏山に逃げ出した。

「ここまで来れば自由だ！！！」

「待て!!」

海がフェイトを追いかけ裏山に出るとフェイトは海を迎え撃つ体制をとった

「広瀬海!!何故ここが!?!」

バルディッシュを海に向けるフェイト。すると海は竹刀を向けた。

「……………」

木の上からフェイトを見下ろしている竜の姿が。

「刃柴竜……まさか奴に私の監視を?」

バルディッシュをザンバーフォームにするフェイト。

「何の真似だ?」

「決まっている!ここでお前を倒し!私は自由になる!!」

「私とやる気か?・・面白い」

海が左腕を翳した。

「トライダグオン!」

海がダグコマンダーを起動させると青いダグテクターが装着されるフェイスのマスクで覆われる。

「タアアボカイ!!」

ダグテクターを装着した海と向かい合うフェイト。

「は!!」

ハーケンフォームで斬りかかるフェイトだが海はフェイトの一撃を受け止めた。

「く!!」

「はああああ!!」

フェイトと互角のスピードで渡り合う海。

そして

「シールドスモーク!!」

「なに!!」

海のダグテクターの排気口から出されるスモークをまともに受けるフェイト。

「げほげほ!!は!!」

フェイトが空を見上げると海に上を取られた。

「タアアアボホイイルクラッシュ!!」





ダグターボから投げつけられるタイヤを咄嗟に避けるフェイト。

「大丈夫！奴はまだ本気じゃ」「おいダグターボどうした！？」「な！」

ダグターボの元に駆け付けるダグアーマー、ダグウイング、ダグドリルたちライナーチーム。

『いい所に着た！生活指導だ！合体だ！！』

ダグターボの無茶フリにライナーチームは相談し・・・

『どっつするっ』

『んまあ今の海に逆らうと後が怖いし』

合体する決意をする。

(マズイ！マズイ！マズイ！マズイ！マズイ！マズイ！)

フェイトの頭の警報機が鳴り響く。

『『『『超重連合体！！』』』』

ライナーチームが手を組むと合体フォーマーションに入った。ダグウイング、ダグアーマーが下半身に合体すると上半身に変形するダグターボが合体し下駄を履き肩にダグドリルが合体すると頭部が車輪を回しながら現れた。

『『『『スウウウウパアアアライナアアアダグオン！！』』』』

スーパーライナーダグオンに睨まれるフェイト。絶体絶命です。

『いくぞー!』

「うぎゃあああああ!」

スーパーライナーダグオンの拳を避けるフェイト。すると・・・

『アーマーバスター!』

ズガガガガガガガガガ!!!

「( & amp ; ; ) & amp ; % \$ & amp ; # % # ” \$ ’ % \$  
( ( “ ) ( # ’ ) & amp ; ; # ’ ) & amp ; ; ’ ( “ )  
スーパーライナーダグオンのアーマーバスターが乱射され無様に避けまくるフェイト。

『ハイパーフラッシュ!』

「ぎゃあああああああ!」

胸から発射される光線で黒焦げになるフェイト。

「ちぎゅしょおおおおおおおおお!」

・ 自棄になりながらスーパーライナーダグオンに向かうフェイトに・・・

「スーパーライナークラッシュュ!!」

「あああああああああ……」

スーパーライナーダグオンの最大の技がクリーンヒットした。

黒焦げのフェイトは海に引きつられ山海高校に連れ戻されると待ち構えていたのは朝日山校長だった。

「は！朝日山校長！」

「広瀬先生……流石にやりすぎでは？」

「しかし」

そして朝日山校長はフェイトの顔をジーツと見ると……

「それでは。ハラオウンにはこの私自ら特別講習をさせてもらいます」

「え？何ですか!？」

「自由な校風とは勉強をおろそかにする事ではありませんよ。はっはっはっはっ!」

校舎に入っていく朝日山校長。

そして

グイ

「え？」

「さあ！朝日山校長がお待ちだ！行くぞ！！」

「ええええええええええええええええええええええええ！！」

こうして海に連行されるフェイトは朝日山校長直々に補習を受けるのだった。

現在

「こうして私は鬼にしごかれながら見事に教員免許をとったとさ……」

「良くフェイト先生プツンしなかったね……」

・  
フェイトの学生生活を聞いて青ざめるケンタの質問にフェイトは……

「ふ！そこははやてに習ってあの悪魔を襲撃した！！」

その辺はフェイトも力に八つ当たりし程よくストレスを発散したらしい。

「というか……なんで力兄ちゃんに八つ当たりしたの？」

「あの悪魔と出会わなければ私たちはダグオンと無関係でいられた  
! !」

そう主張するフェイトにケンタは力に同情するのだった。

第十三話 フェイトの教育実習日誌（後書き）

はー今日は俺の出番は無かったな・・・へ？砲台じゃねえか何だそのお腹の絵・・・腹踊りでもするのか？なに！？最強の人間になれる呪いの検印？って！なんだ無茶苦茶強いぞ！え！！消すには標的が勝たなきゃいけないの！？勘弁してよ・・・

次回！勇者指令ダグオンA's どっこい 力対呪い

ていうか・・・はやてが戦えば良いんでね？

## 第十四話 力対呪い

管理局なのはの部屋

「なのは！これこれ！」

「どうしたの？」

フェイトが何かの漫画を見てなのはに詰め寄った。なんのこっちゃと漫画を見るなのは。それは某格闘ラブコメであり男が女になったりする漫画であった。

「何これ？」

「この呪いであの悪魔に勝とうよ！」

フェイトが見せたのはライバルキャラがお腹にニコちゃんマークを描かれ最強の男になるという回だった。

「これ役に立つの？ていうか出来るの？」

「なのは・・・私たちは魔導師・・・言い方を変えれば私たちは魔女なの！！魔女は呪いが出来るの！！！」

「フェイトちゃん・・・私たちの魔法って魔法科学って言った方が正しいんじゃない・・・」

「つべこべ言わない！では！！！」

なのはのツッコミをフェイトは振り切り筆と墨を取り出した。

「うわ！フェイトちゃん何するの！！」

「いくよなのは！！」

「うひゃひゃひゃっひゃ！！」

なのはのお腹に落書きを始めるフェイト。

#### 第十四話 力対呪い

翌日

「くくく」

呑気に鼻歌歌いながら学校から帰る力。だがその時天啓が起こった。

「！！」

いつもなら何処からとも無く狙撃される力だが今回は違った。ゆっ



くりと上空から降りてくるのはとフェイト。

「・・・またおめえらか」

「そうだよ・・・この悪魔！今日こそ殺してあげるの！！」

レイジングハートを構えるのはいつもと違う気迫を感じる力は戦いは避けられぬと思ひ構えた。だが隣のフェイトに違和感を覚える。

「・・・なんだ？死神女・・・てめえは臨戦態勢じゃねえのか？」

「今日はなのは一人で戦ってもらうよ・・・私は傍観する」

舐められたと思った力はなのはに蹴りかかった。

「んじゃ手加減無しだぜおりゃああああああ！！」

力のキックがなのはに炸裂する瞬間。なのはは力の懐にもぐりこんだ。

「な！うひゃああああああああああ！！」

至近距離からデイバインバスターを食らう力は吹っ飛ばされた。落下し黒焦げになる力。

「なんだ？・・・いつもと違う・・・」

まるでなのはの意思と反するように力にカウンターがいった。力は再び蹴りかかった。

「南斗獄屠拳!!」

どこのシンの蹴りを披露する力。何故技の名前が拳なのに蹴りであることは突っ込んではいけない。

それに対しなのは・・・

「北斗飛衛拳!!」

どこのケンシロウの技を披露するのは。そして原作漫画の通りすれ違いになる力となのは。普通ここで倒れるのはケンシロウ役であるのはだが・・・

「ひでぶ!!」

倒れたのはシン役の力だった。

完全に倒れる力を見たのはとフェイトは絶叫した。

「やったあああああああ!!」ようやくこの悪魔を殺せた!!」

「悲願が叶ったああああ!!」

よっぽど力をぶちのめした事が嬉しいらしい。

再びなのはの部屋

「雨ふやふやふあやふあはうあひゅあはつ」

力に勝ったことによりドンちゃん騒ぎを始めるのはとフェイト。そしてなのはお腹のニコちゃんマークを出した。

「それじゃあフェイトちゃん。これ消して」

「はいはい」

なのはのお腹のニコちゃんマークの呪いを消そうとするフェイトだが……

「……消えない」

「ちょっと待って……ちゃんと拭いてる？」

「洗剤付けてちゃんと……あれおかしいな……ただの墨なのに……」

一生懸命なのはお腹をこすっているフェイト。しかしニコちゃんマークは消えずなのはお腹が赤くなった。

「なんでどうして？」

フェイトが漫画を読むところ書いてあった。

「……この呪いは負けないと消えません……」

「え？」

つまり負けないとこの屈辱的な検印は消えないのだった。

翌日

「いてえ〜」

シヤマルのおかげで松葉杖突くまでに回復した力が同じ道を歩いていると・・・天啓が閃いた。

「・・・あ」

力が空を見上げると降り立つなのはとスタボロのフェイト。

「・・・何があつたんだおめえら・・・」

「・・・それはね」

なのはとフェイトは正直に話すことにした。実は力を倒せたのは漫画であった呪いの検印をなのはのお腹に書いたからであった。そしてその検印を消すことが出来ずに居る事。尚消そうとしてなのはに襲い掛かったフェイトは返り討ちにあいまくり身体中にギブスを巻いているのだった。

「ていうか・・・おめえがわざと負ければいいんじゃないね？」

「・・・それがね・・・この検印自己防衛本能があつて私の意思と関係なく独りでに反撃しちゃうの」

万事休すのなのはは力に助けを求めるのだった。

「お願い！私を倒してこの検印を消して！」

「断る！自業自得だ！！」

「そんな！私達友達でしょ！？仲間でしょ！？」

スタボロのフェイトの言葉に力は・・・

「俺はおめえら友達になった覚えはねえ！！ましてやてめえら仲間なんかじゃねえ！！」

毎回毎回命を狙われていればそういう思考になるのも無理はない。

「く！こうして頭下げて頼んでいるのに！！なのはこのお腹見てよ！！」

力の前でなのはのお腹を出すとしっかりと描かれたニコちゃんマーク。それを見た力は苦笑いするしかない。

「なのはにこんな屈辱な物植えつけたままでいいの！？」

「描いた奴が悪いんじゃないか！！」

「ザク！」

描いたしまったフェイトさん。

「・・・もういいよフェイトちゃん・・・」

「え？」

「・・・やっぱりあんたは悪魔だね・・・けど・・・ケジメはついたの」

そう言っただけなのは飛び去っていくとフェイトも後を追った。それを見た力は・・・

「・・・あいつ・・・泣いてやがった」

見えないようにしていたがなのは涙を浮かべていた。

その夜の力の部屋

プラモデル作るときくらいしか使わない机で珍しく考え込む力。

「・・・うん・・・あの砲台女柄にも泣く泣きやがって・・・  
検印を消すには奴を倒すしかねえ・・・けど無敵モードになったあいつに手も足も出ない・・・今の俺じゃ太刀打ちできん・・・うん」

完全に煮詰まっている力。

「くそ・・・手出しできねえのが悔しい・・・けどな・・・うん父さんは女泣かす奴は最低だっけってだからなあ・・・何とかしてやりたいのは山々なんだが・・・」

「力君、そろそろ御飯やでえ」

はやてに呼ばれる力・・・そして閃いた。

「そつだ・・・俺より強い奴が居たじゃないかこの世界には!」

翌日

「ねえ本当にやるの?」

何故か楓印の力のお面をつけているなの是对し力は自分の考えを言った。

「悔しいが俺じゃ勝てん・・・ここはあいつに賭けるしかない!」

「ぎゅむむ」

「よおっし!」

なのはの後ろに隠れ力が叫んだ。

「やゝい!!--はやての(放送禁止用語)!--」

その時邪神が舞い降りた





つきり言つて一昨日のダメージの方が可愛い。

「ほないくで・・・なのはちゃん」

「よろしく・・・はやてちゃん」

なのはに向かつて構えるはやては瞑想した。

（相手は力君相手は力君相手は力君相手は力君相手は力君相手は力君相手は力君）

自身催眠状態に置き・・・

「!!!」

邪神モードが発動した

能力のおさらい

邪神モードとははやてが力をお仕置きする為に魔力補正無しで身体能力を一億倍にすることが出来る能力である。

「おりゃああああああ!!」

「ひえええええええ!!」

はやての拳から放たれる真空波を防御魔法で防ぐのは。すかさずはやてははやてキックを繰り出すがなのはは真っ向から受け止めてしまう。

「ぬぐおおおおおおおおおお!!」

「うああああ!!うあ!!」

はやてと互角に渡り合うのは。それを見た力達は信じられないと  
いった表情になった。

「・・・信じられねえ・・・魔力補正無しで一億倍になったはやて  
と互角にやりあってやがる」

「・・・がんばってはやて!!なのはを倒してあげて!!」

なのはのお腹の屈辱的な落書きを消す為に最強キャラのはやてと戦  
うが・・・

「ぐは!!」

なのはに吹っ飛ばされるはやて。すかさずシュベルトクロイツを又  
ンチャクフォームに変えた。

「あちゃあああああ!!」

「うああああ!!止まってええええ!!」

はやての又ンチャクをレイジングハートで受け止めまくるのは。  
身体が意に反してはやての攻撃を的確に受け止めてしまうのだった。

「やるなのはちゃん・・・こうなったらウチのマジを見たいんや  
な・・・」

「はやてちゃん何やる気？」

リミットブレイク発動

「説明しようリミットブレイクとは八神はやてに秘められた全魔力が感情の高まりとともに頂点を振り切った時に発動し身体能力を限界なしで増大させる恐ろしい現象である！！」

「せつめいおわったか〜りきくん〜なのはちゃ〜ん〜かく〜はいい？（超低音）」

既に正気を失いつつあるはやて。

「来いなの！！」

はやては右手で握り拳を作ると膨大な魔力を圧縮する。その魔力はラグナロクを七本分だった。

「はああ！！・・・『今のところ』これがウチの力君のお仕置き用の最大の技！！」

七本分のラグナロクを拳の大きまで圧縮すると七色の光を放ち、はやてはなのはに向かって振りかざした。

「ラグナロク！ザ！レインボオオオオオオオ！！！！」

はやての拳から放たれる七色のラグナロク。七本分なので単純にラグナロクの七倍の技な上に邪神モードになった為単純計算して×一億倍＝七億倍の魔力を放つはやて。



キラーン

そのままお星様になった。

「ダメだ・・・はやてが負けたらもう勝てねえ!!」

ギャグパート最強のはやてが負けてしまいもう打つ手が無くなってしまった力達だった。

「もうダメだ・・・ん?」

フェイトが漫画の続きを読むと・・・

「何々・・・検印は歪みに弱い・・・そうか!!」

なのはの部屋に呼び出された力。

「そうか・・・デリケートな作業だから部屋か」

「ここなら誰にも恥ずかしくないの・・・」

そう言ってお腹丸出しにするのはが頑張ってお腹の形を変えてみようとするが・・・

「ん?え!?!」

なんか上手くいかないそして力が殴りかかるが・・・

ぶん殴られる力。

「くっ・・・まだまだ形が甘い・・・もっと思い切って変えなきゃダメだ」

「ダメか・・・これでどうなの!？」

「まだまだああああ」

なのはの腹踊り見ながら襲い掛かる力だが度々反撃されてしまった。

30分後

「げえ・・・げええ」

30分間なのはにぶん殴られ続けた力なのはの検印を消すべく奮闘していた。

「がんばれ砲台女!!もつとグニヤツてやれギユニヤって!!」

「ぬぎゅむぎゅぎゅ!!」

がんばってお腹の落書きを変化させようと頑張るのだが・・・

ウエストは無駄に引き締まっている為至難の業だった。

「なんでおめえはんな不器用なんだ!」

「うるせえ・・・こつちだつてがんばってるの!」

「じゃあがんばれ!でなきゃ!おめえ一生その落書きと一緒にだぞ!

「！」

「一生・・・海に行っても・・・お医者さんに行っても・・・ユーノ君と子作りする時も・・・笑い者になっちゃうしムードが無くなるの！！ユーノ君にはナイスな身体を見せるの！！ぬがああああああああ！！！」

がんばってお腹の表情を変えようとするのは。それを見た力は・

（・・・こいつ・・・曲がりなりにも世間を気にするのか・・・命を狙われて数年の付き合いになるが・・・ここまで努力家だったとは・・・）

なのはの努力に不覚にも感心してしまうのだった。

数時間後

「ふう！ふう！！ようやくコツがつかめてきたの」

悪戦苦闘すること数時間ようやくコツをつかめてきたのはにぶっ飛ばされ続けた力は問いたました。

「その前に一つ聞いておくけど・・・お前それ消えていいのか？」

「ふ・・・この検印のおかげでお前を倒すことは出来た・・・あっさりと・・・けど！！それは私の実力じゃない！！私自身の力でお前を殺してみせる！！！！！！」





「そうか！なのはは今度の宴会の時の一発芸を練習してたんだ！」  
等と勘違いをするユーノだった。

なのはの部屋

「まあ！まあ！司書長も喜んでくれたし良いじゃん」  
必死になのはを慰める力。

「うわああん！！あんたなんかにかんないの！！愛する者に屈辱  
を見せてしまった女の気持ちなんて！！」

思いっきり泣いているなのは。

(・・・こ・・・こいつ・・・意外に繊細だったんだ)

そう思う力だが・・・

「なのは」

「ユーノ君」

「ええ！！」

再び部屋を訪れたユーノ直方を見た瞬間立ち直ったなのは。

「なのは凄いね！あの一発芸絶対みんな喜ぶよ！」

「うん！ユーノ君のためならいくらでもやるの！」

あまりにもハツラツと答えるなのはの姿を見た力は・・・

(・・・こいつ・・・現金な女だ・・・)

等と呆れるのだった。尚ついでに力も秘伝書に書いてあった己の不幸を力にする技を体得したのだった。

## 第十四話 力対呪い（後書き）

いや〜今日はいい天気だな〜けどまだ六月・・・雪ふんねえかな〜  
あ！天気の人に頼んでみよう！え？明日降らせるって！ふんねえじ  
やん・・・

次回！勇者指令ダゲオンA's どっこい 襲撃のサイモン

男の約束破るとは・・・雪の代わりに俺が血の雨をふらせちやる！！

## 第十五話 襲撃のサイモン

ある日の南家

いつも通りはやてが洗い物をし力がお茶すすっている時だった。

「ただ今」

「ああ。ことはちゃんおかえり」

「今日ね、保健体育の授業習ったんだ。で、はやて姉ちゃん（ピー  
ー！！）の時（ピーー！！）ってどんなの？」

「ブー！！」

お茶噴出す力。最近の子供はすぐこういう事を話しかがる。そして  
はやてが

「そらな（ピーー！！）で（ピーー！！）で（ピーー！！）で（ピーー！！）で  
でな」

ピンポン

乙女にあるまじき会話の為しばらくお待ちください

「うわ〜！うわ〜！乙女がこんなはしたない会話をしているはずが  
無い！いいいいいい！！」

赤面し頭抱えてゲツソリしている力。

尚はやてに至っては力がうろたえるのが面白いからという理由でワ  
ザと会話している。

「あら〜お兄ちゃんこの程度の会話で赤面しちゃって・・・」

「うるへえ！！はやて！おめえんな会話してたらダイノガイストが  
泣くぞ！！見たくねえよ！ダイノガイストが泣く姿！！」

「ていうかお兄ちゃんはやて姉ちゃんにチューすらしてないじゃん」

「・・・ことはちゃん・・・力君はチューしないんじゃない・・・出  
来ないんや・・・何なら力君の簡単な倒し方教えたるうか？」

「お前何する気だ！？」

力を尻目に部屋に入って何かを用意するはやて。

「じゃ〜ん」

「お前！うわああああ目がー！目がー！！！！」

ムスカのごとく絶叫する力。

何故か水着に着替えてきたはやて。しかもかなりキツイビキニで・・・

明らかにうるたえる初心な力ちゃん。

「・・・そんなに見苦しいか・・・ウチの水着姿」

頭に筋浮かべるはやて。

「何考えてんだお前!？」

「こっつするんや〜」

次の瞬間力の腕にはやてが絡まってきた。そして猫なで声で何か吹き耳元に息を吹きかけた瞬間。

「うぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああああああああああ!!!!」

頭の中で何かが弾け白め剥いた拳句硬直し倒れて後頭部打った力。

「あ〜・・・・・・」

思いっきり目を回している力をつついてみることは。

「・・・凄い破壊力」

「これ精神攻撃や〜力君ギャグパートだったら色仕掛けに超絶的に弱いからな〜」

ケラケラ笑う水着モードのはやて。

「ていうか新ちゃんもシグナムとお風呂は入ったらショック死で死にそうになっとったな〜」

「はあ〜新兄ちゃんも初心だし・・・なんでウチの男ってこんな情けないんだろうな・・・」

等と思うはやてとことはだった。

## 第十五話 襲撃のサイモン

ある日の八神家の図

サイモンの頭の上でアルバム見ているリイン。

「う〜んこの時は楽しかったです〜」

「そっちな父さん」

雪が降っている時に遊んでいた時の写真を見ているサイモンとリイン。

「また降ってほしいです〜」

「父さん雲凍らせて雪降らせれば？ていうか・・・あの人に頼む！」

サイモンがテレビを見ると・・・

『ええ！明日の天気は・・・晴れのち・・・』

気象予報士に雪を降らせてもらおうとしたサイモン。その時ヴィータのアイゼンがサイモンの頭に振り下ろされた。

「うぎゃー！！親びん！」

「親びんじゃねえよ！！まだ五月なのに雪なんて降るか！」

そう言われると天気予報で・・・

『お天気的事なら私にお任せ！』『じゃあ明日雪にしてくれ！！』  
おい御用で』

「やったー！！！」

「明日雪です！」

テレビに向かって叫ぶサイモンとラインに呆れたヴィータは・・・

「アホくさ・・・付き合いきれん」

等と言ってゲームをやるのだった。



八神家の庭

「まだかな」

空を見上げながら降りもしない雪を待ってるサイモン。

4時間後

「降らないな・・・」

頑張ってる待ってるサイモン。

更に時間が過ぎ

パラリラパラリラガツシャーン！ピーポーピーポー！！

表の道でうるさい音だけが響き

そして夜が明けた

「雪降らなかったですね・・・」

サイモンの頭から残念そうに言うリイン。

「あのテレビの人・・・男の約束を破りやがって・・・こうなりや俺が血の雨を降らせちやる」

話がマズイ方向に向かい始めるのだった。

「ふん！ふん！！」

庭で斧振り回しているサイモン。

「ふふ・・・ティアナの部屋からパクってきたこの鉈で・・・」

何でティアナの部屋にそんなもんがあるのか不明だが空想の中でバトルすると・・・負けてしまい首を刈られたサイモン。

「これでは負けてしまう・・・こうなったら」

考えた結果

「待てえええ俺の拳銃返せ！！」

「ケチケチするな！！ちよつとの間借りるぞ！！」

佐津田刑事から拳銃を奪い気象予報士の家に襲撃に行くサイモン。

そう言ってテレビ局の前に銃もって現れるサイモンと追いかけてきた佐津田刑事。

「き！貴様！犯罪行為をするつもりか！？」

「あのテレビの奴雪降らせるって言ったぞ・・・だからこの手で返ししちやるんだこつやつて!!」

佐津田刑事の銃をテレビ局に向かって構えるサイモンを止める佐津田刑事。

「貴様アホか!! 気象予報士は次に降る天気を予想する仕事で天気を変える仕事じゃねえぞ!!」

「へ? そうなの」

初めて知ったサイモン。地球文化に疎いところという勘違いをするのだった。

「それじゃあしょうがねえな」

「さつさと俺の拳銃返せ」

と佐津田刑事が手を差し出すがサイモンは・・・

「まあ! 折角拳銃を借りたから撃つていこう!」ドアホオオオオオオオオオオ!! 「うぎゃ!!」

突如サイモンの頭に振り下ろされるギガントシューラーク。

「お! 親びん!」

「親びんじゃねえよ! おめえ何やってんだ!! ちょっと来い!!」

「ああ〜れ〜〜」

そう言ってプレスされたサイモンを丸めて持って帰るヴィータ。

結果

「ガミ！ガミ！ガミ！ガミ！ガミ！ガミ！ガミ！ガミ！ガミ！ガミ！ガミ！」

ヴィータの目の前で正座させられ怒られまくるサイモンだった。

おまけ

ノルウェールの前で小さくなってる佐津田刑事。

「いけませんね〜佐津田刑事〜警察官でありながら拳銃を奪われるとは〜」

「いや〜しかし！あいつ物凄い馬鹿力で「言い訳無用です」

そう言って始末書を書かされる佐津田刑事だった。

その夜の八神家

「う〜んサイモンとヴィータのせいで弁償金額しゃねにならんわ〜」

今回テレビ局の玄関を破壊したヴィータのせいで施設代を弁償する破目になった八神組。

家計簿つけているはやてが頭を抱えるとある提案をした。

「そつや！また勇者戦隊ダグレンジャーで稼げばいいんや・・・  
スペシャルゲストでもう一つの南家も加入で売り上げ鰻登りや」

「てお前本当に呼ぶのか！？第一誰が呼ぶんだよ！？」

「はいはい」

力の疑問に手を上げるこの小説一便利な子孫だった。

第十五話 襲撃のサイモン（後書き）

ピンチに負けるな！ダグレんジャーー！！海鳴ランドグランドシアターに・・・

仮面ライダーBLACKの姿が！

さあ！正義の逆襲の始まりだ！！

次回！勇者指令ダグオンA's 勇者戦隊ダグレんジャーー！仮面ライダーBLACK現る！！

君達！海鳴ランドで！僕と握手！！

**第十六話 勇者戦隊タゲレンジャー！仮面ライダーBLACK現る！！（前書き）**

今回別小説のキャラとコラボしました。

第十六話 勇者戦隊ダグレんジャー！仮面ライダーBLACK現る！！

前回、サイモンが壊したテレビ局の玄関を弁償するべく立ち上がった八神組だがダグレんジャーショーだけでは規定の金額に行かず四苦八苦していた。そこで新たな収入を得るために楓により緊急のゲストを収集することになったのだった。

第十六話 勇者戦隊ダグレんジャー！仮面ライダーBLACK現る！！

海鳴ランドに集まった八神組。

「というわけで！！本日のスペシャルゲストや！！」

ビシツとはやてが指差した方向に居たのもう一人の南家だった。

「こんにちは〜御呼ばれされました〜」

「どうも〜」

「……………」

リリカルなのは 漆黒の男で主役を張っている仮面ライダー……  
南光太郎とヒロインを張ってるスバル（別名ライダーズバル）と光太郎に肩車されてる娘ナナシだった。



「いいのかよ！仮面ライダー呼んで！！」

「ふ……これも借金返すためや……」

はやての事をガクガク揺さぶる飛鳥。そして光太郎たちの様子を見ていた他のメンバーは思った。

（（（（なんか休日に家族で遊びに来ているみたいな））））

周りが見てもそうとしか見えない光太郎達だった。

「やあ力君」

「あゝ光太郎さん本編で会うのは初めてだな」

久しぶりに会う力と光太郎。

「どうやって光太郎さん呼んだの？」

「それはですね。私が向こうの世界に遊びに行ったときに光太郎さんの電話番号とアドレス交換したんですよ」

意外と顔が広い楓。

なおライダーズバルを見たダグオンスバルは……

「何で？」

「え？」

「なんで同じ顔なのにこんなイケメンの彼氏・・・ううん！！イケメンの旦那様連れてんの！！？私彼氏居ないもん！！」

「えええああああ私に抗議されても困るううう！！ていうか！光太郎さんは旦那様でもなければ彼氏でもないよおおおお！！」

ダグオンスバルにガクガク揺さ振られるライダースバル。そして3歳くらいの幼児ナナシはスバルの顔を見て言った。

「お母さん・・・この人別世界のお母さん？」

「え？」

その場の思考が止まった。

結果

「あなた仮面ライダーの子供産んだの！！？」

「いやあ！！これには深～～～～い事情があつて！！」

ヒートアップするダグオンスバルに困りまくるライダースバルだった。

「はじめましてナナシちゃん 私は八神はやてや」

そう言ってナナシと握手しようとするはやてだがナナシはジーツとはやての顔を見ていた。流石のはやても気まらずくなり話しかけてみた。

「……なに？」

「……不味そう」

「は？」

ナナシの言動に混乱するはやて。そしてナナシがサイモンの頭を見た瞬間。

「ゴキユリ……美味しそう……」

「は？……うぎゃあああああああああああああああ！！！！」

サイモンが混乱した次の瞬間小動物に好かれるサイモンの頭に噛み付くナナシ。

「ガジガジガジ……」

「うぎゃあああ！食われる！！」

ナナシが噛み付いている為頭から大量に出血しているサイモン。それを目撃したライダーズバルがナナシを止めた。

「こら！ナナシ！出なさい！！こんな食べたらお腹壊すよ！！」

「そうです！！サイモン君は不味いです！！」

「ガジガジガジ……ぷはっ！！」

リインに止められ、ライダーズバルに強制的に引き離されるナナシだった。そして今度はリインを見ると・・・

「あ〜ん!〜!」

「うぎゃあああ!〜!」

リインを頭から加えているナナシ。だがライダーズバルにちゃんと救出されるリイン。尚サイモンは出血多量で目を回したのだった。

「ごめんなさい!この子人間の認識が食べ物認識なんです!〜ほら!謝りなさい!〜!」

「・・・ごめんなさい」

スバルに言われ頭を下げるナナシだった。

その光景を見ていた力は・・・

(・・・知らなかったスバルって自分の子供には厳しいタイプだったんだ)

等と思った。

その時

「おお〜い!はやて遊びに・・・!〜!」

はやてに招待されダグレンジャーショーを見に来たノアだがノアを見て笑顔になるナナシ。

「な！幼児体系だけど・・・その顔はナナシ！！」

「フカー！！」

ノアに飛び掛るナナシ。

因みに現在のナナシは変身魔法を応用し年相応の姿となっている。

理由は通常サイズだとロン毛のスバルだからであった。

ナナシはノアを掴むと丸呑みしようとした。

「うわあああ！！丸呑みされて溜まるか！！」

「あがあが・・・」

ナナシの口に入れられる瞬間咄嗟にナナシの口につつかえ棒をするノア。頑張つて口を閉じようとするナナシと飲まれた溜まるかと言ったノアの熾烈な戦いが繰り広げられていた。

「相変わらず仲良いね」

「光太郎さん！落ち着いてないでナナシ止めてよ！！」

そう言つてノアを救出するライダーズバルだった。

「ごめんねノア・・・ノアってとっても美味しそうなんだもん」

喜んでいいのか微妙なノア。

「良いつて事よ・・・ほれこれミツキからクッキー」

ノアからミツキのクッキーをもらうナナシは早速食べ始めた。

「ありがとうね。はい！ケーキ」

「サンキュウ！！んじゃー！あたいは客席からユウと見てるからな」

光太郎からケーキを貰い客席の一番良い場所を確保するノアとユウだった。

そんなこんなでミーティングが始まった。

「んじゃまずなぐダグレンジャーがピンチになるやろそしたら光太郎さんがダグレンジャーのピンチに現れて正義の逆襲が始まるんや〜因みに今回のボスはナナシちゃんやで〜」

「ガツガツガツ」

段取りを話しながらボス役のナナシははやてに餌付けされていた。

「あの〜主」

「何やシグナム？」

「私の吹きかえってなんですか？」

「ん〜ほらナナシちゃん声もまんまスバルやからな〜ここは吹き返

してもらおうと思って」「

変身するナナシと横に立ってるシグナム。

「あゝこれはどうすれば・・・」

「んゝ言ったとおりにづゝくんやゝ」

「は・・・はあ・・・」

はやての無茶振りに覚悟を決めたシグナムは吹き変えてみた。

「見よ！ダグレンジャー！キサマラの言う正義など私の前では無力なのだ！！」

シグナムの台詞の動きに合わせてパントマイムするナナシだった。

「あらゝ即興で凄いのねゝ」

等と感心する飛鳥だった。

「はゝいそれじゃご褒美ゝ」

「・・・ガジガジ」

スバルにご褒美もらって喜ぶナナシだった。

そして上映時間

会場には観客が満員御礼ではやてもウハウハ状態だった。

さらに

「え〜キャピトラ印のコーヒーにジュースはいかがですか〜?」

客席で売り子をやっているライダースバルとダグオンスバル。今回は双子という設定らしい。

「あ!スバル!俺コーヒー!」

「私ジュース!」

ユウとアルトがスバルから飲物を買ったビデオカメラを回していた。

「ん?ユウどうしたんだ?そのカメラ」

「ああ、ヴィヴィオに頼まれてな〜学校だからダグレンジャーショー行けないって物凄く嘆いてな〜だから録画してやるって行ったら学校いったんだ」

「しっかり撮りなさいよユウ!」

「へえへえ」

アルトに言われてカメラを回すユウだった。

そしてショーが始まり悪の大王役のナナシが会場に現れた。

「聞け!子ども達よ!!!わが名はダークライジャー!!!この星を征



服するべくやってきた宇宙人だ!!」

シグナムの吹き替えに動きを合わせるナナシ。はっきりいって子ども達はビビってます。

『そんな事はさせないわよ!!』

会場に現れる司会進行のはやて。

『みんなでダグレンジャーを呼ぶわよ!!せえの!!』

『ダグレンジャー!!』

子ども達の声援にジェットコースターに乗って現れるダグレンジャー  
ーこと5馬鹿。

「ダグブルー!!」

「ダグブルージュ!!」

「ダグホワイト!!」

「ダグシルバー!!」

「ダググリーン!!」

『よってたかって一人の悪を倒す!!勇者戦隊!ダグレンジャー!!』  
『』

決めポーズと共にバツクの花火が爆発するダグレンジャーショー。

尚前回の反省を生かしまくり今度は精密に計算しセット代もケチらなかつた。

「愚かなダグレんジャーめ・・・私の前にひれ伏すが良い！」

そういうとナナシは力を殴り飛ばした。吹っ飛ばされる力。

「あおう！あおう！！」

滅茶苦茶痛そうですその時全員の頭にはやてからの思念通話が・・・

(言つの忘れとったけどナナシちゃんには手加減なし思いつきりぶん殴っていいって言うたからな)

手加減ナシで光太郎を散々苦しめたナナシに焦る八神組。

「〜」

「え！うわああああああああああ！！」

ナナシに頭掴まれて投げ飛ばされる楓はセットを貫いてしまつ。

「やるお！うああああああああああれ〜〜〜〜〜〜〜〜！！」

サイモンも斬りかかるが簡単に蹴られてしまった。

更に

「うぎぎやああああ！！」

頭が見つかれるカダグテクターのマスクが割れそうになっている。

その光景を見たはやては思った。

（光太郎さん！登場早めるわ！！）

光太郎に合図を送るはやて。そして仮面ライダーBLACKのオーブニングが流れた。

「待て！！」

「お前は？」

セツトの上に現れた光太郎。

「仮面ライダー！！BLACK！！」

決めポーズをとるとダグレんジャーの元に舞い降りた。

「ダグレんジャー！大丈夫か！？」

「ライダー！！」

並び立つ力と光太郎。夢のタッグがここに誕生した。そして力と光太郎を残し他のメンバーが退場した。

「おのれ・・・やれ！！」

「キー！！！！」

衣装がえで戦闘員に着替えた4馬鹿が力と光太郎に襲い掛かるとあっさりやられ花火が爆発した。

そしてトドメのシーンになった。

「いくぞ！とおお！！」

「とああ！！」

「うああああ〜あああ・・・」

力と光太郎のトドメがかかると上手い具合にナナシはよるめき退場すると爆発が起き勝利の決めポーズをとる力と光太郎だった。

尚、握手会も行われ長蛇の列が出来るのだった。

ナナシの暴走により怪我しまくった八神組はシャマルの治療を受けていた。

「いいでい！！」

「全く！少しは加減しなさい！！」

そう言って治療魔法ですぐさま傷を塞ぐシャマル。

「おお！すげえ！」

喜ぶサイモンそれ見たシャマル先生は・・・

「ふっ・・・私がどれだけ力君の致命傷を治療したと思ってるの・・・もう生きていれば治せるわよ」

遠い目をしながら治療スキルが本来の10倍以上にあがったシャマル先生だった。

ショーが終わり力と光太郎は舞台裏でお茶とロケ弁当を食べていた。

「うん労働の後の弁当は美味しい」

「うん！いける！！」

「それにしても光太郎さん態々来てもらってありがとうございます」

「別にいいよ」

基本的に子供好きの光太郎はこれぐらいの頼みはお安い御用といった様子だった。

そこに

「「悪魔覚悟おおおお！！」」

突如空から舞い降りるのはとフェイト。ショーが終わり力の命を狙うのだった。

「覚悟を決めるの!!」

「あの〜」

「誰?」

光太郎の姿を見て首を傾げるのはとフェイト。光太郎は改めて自己紹介をするのだった。

「はじめまして。南光太郎です」

その言葉に驚くのはとフェイト。

「南・・・って同じ苗字・・・」

「あなたその悪魔とどういう関係?」

恐る恐る聞いてみるのはとフェイトに光太郎は笑顔で答えた。

「兄です」

「ええええええええええええええ!!」

光太郎のジョークに絶叫するのはとフェイト。

更に

「光太郎さんこんな所に居たの?」

「お父さん」

光太郎を探し回っていたライダースバルとナナシ。その姿を見て恐怖映画のような顔になるのはとフェイト。

「このイケメンがこの悪魔の兄・・・嘘なの!!」

「スバル?・・・それにその子お父さんって・・・!!イケメンの旦那様手に入れて子宝携えた!!スバルに数段階も先越された!!」

「は?」

なのはとフェイトのテンションに着いていけないライダースバル。

そしてなのはとフェイトは何か違うものに負けた気分になり泣きながら飛び去るのだった。

因みになのはとフェイトの姿を見たナナシは・・・

「・・・不味そう」

「やっぱり判断基準それなんだ」

等と呟く力だった。

「うーん僕たちそんなに一家に見える?」

「・・・見えるよ・・・お父さん、お母さん・・・娘」

光太郎とライダースバルとナナシの順に指す力に苦笑いするライダー

ー  
ス  
バ  
ル  
。

尚  
な  
の  
は  
と  
フ  
エ  
イ  
ト  
の  
誤  
解  
に  
ダ  
グ  
オ  
ン  
ス  
バ  
ル  
が  
え  
ら  
い  
迷  
惑  
し  
た  
ら  
し  
い  
。



第十六話 勇者戦隊ダグレんジャー！仮面ライダーBLACK現る！！（後書き

勇者戦隊ダグレんジャーが中々の興行成績を残した・・・だが今度は映画撮影を行う事になった！！え？原作八神はやて・・・脚本ミツキ・サエグサ？

次回！勇者指令ダグオンA's どっこい 映画撮影！！

大丈夫なのか！？

## 第十七話 映画撮影！！

### 次元移動艦

何かの小説を読んでいる力。それを横から覗く飛鳥。

「ん？何読んでんだ？」

「ハーレム物」

「やっぱりそういうの興味あるの？」

「無いけどさ・・・これ女しか使えないんだよね？」

「まあそつだな。よくある設定だよな」

「男要らないんじゃないかね？」

「へ？」

「いやさ・・・女しか使えないもの・・・それが主流の世界・・・男なんて要らないじゃん」

「OK・・・その辺は夢見させてやるつよ」

「いや〜女王国じゃなくて女王世界じゃん・・・これじゃ男なんていらねえ男なんて人間じゃねえ！！！！って思えるぞ・・・セイバー

なんちゃらの技術使えばだって男居なくても世界が成立するじゃん」

「そいつは極論でねえか？・・・言っつてて苦しくねえか？」

「・・・少し・・・女性にはわかんないねえ」

等とアホな事考える力だった。

## 第十七話 映画撮影！！

影の守護者世界に来た八神組に南家ご一行様。何をしに来たかとい  
うと・・・

借金返すために映画撮影をして設けようということだから・・・

八神組が表立って行動すると物凄く面倒な事になるからだった。

それだけ八神組は悪名が高い。

「いや〜悪いね〜ミツキさん〜」

「まあ〜それはいいとして・・・そっちはどうしたの？」

八神組の業務はどうしているか疑問に思ったミツキそこではやては

答えた。

「それはね・・・ダグベースを好きに使ってええ！って約束で同キ  
ヤラチエンジしたんや！！」

「どつりで朝からウチのはやて達の姿が見えないと思った・・・」

冷や汗流すミツキ。

その頃影の守護者の八神家は・・・

「ちよつと待ちい！！何んやこれ！？」

ダグベースで八神組の業務に頭を抱える影の守護者はやて。

「・・・ヤクザの喧嘩の仲裁・・・ラーメン屋のバイト・・・ヒー  
ローショーの運営・・・その他管理局の溜まりに溜まった仕事・・・  
ちよつと待て！こっちの私の仕事で干物まで作らなければならん  
か！！！？」

頭を抱える影の守護者シグナム。

「ちよつと待って！私ここまで治療業務あるの！！？」

八神組の日頃の喧嘩三昧で出た大量の重症人を治療するハメになる  
影の守護者シヤマル。

更に

「えんや〜とつと〜」

「……………」

鍬もつてダグベースの畑を耕す影の守護者ヴィータと影の守護者ザフィーラ。

ちょうど田植えの季節だったりする。

「ん？応援要請……天下の暴れん坊八神組の力を借りたい……」

応援現場

呼ばれた現場にて1万人以上居るであろう時空犯罪者。

「ちょっとまって……これうち等五人だけで相手せなあかんの？」

「……………これはね……八神組の通った後はぺんぺん草一本生えな  
いっていつくらいに悪名だからね〜」

影の守護者シャマル先生がダグオンシャマル先生の如く適度に黒化して答えた。

「ふ……こんな事もあるのかと……こつちのなのはちゃんとフ  
イトちゃんに応援要請頼んだんや……こつなりや自棄や……！！  
日頃の鬱憤晴らしたる……！！」

そう言っただけの能力を発動させ突撃する影の守護者はやてだった。

「・・・あ！今ウチの部隊長が邪神化したような・・・みんなが苦  
勞する姿が目映る・・・」

そう遠い目をしているユウ。

一方

「うわああああん！！別世界の私に先越されたああああ！！」

「だから誤解だつてえ！！」

ライダーズバルを見て泣き叫ぶ影の守護者ズバル。ライダーズバル  
はまたガクガク揺さ振られている。

「誤解つて何よゝ！？こんなイケメンの旦那様捕まえて娘まで産ん  
でええ！！」

「産んでないって！これにはね！深い事情があつてね！！」

「だまらっしゃい！！ライダーの子供産んで・・・ん？何？頭に変  
な感触が・・・」

何故か頭に妙な感覚を覚える影の守護者ズバル。

そこには

「・・・ガジガジガジ」

「ぎゃああああー!!」

影の守護者スバルの頭に噛み付いているナナシ。スバルの頭「美味しそうと言う発想しかないのだった。

「うわあああ!!取って取って!!」

「ナナシ!出さない!!」

影の守護者スバルの頭に齧り付いているナナシを引っ張るライダー  
スバル。

「ぶはっ・・・」

影の守護者スバルの頭からナナシを離すと・・・

「じーっ・・・」

「な!!!!!!」

影の守護者アギトに狙いを定めた。

「ふかーっ!!!!」

「ぎゃあああああああああ!!!!」

「つるせえんだよてめえら!!!!」

ズドンズドンズドン！！！！

ついに北斗が銃撃した挙句

結果

「……で……何で俺？」

「ガジガジ……」

サイモンの頭に噛み付いているナナシ。こいつの頭が一番頑丈である為だった。

日頃から重傷を負ってるサイモンはナナシに頭を噛みつかれようが頭半分もつていかれようが慣れていたのであった。

「おめえも大変だな」

「親びん〜」

「だから親びんじゃねえよ！！」

アイゼンでぶん殴られるサイモン。

「ねえ……僕ってそんなにスバルちゃんの旦那様に見える？」

「まあ……見ようと思えば……」

等と頭を抱える光太郎。



一方影の守護者スバルは出血の為頭に包帯を巻いていた。

「痛っ！思いつきり噛んで〜あなた毎回噛まれて大丈夫なの？」

「あははは・・・もう慣れました・・・」

「・・・」

何も言わずにライダースバルの肩に手を置く影の守護者スバル。

そして台本が配られた。

「はいこれね〜私が4日徹夜して書き上げた台本よ〜」

ミツキによつて配られる台本。

各々目を通すと力が赤面した。

「ちょっと待って・・・俺はやてとあ〜んなことや〜んなことしなくちゃいけないの!？」

「ラブシーンは映画に必須なのよ〜」

「嫌だ！はやての素っ裸なんて見たら目が腐る!！」

「なんやてええええええ!!」

はやてに金平糖を食らう力は壁に叩きつけられた。そしてはやてはムカついたのか追撃をかました。

「んじゃ今晚力君食うたろうか？」

「やめんかい!!!」

そして台本を見た飛鳥は・・・

「何でこんなシーン入れたの？」

「それはね・・・やっぱりラブシーンは映画の「本心は？」面白そうだからに決まってるじゃない」

「楓のようなノリを・・・」

呆れる飛鳥。

その頃の楓は

「えんや〜とつと〜すつとどどっい」

挨拶り鉢巻と金槌と半纏どんぶり姿でセット組み立てている楓。やはり大工仕事はこの人の担当のようです。

「楓さん！こつちの下取り終わったので組み立ててください！」

「は〜い！ヴィヴィオちゃん今度こつち」

「は〜い」

楓と同じ姿で工具セット持ってアシスタントをするヴィヴィオ。

なお楓により連れてこられた舞人とシズマ、更にはフェラルドまで  
こき使われるのだった。

尚ヴィヴィオに関しては仮面ライダーBLACKとの握手という理  
由で釣った。

「へっくしょん！」

「お？兄さん風邪か？」

「うっん噂されてるだけかな？」

等と力に心配される光太郎だった。

因みに内容の段取りは魔王に囚われたお姫様を助けに行く戦士であ  
り集落で悪の魔導師を倒し魔王城から脱出するというシナリオ。

そして撮影現場

カメラを回すナリアに音響機材いじっている楓。

そして力の台詞が始まった。

「ああ！！姫よ！！我ら4戦士ただいじゃないしゃあ「カット！！」

メガホンで頭ぶん殴られる力。ちなみにはやてが監督というタスキ  
をかけて撮影していた。

力だけ台詞回しのダメ出しが半端なかった。

アクションシーン

「はっ！！」

「くっ！！」

影の守護者なのはとアクションシーンをしている力。その光景を見たはやては・・・

「うーんウチのなのはちゃんたちやと絶対ありえへん光景や・・・」

日頃の力の行いに頭を悩ますはやてだった。

「あのおそっちの私達って普段力さんにどんな事してるんですか？」

「じつや・・・」

影の守護者フェイトにポータブルDVDプレイヤーで力抹殺作戦の映像を見せるはやて。青ざめる影の守護者フェイトだった。

「・・・私あんな顔できたんだ・・・」

やってみようとするが恐ろしすぎて出来ない影の守護者フェイトだった。

が

「あれ？フェイトちゃんユウ相手にそんな顔になっているような・・・」

はやての言葉をスルーする影の守護者フェイトだった。

順調に撮影が進んでいき・・・

クライマックスである城からの決戦に入るメンバー達。

「さつて！！魔王！出てこい！！」

『ファッフアッフア！！』

突如響くミツキの声

『きたな勇者ども褒めてつかわそう・・・それじゃ脱出頑張ってる』

何故か素に戻るミツキするとセットが変形を開始した。

「どついう事？」

「え？」

セットから何故か大量に出てくる機械兵器。中に居るのは勇者役の力、飛鳥、光太郎、敵役でなのは、フェイトだった。

「なにこれ！？ミツキさん」

『あゝこの映画ね・・・台本はある程度の段取りだけなのよね』

「え？」

『この映画は脱出パニック映画なのよ。こうでもしないと力君たち本気でビビッてくれないから。リアリティを追求して最低限の人間にしか伝えてないのよね。』

出てしまった必殺ミツキの悪ふざけ（命名東飛鳥）壁が迫ってくる  
と混乱するなのはとフェイト。その時力が・・・

「二人を頼むわ！なあ兄さん！」

「わかった！なのはちゃん！フェイトちゃん！こっち！」

「は！はい！！！」

光太郎に連れられなのはとフェイトは力の指示したギブアップエリアとかかれた場所まで連れて行かれ事なきを得た。

「なにあれ？」

「大方楓が用意した脱出ルートだろうよ」

「何で行かなかったの？」

「そりゃここまで苦勞して作った映画・・・無碍に出来るか」

「以外に義理堅いのね・・・んじゃ行きますか・・・相棒」

「へいへい」

ダグテクターを装着する力と飛鳥が迫り来る機械兵器に突撃した。

「おりゃあああああああああ！！」

ブレイブクローとワイザーロッドを構えて突撃する力と飛鳥。

「おっら！！」

ワイザーロッドをバズーカにして機械兵器を破壊する飛鳥。

「出てこい！雑魚共！片っ端から叩き壊しちやる！！」

「ブレイブライオアアアアアック！！」

ライオン形態に変形した力がそのまま機械兵器を破壊すると飛鳥が跨った。

「パラリラパラリラってな！！」

「暴走族か俺達は？」

そしてセットを突き進むとボスの剥製があるが・・・

「ビックバンシュート！！」

飛鳥の砲撃によりあっさり破壊されセットを抜け出した。

こうして無事に映画は終了するのだった。

「カット！OK！！」

その指示でとりあえず撮影は終了するのだった。

撮影が終わって

「うひゃひゃひゃひゃ！！」

どこのレストランで打ち上げしているか、飛鳥、ユウ、北斗、サイモン、楓。因みに八神家は八神家でやっていたりする。

「女だけで打ち上げなんて不純だな」

冗談めかすユウ。

「女なんて呼ぶんじゃないわねえ・・・夕飯が不味くなる」

力の言葉に頷くユウに良いのかといった表情の飛鳥。

「フーかあたしも女なんすけど」

「お前男女みたいなものだろ」

「へえへえ」

特に否定する要素がないので流す飛鳥。そして何故かユウと会話が弾む力。

「何かって言うとアルトは何処だアルトは何してる。お前がそうやって構いすぎるからアルトはいつまで立っても独り立ちしねえんだ



ろっが  
「

「よく言うぜ。はやての尻に敷かれてるのはあんただろっが」

「なぬ!!!?」

「正義の味方のヤクザに女はいらねえとかかつこいい事言っちゃつてあれじゃ全然説得力ねえし尻に敷かれた亭主じゃねえか」

「うるせえ!女なんて何だー!!」

「女なんて何だー!」

と言いたい放題言っていたそのとき何故か周りに誰も居ない事に気づいた。

「なんだ?」

「は!」

カとユウが振り返ると・・・

そこには邪神の姿が・・・

「へえ・・・ユウそんな事思ってたんだ?」

「げ!アルト!」

「あ!今・げ!って言ったでしょ・げ!って!」

アルトの登場に気まぜくなるユウ。

その横では・・・

「りきくん、覚悟できてるんか？」

「ブクブクなぜここに？」

はやてに首絞められて持ち上げられている力。

「ミツキ（先輩）に聞いた！！」

「な！！」

「往生せんかい！！」

「ああう！！」

力は金平糖で・・・ユウはハンマーで叩き潰されるのだった。

余談だが映画はファントムが大量に編集し興行収入ウハウハになったらしい。

第十七話 映画撮影！！（後書き）

ええ〜この度私南力は・・・病気になりました・・・くそ！！宇宙人の奴変なウイルスぶち込みやがって・・・あれ？飛鳥は？はやては？居ない！！どうしよう俺の命が危ない！！

次回！勇者指令ダゲオンA's 力の看病日記

ヘルプミー

## 第十八話 力の看病日記

ある日の南家

「うーんうーん・・・」

何故か頭に氷枕しいて布団で寝ている力。その理由は・・・

「・・・風邪ね・・・」

第十八話 力の看病日記

「うー・・・」

珍しく寢床で病気になった力ちゃん。

「馬鹿は風邪を引かんと思ったが・・・」

「馬鹿が風邪を引いた」

シグナムとヴィータが寝込んでいる力を見てそう呟いた。

「あゝそういえばこの間宇宙人に人類絶滅ウイルス打ち込まれてたわね〜」

「まさか・・・それ食らって風邪で済んでるのか？」

「いや〜力君身体頑丈だから〜」

頭かいているシャマル。

「幸いな事に人間に感染はしないけど・・・問題は誰が力君の看病するかよね・・・」

「・・・はやてちゃんまだ学校だし・・・いつも誰がやってんだ？」

「飛鳥」

「なんで？」

「あいつが一番無害だから・・・」

「言えてる・・・」

管理局では問題児の飛鳥だが八神組の中ではただの苦労人と化しているその為馬鹿の中では一番無害なのだと推測される。

「けど飛鳥今お仕事で居ないのよね〜」

「とうとうより・・・母上殿は居ないのか？」

「母ちゃん仕事・・・タクシー運転手で・・・仲裁やらなんやらや

ってる……」

「え？」

新次郎から聞かされた仲裁という言葉に驚くシグナム。

「あれ？言つてなかったっけ？母ちゃん元一万人の子分を束ねてた暴走族の総長だったんだぞ」

「な！！」

元暴走族さらに一万人の子分を束ねていたという力母の新事実には絶句するシグナム。

「……何で警察官と結婚したんだ？」

「母ちゃん喧嘩で負け知らずだったらしくて父ちゃんとサシでバトルして負けたら一目ぼれしちゃって足洗ったんだって」

普段の土下座衝動からは想像できないシグナム。

「……因みにこれが母ちゃんの特攻服と当時の写真……」

押入れの中の『激走』と書かれた特攻服と大型バイクで鉄パイプ構えてる力母の写真……全く面影がない……

「まあ……父ちゃんが温厚で破天荒な人だったから母ちゃん少し控えるようになったみたいよ……だからだな……南家の嫁になる奴は強くなくちゃダメだっていう鋼鉄の掟ができたの」

新次郎の言葉にヴォルケンスは・・・

「・・・なんとなく力が『喧嘩だけ』は強い理由が分かった・・・」

「両親共に滅茶苦茶活発だったみたいね」

「・・・だから母殿は宇宙人すら倒せたのか・・・」

納得するが生憎頼みの飛鳥が居ない為力の面倒を見るやつがない。

因みに飛鳥の看病方法

「飛鳥（りんご）」

「ほれ」

ナイフに刺さったままりんご差し出す飛鳥。

「タオル」

「ほれ」

雑誌に見ながらタオル吊るす。

「水」

「ほれよ」

ペットボトル渡す飛鳥。

口と態度は悪くてもやることはやってくれるのだった。

「とりあえず……いつものメンバー呼ぶしかないわね」

「シヤマル……お前がやるという選択肢は無いのか？」

シグナムのツッコミを無視しシヤマルは電話を入れた。

北斗の場合

「うっ……」

現在体温50 の力熱そうである。だが北斗は上から見ていただけだった。

「北斗く悪いけど水チャキ

「てめえでやれ」

やる気なさそうに力の脳天に銃突き付ける北斗。

「おめえ……看病しにきたんじゃねえのか……」

「……だから見に着てやってんじゃねえか」

「おめえは見に来たんじゃなくて見下しにきたのか!!あ……」



ヒートアップし余計に熱が上がってしまう力ちゃん。

その結果

「・・・次」

シャマルがゆびぱっちんをすると・・・

選手交代

サイモンの場合

「カ〜見舞いに来てやったぞ〜」

そう言って果物の盛り合わせ渡すサイモン。

「早速剥いてやるよ〜」

「お〜・・・」

りんごを剥き始めるサイモンだが・・・

「あら?」

「てめえ・・・それ芯じゃねえか・・・」

料理しない男にありがちなパターン。みかんを剥こうとすれば持ち前の怪力でみかんを搾ってしまうサイモン。果汁やら種やらが力

の元に飛び寝巻きをビショビショにしてしまった。

「……おめえ帰れ!!」

人間体調が悪いと怒りやすくなるらしい。

「次!」

再び指パッチンするシャマル。

選手交代

楓の場合

「お爺ちゃ〜ん薬膳粥出来たよ〜」

土鍋でお粥作ってきた楓。

「おお〜美味そう……う……」

おかゆの頂点に乗っていた力の大嫌いな食べ物梅干……

「……お前……なんで梅干入れた……」

「いや〜味が無いから……それに適度な塩分だし」

そう言ってレンゲもつ楓。

「はい!あ〜ん!」

「・・・自分で食べられるよ」

「しまった！いつも子ども達にやってるみたいに！！」

働いている孤児院の子どもとの習慣が染み付いた楓だった。

とりあえず一応の食事を平らげる力。食欲だけはあるようだ。

「あれ？お爺ちゃん梅干残したの」

「いやだ・・・俺のトラウマ・・・」

「しょうがないな」

そう言って残った梅干食べる楓。この時力に嫌な予感が駆け巡った。

「ぶちゅ〜」

「うぎゃあああああああああああああ！！」

思いつきり口移して強引にねじ込まれてしまった力。梅干を嫌いになったトラウマが再発してしまった。

「あら〜お爺ちゃん刺激強すぎたのね〜子ども達にはこうしてるんだけどな〜」

「お前・・・乙女のクセにはしたない事してんじゃねえ！！」

既に思考が母と化した楓に頭を抱える力ちゃんだった。

この時力にある考えがよぎった。

「・・・俺このままじゃみんなに殺されるかも・・・」

この3馬鹿の行動に身の危険を感じる力ちゃん。こつこつ時に限って嫌な予感当たるのだった。

力の家のご近所の屋根

バリアジャケット姿でレイジングハートを構えるなのは。

「北北西の風ね・・・」

力が風邪引いてぶつ倒れているのをいい事にレイジングハートで寝ている力に照準を合わせるなのは。

「ふ・・・あなたにはこの間の借りがあるの・・・けどね・・・ここで一気にトドメを刺してあげるの」

すっかり借りを踏み倒したなのは。

「エクセリオン・・・バス「こらあああ高町!!」にや!?!」

そこに現れる佐津田刑事。どうも住民が屋根の上に怪しい格好をした不信人物が居ると通報したのだった。

一方南家には見舞い客が来ていた。

「よゝ力風邪引いたんだって？」

「見舞いに来てやったぜ」

南家に遊びに来た甲児と剣児。南家のリビングで北斗たちと寛いでいた。

「・・・ていうか貴様ら何しに来た？」

「つねねえ事言うなよ北斗ゝ力が元気になるようにこつこつもんを  
持ってきたんだぜ」

そう言つて甲児が取り出したのはエロ本だった。思わず照れて顔を  
隠す新次郎。

「おう！新次郎お前エロ本見シャキン

「貴様子供相手に何見せている」

シグナムにレヴァンティン突き付けられる剣児。尚ここでは下手な  
真似をすると殺られるという認識の剣児。

「ああそつだ・・・新次郎・・・お前のベッドの下のエロ本捨てて  
おいたからな」

「な！」

力の部屋

「頼むよ〜エロ本置いてあったの兄ちゃんって言うておいてよ〜」

「……何で俺？ていうかお前俺をばい菌みたいに」

「兄ちゃんばい菌みたいなもんじゃんまたシグナムさんうるさいんだもん」

「まっ……いつか……年頃の弟がエロ本の一冊や二冊」

等と言って床につく力だったが……

「おう！力！エロ本もってきたやつたぜ……い！！！」

甲児が勢いよく力の部屋に入ってきた。

ズドンズドンズドン！！

次の瞬間甲児の持っていたエロ本が北斗により撃ち抜かれた。

「てめ！」

怒る甲児だが耳クソほじりながら言う北斗。

「病人にくだらねえもん見せてんじゃねえ……ああそつだ……おめえのエロ本ありかさやかに言いつけておいたぞ」

「なに！？」

甲児の部屋

「・・・・・・・・」

甲児の部屋のありとあらゆる場所を探るさやか。

剣児の部屋

「・・・・・・・・」

剣児の部屋のありとあらゆる場所を探すつばき。

その結果山積みになったエロ本に並々とガソリンをかけると・・・

「・・・・・・・・燃やせ」

マッチで火破りにするのだった。

そして

「たっだいま」

学校から帰ってきたはやて。

だが・・・

「逃がさへんで！！」あう！！

はやてに看病されるのだけは嫌な力。理由は、はやては力が病気で  
あると無かるうと力への扱いが容赦ないからであった。

「いやだ！助けて！ヘルプミー！！」

「往生せんかい！！」

力の絶叫が響き渡ると新次郎が答えた。

「うーん・・・はやて姉ちゃんなら南家の鋼鉄の掟に当てはまるかも・・・」

等とくだらない事を考えながら漫画を読んでいるのだった。

なおはやての容赦ない看病により力は翌日には治る範囲になるのだった。

夜

「ふう終わったわ」

南家の風呂に入っている八神組女性陣。

そこに

「うっへっへっへ・・・八神組の女覗いて恥ずかしがらせてやるぜ！！」

等とくだらない計画を立てている剣児。

「うっせっしゅっしゅ！！」



そう言って正面から一糸纏わず姿で剣児は女湯に突撃した。

しかし

「「「「「ん？」「」「」」

「え？」

凄まじく反応が薄い八神組。どうも力達との付き合い長いせいかわまじく神経が図太いようだ。逆にタジタジになり始める剣児。

尚乳液風呂に使っているために肝心な部分は全く見えない八神組の女性。

「なにしてんや？」

「あれじゃない？大方覗きに着てキヤーキヤー言わせたかったんじゃないの？」

「全く・・・覗きなどワンパターンなイベントを・・・」

「あ・・・その・・・」

このノーリアクションに逆に剣児は更にタジタジになりそして全員が剣児の丸出しであるとある部分に注目した。

結果

「「「「「小つさっ！！！」「」「」」

「ザクー!!」

剣児の中の何かが砕けた。

「うわああああああああ!!」

泣きながら女湯を出る剣児。

「いや〜やっぱあれかな〜力君がデカすぎるんやな〜」

「い〜え〜お義父さんも中々〜」

「・・・下品だぞ・・・会話が・・・」

乙女らしからぬ会話に苦笑いする飛鳥だった。

力の部屋

「うわああんあんあん!!」

覗きが不発に終わった挙句何かのプライドが負けてしまい号泣する  
剣児。

「・・・なにがあっただ？」

「聞かないでおいてやるっよ・・・」

力とサイモンのツッコミに剣児は誓った。

「八神組の女なんて大っ嫌いだあああああああああああああああ  
あ!!!!!!」

## 第十八話 力の看病日記（後書き）

はあ・・・風邪も引いたしひどい目にあっただぜ・・・あ？楓誰だ？そのちびっこいの？何！？数年後の俺のセガレ！どうして来たの？は？俺が勉強しろだの喧嘩ばかり教えるから文句を言いに来た？んな未来で言う発言なんて責任持てるか！？

次回！勇者指令ダゲオンA's どのこい 登場！力の息子

て！お前なんではやてに向かって鬼婆言ってるんだよ！？

## 第十九話 登場！力の息子

それはある日の事だった

「たっただいま〜」

いつものように学校から帰ってきた力は冷蔵庫の三段目のヨーグルトに手を伸ばした。

「あれ？俺のヨーグルトが一個減っているような」

「あ？お爺ちゃんお帰り〜」

力を出迎えた楓。だがその先に居たのは・・・

「誰だそれ？」

力の目の前に楓がとてクソ生意気そうな少年を連れてきた。しかも力のなけなしの小遣いはたいて買ったヨーグルトを食べていた。

「この子・・・お爺ちゃんの子供です・・・」

「なぬうううう！？」

力の絶叫が近所中に響き渡った。

第十九話 登場！力の息子

「はじめまして・・・南力の息子の南俊介です」

とりあえず自己紹介をする俊介。

それを見た飛鳥は・・・

「ああ〜とうとうはやてに産ませたか〜」

「なぬ！！」

飛鳥の爆弾発言に身に覚えのない力。

「え〜だつてあんた日曜は毎朝はやてとがんばってる〜って言つてたじゃない〜」

「おめえは火に二ト口注ぐな！！第一何にもしてねえよ！！」

「あれ〜？はやてにストッキングとガーターベルト付けさせてるつて二人もいい歳だぶべほ！！！！」

「指一本触れてません！！」

いい加減力に殴られた飛鳥。それを見た俊介は・・・

「父ちゃん・・・女を殴る男は最低だつて自分で言つてたじゃん」

セガレ俊介に日々の教えを付かれ黙ってしまっ力だった。

「ていうか・・・何で連れてきたの？」

「それはですね・・・私が久しぶりに時間犯罪の任務に出勤しまして・・・それがお爺ちゃんが結婚して子供さん生まれて8年くらい経った時代での任務で・・・お爺ちゃん私の事俊介お爺ちゃんに話しちゃったらしく連れて来いって駄々こねられました」

「連れてきちゃったんだ」

「はい・・・」

わが祖父のわがまを聞いてしまった楓。それを聞いた飛鳥は大層呆れた。

とりあえずお茶が入り俊介と雑談している八神組。

「そういえば・・・力君って未来で何やってんの？」

「無職」

「なぬ!?!」

驚く力だが他のメンバーは

(あーやっぱりな)





「お前はとうとう誰かに産ませたんか！？このピーー！！が！！」

「誤解だ！！」

邪神モードを全快にし力をポツコポコにするはやて。

とりあえず俊介の事を説明すると

「・・・全くロクでもないな力君の息子」

呆れ返るはやてに飛鳥の反物質爆弾発言が・・・

「え？これあんたが出したんじゃないの？」

「なぬ！！？ウチが出したん？」

飛鳥の一発にパニック状態になるはやて。

「じゃあ・・・もしかしてウチあゝんなことやこゝんなことを・・・ひゃう！！」

「うわ！！はやてが熱で倒れやがった！！」

そう言っつてヴィータがはやての頭の上に何故か鉄板を乗せ卵を割ると見事に目玉焼きが出来てしまった。

その光景を見ていた力は不順な事を子供に聞かせないと・・・

「まあ・・・とにかく表にでもいくべ」

「うん」

このままここに居たら更にわが身が危なくなりそうなので俊介を連れ出す力だった。

しばらく町を歩いていると海鳴仲良し公園に辿り着き俊介に質問してみる力。

「で？お前なんでここに来たの？」

「見てみたかったから」

「何を？」

「父ちゃんの学生時代」

「は？」

「だって父ちゃん毎日毎日俺に勉強しろだの喧嘩ばかり教えるんだもん！！」

南家の教育方針はヤンチャな子を作るためにあるらしい。

「え？なんで？」

「それに・・・父ちゃん！何で母ちゃんと結婚したの！？」

「いや・・・まだ結婚してないからそんな事言われても責任取れるか・・・ていうか・・・俺が結婚できていた事事態が驚きだ・・・言うより・・・未来の俺は何してる」

「言ったじゃん・・・母ちゃんに毎日DV受けてるって」

「・・・ははは・・・我ながら情けない」

等とマジで情けなくなっていました力。

「あゝわかったよ・・・もう少しマシな人間になるから帰れよ」

「嫌だ！俺ずつとここに居る！！」

己に似ず凄まじい我俣ほうだいの俊介。

そこに駆けつけた楓と飛鳥。

「ちよつとお爺ちゃん！我俣言わないでよ」

「そうだぞ！お前のせいではやてが赤面症で死にそうなんだから」

「ふん！！」

力以上の我俣不利を疲労する俊介。流石に飛鳥が堪忍袋の緒が切れそうになるが・・・

「！！」

楓の頭に電球が浮かび上がった。

「ちょっと待っててくださいね」

「ん？」

楓が時限転移魔法を展開し時間移動を図った。

「よっこいせ」

数分後

力、飛鳥、俊介の前に現れた楓がとある少女を連れてきた。

「楓・・・今度は誰だこれ？」

「この人は私のお母さん！つまり俊介お爺ちゃんの娘でお爺ちゃんの孫です」

「どうも！」

そう言っただけで挨拶する俊介の娘。

「お前の親父は婿養子か？」

「そうです」

等と飛鳥と楓の会話が弾むと楓母が俊介に文句を言った。

「お父さん・・・勉強しろだの喧嘩させるだの文句言うけど・・・お父さんだってお爺ちゃんの事言えないよ。クドクドクド!!」

楓母に文句を言われまくる俊介はタジタジになっていく。こうやって連鎖反応し召す教育方針を見た力は・・・

「こんな家族関係ヤダああ！！」

「・・・だったらもうちょっとマシな男になるんだな」

「・・・がつくし」

飛鳥に至極全うな意見を言われ沈み込む力だった。

尚セガレと孫は楓がちゃんと責任を持って送っていった。

更に余談だが数年後力はがんばって『無職』からは脱却したらしい。

第十九話 登場！力の息子（後書き）

力

「現在俺は火鳥さんとこのヴィヴィオの相手をしていた。そういやすっかり忘れてたけどはやての誕生日近かったな」

飛鳥

「実際は通り越したぞ・・・はやくやらねえと」

力

「何送るかね」

飛鳥

「下手なもん送ったらお前ころされんじゃね」

力

「それだけは嫌だ！！へ！またこんな時に限ってあの二人襲撃に着やがった！！」

次回！勇者指令ダグオンA's どんこい はやての命がけの誕生日

力

「ヘルプミー！！」

## 第二十話 はやての命がけの誕生日

ある日の南家

「すう〜すう〜」

南家のリビングのソファで気持ちよさをそうに昼寝しているはやて。

「ちょっと待て・・・なんでこいつは俺んちで昼寝してんだ？」

「・・・良いじゃないの知らない仲じゃないんだし」

そう良いながらティアナからもらった『和み』と書いてある湯のみで番茶飲む飛鳥。

「おめえはいくつ湯のみ持ってんだ？」

「いや〜ティアナのヤケクソのショッピングの影響でたっぷり持ってたんのよね〜」

「なるへそ」

そう言って飛鳥からもらった『馬鹿』と書かれた湯のみで番茶飲む力。

そこに

「むにゃむにゃ・・・こら〜！力君！！むにゃ〜」

突如響いたはやての寝言。

「・・・お前夢の中でまではやてに尻に敷かれてるのか」

「・・・多分ね」

もうはやてに何されようが知ったこつちやない力だが・・・

「あ〜力君だめや〜」

「「は？」」

何故か身を振りだしたはやて。力と飛鳥は嫌な予感をしたがもう遅かった・・・

「こんなところでえ〜？力君大胆やなあ〜」

「ちよつと待て！！夢の中で何やってんだ俺は！？」

眠っているはやてを怒鳴りつける力。

だが寝言はエスカレーターしていき・・・

「ああ！そこはあ！そこはダメ〜」

「起きろー勝手に変な夢見てんじゃねえー！！」

眠っているはやてをガクガク揺さ振る力。尚飛鳥は呑気にお茶すす



っていた。

「・・・あ！」

何かが終了し更に嫌な予感がした力ちゃん。

「もう力君これじゃ私お嫁に行けへんやないか？」

何かが弾けた力。

「うわああああああくん！」

泣きながら家を飛び出すのだった。尚飛鳥は終始放っておいた。

尚飛鳥の湯飲みが『ご愁傷様』に変化していたのはスルーしていた  
だきたい。

## 第二十話 はやての命がけの誕生日

### 天野平和科学研究所

「で・・・家に着たんだ」

天野平和科学研究所に逃げてきた力。クッキーなどを出してとりあ  
えず持て成すハルカ。

「全く・・・うちは駆け込み寺じゃないの・・・たくケンタとい  
い男って」

「面目ありません」

ハルカに男の面子を潰されてしまう力。

とりあえず外に出ていつも遊ぶ猫に煮干与える力。

「おじちゃん」

「・・・お？ヴィヴィオ」

いきなり飛びつかれる力。尚楓の時のような全力タックルではない。

「おじちゃん！お姉ちゃんは？」

「あ？楓か？そういえば何かいそいそと用意していたような」

楓たちが何かのイベントのために準備していたが何のイベントか分  
かっていない力。そしてヴィヴィオが力の相手していた猫に手を出  
そうとすると・・・

「フカーツ！！」

「きゃー！」

引っ掻かれそうになるヴィヴィオは力の後ろに隠れてしまった。

「あ？大丈夫か？」

「怖いよ」

「悪いな、こいつちいちゃい頃からのおじちゃんの大切な友達なんだ」

「え？おじちゃん人間の友達は？」

「お恥ずかしながら……おりません……」

ピンポン

力の友達は八神組とDYNAMICメンバーと影の守護者メンバーと大悟しかいません。

「じゃあ！私が友達になってあげる！」

「ありがとうよくん？」

そこに力の携帯電話が鳴った。

「……お！ユーノ……もしもし」

力の数少ないなのはサイドの友人ユーノ・スクライアから電話が入るとユーノは絶叫していた。

「力！逃げて！！なのはが！なのはが！！」

「……ん砲台がどうかしたのか？」

すでになのはの呼称が『砲台』になった力・・・ちなみにフェイトは『死神』である。

「なのはが君を探している！殺す気だ！」

「・・・今度はどれだ？」

もうなのはに怨まれる事などやり尽くしてしまった為見に覚えがあり過ぎて逆に分からない力。

「あの時のことがバレた！！」

「まさか・・・」

そう力は一時期クロノの依頼で検拳の為ユーノと共に犯罪組織の男性同士のカップルパーティーの潜入捜査をさせられていたのだった。

事件は無事に解決したが後の処理が大変だった。何とそのパーティー会場にいたカップル達に最愛のパートナーとして紹介されてしまったのだ。

尚その時のやり取り

「「・・・だっはっはっはっはっはあゝ」」

肩組んで濁いた笑いをする力とユーノとりあえずバレたら殺されそうなので誤魔化していた。

「・・・ああ最悪・・・殺したろうか」

「ああ・・・うん良いよ殺して」

「ケツに触るな・・・ケツに「だあっはっはっはっはあゝ」

こうして力とユーノの中ではこの事は永遠の黒歴史にしようと約束したがという経緯かなのはにバレたのだった。

その頃

ガシャコン

レイジングハートをエクセリオンモードにするなのは。

「あの悪魔許せない・・・はやてちゃんだけじゃ飽き足らず・・・  
『私のユーノ君』盗ったの！！もう殺しても殺し足りないの！！」

そうやって力を殺すべくリミッターを自力で解除し天野平和科学研究所に向かうのはだった。

海鳴市街地

「抜き足・・・差し足・・・忍び足・・・」

なのはの襲撃から逃れる為にとりあえず天野平和科学研究所から出る力。街中を逃げていた。

「・・・ふふ・・・往來の人ごみの中ならいくらあの砲台が来ても

大丈夫……」

だがその考えは甘かった

ズバシューーン！！

人ごみで容赦なく砲撃された力。

……焦げてます……

一般人も巻き込まれました

「ケツホケツホ」

とりあえず口から煙吐きながら立ち上がる力の前に降り立つなのは。

「出たよ……いい加減にしつこいぞ砲台女！」

「うるさいの！！お前を殺すためならたとえ火の中水の中！！今回はクロノ君を脅してリミッターは解除したし！非殺傷設定も解除したの！！お前を殺すには十分なの！！！」

人間嫌われすぎるとここまで行くようだ。そして力があることに気づいた。

「ん？あの死神は今日も一緒じゃないのか？」

「……ふ……フェイトちゃんは補習なの」

山海高校

「ごらー！フェイト！貴様宿題を忘れてくるとはいい度胸だ！」

「ひーんひーん」

海にマンツーマンで補習をさせられているフェイトだった。

「というわけで・・・学業終わった私だけが今日は相手なの！！」

「学業終わったって・・・お前中卒で終わりだったの？」

どう見ても自分より頭よさそうに見えるのは。というよりは世界の風習の違いなのであろう。

ブチー！！

「うるせえなの！死にやがれなの！！」

逆鱗に触れたらしく力に向かって砲撃をバンスカバンスカ撃つてくるのは。

「うわ！あぶね！！当たったらどうすんだよ！！」

「当てるつもりでやってるの！！・・・っか・・・動くんじやねえの！！殺せないの！！」

「お前・・・毎度毎度なのなのうるせえんだよ!!!」

「大きなお世話なの!!! 学歴のことは気にしなかったけど・・・  
あんたに』負けてる事はとてもムカつくの!!!」

曲がりなりにも高校に通っている力。何か一つでも世界で一番嫌いな力に負けている事が悔しいのは。

「お前! 学歴社会なんて意味ねえだろう!!!」

「うるせえ! 今はそれが社会の主流なの!!!」

「・・・嫌な社会になつたなあ」

そう言つて時代の流れを嘆く力だった。

「お前が社会の事を嘆くなの!!!・・・今日こそ殺して・・・今日のはやてちゃんの誕生日には出席させないの!」

「・・・あ」

本日6月4日はやての誕生日

尚ダグベースでは

「」

誕生会の準備をしている八神組のメンバー。

「甲児さん〜七面鳥まだ〜」



「今焼けるから待ってる」

パーティメニユーを作る為に呼び出された甲斐。さつきから食事な  
どと散々こき使われていたのだった。

「えつと〜ミツキさんは呼んだし〜大悟君も呼んだし」

着々と準備を始める楓。

そこに

「てなんで俺もいなければならんだ!!」

何故か呼び出された大地。

「まあ〜良いじゃないの〜旅は道連れ世は情け〜」

「てめえ・・・」

さつきから散々こき使われている大地。楓同様手先は器用だった大  
地を散々こき使う楓。

「はい!かくし芸大会も準備万端よ〜」

そう言ってシグナムにいそいそと何かするシャマル。

所変わって襲撃現場

「というわけで・・・はやてちゃんとのラブラブな誕生日会をさせて溜まるかなの!!」

本音を暴露するなのは。

「おめえ・・・だから勘違いするなあ!!」

絶叫する力になのはがレイジングハートに向けたその時だった。

「おつりゃああああああああ!!」

登場した飛鳥にレイジングハートを蹴り飛ばされるのは。

さらに

ズドンズドンズドン!!

「!!」

北斗の銃弾を避けるのは。

さらに

「どりゃああああああ!!」

そこら辺にあった電柱を引っこ抜いてなのはに投げ付けるサイモン。

「・・・お前ら」

「よっ！」

力の元を集結する3馬鹿。

「・・・おめえが来ないと・・・はやてが煩いし・・・どうせ毎度巻き込まれんならこつちから出向くまでよ・・・」

いつもと違いやる気満々の飛鳥。北斗とサイモンもつき合わされウザがっている。

「んじゃ・・・とつとケリ付けてはやての誕生会開始じゃ・・・」

「あいよ・・・いくぜ相棒」

「へいへい」

史上最低の馬鹿コンビがなのはに飛びかかろうとしたその時だった。

「なのは〜」

「ユーノ君〜」

「え！？」

何故か現れたユーノになのはの怒りのボルテージが下がった。

「もうなのは〜馬鹿だな〜ボクがそつちのわけないじゃない〜」

「ごめんね〜」

そう言つてユーノに連れて行かれるのは・・・折角のやる気が不  
発に終わりやり場の無い怒りを覚える力達。

そこに

「いや、納まりましたか・・・」

「会長！」

突如登場するノルウエール。

「まさか・・・会長が司書長さん呼んでくれたのか？」

「まあ・・・そうですね・・・おめでたい日は優しくしませんと・・・  
『今日だけ』は」

ノルウエールが出したのは本日なのはがサボった分の仕事と追加の  
仕事の山だった。

チーン 合掌

「もういったいなんや？」

楓によってダグベースにつれてこられるはやて。そしてライトアッ  
プされると・・・

「」「」「」「」お誕生日おめでとう「」「」「」

そう言つて全員からクラッカーを浴びせられるはやて。

「うわ〜皆ありがとう〜」

皆の行為が嬉しいはやて。はやてにとつてこの日は家族と出会えた特別な日だった。

「さあ〜みんな〜ケーキ持ってきたわよ〜」

ミツキが持ってきたのはダグベースの格納庫並みにあるケーキだった。

「で〜これどつから切ればええんや?」

「はいユウ!」

「へいへい・・・」

そう言つて巨大な包丁を構えるユウがケーキに飛び掛るとケーキを一刀両断した。

「おつりゃ!」

更に食べやすい大きさに斬るユウ。皿の上にケーキは見事に切り分けられた。

「おお〜流石ユウ」

「褒められてもうれしくねえ・・・」

等と毒づくユウ。

「おゝこの七面鳥うめえ!!」

「良かったけどどんどん食べてくれよな!大悟!」

「おう!」

甲児の作った七面鳥を美味しそうに食べる大悟。

そこに

「はい!ここでかくし芸大会開催」

急にかくし芸大会の司会進行し始めるシャマル。

「ここでは・・・もしものコーナーをやってみます・・・では!もしも!シグナムが男だったら!」

騎士甲冑でショートボブヘアで出てくるシグナム。あまり違和感ない・・・

「なんて言うか・・・いるよな・・・こういう魔法剣士・・・」

「だな」

等とサイモンと北斗に言われるが・・・

「・・・」

何もしゃべらないシグナム。

そして

バタリ

倒れた

「何があったどうした！？・・・んだよそついう事かよ」

新次郎がシグナムに駆け寄ると原因は一発でわかった。

「ぶはっ！！」

シグナムのバスのコルセット外す新次郎。すると呼吸し始めるシグナム。早い話が無駄に突りすぎた胸を誤魔化す為にバスに物凄くキツイコルセットを巻いた為呼吸困難に陥っていたのだった。

尚髪の毛はカツラの中に折りたたんで入れたのだった。

尚それを見ていた甲児は・・・

「ふ・・・悪夢から逃れられたぜ・・・シグナムさんの定義がなく

スパシユン！！

物凄い斬撃が甲児の頬を掠めた。その先にはレヴァンティンを構えたシグナムの姿が・・・

「・・・貴様私の定義は胸だけか・・・」

「他に何が!？」

「殺す」

そう言つて甲児にガソリンで刀身を発火させたレヴァンティンで斬りかかるシグナム。

「・・・なんでああしたの？」

「あく力君たちみたいに魔力無い人間に対抗する手段でシグナムが独自に研究してああなつたのよ」

ミツキの解説に納得するヴィータだった。

「わっ！て！！止めるよ！！おっかない女だな！」

逃げ回る甲児に今度は火鳥が・・・

「え〜つと何をすれば良いか分かりません・・・とりあえず」

そう言つてオカリナを吹き始める火鳥。その優しい音色は八神組を穏やかにしていった。



今度は酔っ払った北斗が・・・

「・・・あいつ何やる気だ？」

何故か急に歌舞伎のようなポーズを取る北斗。

「俺！参上！！！」

何故かモモタロスの物まねをやる北斗。

声だけはそのままの為一挙に引いている一同。

「ああ・・・お義父さん金髪のお坊さんまんまで酔っ払いの度を越すと人格変わるんだ」

キャラの解説にこいつはどこまでも金髪坊主のオマージュキャラのようだった。

そこに

「はいどうぞ南楓です」

「・・・南大地だ・・・」

力の子孫コンビの登場。そして司会進行していく楓。

「・・・はい！ここでは名場面集の数々読者様からのアンケートが来ましたねっやっぱり多かったのは・・・初の超勇者合体シーンや最終回などですが・・・一番多かったのは！！！」

バンとホワイトボードに貼り付ける集計結果。

「やっぱり！お爺ちゃんのお仕置きシーン！！」

「ええええ！！」

絶叫するはやて。

ある意味この話の一番の見せ場のようなシーンに誰もが納得した。

「それじゃあ〜プレゼント贈呈式〜」

「え？なに？」

期待の表情をするはやて。

「それじゃあ私は〜」

まず楓が出したのはマッサージチェア（手作り）だった。

「うわ〜マッサージチェア作ったんだ・・・」

「これで日頃の疲れをぶっ飛ばしてください！！」

「ありがとうございます〜」

今度はシグナムが・・・

「私からは・・・」

「お！自家製の干物！」

「今回は飛びぬけて出来が良かったもので・・・」

「それじゃおかずにでもするわ〜で〜力君は何くれるん？」

「無いです」

「は!?!？」

肝心の力は何も用意していなかった。早い話がさっきまでなのはに襲撃されていた。

「もとい・・・力君はなにくれるん？」

「だから無いよ・・・怨むなら砲台怨め」

ブチ

はやてが邪神化しそうなその時だった。

「これしかないわね・・・シャルル」

「はいはい」

そう言ってミツキとシャルマルが力をバインドでグルグル巻きの糞虫にした。

「な!?!？」

「ハイ可愛く〜」

何故か力の頭にリボン結ぶミツキと力の顔に何か貼り付けるシヤマル。

「おい！何の真似だ！！」

「あ〜これあげる〜」

「何！？」

驚く力。シヤマルの貼った紙には『好きにしてください』と書かれていた。

「名づけて！サンドバッグ力！」

ミツキに宣言され暴れまわろうとする力。

「ちょっと待て！俺の人権は！？」

「力君にそんなもんある思ってるんか〜」

等とはやてにがっしり掴まれた力。

「んじゃ・・・日頃の鬱憤晴らしたろうやないか〜覚悟はええか〜」  
「？」

指関節ボキボキ鳴らすはやて。

「んじゃこれお持ち帰りするから〜よっこいせっ」

そういうと何処にそんな力があるのか担ぎ上げたはやて。

「あああゝゝ飛鳥ちゃん助けてよおおお!!!!」

一番頼りになる相棒に助けを求める力だが・・・

「若いつていいねえゝ姉ちゃん嬉しいようゝんじゃがんばれえゝ」

「鬼iiiiiiiiiiiiiiii!!!!」

と言つてあっさり飛鳥に見捨てられはやてにお持ち帰りされる力だった。

「はい!気を取り直して!!食べよう!!」

『おう!!』

こうして全員に見捨てられた力だった。

尚力がどういふ運命で終わったかはご想像にお任せします。

第二十話 はやての命がけの誕生日（後書き）

本日は・・・クラス全体で補習だよ・・・なに！？宿題を忘れてきたからクラスで連帯責任を取って補習だど！？勘弁してよ

次回！勇者指令ダゲオンA's どんこい 地獄の補習

いやだ

## 第二十一話 地獄の補習

この物語における八神家

八神はやて 幼いころから力の暴走を止めるべく力にのみ暴力を振るってきたため本編とは似ても似つかないような破天荒な性格になった。最近では身体能力1億倍は力限定の能力ではなくなってしまうたらしく5馬鹿は勿論なのは、フェイトもその被害を食らっている。何故力にかまうか本人曰く『才色兼備で完璧すぎるエリートよりど〜っか欠点のある奴の方が可愛いんやろうな』らしい。尚自身の最大のお置き技ラグナロク・ザ・レインボーを同キャラに流らせようと目論んでいる。

シグナム 恐らくこの物語の中ではマトモな部類になる人。はやての破天荒の止め役になる事が多かったが最近では力の弟新次郎、妹ことはこの保護者となってしまう止め役を辞職しようと目論んでいる。新次郎を鍛えているが力に対するはやての如く気苦労が耐えなくなつた。

シャマル はやての起こしたありとあらゆる力への致命傷を治療してきた最強の医者。力のありとあらゆる致命傷を治してきてせいか生命活動をしていればどんな外傷でも治してしまうまでに回復スキルがあがった。尚適度に黒化するため一番力達に近い人物であるかもしれない。

ヴィータ 自他共に認めるサイモンの保護者。地球文化に乏しいサ

イモンに振り回されているうちに打ち解けていきかなりの凸凹コンビになった。なおサイモンに対しラテーケン・ギガントと自身のデバイスをフルに使いはやての如くお仕置きをしている。サイモンからは『親びん』と呼ばれていて物凄く迷惑している。

ザファイラ 恐らく途轍もなく影が薄くなってしまった犬。普段はことは飼われているかダグベースで畑を耕している。尚有機農法に物凄く五月蠅くなってしまった。

リインフォース？ 普段はサイモンの頭に止まっている。本人曰く『サイモン君の頭は高級ソファ顔負けのとても座り心地の良い』らしい。その為サイモンからは目玉親父の扱いで『父さん』と呼ばれている。最近サイモンの頭を他の小動物が狙ってきた為争奪戦に勝つべく修行している。

## 第二十一話 地獄の補習

ある日の征西学園

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

力のクラス全員がブスくれた顔をしていた。理由は補習だからであった。

「何だお前ら！俺は言ったよな！？誰か一人でも宿題を忘れてきたら全員居残りで補習だったな」



力のクラスの担任・高坂先生がクラスに向かって宣言する。

「だからって真面目に宿題やってきた私が馬鹿みたいやん……」

宿題やってきたはやての意見ももつともである。

「まあまあここは連帯責任ということで「ラグナロク・ザ・レインボー……」

力が何かをほざこうとした瞬間力に向かってラグナロク・ザ・レインボーを放ち学校の壁ごとぶち抜くはやて。

「宿題忘れたお前が偉そうな事言うな……」

宿題をやつてこなかった力。

尚はやてが通うようになってから征西学園は何回も改装工事をしてきた。理由は力をお仕置きするべくはやてが学校のありとあらゆる場所を破壊したからだつた。

その為無駄に学校の設備が最新のものと化している。

尚力の態度を見たクラスメイト全員はやての認識が『お淑やかな優等生』から『怒らせたら怖い人』に変わった。

「……八神……いい加減学校壊すの止めろ！青空教室じゃねえんだぞ」

「え！ええじゃないですか！！風通しよくなって〜」

「良いわけねえだろう!!」

怒る高坂先生。この為はやてはまた学校の弁償をしなければならぬのだった。

「でははじめるぞ」

風通しの良くなった教室で補習を開始する力達。なお力は首やら肩やらにギブスを巻いていた。

尚何故クラスメートたちが補習の暴動を起こさないかというところ

(休日に学校に補習に行くくらいならここでしっかり補習する)

らしい。意外に学業を無碍にしないらしい。

「でゝあるからして・・・聞いているのか南!!」

「うゝんうゝん」

高坂先生の補習を頑張っている力だが頭が悪過ぎてついていけない。何故こんな奴が高校生になったのか不明。

「こら!力君頑張れ!早く帰らないとご飯つくれんやないか!!」

「うるせえ・・・俺だって必死なんだよ」

一生懸命補習している力。だが無常にも時間は過ぎていく。

「それじゃあ・・・課題プリントを配る・・・全員が終わるまでは

帰さん！」

高坂先生からプリントが配られると力は問題を若干解いていく。

しかし

「わかんないよ〜」

「ていうか・・・これ難易度難しくありませんか」

はやてですら難しいと思えるプリント難しいはずである。何故なら・・・

「これセンター入試の過去問題じゃねえか！！」

とある勉強できる生徒が立ち上がって答えた。何が悲しくてセンター試験の過去問など全て解かなければならないのか・・・

だが生徒達は頑張った

頑張って解いた

しかし

「う〜ん・・・」

力だけは問題を解けずに唸っていた。征西学園はそれほど高い学力ではないがやるべきところはやる学校のようです。

「うん南が問題解けないと帰れないぞ・・・」

そうこの補習は全員が完了するまで帰れないと言う地獄の補習。ゆえにクラスメートの全員のプレッシャーをかけられてしまった。

「・・・マズイ」

力の頭の悪さを痛感しているはやて。そこではやてのとつた行動は・・・

(こちらボス・・・応答せよ・・・)

念話を展開するはやて。

(・・・こちらシャマルです)

(シャマル、力君のプリント見えてる?)

(ばっちり)

征西学園の近くのビルで何故かライフルのスコープで力の答案用紙を覗き見るシャマル。したでは・・・

「えっつとこれがこつで・・・」

「ちげえよ!これが」

「いやいや・・・こつがこつちで」

ヴォルケンスが頑張って力の問題用紙を解いていた。

しかし

「おめえ！頭悪いな」

「貴様に言われたくない」

「落ち着け」

「これで合ってるんです」

長年生きてきたヴォルケンスとはいえ何が悲しくて学生の学問などやらねばならんのかとにかくかなりもめていた。

（力君）

「？」

力の頭に響く声・・・はやてからの念話であるが力の場合は受信できるとのみで力からは送信出来ない。

（そのまま聞き・・・今シグナム達が問題といているからその通り書き）

カンニングだろうと何だろうとクラス全員を帰すにはこの方法しかなかった。

一方

「お前強情だぞ！」

「だからこれはこうなんだって」

「うるせえ殺すぞ」

「貴様らこつちがこうで決まってるだろうが！」

飛鳥、サイモン、北斗さらには佐津田刑事まで巻き込んで力の問題を解いてみるが・・・

「わからん」

この四人の知能は力と同レベルだった。

更にもめ始めている為事態は悪化の一方だった。

尚この会話全て力の脳内で筒抜けである。

「ああもう！うるさい！！」

そう言っただけ立ち上がる力。その前には高坂先生が居た。目が合い気まずくなってしまう。

「南・・・貴様いい度胸だな・・・お仕置きで全員プリント追加」

高坂先生が怒り理不尽な追加要求をしたときはやてが最後の手段に出た。

「……先生……このまま私が力君をお持ち帰りしてお仕置きするのとおここでお仕置きして校舎建て直して先生の休日消えるのとどっちがええですか？」

はやての満面の笑みの脅し、その時クラス全員がこの世の終わりのような表情になった。

「うわ〜！死にたくないよ〜」

「ヘルプミー」

はやてならやりかねない……それを聞いた高坂先生は……

「帰ってよし」

己の首が危ないためあっさり妥協するのだった。

尚先生に無礼な立ち居振る舞いをしたからという理由で力がお仕置きされたのは言つまでもない。

## 第二十一話 地獄の補習（後書き）

ははは・・・毎度のことながらひどい目になった・・・んで今度は何だ？は？十年前の賭けの負けを取りに来た。んで？俺は何賭けたんだ？なに！？八神家の自宅！！おう！はやて！火鳥さん！甲児さん！ノア！ギャンブルで取り戻してくれるのか！？

な！！機動六課が！天野平和科学研究所が！ロケットパンチが！サエグサ家が！借金の肩に差し押さえられた！！  
取り戻すにはギャンブルで勝つしか無い！

次回！勇者指令ダグオンA's どっこい ギャンブル狂のブルース

ギャンブルは身を滅ぼすううう！！



## 第二十二話 ギャンブル狂のブルース

ファイバードStrikers時代のある日

「ふう儲かった儲かった」

景気良くパチンコしている飛鳥。今回は儲かり玉を交換しに行った。

「何にします?」

「雨だのチヨコだのお菓子で適当に繕って」

そう言ってお菓子を持って帰る飛鳥。

「いつもみんなにや世話になってるからね、たっぷりプレゼントせ  
にゃ」

等とぶつくさ言って我が家に帰ると・・・

「あ?」

「お」

「おかえり」

何故か力とはやてが迎え入れた。

## 第二十二話 ギャンブル狂のブルース

数時間前

いつもの通り八神家でたむろしている力達。本日甲兎、ノアと遊びに来ていた。

その時

変な顔の男が八神家を訪れた。

「南力・・・久しぶりだな」

「貴様は・・・流離いのギャンブラー・・・ギャンブル狂のブルース!!」

玄関に力の目の前に現れたブルース。

「・・・南力・・・八神はやてがいないとは・・・まあいい・・・貴様が13年前に賭けていった負けの担保を取りに来た」

「は？」

13年前の事なので細かい事は覚えていない力。それを見ていた甲



そうやって八神家から追い出されてしまった力達。

その結果

「このバカたれえエエエエ！」

「ぶくぶくぶく!!」

一時避難したダグベースにはやてにアルゼンチンバックブリーカーを食らっている力。

泡吹いてます。

「こつなつたら責任もって取り返すしかない力」

「そつだな・・・」

「て!さいっしょから勝負投げるな!!」

賃貸マンションやら新築で新しい土地を買おうかなと思っている八神家。

「大工さんどうする?」

「楓にやってもらえば家の一軒や二軒簡単に作れるだろう」

新築のマイホームを買う気満々のヴォルケンス。力が勝負に勝つなど毛頭思っていない。

翌日

八神家で賭場開いたブルースに・・・

「たのも〜!!」

力が殴りこんだ。そこにはなのは、フェイト、火鳥に甲児にノア、ウエンディやら佐津田刑事まで居る。

「ほほ〜南力来たか・・・」

「おう勝負だ!」

「え?担保は?」

「ダグベース玄関!これが証文だ!!」

そう言っつて証文を叩きつけ勝負する力。

「ところで勝負つて何やるんだ?」

「さあ〜」

甲児とノアの意見にトランプを出したブルース。勝負内容は・・・

「ババ抜きですね」

火鳥の言葉にずっとこけるメンバー。

結果

「お前の負け」

「なぬ！」

あっさり負けてしまった力。

「まだまだ！ダグベース格納庫！これが証文だ！！」

「お前の負け」

「ぬがああ！！」

再び負けてしまった力は見事にダグベースを巻き上げられてしまった。

それを見かねたはやては・・・

「力君・・・ならウチが勝負したる」

ブルースの前に堂々と立つはやて。

「ほお・・・で？担保は？」

「ふ・・・機動六課玄関！！これが証文や！！」

そう言って証文を叩きつけるはやて。

結果

「お前の負け」

「な！」

手札にババが残ってしまったはやて。してやったり顔のブルース。

「まだまだや！機動六課会議室！！これが証文や！！・・・な！！！」

「お前の負け」

「まだまだ！機動六課食堂！！」

「お前の負け」

「くそ！機動六課階段！！」

勝負に負けまくり次々と巻き上げられる機動六課。

結果

「もう賭けるもんがない！！」

八神家マイホームや機動六課施設を全て巻き上げられてしまったはやて。

「・・・はやてちゃん情けないの・・・こつなったら」

前に出てくるのは。

「私が勝負なの！」

「へ〜で？担保は？」

「レイジングハート！これが証文なの！！」

証文とレイジングハート叩きつけるなのは。

結果

「お前の負け」

「なの〜〜〜」

見事に撃墜されレイジングハート取られたなのは。

「なのは・・・こうなったら私が相手だ！！」

怒りマークを表し前が出るフェイト。

「ほお〜で？担保は？」

「バルディッシュ！これが証文だ！！」

バルディッシュと証文叩きつけるフェイト。

結果

「なぬ！！」



「お前の負け」

そう言ってブルースにバルディッシュ巻き上げられたフェイト。

「・・・お前ら商売道具賭けていいのか？」

そう思ってしまった力。

はやて、なのは、フェイトがブルースに撃墜された後、仲間達が次々とブルースに挑戦していった。

火鳥の場合

「わかりました・・・天野平和科学研究所玄関！これが証文です！」

証文叩きつける火鳥。

結果

「お前の負け」

「しまった。負けてしまいました」

見事にババを引いてしまった火鳥。

スバルの場合

「こうなったら・・・ガードファイヤー！！これが証文！！」

そう言ってブルースに証文叩きつけるスバル。

結果

「お前の負け」

「えええ〜〜〜!!」

『スバルお前なー!!』

借金の片に持ってかれるガードファイヤー。

ウエンデイの場合

「情けないツスね〜天野平和科学研究所！ノーヴェの部屋！これが証文ツス!!」

証文叩きつけるウエンデイ。

結果

「お前の負け」

「なあ!!」

ジェイルの場合

「天野平和科学研究所！私の研究室！これが証文だ！」

証文叩きつけるジェイル。

結果

「お前の負け」

「ぬが!!」

甲児の場合

「マジンガーの右手のロケットパンチ！これが証文だ!!」

そう言って証文叩きつける甲児。

結果

「お前の負け」

「なぬ!!」

そう言ってロケットパンチを没収された甲児。

ノアの場合

「サエグサ家ユウの部屋！これが証文だ!!」

そう言って証文叩きつけるノア。

結果

「お前の負け」

「はっあ！！！・・・まだまだ！！サエグサ家ミツキの部屋！これが証文だ！！」

「お前の負け」

「はっあ！！」

佐津田刑事の場合

「情けない奴らだ・・・こうなったら俺が相手だ！！俺のパトカー！これが証文だ！」

そう言って証文を叩きつける佐津田刑事。

結果

「お前の負け」

「な！！」

『佐津田刑事！！』

そう言ってガードスターが差し押さえられた。

その後も各メンバーは自分と他人の財産を順調に賭けていき・・・

その結果冒頭に戻り

「・・・でみんなして家に来たの」

呆れる飛鳥。

飛鳥の家に転がり込んだ八神組&火鳥たち&なのは&フェイト&甲児&ノア。

その姿はさながらギャンブルの深みにはまり込み身を滅ぼしてしまった者の末路だった。

その為全員無事な飛鳥の家に転がり込んだのだった。

・・・凄まじく狭い

「くう！あそこでババを引かなければ！！」

短パンにシャツのなのは。バリアジャケットまで賭けて巻き上げられた結果。

「なのは・・・身包みまで賭けるなんてどんだけのめりこんだのよ・・・」

「フェイトちゃんだって学校の職員室まで賭けたくせに」

「それは言わないで！！」

黙ってしまおうフェイト。

「うわ〜ユウはともかくミツキに合わす顔がねえ」

サエグサ家の全てを担保にしてしまった為帰るわけには行かなくなつたノア。帰ったらミツキからと〜〜〜〜つてもキツイお仕置きが待っているからであつた。

「くっそ・・・早くロケットパンチを取替えさねえとさやかさんに叱られちゃうぜ。あれ高いんだぞ」

甲児もさやかから来るであろう報復を恐れていた。

見かねた飛鳥が・・・

「んじゃあたしと勝負してみる？」

トランプで飛鳥とババ抜きを始める力、はやて、スバル、火鳥、佐津田刑事、甲児、ノア。

結果

「・・・あたしの勝ち」

「「「ぬが！！」」」

一番先に上がった飛鳥。日頃からギャンブルに強いせいか真っ先に上がったと思うメンバー。

2回戦

「あたしの勝ち」

「ええええ！」

またしても飛鳥が一番に上がった。他のメンバーは針にも糸にもならなかった。

飛鳥の強運を賞賛するメンバーだが飛鳥は呆れた顔をしていた。

「とうよりも・・・力さんとはやてさんブルースに怨まれるほど何やったの？」

ハルカの質問に回想に入る力とはやて。

13年前

「力君！お祭りやで〜」

「お〜出店だ〜」

そう言っつて祭りを見学している力とはやてそこに・・・

「お？ギャンブルで一本あれ！俺の欲しいゲームだ！」

「よ〜しおじさん！一回！」

「あいよ」

1回300円でギャンブルババ抜きを始めるはやて。その店こそがギャンブル狂のブルースの店だった。

「お前の負け」

「はうあー!!」

負けてしまったのはやて。その日のお小遣い全部つぎ込んだ拳句浴衣まで担保にってしまった。

「うわああんうちお嫁に行けへん！力君敵とつて」

「よっしやー!!」

挑戦者力がブルースに挑むが・・・

「お前の負け」

「なぬううう!!もう一回!!」

「お前の負け!!」

「ぐうううう!!」

全財産つぎ込んだ拳句パンツ一丁になつてしまった力。

「さあ・・・身包み返して欲しかったら担保は・・・」

「こつなつたら！八神家自宅だ!!これが証文!!」

そう言つてブルースと勝負する力だが・・・



「お前の負け……もらっていくぞ」

「ああ……」

絶望に立たされる力。

回想終了

「で？どうしたの？」

ハルカの質問に力とはやては……

「そのまま負けて帰るのもシャクやったし」

「簀巻きにしてドラム缶に入れてコンクリートで埋めてはやての使い古した車椅子を重石にして海鳴湾に叩き込んだ」

再び回想

「こっしてやるー!!」

「おとといきやがれー!!」

「あああれええええ」

力とはやてに蹴り落とされ海鳴湾に沈んでいくブルース。

それを聞いたハルカたちは・・・

「そんな事したら怨まれるの当然でしょ!!」

「ところがよ・・・あの野郎イカサマやってやがったんだ!!」

「なに!？」

イカサマという言葉に仰天する一同。

「・・・今思い出したぜ・・・あの野郎の落としていったトランプ拾ったら全部ババだったんだ・・・最後の二枚の状況になったら必然的にババを引かせる手段とってやがったんだ」

「なんでもっと早く思い出さないのよ」

「しょうがねえだろ・・・13年前の事なんだから・・・とにかくイカサマを見切れれば」

「問題はそれだけじゃない」

力の言葉を遮る飛鳥。

「なんで・・・まずお前らはトランプを引きババだった場合それを引こうとすると何故か子供のようには喜ぶ・・・そしてそれを外すとこの世の終わりみたいな絶望の表情になる」

力、はやて、スバル、火鳥、佐津田刑事、甲兎、ノアがまさにその

ドツボにはまった。

「さらに・・・ババを引きやすいようにちよつと出すと必ずババを引く」

「今時そんな手に引つ掛るやつが」

「現にあんたら引つ掛かつてたたる・・・」

飛鳥にさつきから同様の手で敗北していた事に気づいていないプレイヤーと傍観者達。

「どういふ事ですかこれ？」

「根が素直・・・悪く言えば単純だから・・・」

「それって」

「こいつら根っからギャンブルに向いてないんだよ」

呆れた顔になり飛鳥が考えた手段は・・・

「ミツキです」

「さやかです」

「私もですか？」

「何で俺まで」

「俺もだ」

ティアナに万年しかめっ面の北斗と大地など比較的表情の読まれな  
い人間を呼び寄せた飛鳥それに自分も加え賭博場と化している八神  
家に殴りこんだ。

「ほほ、今度は強そうな奴だな」

「……まあね……一気に勝負に持ち込む！」

「」「」「勝負」「」

勝負を始める飛鳥たち。

尚こうしている際もドライアスの襲撃があるのだが借金の片に天野  
平和科学研究所とダグベースが取られているため出撃できない。

『ははは！泣け喚け！！』

ゾルが町でロボットに乗って暴れていると……

『待て！』

『誰だ！？』

『ゴルゴオオン！！』

ドランの召喚と共に大地から黄金竜ゴルゴンが召喚されると人型に  
変形した。

『つおあ!?!』

ドラゴンが宝石のような姿になりゴルゴンの胸に納まると口から頭部が現れた。

『黄金合体!ゴルドラァン!?!』

ゾルの前に降り立つゴルドラン。

『ち!ファイバードとダグオン以外にこんな奴らがいたとは』

ゴルドランに向かっていくゾル。

一方

『泣け叫べ!?!』

シユラがロボットに乗り叫んでいると・・・

『待て!?!』

『誰だ!?!』

『銀の翼に望みを乗せて!灯せ平和の青信号!勇者特急マイトガイ  
ン!定刻通りに・・・ただ今到着!?!』

シユラの前に降り立つマイトガイ。

更に

『泣け！叫べ！』

悪人はみんな泣け叫べというのが悪党の定番なのかジャンゴがロボ  
ットに乗って暴れていると・・・

「セイバアアアチェンジ！！」

シズマのプレスが・・・長いので以下省略

『セイバアアア・・・ヴァリ！オン！』

楓が手を回し友達の勇者を呼んで一応の決着を見たのだった。

尚力達は何やってるかというと・・・

「ギュギュ」

顔に洗濯ばさみを張り付けながら頑張ってる力。表情の変化を変え  
るためだった。

一方

「上がり！私の部屋とった」

「上がり！ロケットパンチ返してね！」

「上がり！佐津田刑事のパトカー返して！」

「上がりだ・・・ダグベースの台所返してもらっぞ」

「上がり・・・姉貴のメカルーム返してもらっぞ」

次々と上がっていく表情読まれないメンバー。残り2枚になったブルースのカードを引く飛鳥だが・・・

「あたしが引くのはあなたの腰の右ポケットのカード・・・」

そう言っただけで飛鳥が引いたのはブルースが隠し持っていたカードだった。

「くそ・・・こいつら強い」

「ていうか・・・こいつも力達と同じとは・・・」

呆れる飛鳥。普通にやっていたら勝てるのに負けてしまうのは力達がいかに弱いからであろう。

「上がり！ユウの部屋取った」

「上がり！スバルの消防車返してもらっわよ！」

ミツキ、ティアナと次々に上がっていくと・・・

3時間後

「ふう〜家は取り返した〜」

「そうね〜甲児君にもお灸すえないとね〜」

ミツキ、さやかに巻き上げられた機動六課、天野平和科学研究所、マジンガー、サエグサ家とダグベース。

残るは八神家のみ・・・

そしてノアが・・・

「ようっし！あたいに任せろ！！サエグサ家ユウの部屋「ノア」  
ビクー！！」

メガネ光らせて黒化しながらノアの背後に現れるミツキ。

「いい加減にきなさいよ〜」

「いてえ！！ギブギブ！！」

ミツキにアイアンクロー食らうノア。

その時

「ちよつとまった！！」

八神家のドアを蹴破って現れた力とはやて。

「ほほ〜・・・よく来たな」



「ブルース……てめえに対する落とし前はつけさせてもらっぜ」  
高々と宣言する力。

この時飛鳥は思った。

（ダメだ……今の力が戦ったんじゃ負ける……このブルースが  
どんな馬鹿でも）

付き合い長いせいだそう思って対戦台に座ろうとする飛鳥だが。

「何ですと……」

既に対戦体制に入った力とブルース。ブルースは飛鳥と戦うことよ  
り力と戦ったほうが勝算があると思ったのだった。

だが話は先に進み

「で？担保は？」

「これや！……」

バンと証文叩きつけるはやて。

「なんだこれ？」

「土地の権利書や……ウチが結婚したら新居建てようと思って日々  
コツコツ貯金して貯めたお金で買った土地や！……これが担保で証文  
や！……」

「・・・てお前はいつの間になんな物を買った？」

呆れる飛鳥。そして勝負は始まった。

「あ！」

初手で早々ババを引いた力。

そして

「うぎゃー！ー！」

力の引きやすくしたババを引いてしまっブルース。

5時間後

「ぜえ・・・ぜえ・・・」

「はあ・・・はあ・・・」

5時間経ってまだ一枚もペアを作らずババだけを引き合っ力とブルース。

「・・・それにしても器用よね。見事にババばかり引き合って・・・」

力達をほったらかしにし夕食食べ始めるシャマルたち。

「二人ともおんなじくらい馬鹿ってことじゃない？」

そう言つて頷くミツキ。その横で・・・

「ミツキ〜飯〜」

「却下」

「飯〜」

ノアを飯抜きで刑でとりあえず許す事にしたミツキだが嫌味っらしく豪華な食事を披露するミツキ。

「飯〜」

「ステイよ」

「ミツキさんそれ犬のしつけ」

等とノアの拷問を黙ってみてるしかないさやか。

「ん？」

ある事に気づいた力。

（このカードだけ擦り切れてる・・・そうか・・・ババだけを引き抜きすぎてこのカードだけが傷ついたんだ！！）

そう気づきババ以外を引いた力だが・・・

「え!？」

何故か力の手札に入っていたババ。

「なんで？」

「あれじゃない？力が手札を引くのを見計らって自分のババを捻じ込んだんでしょ」

「きたねえ……」

等とブルースを睨む八神組だが……

「まちねえ……勝負はまだまだこれからだ!!おりゃ!ありゃ!」

「おりゃ!？」

本質が変わらないのかまたしてもババのみを引きまくる力とブルース。

8時間後

「くそ……」

「おのれ……」

もう既に日は変わり二人の披露はピークに達していた。だが手札は

力が一枚、ブルースが二枚。

「よおつし・・・南力ここは一発勝負でどうだ!？」

「ん？」

トランプをテーブルに伏せるブルース。一発勝負に受けて立つべく力はトランプを引いた。

「ニヤリ」

ブルースが笑ったという事は力が引いたのはジョーカー。

(ふふふ・・・こんな事もあるのかと二枚ともジョーカーに摩り替えていたのだ)

だが

「・・・甘いぜ」

力の手札をめくると

「ババ!?!？」

「なんで？」

力の手札にあったのはババ。揃わないトランプの柄が揃ったという事は上がりだ。

「な!何故だ!？」

「ふふふ・・・この苦節13時間の戦い・・・それにより俺もてめえも集中力が途切れ始める時間・・・そしてババを俺の手札に捻じ込みすぎた・・・結果テメエは自分でどれだけババを入れたか忘れてしまいこのゲームはいつの間にかジジ抜きになったのだ!!」

「ガーン!!」

そう言っつてブルースを見事撃墜した力。

何とか財産を全部取り返した力だが・・・

「うゝんうゝん!!」

集中力の使い過ぎでダウンした力。

「ギャンブルなんて大っ嫌いだあああああああああああああああ  
あ!!」

そう絶叫してダウンする力だった。

## 第二十二話 ギャンブル狂のブルース（後書き）

そついやゝ夏真っ盛りだなゝここは景気良くぱゝとどこかいくか  
！俺だけで！ん？待てよそろそろ二十話たつたな・・・ん？この殺  
気この気配！まさか！

次回！勇者指令ダグオンA's どっこい 南力抹殺大作戦5

もう勘弁してよゝ

## 第二十三話 南力抹殺大作戦 5

ある日の管理局

「ふん!!ふん!!」

「シュツシュツ!!!」

何故か己に気合を入れまくっているのはとフェイトその理由は・

「あの悪魔今度という今度は殺してやる(の)!!」

第二十三話 南力抹殺大作戦 5

「またこの季節か」

「・・・だな」

とある管理局員AとBがなにやらため息をついていた。

そう管理局の負の行事南力抹殺大作戦が開始されようとしていたからだ・・・



なお巻き込まれた管理局員は数知れず全員同罪として、なのはとフエイトが破壊しまくった公共施設を弁償したりして侘しい給料を余儀なくされた。

そして終に局員達は力抹殺作戦が起きたら撤退するという安全策をとるようになったのだ。

「ていうか・・・高町教官やハラオウン執務官なんて毎回負けるのに襲撃するんだ？」

「それはね〜」

局員Aの質問に何処からともなく現れたシャマル先生が答えた。

「毎回毎回なのはちゃん達って力君とバトルする前に第三者に割って入れちゃって有耶無耶になるでしょ・・・」

「はぁ・・・今までのパターンじゃそつすね・・・」

「なのはちゃんとフエイトちゃんからすれば白黒はつきりつけたいのよ・・・たとえばどんな方法であつてもね」

（（迷惑な話だ））

局員AとBは心底そう思った。尚力は管理局員から怨まれるような人間の為、誰も同情しないがとにかく巻き込まれるのは勘弁していただきたいそう思うのだった。

「要するに力君がガチンコでバトルしてあげれば諦めがつくのよ〜」

同員AとBはとつと力に白黒つけて欲しいのだった。

その頃のなのはとフェイト

「後は口実なの・・・」

「だね・・・あのクソ悪魔とつとなんかやらかせ・・・」

そう言つて自分の相棒デバイスをもつてはやての元に向かうのはとフェイト。

その理由ははやてが一番近い人物であるからだ・・・

「くう・・・力君の奴」

御誂え向きに力に対して不機嫌なはやてを見つけたのはとフェイトは満面の笑みではやてに駆け寄つた。

「はやてちゃんどうしたの？」

「あの悪魔がどうかした？」

もはや口実を求めてはやてに駆け寄るのはとフェイト。

「ん？なのはちゃんフェイトちゃん・・・ぐぐぐ・・・力君の奴・・・うっ・・・あああ！！」

赤面しながらどうやらとても人に言えないようなことを怒っているはやて。

それを見たなのはとフェイトは……

（あの悪魔を殺しにいく口実が出来た）

くどい様だが力を殺しにいく口実は何でもいい……

海鳴

「たく……はやての奴あんな事で怒りやがって……まあ俺も悪  
かったけどさ……」

珍しく反省しながら学校帰りの力

すると

天啓が

「!」

いつの間にか両手を後ろに回され手錠をはめられてしまった力。

「誰だ!？」

「あたいだ!！」

「い!！」

何故か背後から現れたノア。ミツキ特性の高密度ステルス素材を被っていたようだ。

そして

「はうあ!！」

上空からアクセルシューターが雨の如く降り注がれた。

「あおう!！」

両腕を拘束されている力は爆撃され吹き飛ばされる力。

「ぐは!ぶへ!！」

倒れこんだ力はそのままなのはに顔面を踏みつけられた。

「・・・またおめえかよ砲台女」

「何とでも言いやがれなの・・・この悪魔!今度という今度は心底呆れたの?」

「なに?」

「あんだ嫌がるはやてちゃんを・・・」

「なんだよ!?!」

「襲ったの!?!」

「なぬ!?!?!」

凄まじく根も葉もない事を押し付けられる力。そして力の頭を踏みつけながらなのは力にレイジングハートを突きつけた。

「世の為人の為死にやがれなの!?!」

迷うことなくレイジングハートのトリガーを引くのはに・・・

ピンポーン

非殺傷設定と対物設定は解除済みです

「そう簡単に殺されてたまるか!」

自由に動ける足で発射寸前のレイジングハートを蹴り飛ばし弾道を逸らす力。

「腕が使えないなら受け止められない!?!覚悟おおおお!?!」

両手を手錠で拘束されている力は仰向けになりフェイトのバルディッシュを・・・

「真剣白刃取り!?!」

足で真剣白刃取りをして間一髪防御した。

「チツ！！手じゃなく足で・・・」

「だからお前チツて言っただろ！」

「問答無用！！」

そのままライオットを発動させ力に斬りかかるフェイト。

そして

「楓何処だー！！」

「ああうー！！」

ノアのナツクルでぶっ飛ばされる力。

結果

「逃げる！地の果てまでも！！」

「「「待てええええええええええ！！！！」」」

お決まりのパターンで逃げまくる力と追いかける3人。

そして

「ああ、嫌な予感が……」

相変わらず巻き込まれる運命の下にある飛鳥も何かを感じ取ると・

・

ドーン！！

「ひでぶ……」

いきなり砲撃された飛鳥。焦げてます。

「げっほげっほ……何なのよ」

「おお！飛鳥！いい所に！」

「またお前かよ……」

とりあえず飛鳥と一緒になのはとフェイトとノアから逃げまくる力と飛鳥。

「……お前どうした？何やらかした？」

「# \$ & # % \$ % ' ( & ) % % & \$ % ' # % \$ # ' % \$ ' %」

「ん？『俺がはやてと出逢った日 周年記念を忘れたからはやてが

怒ってあの砲台と死神にチクった』？お前ねえどうしてそういう肝心なこと忘れんだよ・・・これだから男って奴は」

「#\$%&'（）「）'&#\$%&'（）'&#\$%#!?!」

「『とりあえずノアの奴は楓呼んで誤魔化しておくか』・・・そうだな」

何でこれで会話が成立するのか不明だがとにかくいつもの手を使う事にした。

「『すうゝあ！こんな所に落ちていた饅頭が「え！？どこ！？」確保！！」「」

「ふぎゅー！！」

相変わらず食い物に釣られて未来移動してきた楓。

「おいノア受け取れ！！」

「あゝれゝ！！」

ノアの下に投げ飛ばされる楓。

「楓ゝここであつたが百年目・・・お前のせいでミツキに怒られまくったんだぞ！！」

「それはノアちゃんが悪いんじゃない」「問答無用！！」

ノアから攻撃される楓は逃げまくるのだった。



一方

「スターライトブレイカー!!」

「うぎゃああああああああ!!」

なのはのスターライトブレイカーを間髪で避ける力。しかも手錠を装着されている為自由に動けない。

「くそ!いつもならこんなもん簡単にぶっ壊せるのに!!」

「ふ!佐津田刑事からの伝説であんたは手錠破壊の常習犯・・・これは兜甲児を買収して作った特性超合金Z性よ!!」

「甲児さああああん!!」

とりあえず泣きまくる力。そしてその力を銃撃しまくるのは。

「くそあの女腕上げたな・・・うわおおおおお!!」

逃げまくってる力。

「待ちやがれなの!!」

どうしても殺したいのか力に向かってデイベインバスターを連発するなのは。

「は--」

「はあああああ！！！！」

飛鳥の足とフェイトのバルディッシュが交差する。

「ハラオウン執務官腕上げましたね・・・」

「たりまえよ！！あんた達を殺すために毎日鍛えてるんだから！！」

口々に恐ろしい事を呟きながら飛鳥にバルディッシュを振り回すフェイト。

なのはとフェイトは日々力を殺す為に特訓に継ぐ特訓を重ねていた為並みの犯罪者くらいなら瞬殺できるようになった。

尚なのはの特訓の犠牲になっているのは愛しの某偉大なる無限書庫の司書長だった。

そして

「あべし〜！！！」

「逃げるな楓！！！」

「ノアちゃんいい加減諦めて！！！」

「諦められるか！！北斗！！千手懷拳！！！」

「ひでぶー！！！！！」

力達に毒されてしまったのか北斗 拳を披露するノア。楓がひでぶ  
になりそうになるがとりあえずぶっ飛ばされただけで済んだ。

そして

「うぎゃー!!」

「ぐあー!!」

「ふぎゅー!!」

一箇所に追い詰められる力、飛鳥、楓。ここは迎え撃つしかないと  
感じた力達はダグコマンドーを起動させようとするが・・・

ここでお決まりのパターンが・・・

ガシ

突如背後からなのはの肩を掴む手が佐津田刑事だと思ったのはだ  
が・・・

「なののは」

「ゆー！ユーノ君!!」

ユーノだった。しかも笑顔で頭に筋浮かべていた。

「ゆー！ユーノ君どうして・・・」

「なのは・・・いくら僕でもね・・・怒るときは怒るんだよ〜まあ僕怒ってないけどね〜」

（・・・怒ってるの）

普段怒らない人が怒ると怖いのが凄まじい恐怖を感じるなのは。

「それじゃ行こうか」

「・・・はい」

逆らったら怖そうなおーラを感じながらなのはユーノに連行されるのだった。

そして

ヒュン！！

「は！！！」

フェイトの顔面を日本刀が掠めた。

「フェイト〜〜〜〜！！！」

「広瀬海！！！」

「貴様何をしたかわかっているのか！！！！？」



「ミツキさんいいんですか？」

「うん。『私は』今日は何もしないから『私は』ね」

「なんか嫌な予感が」

そう思う力と楓。

そして

「力君どういう事や〜？」

「・・・はやて」

万歳する力。早い話はお手上げ

「ウチとの記念日忘れてどういっことじゃ」

リミットブレイク発動

「これがお仕置き八神スペシャル・・・ラグナロク・ザ・レインボ  
ー！！フルコースじゃあああああああ！！」

「ぎゃあああああああああああ！！」

モザイクがかかるまでぶっ飛ばされまくる力。

そして

「すみません！すみません！ウチの馬鹿たれが何やったか知りませんけどとにかく私が謝っておきます！！すみません！すみません！」  
久しぶりに土下座しまくるはやてだった。

一方

「ぐどぐどぐど」

ユーノに優しくお話を食らっているのは。

「ガミガミガミガミ！！」

海に滅茶苦茶怒られまくっているフェイト。

両者のお話と説教は果てることなく翌朝の8時まで続いた。

そして

「おやつおやつ」

そう言ってルンルン気分部屋に入るノアだが・・・

「ジー・・・」

「ビクリ！！」

部屋に居た人物を見て撤退を試みるが・・・

ガチャガチャ

「ドアがあかねえ!!」

部屋のドアがロックされてしまった。そして部屋に居る人物とは・

「うえゝ来るなゝ来るなゝ畢」

力の魂のブラザー南光太郎の娘・畢・ナカジマ。実は一回ノアを口に入れてから味を占めてしまいノアを食べようと目論んでいるのだ。

尚ここに来た理由はミツキにキャラメル3個で買収されたのだった。

「ジー……」

口から凄まじい量の唾液を分泌させながらノアを見つめる畢。その視線は獲物を狙うハンターの目だった。

「ぐるるるる……ふかー!!」

唸りを上げノアに飛び掛る畢。

「うぎゃあああああ!!」

必死に畢から逃げまくるノア。

「ミツキーあたいが悪かったからだぢでゝゝ!!!!」  
「ふかー」



「!」「ぎゃあああああああ……」

「……しばらく反省しなさい」

そう言つてノアの部屋に外から南京錠を50個くらい装着したミツキだった。

余談だがノアがげっそりして出てきたのは言つまでもない。

第二十三話 南力抹殺大作戦5（後書き）

拙者浪人・南力之介！今回もまた時代劇のノリになりました！岡っ引きの飛鳥乃進、用心棒の北斗、どこかの国の若様で遊び人の西紋ノ上、からくり人形師の楓、蕎麦屋さんの光太郎。今日も愉快なお江戸の町で楽しくやります！

次回！勇者指令ダグオンA's どっこい お江戸だよ全員集合2

力之介

「ゲストの方の職業は何になる？」

飛鳥乃進

「いや・・・ゲスト出していいのか？」

## 第二十四話 お江戸だよ全員集合2

時は江戸時代の海鳴町。今日も陽気に生きているお馬鹿達の話の始まり始まり。

### 第二十四話 お江戸だよ全員集合2

ある日のお江戸

「毎度！どうです出来は！？」

飾り職人飛鳥の作ったかんざしをマジマジと見る飛鳥乃進。

「おう！てえしたもんだな・・・おめえさん腕上げたな」

「へへ！まだまだっすよ！」

「んじゃこれ勘定だ」

代金を置いて飛鳥からかんざしを受け取る飛鳥乃進。

岡っ引き・東飛鳥乃進の長屋

「おう！ティアッパチ」

「あ！親分！」

「ちよつと顔かしてくんな」

「はい？」

飛鳥乃進に顔を差し出すティアップパチするとティアップパチの髪にかんざしを差し込んだ。

「え？これって」

「おう！この間の大捕り物でな。佐津田様から特別褒美をもらつてな。最近若い飾り職人が腕を上げな〜そいつんとこで作らせたんよ」

町の同心佐津田の大捕り物に参加している飛鳥乃進。

「良かったんですか？」

「たまにはお洒落しても良いんでねえか？」

「・・・はあ」

その時

「親分てえへんだ！！」

飛鳥乃進の部屋に住民が舞い込んできた。

「・・・またか」

とりあえず仲裁をするべく出勤する飛鳥乃進。

飛鳥乃進が駆けつけると・・・

「うわあああああ！！」

「このドアホおおおおお！！！」

長屋にて自称女房はやてに大太刀を振り下ろされる貧乏浪人・南力之介。

理由はツケ等で金銭的にも困りはやての鼓を売ってしまったのだった。

尚その鼓はかつて將軍家だったはやての買った上等の品である。

「・・・なんでウチの鼓売ったんや？」

「いやね！そろそろ光太郎の兄いの所にツケも溜まってるし払わないと兄いの店潰れちゃうし」

「・・・だからって女房の鼓売ってええんか？ああ？」

「俺がいつお前と所帯持った！！？」

「問答無用じゃ！！！」

はやてが大太刀を構えると光だした。

尚魔力ではなく邪神モードのオーラをむき出していたためであった。

「奥義！天地爆裂！！我意龍風月斬！！」

「技の名前が長すぎるんだよ！！」

咄嗟に避けると床が真つ二つに斬られた。しかも鏡のように綺麗な切り口で・・・

「お助け！！」

「またんかい！！」

こうして大太刀振り回されながら長屋中追っ駆け回される力之介だった。

止めようが無いと感じた飛鳥乃進はスルーを決め込んだ。

商店街

鼓を買い戻すべく商売を始めた力之介の元に5両と書かれた札が立っていた。それをジーツと見る飛鳥乃進と友人の侍火鳥勇太郎。

「何やってんだお前？5両で何売るんだ？」

「俺を売るんだ！！」

「え？5両で身売りするんですか？」

流石の火鳥も？マークでいっばいだった。

「誰もお前なんか買わないって」

「それはねカランコロン！！・・・え？」

何故か1両投げつけられた。

「お助けー！！」

「「「は？」「」」

いきなり振ってきた1両小判に驚く力之介と飛鳥乃進の目の前に追われている浪人が・・・

「ななな！何だよお前！？」

「お助けー！！」

力之介の影に隠れる浪人。それを追いかけてくる若侍の姿が・・・

「待てい！兄の仇！！」

その言葉に

「お前仇持ちか！？」

「滅相も無い！！」

そう言う浪人に襲い掛かる若侍の攻撃を受け止める力之介。

「ちよいまち！！えええ！！！！」

巻き込まれた飛鳥乃進。

「うわ！！」

それは見物していた火鳥にも降りかかった。

「！！！！」

咄嗟にそこら辺にあつた竹棒やら構え勇太郎は侍の刀を受け止めた。

「何奴！？」

「桃太郎・・・鬼退治です！！」

そう言つて若侍を抑える火鳥。

それをチャンスだと思つた力之介は飛鳥乃進を連れてどこかに撤退するのだつた。

蕎麦屋 『南黒』

「へいお待ち」



「ありがとう〜」

光太郎の蕎麦をすすめる力之介と飛鳥乃進。先ほどの浪人も一緒だ。

「はいお茶どうぞ〜」

「どうも〜・・・て！畢！俺の天ぷら食べるな！！」

お茶を持ってくる光太郎の女房スバルと力之介の蕎麦の天ぷらを食べる娘・畢。

「もう！畢！金平糖あげるから遊んでらっしゃい」

「・・・うん」

「スバル・・・それ俺がいつも藩主に食らってる奴じゃないよな」

「・・・大丈夫本物だから。はい」

「・・・うん」

畢に金平糖の袋を渡すスバル。畢は近所の子と遊びに行った。

「奥方お若いですね〜」

「いや〜それほどでも〜」

浪人の言葉に照れるスバル。

「お二人はどうやって知り合っただんですか？」

「あれは僕が若い頃だったな」

光太郎の回想が始まった。

夜道の屋台蕎麦『南黒』

「ふう〜そろそろお客さんも遠のいたし早仕舞いするかな。最近この当たりじゃ辻斬りが出るって命あつての物種っていうしね」……蕎麦屋「ん？」

光太郎の背後から刀を突きつける女性剣士スバル。

「え！あ！なに！？辻斬り！？お金？」

「……蕎麦を茹でろ」

「は？」

「いいから茹でろ」

なんのこつちやと思いとりあえず要求どおり蕎麦茹でる光太郎。  
すると

「……天ぷら」

「へ？」

「天ぷら!!」

スバルの要求どおり天ぷら入れる光太郎。

更に

「薬味」

「……………」

もうリアクションに困り果て普通に薬味入れてスバルに蕎麦を渡すと……

「…………声を出すな」

そう言ってささくさと去っていく辻斬りスバル。それを見ていた光太郎は……

「…………え? ……辻斬りが蕎麦一杯? ……ケチだな「蕎麦屋」?」

背中から刀を突きつけられる光太郎。

「ん?なに?」

「手を出せ」

「はい」

呆れながら手を出す光太郎

すると

「・・・勘定だ」

そう言つて勘定渡してそそくさ去つていく辻斬りのスバルに光太郎はハリセンを持ち出し・・・

「・・・心臓に悪いよ」

「んぎゃー!!」

スバルの頭をひっぱたいた。

「で、これがその時の竹光・・・暗くてよく見えなかった」

そう言つてスバルの持つた竹光見せる光太郎。もう完全に笑い話と化している出会いだつた。

「ていうか何で光太郎の兄い辻斬りと結婚したの？」

「だって・・・見てられなかつたんだもん」

実は代金が足りずに蕎麦を注文したスバル。

その後肉体労働で屋台を引つ張らせていたのだが、あまりにも危なかつたので光太郎が引き取つたらしい。

「で？話を戻すけど・・・」

「お侍さん何で追われてるの？」

力之介と飛鳥乃進の問いに侍は答えた。

「はぁ・・・拙者こう見えて幕府に仕えていた武士であります」

「何で幕府の武士が仇持ちに？」

「拙者武士といいますが物書きでして・・・そこで帳簿のことを調べ書きに書いたところを確認していただきたく上司の者に申し出たところ・・・その上司が何者かに毒殺されていたんです・・・時悪く他の武士達が私を見つけてしまい・・・逃げました」

「ダメだよ・・・そんなところで逃げちゃ・・・んで？変わったこと無かった？」

飛鳥乃進の言葉に武士は考えると・・・

「そういえば・・・暗殺の数日前に・・・南蛮からの使者が来たことしか・・・」

「特に変わったことなんか無いわ・・・南蛮からの使者が怪しいが・・・調べ直すしかないか・・・」

「けどどうする？面倒なことになりそうだし・・・こんなことに協力してくれる奴って・・・」

「「あ！」」

何かを思いついた力之介と飛鳥乃進はある武家屋敷に向かった。

サエグサ家武家屋敷

「・・・断る」

サエグサ家当主・ユウに調べなおしを申し出る力之介と飛鳥乃進だ  
があっさり申し出を蹴られた。

「もう調べは済んでるだろ？今更何やったって何もでねえって」

「お前・・・無実の人間がつみ問われるかもしれんのだぞ!？」

「けどな・・・お上が「本心は？」面倒くさい」

その言葉に・・・

「ユウ！調べてあげなさいよ!」

ユウの奥方・アルトの方が亭主に申し出をした。

「嫌だよ・・・面倒くさい・・・」

「ユウ!」

「は!」

何処から持ち出したのかアルトに薙刀突きつけられるユウは咄嗟に

刀で受け止めた。

「アルトさん・・・そんな物何処で覚えてきたの？」

「・・・」

一枚の瓦版を出すアルト。そこにはこう書かれていた。

武術のことなら八神流！！来たれ武士を指す者！！道場なら八神道場！！

記者ミツキ

「ここでみっちり鍛えてきたの！！」

「俺の小遣い減ったのはそれか！！」

アルトの薙刀の一閃を避けるユウ。

その光景を見ていた力之介は・・・

「再調査の許可出してくれたら助けてやるけど」

「お前賢い動物になつたな・・・」

そう言って無理矢理再調査の許可をもらう力之介と飛鳥乃進だった。

「後は・・・侍さん匿う場所だあな」

「迷惑かけれんのは・・・」

火消し・め組

「何で俺達んとこ来るんだよ？」

め組頭・大悟に文句を言われる力之介。

「だってよ〜こついう時に迷惑かけられんのおめえだけだし〜」

「とか何とか言ってるこの侍俺達に押し付けようって腹だろ……」

「あれ？ばれた？」

「まあいいや……置いてけ」

しびしび引き受ける大悟に浪人は一礼しめ組で世話になるのだが・

「うおおおおお！！頭！！高町城が家事ですぜ！！」

「ガイ……おめえが行くと火の回りが速くなるから大人しくしと  
けよ」

「わかりやした！！」

大悟にそう言われて奥にはいるガイ。

因みに高町城の殿・高町なのはは力之介にと――――



「……………つても恨みがあるらしく力之介に懸賞金をかけていた。」

尚懸賞金は奥方のユーノの方が払わないと宣言はしている。

「あゝあ……あのまま高町城潰れば良いのに」

「それは思っても言っちゃダメ」

飛鳥乃進に止められる力之介だった。

商店街

「ささ！よつてらっしやい見てらっしやい！！最近巷を騒がせている天下の大泥棒！ハラオウン小僧の号外だよ！今度の獲物はサエグサ城のノアの耳かきときたもんだ！！」

「おう！ミツキさん」

「あ！飛鳥乃進の親分」

瓦版配っているミツキに何やら50文渡した。

「……最近南蛮人が悪いことしてらって情報無い？」

情報を求める飛鳥乃進。ミツキは瓦版を書いているほか裏の世界の情報屋としてその名が知られていた。

「いっぱいあるけど飛鳥乃進さんの欲しい情報は50文じゃ安す

ぎるわ〜」

「ほお〜あたしの欲しい情報を握ってるって事だあねえ〜欲を出す  
と後悔するぞ〜」

「だ！か！ら！50文じゃ安すぎるっての！！」

「そっかそれじゃあ最後の手段・・・ユン先生！！」

「はっ！！」

飛鳥乃進の背後から現れるサエグサ城の医師ユン。

「ミツキさん見つけましたよ」

「い！これは！！」

「ほほ〜ミツキ〜政事もやらずにこんなところで油売ってるとは良  
い度胸だねえ」

「ユン先生これには！！」

「まあいい・・・天下の為にこいつの欲しい情報をとっと渡せば  
命の保障はしてやるよ」

「う！飛鳥乃進さん・・・ずる賢い性格になったわね」

「ええ！何とでも言え！これも世の為人の為」

苦笑いしながらユンに連行されるミツキ。

一方力之介は・・・

からくり屋・光子力

「よう！毎度〜」

からくり師の兜甲児に証拠品の分析をしてもらおう力之介。

「甲児さん！ウチの楓がお世話になってます〜」

「いやいや〜こつちもよく働いてもらって〜」

からくり師として生計を立てている楓を雇ってくれてる甲児。その目的は・・・

「さっそくだけどさ。こいつを調べてくんない？」

力之介が持ち出したのは侍から預かった手掛かりの手形だった。

「おまかせ〜楓！〜」

「はいはい！〜」

パソコンで分析する楓。何故時代劇にパソコンと科学捜査があるのかはスルーしていただきたい。

敢えて言うなら楓が作ったのだ。

「……ふむふむふむ……この手形外交官特権の為の特別な品みたいですね」

「てことは……」

「間違えなく南蛮人がビンゴだな」

甲児がそう推理し腕を鳴らした。

「どうする？踏み込むか？」

「いや……甲児さんは止めたほうが良いって」

「なんでだよ!？」

出陣しようとする甲児を止める力之介。すると力之介はある一点を指差した。

そこには甲児の女房・さやかがジーツと甲児を睨んでいた。

「……甲児君……まさかとは言わないけど……仕事ほっぽり出して参加する気じゃないわよね」

「いや!さやかさん!」

「仕事しなさい!」

「……はい」

さやかの怒声に黙ってしまう甲児。

そして力之介はメンバーを集めた。

茶屋

「どうも」

西洋のぬいぐるみを売っている蓮をよそに茶屋でお馴染みの面子を集める力之介。

「・・・おい・・・なんで毎度俺達がテメエにつき合わされなきゃいけないんだ」

しかめっ面の用心棒・北斗。

「全くだぜ！この事女房に知られたら大変だぜ！！」

女房・ヴィータの方に尻に敷かれていた若様・西紋ノ上。

「私仕事なんですけど、これでまたお給料が」

からくり師・楓。

いつも通りの5馬鹿が揃った。

「だって・・・斬ったはったは俺達のキメだろっ」

力之介の身勝手に呆れる4馬鹿。

「それじゃあ……ここまでの情報を整理しようか」

「じゃあ俺から」

北斗が先に手を上げた。

「最近銃器で百連発砲とやらが開発された。一度に百発撃てるから  
つて……兵器マニアが手薬煉引いて待ってるって話だ」

その次にサイモンが……

「んじゃ俺な！隠密に調べさせたところ城の奴らが横流ししようとしてな……それに気づいた侍が殺されちまったって訳だ……」

最後に楓が……

「その南蛮人なんですけど……今日出航するみたいですよ」

「それ……はやく言え!!」

力之介にハリセンで倒される楓。

「……まあいいや……そのぼっちゃん！それもらっつよ」

「はい毎度」

蓮からぬいぐるみを買った西紋ノ上と北斗。

「お前そんな趣味が？」

「娘にやる」

そう言つて準備にかかる5馬鹿。

夜

港で準備をしていた南蛮人たちが積荷を積んでいると

「待て待て待てい!!」

船に押し込む飛鳥乃進と力之介。

「そいつが百連発砲か・・・返してもらつぞ!!」

十手とキセルを構える飛鳥乃進に向かって南蛮人は・・・

「ヘイ!このチンピラどもをタタキツブセ!!」

南蛮人の命令に銃を抜く兵士達だが・・・

「この野郎!日本の岡っ引きを舐めるんじゃあねえ!!」

咄嗟に腰から銭を構え投げ銭を披露する飛鳥乃進。

投げ銭は見事に南蛮人たちの銃に当たり叩き落とすと南蛮人たちは横流しされた百連発砲を持ち出した。

「ヒヤクのタマ……クラエ！」

ヒヤク連発砲が火を吹こうとしたその時一発の弾丸が百連発砲を破壊した。

「な！」

「教えてやるよ……必要なのは一発だ」

南蛮人の先に居たのは銃を構えた北斗の姿が

「く！ニゲ！！」

「おりゃあああああああ！！」

轟音と共に船のマストが引っこ抜かれた。

「これで逃げられんな！」

「貴様！西紋ノ上！！」

異国の藩主・西紋ノ上にが船のマストを持ち前の馬鹿力で破壊し追いつめる。

更に

「舵が！！」

突如動かなくなる舵。何やら粘着物質が巻かっていた。



「どうですか？からくり師・南楓発明の強力接着剤の味は？」

からくり人形と共に参上する楓。

5馬鹿が揃ってしまった。

「よっしゃ・・・おめえら年貢の納め時だ・・・一人残らずたたっ斬ってやる！！」

刀を抜く力之介。

「カカレ！！」

力之介たち5馬鹿に襲いかかる南蛮人たちに・・・

チャキ

楓が竹筒で作った巨大大筒を担ぎ上げ・・・

ドーン！！

凄まじい爆発を起こし撃破された南蛮人。それを見たボスは・・・

「・・・ハイ・・・ユーたちそういう戦いかたしてタノシイカ？」

「じめん・・・こいつ呼んだあたしらが悪かった」

普通ならここで剣劇が起こるのだが楓は持ち前の技術でバズーカを

持ち出したのだからかなりの空気を壊してしまった。

流石の力之介たちも良心が痛んだ。

「まあ良いや・・・覚悟!!」

「あおう!!」

とりあえず峰打ちで南蛮人氣絶させる力之介。

その後南蛮人はノルウェール黄門様のお裁きによって事件は解決した。

「おかげ様でありがとうございました」

御礼をする侍に力之介は5両を渡した。

「これは」

「旅には必要だろ・・・」

「感謝します!!」

そう言って力之介たち5馬鹿に礼を言って旅に出る侍。

これにて一件落着!!

とはいかなかった

「で、結局私の鼓はどうなったんや？」

思いつきり長屋の壁に張り付けにされる力之介。

5両は返してしまったため当初の問題は解決されていなかったのだ。

「いや・・・その・・・」

「なああんだ、精神的苦痛と肉体的苦痛とどっちがええ？」

「いや！どっちも」ああ！両方欲しいって？んじゃ遠慮なくほい！  
「！」

「ぎゃあああああああああああああああああああああああ！  
「！」

長屋に響き渡る力之介の悲鳴。尚このことによりかかり付けの町医者シャマル大先生が苦労したのは言うまでも無い・・・



第二十四話 お江戸だよ全員集合2（後書き）

サイモン

「ん？どうしたルーテシア」

ルーテシア

「サイちゃん・・・台風だね・・・」

サイモン

「そうだけど？」

ルーテシア

「家がオンボロだから移動させて可哀想だよ・・・」

サイモン

「なぬ！？ううゝあんなでつかい家を運ぶなんて・・・残念だが俺が強力だからといっても俺一人では無理だ・・・だが子供の夢を壊しちゃいけない！！だったら台風と決闘して倒しちゃう！！そうすれば家を動かさないで済む！！」

ダイ

『王子！何もつと無茶な事言ってるんですか！！！！』

サイモン

「ルーテシアはいつもお前の子供の面倒見てるだろうが・・・ここですらなきゃ男じゃねえ！やい！台風！降りてきて男らしく勝負しろ！！！！」

次回！勇者指令ダグオンA's どっこい サイモン対台風

サイモン

「どうした台風！怖気づいたか！！かかってきやがれ！！」

ダイ

『……王子……どうしてここまで馬鹿になってしまったんですか……やっぱり伝染するんですか！？八神組の馬鹿は！？……子ども達が真似してしまうではないですか！！』

## 第二十五話 サイモン対台風

第二十五話 サイモン対台風

時はファイバードStrikers時代

本日の南家

「台風だな」

「台風やな」

物凄い風の音が鳴り響いている今日この頃。本日台風のため家で大  
人しくしているのだった。

が

「あら!!!?!」

「・・・あ!!!」

急に雷が落ち停電してしまった。急いで力が配電盤を調べると・・・

「あゝこれ元がやられちゃったな」

「この辺りも停電しちゃったな」

配電盤ではお手上げの状態になり南家で懐中電灯を持ってロウソクなどを探して押入れの上の棚を調べようとする力。

「んじやはやて宜しく」

踏み台などが見当たらない為屈む力。はやてを肩車して取ってもらおうという魂胆だった。

「は？なんでウチが？」

「お前のほづが軽いだろっが」

「いやや・・・力君が上にならんかい！！」

はやての案で妥協すると・・・

「ぎゅぎゅぎゅ」

「・・・全然上がんねえぞ」

「ぎゅぎゅぎゅ・・・」

邪神モードではないので一億倍の力になっていないはやて。

結果

「やっぱりウチが上になるわ」



「始からそうしろよ・・・」

はやてを肩車する力だが・・・

「もっちょつと奥・・・おりゃあ!!」

その時はやての足が閉まり結果・・・

「あがががががががけきやえか!!」

足で力の首を思いっきり絞めるはやて。

結果

「ああ・・・」

「うわああ力君倒れんな!!あ!!」

倒れる力を完全に尻に敷くはやて。

「うう!重い・・・ぐあ!!」

思いっきりはやてに殴られる力。

「重いつて女の子に言う台詞ちゃうわ!!ん?・・・手」

「んあ?手?ハウア!!」

殴られた衝撃ではやての胸触っていたことに気づいた力。

「いや！そのこれは不可抗力で！！」

「・・・何そこまでうるたえとるんやあんだ」

「へ？」

リアクションがかなり薄いはやて。影の守護者メンバーにその手のネタで散々いじられたせいで免疫が出来てしまったはやてだった。

一方ルーテシアの家

「さむ！！」

台風の中窓を板で補強しているサイモン。

現在のサイモンはとある事情により八神組と合流することが出来ない為ルーテシアの家に転がり込んでいた。

理由は・・・

「去年親びんに借りた3万円耳そろえて返さなきゃなんないけどねえんだよ3万円」

というサイモン。

セブンチェンジャーの理由は……

『ここでサイモンが八神組と合流してお嬢の正体を知られるわけにはいかん』

という理由らしい。尚部屋を提供している弱みでサイモンに炊事洗濯と散々こき使っているのは言うまでも無い。

尚人間サイズであるダイの妻であるアリスやダイキッズ達もルーテシアの部屋に転がり込んでいた。

『ルー姉ちゃん遊んで遊んで』

「……良いよ」

尚、ダイキッズ達はルーテシアに物凄く懐いていた。

サイモンとルーテシアの出会いはこうだった。  
ヴィータから借りた3万円踏み倒すべく久しぶりに地球に来たサイモン。

「いや〜久々の地球だな〜ダイ」

『そうですね〜王子』

海鳴の町を歩いているサイモンとダイ。するとサイモンとダイの目の前に泣いている女の子が・・・

「ん？どうしたあの子？」

サイモンが女の子に声をかけようとする・・・

「・・・うーセブンチェンジャーと逸れちゃったよ・・・このままじゃ悪い人や悪いロボットに声かけられて誘拐されちゃう・・・誘拐・・・誘拐」

(・・・声かけづれええ!!！)

その後何だかんだで少女・ルーテシアに声をかけたサイモンとダイ一家は何だかんだで誤解したセブンチェンジャーとバトルし、何だかんだで和解し、何だかんだで一緒に暮らしていた。

『その何だかんだを説明しろ!!！』

「・・・セブンチェンジャー何言ってるの？」

『いや！セブンチェンジャー！それは天使殿が説明してくれる!!！』

『人に任せるな!!！自分で説明しろ!!！』

物凄く目をピカピカ光らせて叫ぶセブンチェンジャーと同様に目を光らせて止めるダイ。

「それにしても・・・台風ひでえな・・・」

「そつだね」

「こりゃあっちこっち補強しなきゃ・・・あっちこっちガタが着てる・・・古いなこ」

家を補強するサイモンすると・・・

「・・・ねえサイちゃん」

「なんだ？」

「セブンチェンジャーも御年寄りなの？」

ドンガラガツシャーン！！！！

ルーテシアの一発にずっこけるサイモン。するとその一発で放心してしまったセブンチェンジャー。

「いや！え！？どうなんだ!？」

「セブンチェンジャーもお年寄りだったら可愛そつだからサイちゃんセブンチェンジャー避難させてよ」

何かを訴える目でサイモンを見るルーテシア。

結果

「あんな純真な目をした子供の期待を裏切ってはいけない・・・だ  
がいくら俺が地球人には無い馬鹿力でもセブンチエンジャーを安全  
地帯まで運ぶことなんて到底無理だ・・・なら」

断崖絶壁の上で台風に向って構えるサイモン。

「この台風と決闘して台風を倒せば台風が止む！そしてセブンチエ  
ンジャーを移動させないで済む！！」

『王子！何もつと無理なこと言ってますか！！？』

サイモンにツツコミを入れるダイ。

八神組の馬鹿は伝染するようです。

「どうした台風！怖気づいたかかかって来やがれ！！男らしく勝負  
しろ！！」

『王子！かかってくるも何も海鳴全土を覆いつくしています！！それ  
に台風には性別はありません！！』

台風に向って飛びかかろうとするサイモンだが・・・

「ああああああええええええええええええ！！！！」

健闘空しく吹っ飛ばされてしまった。慌てて回収するダイ。

「くそ・・・台風の野郎！！」

片足にギブス巻いて松葉杖突いているサイモン。

『……王子……諦めて台風が去るの待ちましょーよ』

至極全うなことを言うダイ。

「男が一度決めたことは遣り通さなきゃいけないんだぞー!ー!」

『王子! 限度つてものがあります!ー!』

その時サイモンは何かを閃いた。

「そつだ! ダイ!ー! お前何とかしろ!ー!」

『へ!? 何言ってるんですか王子! 私にそんな事出来るわけ無いじゃないですか!ー!』

「おめえ伝説の勇者だろ!? 父親だろ!? 何とかしろ!ー!」

サイモンの超無茶振りに困りまくるダイ。

すると……

『そつだ! 父ちゃん! 台風くらい何とかしろ!ー!』

『だ! 大一郎!』

『そつだ! ルー姉ちゃんの為に何とかしろ!ー!』

『ルー姉ちゃんいつも俺達と遊んでくれるからお礼に父ちゃん何とかしろ!ー!』

『大二郎・・・大三郎まで・・・』

段々逃げ場が無くなるダイ。

『ルー姉ちゃん泣かせるパパなんてだいつ嫌い（トドメ）』

『ガーン！！太子！！』

我が子に散々罵倒された拳句トドメを刺された伝説の勇者ダイブライド。

「頑張つてねあなた。伝説の勇者の意地にかけて子ども達の期待を裏切つてはいけませんよ」

「っ！妻よ！！」

アリスにまで期待され・・・これで家族全員から期待されてしまったダイ。この時ダイは思った。

（神よ！なぜあなたは私を伝説の勇者なんかにしたんですか！！？）

伝説の勇者に生まれたことを呪ってしまったダイだった。

結果

『ダイナツクル！！ダイバスター！！フルブラストエンド！！！！』

台風に向って殴ったり砲撃したり一斉射撃したり頑張ってみたダイだが効果が無かった。



## 結果

「……ダメ勇者」

『『『『『……ダメ親父』』』』』』

主と子ども達にフルボッコで罵倒される親父。

『王子！私にだって出来ることと出来ない事があるんです！！！』

涙流しながら訴えるダイ。その姿はとても宇宙の伝説の勇者ではな  
くただのマイホームパパだった。

「くっそ……どうすれば……」

考えるサイモン

するとテレビで……

『いや〜凄いですね〜初代ダグオンは台風を倒したんですから〜』

「それだ！！」

そう思って翌日初代ダグオン炎の勤める交番に来たサイモン。

「炎さん！！」

「ん？なんだよ？」

昼御飯がてらラーメン食べている炎。

「台風はどうやったたら倒せるんだ？」

「何だそんな事かよ。台風の宇宙人を台風につつけければ良いんだよ」

「よっし！探しに行くぞ宇宙人！」

「けど台風止んだぞ」

「な！！！」

サイモンが交番の外に出るとカンカン照りになっていた。どうやら思考が回っていないかったせいかわ台風が止んだことに気付かなかった。

「台風カムバック！！！」

こうしてサイモンのアホな努力は無駄に終わってしまった。

余談だがセブンチエンジャーはショックでいじけていたらしい。

第二十五話 サイモン対台風（後書き）

ん？ここは何処だ？何この格好・・・勇者リキって・・・何！？魔  
王高町なのはを倒しに行けって！！あんた何者！？

次回！勇者指令ダグオンA's どっこい リリカルクエスト

何で今回俺が勇者！？

## 第二十六話 リリカルクエスト

ある日目を覚ました力。

「ん？」

何処かの城の中の王座の前にいた。

「目を覚ましましたね・・・勇者力・・・」

「ええええええええええ!!」

いきなりの無茶ぶりに仰天する力だった。

## 第二十六話 リリカルクエスト

聖王ヴィヴィオの側近シャマルの話では最近・魔王高町なのはが世界を征服をするべく進軍を開始したとの事だった。

その時力は思った。

「・・・どうせ夢だろ」

「力君それは言うてはいけないのよ・・・」

「どっせ夢ならその内行くよ」

次の瞬間シャマルに蹴り飛ばされた力。

「今行きなさい！すぐ行きなさい！直ちにいきなさい！！」

こうして追い出されるように旅に出た勇者力。

「金ねえな・・・なんでRPGの王様って勇者に魔王退治頼んでおきながら銅の剣買えるか買えないかの金額しかくれねえんだよ・・・序盤は薬草必須なんだぞ・・・なんでシャマルさんもつとくれなかつたんだよ」

（世の中そんなに甘くないのよ）

と電波を感じ取り不満をばやきながらとりあえず次の村に向かって歩いている勇者力。

現在の勇者力の装備

棒に鍋蓋、どう見ても勇者の装備ではない

すると

「お？あんたが勇者力か？」

背後から気配を感じた力が振り返るとそこには

「あたしは戦士飛鳥・・・分け合っただけであんたに同行する・・・って

何言わせるんだ」

「いいじゃん・・・どうせ夢オチで終わるんだから・・・」

「そうだな」

そう言って順応性の高い馬鹿コンビは次の町に向った。

更に

「私も仲間にしてください!!!」

「誰?」

力と飛鳥の背後に現れたのは・・・

「私は賢者楓です!!!回復やらは私にお任せを!!!」

それを見た力は・・・

「いや・・・遠慮しておく」

「なんで!?!」

「だって・・・MP回復アイテムって高いんだもん!!!近年はコインじゃなきゃ手に入らないのもあるし・・・シャルさん全然くれなかったし」

「自腹切ります!!!自腹切りますから!!!」

そうしてMP回復アイテム自腹という形で仲間になった賢者楓だった。

結果

「うええんモンスター出ないから宿代が無い・・・」

「これもピンチだな」

因みに現在の力のレベルは1、飛鳥は5だったその為か普段の戦闘力を差し引いても28前後である為かモンスターのほうが怖気づいたのだった。

「回復役が欲しいよな・・・」

「だな・・・そう言えばこの先の教会に僧侶がいるみたいけど」

「じゃあ行ってみつか？」

そう言っただけで教会を訪れる力と飛鳥。

「僧侶って坊さんなんだよな」

「だな～きつと高貴な方なんだろうな・・・ん？坊主？」

なんか嫌な予感がした力と飛鳥・・・すると

「あ？てめえらなんか用か？」

教会から出てきたタレ目の金髪僧侶・北斗。何故かRPGの僧侶ではなくいつもの三蔵法師姿の北斗。

「・・・おめえよ・・・なんでおめえが僧侶なんだよ・・・にあわねえズドン！！うわああ！！」

力に向って拳銃撃つ北斗。

「・・・毎度毎度めらが俺を金髪坊主と一緒にするからだろ」

「なんで僧侶の武器って貧弱なフレイルが多いじゃん！！何で銃なんだよ！！」

「・・・なんかミツキが渡してきた」

「まさかこの世界作ったのミツキさんじゃ・・・」

「ありえるぜいつもの悪ふざけで」

等とくだらない妄想を始めると・・・

「うるせえ殺すぞ！！！！」

思いっきり銃乱射する北斗。とても神に仕える人間には見えないどつちかというと紙を足蹴にしていそうな人間だった。とりあえずRPGのノリにしたがって情報を与えることにした北斗。

「・・・えつと・・・この先に盗賊が出てて・・・大変困ってるそうです・・・お助けください（棒読み）」



台本持ちながらやる気なさそうに言う北斗に対し力は・・・

「うわぁ・・・助けたくねえ」

「うんうん」

だがここでイベントをこなさなければ力達は下の世界に変えることが出来ないと考え力は・・・

「よつつし！！行くぞハゲ蔵！」

「何で俺が？」

「どうせお前がいねえと先進まないんだから一緒に行こうぜ」

嫌がる北斗を無理矢理連れ出そうとする力と飛鳥。すると奥から娘キヤロが出てきて・・・

「お義父さん行ってきたあげなよ」

「何で俺が？」「パパって呼んじゃうよ」「ゾクゾク」

キヤロに尋麻疹発動させられた北斗はしぶしぶ同行した。

「よおつし！盗賊を倒して村人に平和を！！」

そう言ってやる気を出した力だが・・・

町

「うっひゃっひゃっひゃ〜金目のものもってこいや！」

盗賊はやてと仲間の魔法剣士シグナムと闘士姫ヴィータが村人から金目のものを巻き上げていた。

それを見た勇者力は・・・

「・・・か・・・勝てない!!」

膝突いて愕然とする力だった。キャラクターを見て敗北が確定したことを嘆いていた。

「ちよつと勇者!!何でここで敗北をきしてるんですか!？」

「あのね・・・この作品において俺がはやてに拳骨で勝つ事は出来ないの・・・」

「自ら敗北を認めた!!お爺ちゃんたまにははやてさんに反抗起こして勝ってみたらどうなんですか!!」

賢者楓の言葉に泣きまくっている力は・・・

「だから無理なのダメなのさだめなの!」

今まではやてに何度か反抗してみたが返り討ちに合い更に追い討ちをかけられたりはやてに攻撃を小指一本で止められたこともあった。

「お〜こんな所に勇者とは工工度胸やんか?えええ!」

思いつきり勇者力を敵視する盗賊はやて。

その言葉に勇者力は・・・

「いえ・・・私はただのモブキャラです」

「そんなバツゲームみたいな装備でもダメやで」

指関節ボキボキ鳴らすはやて。

すると

「おりゃあああああああ!!」

「うぎゃああああ!!」

中途半端な性能の盗賊のスキルとは思えない戦闘力で勇者力をぶちのめすはやて。力とはやての仲間達は啞然としている。

尚はやてのレベルは序盤のクセに78だった。

スタボロにされた勇者力を回復している賢者楓と僧侶北斗。

「いや〜スッキリした〜で〜魔王を退治にいくんやて?」

「あ・まあ・・・」

勇者が死ぬ一歩手前なので代わりに戦士飛鳥が受け答えしている。

「そんなら盗賊家業よりも面白そうだからうちも魔王退治に付きおつたる〜」

そう言つて普通のRPGとは間逆の勇者が敗北して仲間になるというパターンで仲間になつてしまつたはやて。尚シグナムとヴィータは呆れて帰つてしまつた。

尚勇者力を治療している楓と北斗は・・・

「きつ〜何でシヤマルさん居ないの〜」

「あのアマ上手い具合に逃げやがつたな〜」

「こつなる事必須だからね・・・」

(世の中甘くないのよ〜ていうか！私が心労で倒れちゃうわよ！！)

妙な電波を拾いそのまま森地帯に入った勇者一向。

そこでふと思つた。

「ねえこの辺でレベル上げられるところ無い？」

「何で？」

「俺とお前のレベルが貧弱なんだよ！！」

現在の力のレベル1、飛鳥のレベル5、北斗38、楓42、はやて78と言つて物凄く浮いている序盤組。なお物語はまだ最初のイベントしかこなしていないと言つかこのメンバーじゃ自分立ち入らな

くねえか共思い始めた勇者。

というわけで

魔導師ミツキの庵

「へ？レベル上げにぴったんこなこと？」

近くで有名な魔導師ミツキの庵に来た勇者一向。

「だってこのままじゃ寂しいんだもん」

「まあ……序盤から仲間のレベルがそれじゃ自信喪失するわね……  
うーん……私の仕事手伝ってくれたら紹介しても良いけど」

「何を!？」

ミツキのことだからどうせよからぬ事だろうと踏むと……

「最近畑を荒らしまわってる野生児がいるみたいでね、捕獲にと」

「そいつ何処に居るんだ？」

「この先の村の畑に出没するの、なんかちっちゃ生き物が好物なんだって……」

「んじゃミツキさん丁度良いの居るじゃん」

「あー!」

何かを閃いたミツキは・・・

「おい！何であたいなんだ！？」

「一番手ごろなちっちゃい生き物ってノアくらいだし」

広いところで使い魔ノアを吊るして囷にしようと思論むミツキ。

「大丈夫！食べられちゃったらお線香の一本でも上げてあげるから」

「鬼〜！！」「フカー！！」「うぎゃああ！！」

そうして何かの影にパクンチョされてしまったノアするとミツキは力を使い凄まじい馬鹿力で吊り上げた。

「はい出しましょうね」

ノアを影の口から出すと・・・

「・・・やっぱりこいつだったか」

「・・・じゅるるる」

力達の目の前に居たのはバーサーカー畢だった。するとミツキから畢に対してお話が始まった。

「わかった？」

「コクコク」

「じゃあ良かったら私たちと一緒に来ない？御飯だったらいくらでも食べさせてあげるわよ」

「行く行く」

ミツキの言った御飯という言葉に釣られたバーサーカーだった。

「で？こいつのレベルは？」

力が畢のレベルを見てみると・・・

畢・レベル99 (MAX)

「ガン！！」

シヨックを受ける勇者力。

「まあ良いところ紹介するから」

というわけで魔導師ミツキも同行しレベル上げにぴったりの場所に到着した。

回復の女神アルトの泉

「あの・・・何しに来たんですか・・・」

「レベルを上げたいんです!!」

泣きながら回復の女神アルトに頼みまくる勇者力。

「ここって！回復タダなんですよね!!」

「ええ・・・まあ・・・」

勇者力の身勝手な言い分に一步引くアルト。

「ていうか!!門番!どうした門番!!?」

その頃門番ユウは・・・

「どうせ毎度アテにされんだから労働するだけ損だよ」

などと言って門番サボっていた。

## 結果

「うおりゃああああ!!」

散々回復の女神アルトをこき使いレベル上げに没頭する力。そして付き合いでミツキも付き合い合わされた。

倒されては無料回復をアテにされるので炊事洗濯としかたま労働しているアルト。

(なに・・・この割に合わない労働・・・ユウの奴帰ったら覚えと



れ！！）

等と思っていた。

「はぁ！！」

ミツキの火炎魔法がモンスターを一掃し全滅させた。

「ふう・・・何で私まで・・・」

「いや、魔術師貴重だからか、でミツキさんレベルは？」

ミツキのレベル67

「ガン！！」

ミツキのレベル見て嘆く勇者力だった。

かくして勇者達は話を進めずに序盤で無駄にレベルを上げまくるやりこみプレイを始めるのだった。

一方魔王城では・・・

「遅いの・・・勇者の奴ら何やってるの・・・暇なの！！・・・こ  
うなったらRPGの魔王がやらない事を・・・とつとと世界に進軍  
するの！！！！！！」

そう言って暗黒騎士団長フェイトをこき使いまくり世界に進軍する

魔王軍。

尚当の魔王は側近のユーノといちゃついでるだけだったりする。

急げ勇者！

セーブ

一旦現実世界に戻ります

## 第二十六話 リリカルクエスト（後書き）

とりあえずレベル上げの途中だけど・・・いや、今回俺は反省しなければならなくなりました・・・というわけで！！主役の権利を渡します！！誰が良いかな、ユウかな、甲児さんかな、火鳥さんかな、大悟かな、飛鳥かな？とにかくこの話での面白いことを頑張つてね。

次回！勇者指令ダグオンA's どうこい あんたが主役

俺は温泉でも行っても迷惑かけないようにするか、あ！主役にはもれなくはやてに殴られる権利があるじゃえ！

## 第二十七話 あんたが主役

ある日

珍しく遊びに来ていたユウとアルトは背後から誰かに肩を叩かれた。

「ん？」

「誰？」

振り向いたユウの先には気色悪くニンマリした顔の力が・・・

嫌な予感がしたユウだが時既に遅く何かのタスキをかけられたユウ。

「じゃあ！後よろしくー！！」

そう言っつて一目散に何処かに行っつてしまった力。

「何だよいったい？」

「ユウ！ユウ！ー！！」

ビックリしているアルトがユウを指差しユウはタスキを見るとこつ書かれていた。

『あんたが主役』

「なぬっっっっっっっっっっっっ!?!」

第二十七話 あんたが主役

絶叫するユウはとりあえずアルト共に南家に向った。

「あらゝ大変な事になっちゃったわねゝゝゝ」

「シャル先生ゝゝ全然そんな事思っでないだろ」

ニヤついてユウを見るシャルは事情を話し始めた。

昨日

八神家に大量に入る大工さん。

「あら八神さんちまた改築?」

「良いわねゝ」

等と近所の方々は言うがゝゝ実際は違った。力をお仕置きしていはやてが家中破壊しまくっている為何度も直しているのだゝゝ大工さんからはもう一から建て直したほうが早いとも言われた。

そんなこんなで南家に居候することになった八神家。

そして

「力君見て見て」

新しく買った服を力に見せびらかすはやて。かなり気合の入った服であり夏の最先端ファッション……のようなものだった。

「いや……俺お洒落興味ないし……」

「またまたウチがあまりにも可愛いからって」

「……うるせえな……お前が似合いもしないミニスカートはいて有りもしない色気で迫ったって欲情しねえよ」

ブチ

何かがキレたはやてが力の頭をヘッドロックし……

「悪かったなああああああ！！」

「つぎゅつつつつつ！！！」

そのまま壁に力の頭を突き刺すはやてだった。首プラインの状態で壁に突き刺さっている力。

回想終了

「まっ……そういつ訳でねー一応お洒落してみようと思って新しい服買ったのに禁句言うなんてねー」

「そりゃ力が悪いな」

「ほら〜力君照れ屋さんだから〜」

（あいつにそんな出来た神経は無いと思いますが・・・）

（奇遇ね〜私もそう思ってるところよ）

（なぬ！！）

シヤマルの説明を聞き終わり心にそう思ったユウだがその心を読取ったシヤマルに驚くユウ。

「で？力は？」

「反省を込めてこれから謹慎するって〜というわけでユウ君〜主役・  
・・頑張ってね〜」

「シヤマル先生！なんで俺が！？」

「いや〜多分力君の友達で迷惑かけても怒んなさそうなのユウ君だけだからじゃない？力君友達居ないし・・・」

（あの野郎おおおおお！！）

再び絶叫するユウ。

「ていうか・・・何すれば良いんだ？宇宙人倒せば良いのか？」

「ユウ君・・・この話にそんな真面目な話は期待しないのよ」

ダグオンA's 本編での目的をあっさり斬られてしまったユウ。

「まあ、何か面白いことしてね」

(お！重い！！なんて重い主役の権利なんだ！！！)

いつも力がやっつてる体力的なノリを求められてしまうユウ。そして何よりこの小説を盛り上げなければならぬという大役を任されてしまうのだった。

そして何より『この小説で何か面白い事をしなければならぬ』というのが難題だった。

「く！個性豊か過ぎる面子が多いなかどうすれば良いんだ!？」

「因みにはやてちゃんまだ怒りが納まってなくて庭で必殺技の修行してるわよ」

「へ!？」

恐る恐る庭を見ているユウとアルトそこには・・・

「ふん!!ふんふんふん!!おっとまだ倒れるのは早いで・・・  
超必殺!!ラグナロク・ザ・レインボー!!ペガサス流星拳!!」

騎士甲冑で一秒間に百発のラグナロク・ザ・レインボーを放つはやて。狙われているのは等身大力型サンドバッグだった。



ラグナロク・ザ・レインボー百発なので単純計算して700億倍の  
ラグナロクを放つはやて・・・

そして粉微塵になる力型サンドバッグ。

「今度は北斗神拳も混ぜてみるか・・・なあ次は？」

はやての横で山積みになった力型サンドバッグ。横ではシグナムと  
ヴィータが一生懸命縫っていた。

「だ！大丈夫！いくら組長でも俺にそんな事は・・・」

「ゆゆゆゆゆ！！ユウ！！」

「ん？なんだ？」

タスキを見ていたアルトがなにかに気づいた。そしてユウも書いて  
ある文章を見つめると恐ろしい事が書かれていた。

「・・・この主役の権利は同時にもなくこの話の目玉である『は  
やてにお仕置きされる権利』と『歩く砲台と金色の死神に命を狙わ  
れる権利』が付きます・・・力いいい！！俺に死ねっていうのか！  
！」

想像してみるユウ・・・

（これがお仕置きフルメドレーやああああ！！ラグナロク・ザ・  
レインボー！！ペガサス流星拳バージョン！！！！）

（死にやがれなの！！この悪魔の仲間！！！！）

(真つ二つにしちやるつうつうつう!!!!)

想像終了

世にも恐ろしい3大巨悪の襲撃を感じたユウは・・・

「いやだああああそんなの!!こんな主役の権利いらねえ!!  
力何処いった!?反省何て言ってる場合じゃねえだろう!!」

「いや〜力君此処にいと迷惑かけるからって言っただけのもの5馬  
鹿引き連れてミツキさんと一緒に温泉行ったわよ〜」

「姉貴いいいい!!」

力の逃亡に手を貸したミツキにやり場の無い怒りをぶつけるユウだ  
った。

「それじゃ〜頑張つてね〜」

シヤマルに見放されてしまったユウとアルトはとりあえず玄関に出  
されてしまった。

「・・・どうする?ユウ」

「相手が組長じゃな・・・正攻法で戦いは挑めんぞ」

ガチンコの肉弾戦に持ち込めば破壊力ではやての方が部のある状態。  
そこでアルトが提案した。

「謝っちゃえば」

「あー！」

いつも何かしらして逃亡を計ろうとする力と違い主役の権利として謝ってしまおうと踏んだユウ。そして庭に入ろうとすると・・・

「力君！謝ったって絶対許さへんで！！たえ逃げたって地獄の果てまで追いかけてぶちのめしたる！！！」

謝罪に聞く耳持とうとしないはやて。よっぽど怒っているらしい・・・

その言葉を聞いて逃亡するユウとアルト。

力達が悲しくなった時にいつも来る坂

「どつすんのユウ？」

「いや・・・俺組長に処刑されたくないし・・・力を探すか」

「でも匿ってるの先輩だよ・・・絶対見つからないって・・・」

「・・・クソ姉貴の奴何でこんな事を」

（そんなの面白そうだからに決まってるじゃないのよ）

「！...」

何やらシャマルと同じような思惑電波が放たれ受信してしまったユウ。

「姉貴の野郎・・・いつの間にそんな電波術を・・・」

頭抱えるユウ。

選択肢は二つしかない

・・・このまま主人公として活動するかそれとも誰かに権利を放棄するか・・・

その時

「熱血！！最強！！」

何やら暑苦しくランニングしているガイの姿が・・・

それを見たユウは・・・

「よゝガイゝ久しぶりだなゝ」

「お！ユウどうした！？ん？何だこのタスキ？」

「後よろしくうとうとうとうとうとうとうとう！・・・」

そう言って通りかかったガイに『あんたが主役タスキ』を押し付け逃亡するユウとアルト。



ガイに主役の座を押し付けられてしまった蓮。基本、人に頼まれたら断れないのだった（うちの作者はそう思っています間違ってたらごめんなさい）。

その時

「蓮！俺が主役になろうと思ってたのに!!！」

突如現れた飛鳥（ダグオンの人ではありません）。

「に！兄さん!!！な！何をすれば良いんだ!？面白い事を・・・面白事しなくちゃ!!！」

超焦りまくる蓮。と呆れた顔で蓮を見る飛鳥。

「!!.....!!!!!!」

弓道を披露したり・・・お菓子作ってみたりとにかく話を盛り上げようとする蓮。

「#\$%&#\$%&`#\$%&#\$%&#\$%!!!!」

もう行動すら大変になってきた蓮はパニックの極に陥り・・・

「・・・わかった・・・別の奴に渡してきてあげるから・・・」

そう言ってシグナムが『あんたが主役タスキ』をとりあえず回収した。

そう言っつてとりあえずタスキを持つてるシグナムだが・・・

「とは言うものの・・・誰が好き好んでこの話の主役などになりたがる・・・」

自分の出演している作品に向つて身も蓋も無い事言つてのけるシグナム。

「だが・・・誰かをこの話の主役にしなければ話が進まん・・・よりにもよつて5馬鹿は逃亡した・・・来年になれば火鳥に押し付けられるのに・・・」

何故シグナムが来年の事がわかつているかはスルーしていただきたい・・・

「・・・甲児も別世界か・・・やむえん」

シグナムが考えた結果・・・

「リインが主役です」

『あんたが主役タスキ』を付けて喜ぶリイン。

「で？リインは何やるんだ？」

「魔法少女物の原点回帰です！！」

その言葉にヴィータは・・・

「・・・じゃあ・・・魔法使って困ってる人助けたりお菓子の家出したり夢を叶えたりするの？」

・  
グイータが言う一般的であろう魔法少女の原点を聞いたリインは・

「!?!」

挫折してしまった・・・

その時

「よゝ元気か？」

何故か次元を超えてきた甲児。

「おう！甲児良い所に来た!!」

そう言っつて甲児に『あんたが主役タスキ』を装着するシグナム結果。

「よっしゃ!!俺が主役だ!!女連れてこい!!」

「話の主軸が変わってしまったらうが!!」

そう言っつて蹴り飛ばされる甲児だった。

そこに・・・

「何やっとなるんや？」



物凄く不機嫌なはやて・・・

「はやてちゃん！」

「貸しい」

そう言つて『あんたが主役タスキ』を装着するはやて。

「なな！何を血迷つたの！？」

「・・・まちい」

はやてが静止すると・・・

「この悪魔！！」

「覚悟！バルディッシュで真つ二つだぞ！！」

襲撃に来たいつもの二人・・・この時二人は対戦相手を呪つた。

「やあ〜まっとなで〜なのはちゃ〜んフェイトちゃ〜ん」

「！！！！」

いつもより怖い邪神モードのはやて。二人は掟によりこの話の襲撃をしなければならぬ。

「そついや〜二人なら相手にとって不測無いで〜」

指ボキボキ鳴らしながら完全に憂さ晴らし目的で主役になったはや

て。

この後なのはとフェイトがどういふ運命で終わったかご想像にお任せします

夜

「帰ったぞ〜」

温泉饅頭買って帰ってきた力。すっかりほとぼりが冷めたと思いついでいたが……

ひらひらひら……

力の元に『あんたが主役タスキ』が降ってきた。

力ちゃん主役に返り咲き

「まっとうたで〜力君〜」

笑顔……しかもリミットブレイクオーバードライブを発動させたはやて。

「どりゃああああああああああああああああああああああああああああ……」

「ぎゃああああああああああああああああああああああああああああ……」

あああああ！！！！！」

はやてに処刑される力。

尚才子を見るべくその姿を見ていたユウは……

「力……この話の主演はお前にしか務まらん……」

等と思った。

この後ははやてに絶命寸前までぶちのめされた力を復元するのにシヤマルが苦勞したのは言つまでも無い……

## 第二十七話 あんたが主役（後書き）

やってきましたリリカルクエストの世界！さってセーブから・・・  
あ？此処までレベル上げてたんだ・・・

次回！勇者指令ダグオンA's どっこい リリカルクエスト2

さっさと魔王を倒すぜい！

## 第二十八話 リリカルクエスト2

### 第二十八話 リリカルクエスト2

データをロードします・・・

回復の泉にて・・・

「ふう〜・・・とりあえずレベル上げはこんなもんか？」

泉の女神アルトを散々こき使ってしこたまレベルを上げた勇者力ご一行様。

「もう・・・勘弁して・・・」

凄まじい労働でグツタリしている回復の女神アルト・・・早い話が回復がタダなのを良いことに炊事洗濯全て押し付けられてしまい凄まじい割に合わない労働をさせられたのだ。尚門番は面白そうに見てるだけだった。

尚現在の戦況は・・・

「ゆけえええ!!勇者が全然襲ってこないから暇でしょうがないから世界に進軍するの!!恐れるものは何もないiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!」

そう言つて魔王から大魔王に出世した高町なのはは着々と世界を進軍している。

「大魔王様！」

大魔王なのはにひざまづく暗黒騎士フェイト。

「なんなの！？騎士団長！？」

「既に世界の99,999%は制覇しました！！」

「よおつし良い成果なの！それじゃあ後は任せたなの！！ユノ君

」

そう言つて側近ユノのもとに行く大魔王なのは。

それを見ていた暗黒騎士フェイトは・・・

「なのは・・・殆ど労働してるの私だよね・・・」

等とやつれていた。

泉の女神は・・・

「そろそろ話進めないと世界征服されちゃいますよ・・・」

「そつだなくんじゃ行くか・・・」

などと言って初期装備のまま泉の女神アルトの元を去ろうとする勇者力。

(ふう・・・これで重労働から解放される)

等と思つたアルトだが・・・

ザバン

何故か泉から出されてしまった。

「え? どういう事?」

「このまま着て」

「えええええええええええええええええ!!」

こうしてRPG初、泉の女神をパーティに加えるといった暴挙に走つた勇者力だった。そしてついでに連行される門番ユウ。

ジヨブチェンジの神殿

流星に泉の女神のままだと卑怯なのでジヨブチェンジさせる事にしたパーティ。

「えつと・・・白魔導師で良いか?」

「えー! ちょっと待つてください! 白魔導師って前半では大活躍する

けど後半になればなるほどその戦闘での使い辛さで泣きを見るキャラじゃない!!」

「ああ・・・細かい事は一々うるさい」

「そんなああああ!!」

そう言って白魔導師にシヨブチエンジさせられ降格してしまったアルトだった。

尚

「んじゃ〜ユウ君は銃士になってもらおうか」

「ちよい待て!何で俺が射撃!？」

「だって決め技射撃じゃん」

「・・・・・・・・」

賢者楓の偏見で銃士にさせられたユウだった。

現在の世界情勢に至って既に世界の殆どが征服されている為勇者力は今更行動を開始するのだった。

「えっと〜装備もボチボチ変えようかな〜お金お金・・・」

そう言って資金見てみると・・・

「あら〜たんまり給っていらっしやる〜」



「これだよね……やりこみゲームの無駄なレベル上げで資金だけガツポリ溜まるって……」

「あと居るよね……初期装備で頑張る奴……そういう人ってRPGに何を求めているんだろっ……」

「自由という名の作業じゃないの？」

そう言っただけで征服されてない町に向かう。

すると早速魔王軍が町に進軍している真っ只中だった。

「あれは……！」

勇者力達が見たのは……

「くう……この町だけはこいつが居るから全然征服できない！」

「この町の平和が僕が守ってみせる……！」

モンスターに向かってそう言っただけでRPGスタイルで槍を持っているRXの姿が……

「お！兄さん！その姿はザ・グレイトバトル？の水の槍の姿……！」

勇者力に言われ光太郎は……

「そうそう！丁度この話に良いかなって思って持ってきちゃった」

8頭身でザ・グレイトバトルの姿を披露する光太郎。

「俺達を無視するな!!」

そう言っつてモンスターが襲い掛かるが……

「必殺アイテム!巻物!!」

そう言っつてRXが巻物を披露すると空から巨大な水が舞い降りサーフィンでモンスターを倒した。

「おお……この技は正しくザ・グレイトバトルの技……」

「光太郎さ〜ん」

「やっぱり居たか……」

そう言っつて本来設定では武道家だったが作者の思いつきで大地の鉄球を持って現れるライダースバル・職業・闘士。

「何でこんな姿なんだろう……」

「多分必殺技の豆まきとかやりたかったんじゃないの?」

等と思っつていたりあえずストーリーが進む。

「……お母さん」

「畢!どうして町の外に食材盗りに行っつちゃダメでしょ!!」

そう言ってお説教されるバーサーカー畢だが・・・

「けど美味しそうなもの見つけた・・・」

「何？」

「・・・これ」

「!!--!!」

畢が驚づかみにしていたのは・・・

「こらああ!! あたいをとっとと離せ!! ていうか!! ミツキひでえよ!! あたいに子守をさせるなよ! 何度丸呑みされそうになったか!!」

そう言っつて半泣きのノア。

尚ミツキは・・・

「だつて〜畢ちゃんノアのこと大好きつて言うし〜」本心は? 「そんなの面白そうさだつたからに決まってるじゃない」

「姉貴・・・楓さんみたいにデビル化ならぬダーク化してねえか？」

「ユウ〜ちゃん何か言つた〜?」

「・・・何でもありません」

怒らせたなら怖そうなので放っておく事にしたユウだった。

「とりあえず・・・困ってるならウチの宿に泊まれば？」

「おお！一般宿！！」

そう言つて光太郎の経営している宿に行く一行だった。

「はい！ライダーハンバーグお待ち！！」

「おお！美味しそう！！」

食卓に着いたメンバーは光太郎が作った特性ライダーハンバーグとやらを食べ始めた。濃厚なソースが自慢である。

「美味しい！一級シェフ顔負けや！！」

そう言つてがつついて食べる盗賊はやて。

「一方！！」

「お父さんおかわり・・・」

「私も！！」

そう言つて一家の食卓ボードで大量にハンバーグカレー食べるバーサーカー畢と闘士スバル。

「・・・兄さん苦勞してそうだな・・・嫁と娘の食費が・・・」



「……………」

気持ち良さそうに眠ってるはやてと床で雑魚寝している力。

理由は

「しかもダブルベッドでやんの……………」

ダブルベッドなんて物を考え出した奴を絞め殺そうと思った力だった。

翌日

「寝不足……………」

「マジだ……………」

そう言っただけ目をこする勇者力と銃士ユウ。

それを見ていた魔導師ミツキは……………」

「もう二人とも張り切っちゃって……………」

その言葉にユウは……………」

(俺のラスボスはいいつか?)

等と思っていた。

尚一行に南ファミリーも加わり戦力が格段に上がっていた事は言うまでもない。

「ていうか・・・ゲストキャラにはチヨイスの基準があるのか？」

「いや・・・恐らく何かやっても怒らなさそうなのがよく出てるんじゃない？」

「まあ・・・一歩間違えれば滅茶苦茶怒られそうなネタしかやらないからな」

等とくだらない会話が進む勇者力と戦士飛鳥だった。

「そつえば次の町は何処だ？」

「何でも凄い馬鹿力が居るからそいつを仲間にするんだとよ」

「味方か？」

「凄い馬鹿力って言ったらあいつしかいねえだろ」

等と言って最後の一人が居るであろう町に向かおうとする勇者力。

道中

「ん？」

何かに気づいた勇者力。そこに倒れているのは仮面ライダーDこと飛鳥だった。

「は！力兄！んべー！！」

起きて早々ハリセンで頭殴られる飛鳥（見分けがつかないので次回からカツコ内にDと表記する）。

「お前な・・・ノリが悪いじゃねえか！！仮面ライダーまんまで来るなよ！！！」

「いや・・・その・・・」

勇者力の意見にタジタジになる飛鳥だが・・・そこで救いの神のように大先輩が・・・

「飛鳥（D）君！どっちが良い？炎の剣と風の弓」

そう言つて衣装を提示する槍士光太郎。

「兄さん・・・それF91とロアが使つてた奴じゃん・・・持つてきたの？」

「いや〜誰かが困ると思つたし〜RPGのノリだから良いかな〜つて」

「なるほど・・・」

果たして飛鳥（D）の選択は・・・

セーブします・・・現実世界に戻ります。





## 第二十八話 リリカルクエスト2（後書き）

ある日の事・・・ロストロギアではやてが赤ん坊になった！！？で  
！何で俺が面倒見なきゃいけないんだよ！？

は！？この中で赤ん坊の世話した事があるのが俺だけだからか！？  
勘弁してよ・・・て！はやて！俺の胸吸うな！！

次回！勇者指令ダグオンA's どっこい 赤ん坊になったはやて

ぐす・・・俺もう婿に行けない・・・

## 第二十九話 赤ん坊になったはやて

ある日の南家

「ふっふっふっ管理局からちよるまかしたこのロストロギアで力君にどう悪戯したろうかな」

等と下らない事考えているはやて・・・余程暇ならしい。

「さつて・・・これは・・・ん？このスイッチはなんや？」

等と言って愚かにもロストロギアを作動させたはやて。

すると

「ぎゃあああああああああああ！！」

南家が光に包まれた。

第二十九話 赤ん坊になったはやて

「ただいま」

帰宅する力がリビングに入ると変な光景が・・・

「ん？なんだ？はやての奴だらしく脱ぎ散らかして・・・片付ける方の身にもなれってんだ」

等と言ってはやての脱ぎ散らかした服片付け始める力。

「んあ？これははやての下着・・・なんで？」

嫌な予感がした力すると・・・

「おぎゃーおぎゃー！！！」

何故かへんな機械の近くで全裸で泣きまくっている赤ん坊が・・・

「この服・・・この機械・・・この赤ん坊・・・」

この事から推測すると・・・

「はやてが子供になったああああああああ！！！！！」

仰天する力。

「どっしよどっしよどっしよ！！！！！」

物凄くパニックになっている力。元凶のはやては赤ん坊化した為意思の疎通が出来ない。

そこに・・・

「おゝい力〜どうした〜？」

尋ねてきた飛鳥。

「飛鳥！！#\$%&'(%\$#%&'(&%\$」

単刀直入に力語で飛鳥に説明する力。その事で全員を南家に集めるのだった。

「不味いな・・・今管理局じゃはやてが乳児化したと・・・痛いな・・・このロストロギア乳児化マシーンで人間を乳児にする機械か・・・未完成で効果は一週間って」

「・・・どうしましょう」

そう言っただけで考え込む楓。するとシャマルが楓の顔を見て何かを閃いた。

「ちょっと楓ちゃん借りるわね」

「ええええええええええ！！」

何故か南家客間に入れさせられる楓。

「じゃあ楓ちゃん可愛くなりましたよね」

「いやあああああああ！！」

絶叫をスルーしどうするか対策を練ろうとすると・・・

ピンポン

南家のインターフォンが鳴り飛鳥が覗いてみると・・・

「不味い！じいさんだ！！」

訪れてきたのは八神組会長ノルウェール。

「入りますよ」

「はづー！！」

咄嗟に乳児化したはやてを服の中に隠す力。

「あれ？はやてさんはここに来ていますか？」

「いーいやーちょっとトイレ・・・」

「じゃあ待たせてもらいましょう」

「ええええええええええ！！」

リビングのソファーに座るノルウェール。

「いやーそう言えばはやてさんがロストロギアを持ち出したって聞いたんですが・・・」

はやての持ち出したロストロギアをジーツと見るノルウェール。

その時

「はあ！・・・あ！！ああ・・・」

何故かもがき始めた力。

その理由は・・・

「チュパチュパチュパ」

服の中に隠したはやてが力のおっぱいに吸い付き始めたのだ。

ひたすら悶絶して耐える力。

「そういえば・・・はやてさんは？長いトイレですね」

「！！！」

ノルウェールの質問にそのとき。

「私が八神はやてです・・・」

そう言つて髪染めて整えてカラーコンタクト入れてヘアバンドやら髪飾りなどを付けた楓の姿が・・・ぱっと見バレナイぐらい化けてあり、引きつった笑みで楓が誤魔化し行為を試みると・・・

「八神空佐・・・早くお仕事に戻りなさい」

「はい！！！」

そう言つてなんとかこの場を切り抜ける力達だった。

尚、シヤマルが楓への報酬は楓の趣味の限定超合金をはやての貯金で好きなだけ買って良いというものだった。

そして

「お前いい加減離せよ!」

「チュパチュパ」

何故か夢中で力のおっぱいに吸い付いているはやてだった。

「いででで乳首噛むな!」

歯茎で力の乳首噛むはやてだった。

そして乳児化したはやては南家で面倒を見るハメになった。

ベビー用品店

とりあえず乳児化したはやての為に紙おむつやら何やらを買い始める力、飛鳥、サイモン。

「お!これでどうだ!」

サイモンが紙おむつを持ってくるが・・・

「これ大きいよ・・・このはやてはまだ乳児だぞ・・・て!ちよつと待て!このお尻ふきじゃかぶれちゃうよ!」



色々ケチをつける力。

「そつえば！食べるのこれで良いよな？」

サイモンが再びベビーフードのようなものを出すが・・・

「アホか！歯が無いのに何で固形物もって来るんだよ！！良いか！  
！歯がないのに固形物は絶対ダメなの！！」

意外にベビー用品に対してうるさい力ちゃんだった。

お会計の時

「あら〜可愛い子ね〜誰の子？」

レジのおばちゃんにそう言われ飛鳥が・・・

「こいつの子」

力を指差した。

「て！飛鳥！おめえな！！」

「あら〜奥さん照れ屋さんのね〜」

おばちゃんは乳児化したはやてを力と飛鳥の子と勘違いしたらしい。

南家

「・・・ちよつとこれ濃いよ・・・」

サイモンの作った粉ミルクにケチをつける力。案の定はやては飲ま  
ず薄めの物を作った。

「・・・」

しかしはやては飲まない。

「・・・」

流石の力も考え込むと飛鳥が・・・

「これじゃおっぱい飲ませるしかねえんじゃね？」

「お前出ねえだろ」

「同感」

シャマル先生に振つてみるが首を横に振つたりシグナムに振つてみ  
ると睨み付けてきた。それを見た北斗は・・・

「何でてめえらそんな無駄についてんのに本来の様をなさねえんだ  
よ・・・この無駄乳女」

「ムカ!!」

すると何故か力の服の中に潜り込むはやて。

結果

「ちゅぱちゅぱ」

「だから俺のおっぱい飲んでどうすんだよ!!!」

「でねえけど気に入ったって口だなありゃ・・・」

呆れる飛鳥。

その日の夜

乳児化したはやての夜鳴きボンバーで散々あやした力は・・・

「があ・・・があ!!!・・・」

疲れてぶっ倒れた・・・流石に疲れたのか普段かかない力だがイビキかいて寝ている。

翌朝

「ふああ・・・よく寝た・・・ん？何か妙に身体が重いような・・・!!!」

布団から起きると何故か自分の胸の上に乗ってるはやて。しかもしつかりしがみ付いている。

「・・・ちよつと待て・・・何でこんな事に？」

「悪い・・・そうしないと夜鳴き酷くて・・・」

頭かいて謝る飛鳥。

その時

「ん？何か妙にぬくいような！！やられた・・・」

朝早々はやてにお漏らしされてしまう力だった。

風呂に入ってはやてのオシメ変える力は・・・

「はやての野郎、元に戻ったらベビーシッター料タップリふんどくつてやるからな」

完全にやつれている力。かというはやては呑気に笑っていた。

「おいママー！」

「うるせえなお前は・・・」

古女房みたいに呼ばれた飛鳥はとりあえずミルク作って飲ませていた。

一方楓は

「うぎゃあああああああ！何ではやてさんこんなに仕事溜め込んでるの~~~~」

はやての山積みになった仕事を片付けていく楓。楓は馬鹿だが元々仕事に使う頭は持っていたらしくはやての仕事をこなしていた。

「くうう！！はやてさん！絶対にバイト代ふんだくっちゃる！！」

そう言っただけで楓ははやてのクレジットカードを持っておもちゃ屋さんに向かうのだった。

「おい！居たか！？」

「何処だ！！」

何故か家中何かを探している力と飛鳥。何を探しているかというところ

「はやて何処行った！？」

そう・・・力と飛鳥がウトウト寝てしまった瞬間はやての姿なかった。現在二階を搜索中。

「力！！」

「はうあー！！！！」

ベランダを見てみると屋根の上にはやての姿が・・・

「やばい！...！」

急いで1階に下りる力と現場で挑戦を試みる飛鳥。

「良いかはやて・・・絶対にそっちに行くなよ・・・絶対な・・・」

恐る恐る屋根の端にいるはやてに接近を試みる飛鳥。

すると

ポロリ

「のおおおおおおおお！...！」

屋根から落ちてしまったはやて。

そこに

「ダイビングキャッチ！！！」

下に到着した力がはやてをキャッチし事なきを得た。

「えらいぞパパ！チューしてあげたい！！！」

そう言う飛鳥と力ははやてを抱っこしながら呟いた。

「はぁ・・・お騒がせベイビーだなお前」

その時だった。

「ぱ……ぱ……」

「は？」

突然はやてが力に向かってパパと呟いたのだった。

そして飛鳥に……

「ママ!!」

「なぬ!!」

フリーズする飛鳥だった。

一週間後

「なあ……力君どうしたん？」

何だかんだで時間が切れて元に戻ったはやての視線の先には凄じ自己嫌悪の状態の力の姿が……

「ねえ、なんでウチの貯金こんな無くなってんの？」

楓の超合金代で消えてしまった貯金に何故か考え込むのだった。

尚力は……

「俺もう婿に行けない・・・」

「まあ・・・ダメだったらはやてに引き取ってもらえ・・・」

そう言っって頑張っって慰める飛鳥だった。



第二十九話 赤ん坊になったはやて（後書き）

くうく 今日には力君の悪戯ができへんかったな。．．．そうや．．．  
ここは同士を集めてみるか。日頃！ブログで掲載している八神流喧嘩術．．．技を直々伝授したろうやないか！！

次回！勇者指令ダグオンA's どっこい 入門！八神流喧嘩術

さあつて．．．今日の技もブログに載せなあかな。力君で実演してる画像付で。

## 第三十話 入門！八神流喧嘩術

### 第三十話 入門！八神流喧嘩術

ある日の南家

『私・・・実は・・・あなたが』

「・・・・・・・・」

何やら詰まんなさそうにゲームやってる力。

「・・・何やつてるんだお前？」

飛鳥が聞いてみると力がやっているゲーム・・・それはまじごと事無  
き・・・

「・・・ギャルゲー」

「・・・お前そういう趣味があつたのか？」

どう見ても興味なさそうな力に対して言う飛鳥に力は・・・

「・・・はやてに無理矢理押し付けられた」

このゲームははやてによって無理矢理押し付けられた。尚、力のゲ  
ームの文明はスー アミで止まっていた為、はやては態々P 3を

買ってまで押し付けた。

「……そこまでしてやらせたいか？このゲーム」

「はやての野郎1時間に1回メール送ってきやがって……」

通話とメールしか使わない携帯電話にはやてからの『ちゃんとやってるか?』という文章が送られていた。

興味本位で覗いてみる飛鳥。

「て……これあたしらがモデルじゃん」

ゲームの攻略キャラクターが何故か自分達八神組と似ている(というか参考に作られた)事に驚いている飛鳥。

「お前誰攻略してんの?」

「お前」

「なぬ!!!?」

何故か己が攻略対象にされている事に仰天する飛鳥。

「何で?」

「お前が一番害無いし笑い話で済むから」

「……ああ……それ言えるかも……」

恐らく八神組では一番大人しい飛鳥。ツッコミ担当の為か個性豊かなメンバーが揃っているせい不明。

ギャルゲー見ながら思った飛鳥。

「そう言えばウチの作者ってロマンスやらないよね？何でだろう？」

「苦手なものもあるんだろうけど。おおかたロマンスは皆様が十分にやってくださっているから自分はおえてやる必要はないだろうと思っただけじゃない？・・・ていうか見たいか？俺達のロマンス」

「見たくない」

「だろ？」

きっぱり否定する。そう言ってゲーム進める力とパソコンのインターネット見る飛鳥。

「そういえばはやての奴ブログやってるんだよな・・・どんなブログだ？」

はやてのブログをしてみる飛鳥そこには・・・

八神流喧嘩術！これで君も邪神や！！

「なんつーブログ作ってんだあいつは・・・」

呆れる飛鳥。

尚今回の力は大人しくゲームをしていようと考えていた。

はやての部屋

「ふう〜ブログ更新や〜」

ブログに己の技の動画（撮影者シャマル先生）を載せるはやて。尚、無料で見られるのだが一度は全部いつぺんに見てみたいという要望に答えDVDを発売した所、馬鹿売れしはやての懐はウハウ八になったのだった。

因みに本日の技

「唸れ必殺！スピニングストリング！！この技は左ジャブに神秘のエネルギーを込めて一気に解き放ち竜巻を起こす必殺技や！！」

尚食らった力の動画ではホントに竜巻が起きており力は大空の彼方に吹き飛ばされお星様になった。

ピンポーン

「ん？」

何故かインターフォンが鳴り出てみると・・・

「こんにちは〜」

何故かはやての家を訪ねてきた仮面ライダーDの所のはやて（以降

Dはやて）。

とりあえず家に招き入れいつものもてなしをするはやて。

「で〜？今日は何しにきたん？」

何やら神妙な顔のDはやて。そしてDはやては口を開いた。

「はやて姉さん！ウチに八神流喧嘩術を教えてえな！！」

「は？何を藪から棒に？」

Dはやてのいきなりの頼みに訳が分からないはやて。

「強くなりたいです！！（蓮ちゃんを悪い虫から追っ払う為に！！）」

野望ありありでDはやては、はやてに弟子入り志願する。

「けどな〜いくら別世界のウチでもウチの技（物理的な）覚える事できへんで・・・この間ガイ君が死にそうになっとなし・・・」

「大丈夫です！！ウチとて同じ八神はやてです！！」

「けどな〜・・・ウチの技って自然に見に着いたものやからな〜」

「ええんです！！ウチだつて強くなりたいです！！（蓮ちゃんに近づく悪虫がもう二度と蓮ちゃんに近づかないように）」

Dはやての目を見たはやては・・・

「まあ・・・まる聞こえの心の声は置いておいて～そこまで本気なら教えたるわ」

「どつきーん!!」

心を見透かされてタジタジになるDはやてだった。

とりあえずDはやてにブログのDVD見せるはやて。

「おお!凄い!これどうやったら使え・・・」

早速必殺技について聞いてみようとしたDはやてだが・・・

「じゃ・・・見せたから後は勝手に使つて・・・」

「ええええええええ!!」

飛鳥と同じ方法をとるはやて。

「いやや～!!教えてえええ!!」

「ええい!離しい!!」

車椅子で思いつきりDはやてに掴まれるはやて。

結局

「ええい!踏み込みが足らんわ!!」

「せいせい!!」

みっちりくつきりDはやてを鍛えるはやて。そしてはやても車椅子に乗った。

「ん？はやて姉さん何するんや？」

Dはやての質問にはやては・・・

「必殺！車椅子力ポエラ!!」

そう言つて車椅子に跨つたまま逆立ちし縦横無尽に車椅子で打撃を披露するはやて。

「あの～はやて姉さん何でそんな曲芸覚えたん？」

「力君にお仕置きしておると必然的に身につくんよ」

「んじゃ・・・ウチも力兄みたいな人見つければ・・・」

等とくだらない事を考えるDはやてだった。

## 力の部屋

『私・・・ずっと前からあなたの事が・・・』





何故か先ほどのゲーム中の人物と同じコスプレしてゲームのエンディングをやり始める力と飛鳥。

「俺はお前を絶対に幸せにして見せる!!」

「うん！私！嬉しい力」

「飛鳥」

と妄想に酔ってしまい抱き合う力と飛鳥。

そこに

「・・・何やってるんやあんたら？」

サーーーーーーっ!!! 血の気が引く音

勢い余ってはたまた悪ふざけし過ぎてノリにのってしまったところに帰ってきたはやて。

「いや！この!!それは!!」

「まあ・・・相手は飛鳥やからな」

安心する力だが・・・

「・・・だから言つてウチが許す思つてるんか？」

「えーけどこれは!!」

「はやてちゃん ちょうどええ〜実験台が出来たで〜」

そうやって力を庭まで連行するはやて。尚飛鳥はお手上げを表明している。

「ほなくて・・・これが新必殺技や!!!」

本日のブログ更新

必殺技 白鷺の舞

魔力を全身に纏い手裏剣を投げた後に人間の急所に的確に正拳突きを入れる技。かなり痛い。

尚、このブログ更新後人々が真似し始めたことによりはやてが怒られまくったのは言うまでもない。

### 第三十話 入門！八神流喧嘩術（後書き）

女性・・・それは太古の昔より男性達の下にあるものだと考えられてきた・・・そして現代でも一部の人間はその考えは変わらない・・・そんな中！女性達は立ち上がった！！

次回！勇者指令ダグオンA's どっこい 女性達の反乱

ちよつと！ダグベースに立てこもるな！！



それはある日の食堂での出来事だった。

「男なんて皆ゴミくずよ!」

とある女性局員がいきなり立ち上がりそう叫んだ。

女性局員の主張としては毎日お茶くみだの全ての雑用を押し付けられるとの事で自分たちは同じ局員ではなくむしろ使いつぱしりのような存在だ・・・

その他も家に帰っても家事労働育児などもしない飲んで遊んで気ままに帰って家計すら省みないそうである。

だが近年の作品では男なんて要らない男の存在価値など地の底などとはたまたま男には仕えない兵器や登場人物のほとんどが女であり男の存在意義が全く無い、男という人種は世界が始まったころから存在しなかった、男などこの世に必要無い、男など存在する価値も無い・・・ぶつちやけ男が居なくても世界が成立する作品等が多い中今更このような発言をされても困ってしまう数少ない男性局員たち。

一部の女性はこの人男の人にロクな目にあっていないのだろう程度にしか思わないであろうが・・・

男性理想主義者の居ない女性線化の時空管理局では・・・

『うおおおおおおおおおおおおお!』

この出来事があの時空管理局を崩壊させまで至った地獄の日々の序章とは誰もが思わなかった。

この時から女性局員の反乱が始まった。

男性局員に対する徹底的な雑用の拒否。

男性とのフォーメーションを組まない。

男性とのタッグを強制的に解除する。

男性局員のデバイスは整備しない。

男性からの命令を拒否するなど徹底した反論が始まってしまった。

その中には我らが管理局の邪神や砲台と死神まで居たことは黙っておじつ。

仕舞いには

「覚悟おおおおおおおおお！……！」

「うぎぎゃ あああああああ……！」

男性局員への女性局員の新聞紙ブレードによる強襲という武力による主張まで始まってしまった。

「うぎぎゃ あああああああああ……！」





「ぬがあああああああ!!」

男性局員に新聞紙ブレードで辻斬りに会うフェイト。

男性局員たちも立ち上がった。

武力勢力による主張はそれに対する反武力勢力を生むのも長い歴史が教えてくれることである。

「ぎゃあああああああ!!」

「のおおおおおおお!!」

男性局員に次々とピコピコハンマーで通り魔に会う女性局員たち。

こうして管理局内で女性と男性の二つの勢力が衝突を始めてしまうのだった。

尚不幸中の幸いなのは武装がハリセンや新聞紙ブレードで終わっている事であろう。

管理局各所で襲撃されあつ局員たち。

そして勢力に対しては意見の不一致から勢力は数々の派閥に分かれもした。

ひたすら戦いを求める・武力革新派

武力ではなく交渉による解決を求める・穏健派

はたまた男性と女性に対する溝を作る新たな社会を広げようとする・  
新改革派

また上で申し上げた方法以外の解決策を模索しようとする・模索派

こんな作品等終わってしまえなど思っている・作品終了派

憎しみの対象を日頃からの恨みをこめて、全ての憎しみを高町なのはにぶつける・なの死ね団

また上記の原因を作った管理局とは全く関係の無い南力に憎しみを向けた・力死ね団

インターネットの創作サイトなどで己の主張を作品にする・創作物  
推進派

ひたすら己の主張を広告などに貼り付ける・広報課

雑誌新聞社などに暴露する・ドラゴンアームズ

はたまた戦いの虚しさを歌にして使えるシンガーソングチーム・ラ  
イオネスダンジャー

など、既に全員が何の為に戦っているのかもすら忘れ始め管理局内  
部基盤は完全に崩壊の足音を立てていた。

だが驚くべき事管理局本来の機能はちゃんと維持していた。

管理局近くにできたキャピトラダグオン店

「……………」

光太郎がカウンターから外を見てみると全方向を注意しながら自宅に帰っている男性局員と女性局員。

「物騒な世の中になっちゃったね……………」

等と犯罪者ではないにしろ時空管理局の内政事情に同情する光太郎。

「…………人が人を疑うなんて嫌な時代だね……………」

歳不相応にそう感じる畢。

尚力たち八神組五馬鹿とシャマル先生は永久中立地帯？であるキャピトラに非難した。

「…………止められないですか？」

「あれで仕事だけはちゃんとやってるから止める理由は無いのよね」

楓の言葉に答えるシャマル先生。尚ここ数日シャマル先生が治療した局員は数知れず…………一般的は医者 of 作業効率としては24時間でオペのフルコースをやったものであるが特に疲れた様子は無い。

それもこれも普段から力のありとあらゆる【致命傷】を治療しているからであろう。

「けど仮にも天下の管理局で二派に分かれて内部抗争なんて良いの

かな」

「まあ・・・お偉方も自分の首が飛びかねないから黙認してるんでしょ・・・家の妹も何をとち狂ったのか抗争に参加しちゃったよ・・・」

光太郎の疑問を返す飛鳥。

「メنزってそんなに役に立たないかな？」

ライダーズバルに相談してみる力。

すると

「うん・・・少なくとも光太郎さんは炊事洗濯ゴミ出し育児はやってくれるよ」

「で？お前何やってんだ？」

「！！」

考えてみると思いつかないスバルだった。

そして畢が・・・

「お母さん普段仕事してご飯食べてるだけだよ」

「！！おめえ家事労働やってねえじゃねえか！！」

力の言葉にスバルは・・・

「だってやるうとすると光太郎さんが全部終わらせてるんだもん  
(泣)!!」

「・・・いや・・・僕がやってることなんて最低限のことしかやって  
ないよ」

家事労働全て光太郎にやってもらっている事に涙流しながら自己嫌  
悪するスバル。しかし光太郎にしてみれば店の開店準備の延長戦で  
しかない為特に気にしていない。

そして畢が・・・

「けどお父さん家事はやるけど植物の世話とか苦手だよ・・・この  
間もティア姉ちゃんが持ってきたお花水あげすぎて枯らしたし・・・  
何というかお互いの欠点補い合ってるんだよこの夫婦」

「だから！夫婦じゃないって!!」

「はははは・・・」

絶叫するスバルと苦笑いする光太郎。

「こういうのをリア充っていうのよね」

「リア充ってなんだ？」

「現実が充実している人のこと」

「変な略し方するな!!」

等と力にとつてはあまり理解できない言葉のようだった。

そして情勢が崩壊し始める管理局。

だがその時立ち上がった一人の男が居た。

「さあ・・・皆さんお話ししましょうか？」

ものすごく怒っている八神組会長ノルウエルさん。どうも出張していたらしく帰ってくるとんでもない事になっていた為完全に怒っていた。

「悲しいですね・・・私の若いころはですね・・・」

その後ノルウエルのお話は午前6時から午前5時まで続き給与査定が地の底まで下げられたのだった。

尚、ノルウエルが帰ってきた事により前代未聞の時空管理局抗争劇はこうして幕を閉じるのだった。

第三十一話 女性たちの反乱（後書き）

今日はリリカルクエストのロードだぜい！！そろそろ中盤に行かないといけねえんだぜい！！て？ティアアナ？ん？お前はライダーティアアナか・・・ちょっと待て！！何で俺に銃を向ける！！

次回！勇者指令ダグオンA's どっこい リリカルクエスト3

北斗が二人になった！！

## 第三十二話 リリカルクエスト3

データをロードします。

「いやゝ急に世帯が賑やかになったなゝ」

とある町の宿で勇者力が眩いた。

八神組、影の守護者、一行様、ライダー南家、仮面ライダーD組を引き連れているその時思った。

「パーティの出撃枠が足りなさそう・・・」

## 第三十二話 リリカルクエスト3

とある道具屋

「兄ちゃん・・・」

「お！我が弟！！どうした！？」

道具屋に買い物に来ていた力が見たのは力の弟・新次郎だった。ここでは道具屋さんやっているようだ。



「兄ちゃん！！これ持っていつてよ〜」

新次郎に道具屋に案内されるとそこにいたのは・・・

「シグナムさん・・・」

「ん？力？」

道具屋の奥で呑気に干物作っていたシグナム。

「シグナムさん！兄ちゃんが着たから戦いに参加できるぞ！！」

そう言つてシグナムを追い出そうとする新次郎だが・・・

「・・・戦うより干物作っている方が面白い」

「ええええええええ！！？そんなのシグナムさんじゃねええええええ！！」

「まずつた・・・」

戦いより干物作っている方を選んだシグナムに絶叫する新次郎と焦る力。

実はバトルマニアとして有名なシグナムを暴れさせない為に火属性の能力を利用して干物作りでもやらせてみた所、和食好きが講じたのか当人はハマったらしく干物作りに熱中するようになりバトルの被害を抑えられるようになったのだ。



「は！？干物作るための魚調達してこいって!？」

力の言葉にシグナムは・・・

「貴様・・・干物作りを否定されたら私はどう自分を表現すればいいんだ!?!」

凄まじく絶叫しながら主張するシグナム。

（（そういう問題か？）（）

等とシグナムの干物作りに啞然とする力達。

という訳で川魚で手を打ってもらうことにしたため魚漁といえは・・・

「何で俺なんだよ・・・」

しかめっ面で川に糸たらしている北斗。

「そりゃ〜ダ〜リンそれが本業じゃん!」

「お義父さん!本業の見せ場です!!!」

嫁娘の超期待の眼差しで見られて頭に筋浮かべる北斗。そしていつもの通り瞑想した。

気力で自然の流れを読んでいるのだ。

そして

「はあ!！」

必殺の一本釣りで見事な鮎を釣った。尚、北斗は一本釣りに拘っている。理由は一本釣りの方が魚の質がいいと思っているからだ。

早速シグナムのところに持っていくと・・・

「おお!見事な鮎だ・・・私も連れてけ」

こうして仲間になったシグナム。尚、新次郎は干物地獄から開放され大喜びで店に置いてあった道具を渡すのだった。

尚シグナムのレベルは92だったりする。

一向はサイモンが居るであろう城に向かって進路をとるとモンスターが出現した。

「みんな!戦闘準備!！」

そう言っつて戦闘を始めるパーティだが・・・

ガンガンガンガン!!!!

次々と射殺されるモンスター。経験値を稼ごうとしていた為イベントのように撃破されてしまい経験値をゲットできなかつた。尚全員がある人物を睨むと・・・

「北斗！お前！！」

「……俺じゃねえぞ」

「私よ！！」

その声と同時に降り立ったのはこれまたザ・グレイトバトル？のロアの衣装で出てきたティアナ。尚持っているのはロアの銃だったりする。

「ちよつと！ティアナ！お前経験値泥棒するなよ！！」

文句言う力。するとティアナは……

「……誰？」

「へ？」

力の顔を知らないティアナ……結論。

「これは！ウチのティアです！！」

ライダーズバルの一言でこのティアナがライダーティアナだと確信したメンバー。

「まあ……ウチの妹よりはっちやけてそうだな」

そう飛鳥が考察する。

「そんなにはっちゃんけてますか？私」

ティアナの意見に頷く光太郎と畢。

「ティア姉ちゃん・・・ウチの最終決戦夜道歩くときは後ろに気をつけるって言って実践したし」

凄まじく気まづくなつたパーティ。

「てめえなりの気遣いか？幼稚な女だ」

「・・・ムカ!!」

北斗の嫌味にティアナの中の何かがキレ北斗に銃を向けた。

「・・・いつペン死ぬ？」

ティアナの売り言葉を北斗は・・・

「おもしれえ・・・今すぐ神の元に送ってやる」

買ってしまった。

「」「やめるー!!」「」

この後北斗とティアナの銃撃戦を全員で止めたのは言うまでもない。

そしてサイモンが居るべき城に着くと・・・

「いや、良く来てくれたね」

王座に寝転がっているサイモン。その姿に力たちはいらっとしていた。何せ自分たちが苦勞しているときにこいつだけ王様で豪遊していたからだ・・・

「サイモン君」

何故かサイモンの冠の中から出てきたリイン。余程サイモンの頭が気に入ったらしい。

「で？お前は何をすれば仲間になるんだ？」

「ああそうそう！俺の場合この先の洞窟のモンスターを倒してくれば仲間になるんだと・・・」

とりあえず人数が多すぎるのでパーティ編成をした。

選択メンバー

勇者力、槍士光太郎、闘士スバル、槍士ユウだった。

海の近くの洞窟

「うおりゃあああああああ！！」

とりあえず装備の棒切れ振り回してモンスターを倒す力。

「何で初期装備？」

「色々こだわりがあるんじゃないの？」

光太郎の疑問にツツコミを入れるスバル。

そして光太郎とスバルも何かの巻物を読むと・・・

「合体技！！」

水まき始めた光太郎と種まき始めたスバル。本来グレートとの合体技ジャックと豆の木を披露した。

「うわ・・・光太郎さんが不真面目な技披露してるよ・・・」

そう思いながらユウもモンスターを薙ぎ払った。

そして地下へと突き進む力達は町を騒がせているモンスターを見つけた。その姿は巨大なドラゴンだった。しかも凶悪そうな顔だ。さらにデカイ・・・

『ウオオオオオオオオオオオ！！』

ドラゴンの吐く炎を防ぐ光太郎。

「うおりゃあああ！！」

ユウも飛び掛り槍で刺すが・・・

「ああああああああああああああ！！！！」



ドラゴンの図体がでか過ぎる為効果が薄い。

「そりゃああああ!!」

初期装備の棒切れで殴る力だが効果は薄かった。

「大きいな・・・そうだ!!」

スバルが巻物レベル3を発動し飛び上がった・・・

結果

『ギャウ!!』

巨大化したスバルによってドラゴンは踏み潰された。しかもペラペラになっている。

「そ・・・そんな手段あり?」

「流石ザ・グレイトバトルの技・・・」

ユウと力がそう言つと・・・

「スバルちゃん!あんまり動くと踏み潰しちゃうからやめてね」

光太郎の言葉にスバルは元に戻ろうと試みるが・・・

「戻れないよ」

技が終了してないので元に戻れないスバル。やったはいいが後のことがどうにも出来ない瞬間だった。

すると・・・

「いた!!」

天井に頭をぶつけたスバル。

ピンポン

ここは海辺の地下・・・

「うわあああああ!!水が流れてきた!!」

スバルの開けた天井から落ちてくる水。

「うわっぶ!!」

「ぎゃあああああ!!」

水に流される光太郎とユウ。

「不味い!!」

とりあえず巨大化したままのスバルが光太郎とユウを回収し最後に力を回収しようとするが・・・

「・・・なんか嫌な予感が・・・」

水が落ちてくる絶体絶命的状態で何か嫌な予感がする力。

その予感が当たり現れたのは・・・

「うおおおおおおおおお南力はどこだあああああああああああああああああ!?!」

「げ・・・佐津田のおっちゃん」

佐津田刑事登場に啞然としながら水に流される力たち。

「ぶは!!」

水の中から這い出てくる力と佐津田刑事。

「南力!逮捕だ!!」

「しつこいぞおっちゃん!こんな夢ん中まで追いかけてくんよ!!」

「例え夢の中でも!貴様を逮捕するためなら例え火の中水の中!!」

「そんなこと言ってる場合かよ!!」

「やかましい!とにかく逮捕だあああああああ!!」

「ちょ!力さん!流されないでよ!!」

水に流されながらいつものように言い争う力と佐津田刑事。尚このスバルはライダーズバルの為佐津田刑事との面識は無かった。

尚、結果的に巨大化したままのスバルが佐津田刑事以外を拾った為何とか脱出できた。

「うわ！スバル！覚えていろ！！」

佐津田刑事はダグオンティアナが回収していった。そしてダグオンスバルが何故か怒られまくったのは言うまでもない。

「ねえ・・・早くもとに戻してよ」

城に帰ったスバルは元の大きさに戻れなかったため楓、ミツキと頭脳労働者がスバルを元に戻すのに苦労していた。

「こうしてみれば？」

「いっその事穴あけて空気抜いてみれば・・・」

等と苦労している。

「うえええええん！！なんとかしてええええ（泣）」

「うるせえ殺すぞ（うつさい殺すわよ）！！」「」

そう言って北斗とティアナに銃向けられながら脅される巨大化したスバルだった。

そして

「いや～ありがとうね～俺も付き合っよ～」

呑気に合流したサイモンだった。

尚サイモンは最後に合流したためボコボコにされたのは言つまでもない。

データをセーブします。

第三十二話 リリカルクエスト3（後書き）

とりあえず現実に戻ってきたか・・・さて暇だし干物でも作るかなに？新次郎が喧嘩で逮捕された？て！私は力に対する主ですか？ん？母上！？どうしました！？

次回！勇者指令ダグオンA's どっこい シグナム対力母

これが・・・一万人を束ねていた総長の力・・・

### 第三十三話 シグナム対力母

ある日の南家

トントントン……

北斗がまた大漁に売れ残りの魚を持ってきたので呑気に干物作っているシグナム。

「ふ……今日はこうしてみるか」

バトルマニアの異名をとっているシグナムだがその戦闘を制限させるべく皆で干物作りを進めたところはまったくらしくバトルの被害を防ぐことに成功した。

「よー」

味を調べているシグナム。

すると電話が鳴った。

「はい南です……はあまたですか」

何やら会話が成立しどこかへ出かけた。

第三十三話 シグナム対力母

近所の交番

「またか・・・」

ため息吐きながら交番に来たシグナム。するとそこには傷を負った新次郎とズタボロにされた二人組が居た。

「あ・・・シグナムさん」

「・・・新次郎・・・貴様またやったか」

「だってこいつら子供相手にカツアゲしてんだもん!!」

南家の鋼鉄の掟『悪党とは徹底的に戦いましょう』を実践した新次郎に呆れるシグナム。

その時一台のタクシーが交番の前に停まった。

タクシーの運転席から出てきたのは・・・

「母殿!？」

出てきたのは力母こと南透・30代前半くらいに見える40歳。

「すみません!すみません!ウチの馬鹿息子が何したか知りません



けどとにかく私が謝っておきます！！すみません！すみません！」

新次郎を逮捕している警察官に向かって土下座しまくる透。

「そうちよ．．いえ！お母さん落ち着いてください」

「すみませんすみません！！」

すると透は新次郎が傷つけた相手に向かって謝るが．．

「うるせえんだよ！ババア！！」

「ババア．．．」 目覚めた族の血

「ひ！！」

何やら透の様子に怯えまくる警官。

すると透は机に向かって．．．素手で．．．

ズガシャン！！

机を木っ端微塵に破壊した。

「舐めた口聞いてんじえねえよヤキいれっぞ！！！！！！」

「ひいひいひいひい！！総長落ち着いてください！！！」

その光景に唾然とする少年たち。

「萩谷！！おめえが甘い顔してるからんなガキ共がつけあがんだろ  
うが！！！」

「ひい！！総長すみません！！！」

実はこの警官、透の族時代の子分の一人だったりする。

「お前等！！この方をこれ以上怒らせんじゃねえ！！この方は俺ら  
一万人を力で纏め上げた南透さんだ！！！」

「！！！！」

その言葉に震え上がる少年たち。

実は透の伝説は今でも語られていた。かつて一万人の子分を力で束  
ねた伝説の暴走族の女総長。

そして警察に伝わる血で血を洗う伝説の戦いの発端者でもある事を。

その凶は・・・

十数年前の何処かの廃工場

警察が周辺を包囲し一斉突入を開始しようとしていた。

『暴走族の皆さん〜無駄な抵抗は止めて速やかに投降しなさい〜  
私たちとて全面戦争をする気は無い』

拡声器を持って説得を試みる新吉。根元巡査に至っては重装備で待機していた。

すると

「うるせええ！！マツポが怖くて族やってられっかよ！！」

鉄パイプ振り回しながら新吉の前に現れる若き日の特攻服姿の透。

『速やかに投降しなさい』

「うるせえんだよ！！あたしが相手になってやるよ！ああ！？サシで勝負する度胸もねえ癖によ！！」

明らかに新吉を挑発する透。

すると

「なるほど・・・サシで君に勝てば投降してくれるんだね？」

「ああ！！だけどな・・・子分たちに何かしてみろ！！あたしがこの場でぶっ殺してやつからな！！」

「いいだろう・・・」

その言葉をゴングに新吉と透の警察に残る伝説の戦いが始まった。

相手が女であろうが容赦しない新吉と歯向かう者を拳で黙らせようとする透。

打撲や出血は当たり前・・・更には廃棄されていたブルドーザーを持ち出した透と突進してくるブルドーザーを駆け上がり透を蹴り落とす新吉。

尚その光景に警官は愚か透の子分達も震え上がっていた。

後に根元巡査はこう語る

(あれは人間の戦いなのですか!?)

そして

「ぜえ・・・ぜえ・・・」

「はあ・・・はあ・・・」

殴り合いの果てに既に着ている物が赤く染まっている新吉と透。

だが先に倒れたのは透だった。新吉も透のそばに倒れる。

「・・・へ・・・男であたしを倒した奴はあんたが始めただよ・・・」

「君もやるじゃないか・・・根っからの悪党ではないようだね・・・」

「「だっはっはっはっは!!!!」」

昨日の敵は今日の友なのか肩組んで笑いあう新吉と透。

尚この後透の指示により暴走族たちは全て投降しお説教だけで済んだのだった。

尚、この出来事が新吉と透の馴れ初めであつたりする。

「・・・何となくこの力が喧嘩が滅茶苦茶強い理由が分かつた気がする」

交番でのお話を終え南家に帰還したシグナムは南家の面子を見てそう呟いた。

凄腕警官の新吉と一万人の子分を束ねた暴走族の透。

血筋的に喧嘩の腕だけは特化しているようだ。

「それにしても・・・シグナムさんすみませんね・・・ウチの息子がご迷惑おかけしまして・・・」

「いえ・・・その・・・」

透の変貌振りにタジタジになるシグナム。その姿は邪神化したはやてに匹敵するほどの怖さであつたからだ。

「はぁ・・・シグナムさんみたいな人がウチに来てくれればねえ」

「へ？母殿何言ってるんですか！？」

「・・・ジヨークが通じないわね」

そう言つて透は美味しそうにシグナムの干物を平らげた。

「いや母殿・・・私にはとてもじゃないですけど嫁ぐのは・・・」

「南家の嫁になる人は強くなくちやいけないのよ・・・旦那の暴走を止める為に・・・」

「あの・・・あの温厚な新吉さんが暴走したんですか？」

「皆走らないけどあの人は結構やんちゃしてたわよ・・・」

実は力たちの知らないところでやんちゃをしていた新吉。

「それにしても・・・興味あるかな？シグナムさんの戦い・・・」

「へ？」

透の何か言い知れぬものにあっけらかんとするシグナム。

その結果

「何故こんなことに・・・」

騎士甲冑姿で特設された訓練所に来たシグナムと透。

尚透の武器は・・・

「あの・・・鉄パイプですか？」

「いや、これ族時代から使ってた奴だし、愛着があるし」

「あの・・・母殿南家の喧嘩は素手が基本じゃ・・・」

「武器を持っている相手には武器使っていないのよ」

透のテンションについていけないシグナム。

(まさか・・・私このまま新次郎のこと貰わなきゃいけないのか？  
確かにあいつは私の干物を律儀に食べてくれるが・・・まあいい今  
日はどの干物を作るか・・・)

等と考えていると透に急に懐に入られたシグナムは鉄パイプの一撃  
を咄嗟にレヴァンティンで防いだ。

(な！なに！？気配が読めなかった！？)

透から凄まじい実力を感じるシグナム。

すると

「く！素人相手に大人気ないが！」

そう言って透に非殺傷設定でレヴァンティンを振り下ろすシグナム。

すると

ドーン

凄まじい爆音と共に周囲に煙がまった。

「いかん・・・本気になってしまったか「隙が大きいよ」なに!？」

突然背後から現れた透に驚くシグナム。

(化け物かこの母殿・・・いや・・・あの化け物の母殿だけはあ  
るか・・・)

次元世界最悪の悪魔の母である事に納得するシグナム。

「はあ!！」

シグナムがレヴァンティンを再び構えたその時。

「ふん!！」

シグナムの懐に入りレヴァンティンを持っているシグナムの両腕の  
手首を凄まじい力で掴み取る透。

「これは・・・力の・・・」

力の剣に対する喧嘩技の一つ・剣封じ。剣を持っている手の手首を  
つかまれば剣を持つ手は身動きが出来なくなり無力化させること  
が出来る。

だがやるには相当の腕の力や握力、そして度胸が必要であるためま



ともな人間はやらない。

「腕は落ちてないわね．．．あの子にこれ教えたの私だし」

「なぬ！！」

新吉だけだ無く透も力に喧嘩を教えていた事に啞然とするシグナム。

「いや〜楽しかったわ！それじゃ！」

意気揚々と帰っていく透に対しシグナムは．．．

「一般市民に負けた！！」

一般市民に負けた事に愕然とするシグナムだが忘れてはいけない。  
透はかつて自分たちを暗殺に来た宇宙人を物干し竿で撃退したのだ．．．一般市民ではないだろう。

552

翌日

「立て！新次郎！お前の実力はその程度か！？」

「え！シグナムさん！何で俺こんな目にあってるの！？」

朝っぱらからシグナムの特訓に付き合わされる新次郎。

その理由は．．．

「貴様の母殿を倒すため．．．私は強くならなければならんだ！

「！」

「いや！シグナムさん！それって誤解生むって！！」

「問答無用だ！！」

「ぎゃあ！シグナムさん！それモノホンのレヴァンテインじゃん！  
「！」

この時新次郎は思った。

「俺……シグナムさんに貰われなきゃいけないの？」

### 第三十三話 シグナム対力母（後書き）

突然ですが・・・私南力・・・ちつちやくなりました！え！？何がどうしてこうなった！？何々・・・天野博士が作ったミラクルミニチユアマシンのせいだって！？勘弁してよ！

次回！勇者指令ダグオンA's 小さくなった力

こら石に括り付けるな！！

### 第三十四話 小さくなった力

それはある日のことだった。

「何でこうなったんだろ・・・」

「何でやるのかな？」

何やら南家のリビングで見詰め合っている力とはやて。

その理由は・・・

「何でだろうな・・・」

小さくなり、はやての手の平の上に立っている力だった。

### 第三十四話 小さくなった力

「で？何でこうなった？」

テーブルの上に力を乗っけながら考えるはやてとリインよりも小さ

くなつた力。

「昨日！」

考えてみると何かを思い出した力。

昨日の天野平和科学研究所にて

「できたぞい！！」

天野博士が何かの発明を力たちに見せびらかした。

その名は・・・

「名づけて！ミラクルミニチュアマシンじゃ！！」

「何それ？」

ケンタが天野博士に質問してみると・・・

「これはな！どんな物でも小さくする事ができるんじゃ！これさえあればもう！荷物の置き場に困ることがないぞい！」

ナンバーズたちの買ってきた荷物が増えすぎ置き場に困った為にその荷物自体を小さくすればいいのであるうと考えたのだ。

「んじゃ早速！」

天野博士がセインの使っていないどんぶりを置き、装置を起動させると……

「こんにちは」

研究所を訪れた力。すると天野博士の手元が狂い標的が力になってしまった。

「ぎゃああああ!!」

装置の光線を一心に浴びる力。

だが……

「何も起こらないよ?」

力の身体に変化が起きないことに疑問を感じるケンタ。それを見た天野博士は……

「失敗したようじゃの……」

そうがっかりするのだった。

そして

「つまりその時浴びちゃった光線が今頃になって効いてきてミニ化したゆうんかい」

「だな」

はやてに持たれながら天野平和科学研究所に向かう力。

「はやて・・・はなせよ・・・自分で歩けるって」

「ええやん！持ちたいんや」

（・・・こいつこのまま元に戻らないほうが良いと思ってんじゃねえだろうな？）

ありえない事ではない。このまま小さくなっていけば力は行動が制限され近所迷惑はやての持病の神経性胃炎を悪化させないからである。

そんなこんなで天野平和科学研究所に到着すると・・・

「なぬ！！博士装置壊しちゃったの!？」

「うん」

気まずそうに言うケンタに開いた口が塞がらない力とはやて。

「だってじいちゃん皆から唯でさえ置き場が少ないんだからこんなもん作るなって、ハルカやウエンディ姉ちゃん達に文句言われて」

「それで壊しちゃったの？」

「うん」

その結果しばらくこのままですす羽目になった力。

よって

「あちゃあああああ!!!!」

コーヒーカップの中にダイブしてしまう力。小さくなったせいでコーヒーカップがプール並みにあるのだ。

すると

「ん？電話やはい！天野ですがん？空将？」

電話が鳴りはやてが取ると・・・

「なに！？爆弾事件発生やて!？」

ノルウェールからの救援ですぐさま力を物みたいに持って現場に向かうはやて達。

ビル街を走りながら到着した現場では佐津田刑事やらティアナやらがパトカーに乗って待機していた。

「佐津田刑事！現状は!？」

はやてが佐津田刑事に状況を確認している。

「厄介な状況だ・・・犯人は彼女に振られて泥酔状態・・・」





「行ってこい！！44おおお！！ソニック！！！」

「うわああああああああああ！！！！！」

そう言うてはやてに爆弾の場所に投げられた力だった。

「いたた・・・くそ・・・はやての奴元に戻ったら覚えてるよ！！！」

石にプレスされながら這い上がってくる力だった。

建物内を散策していると巨大な爆弾を見つけた力。

「ええつと・・・ここか・・・よっし」

そう言うて力が取り出したのは楓が趣味で作った宇宙装甲グレン製爆弾解体グッズだった。

「小さくても丈夫だからって大介さんに無理言ってまわして貰いやがって・・・はやて始めるぞ」

(はいはい)

はやての念話を拾う力。念話の送信は出来ないが受信は出来る為、はやては力の居るポジションを索敵でイメージを浮かべながら会話が成立していた。

「いつしよいつしよ・・・」

はやての指示で爆弾を解体していく力。

「ん？」

決まり通りの赤と黄色の線を見つける力。

（力君！黄色や！）

「よっと！」

はやての指示通り黄色い線を切った力だが・・・

「ごめん力君！！そっちトラップやった！！」

「なぬ！！は！！！」

突如爆弾が赤く光りだした。

「どっしょよう！！こっなりやああああ！！！！」

爆弾を担ぎ上げて脱出を試みる力。頑張っって走って外に出ると・・・

「おりゃああああああ！！！！」

空中のどうでもいい所まで爆弾を持ったまま跳んだ。

結果

ドッカーン！！

「あーれー！！！」

空中で爆弾が爆発し大空の彼方へ吹っ飛ばされる力。

ポチャン

どっかの水の中に落ちた。

『おい力君どこや〜?』

お蔵入りしていたゴッドファルビリオンで力の吹っ飛んだであろう方角を探すはやて。

「居ないな〜」

コックピット内ではやくはやて。

「はやてちゃん海鳴のマップを見ると・・・」

シヤマルがマップを表示すると力が吹っ飛ばされた方角には果てしなく広い海が・・・

「じゃあ・・・力が吹っ飛んだのって」

「可能性大よね・・・」

「ちゆうことは力君を・・・この広い海から探すんかい!!」

頭を抱えて絶叫するはやて。

その後、大変に迷惑をかけていい八神組（初代ダグオン含む）と楓軍団（レジエンドラの勇者と勇者特急隊含む）をフル導入でサルベージした結果、奇跡的に力は深海から救助されるのだった。

第三十四話 小さくなった力（後書き）

くっそ！ひどい目にあつた！！ん？今日はまともな夢が見られるのか？何々・・・思い通りの夢を見られる方法で？枕の下に好きな本を置くって？よっしやってみるか？

次回！勇者指令ダグオンA's どんこい 夢騒動

て！俺の夢邪魔すんな！

## 第三十五話 夢騒動

### 第三十五話 夢騒動

ある日の南家

「なあ力君知ってるか？」

唐突に何かを思いたったはやての言葉を聞く力。

「好きな夢を見るには枕の下に本を置くんやて」

「ふ〜ん」

食べ散らかした煎餅の欠片ほど気にも留めない力。

「最近はリリカルクエストの夢しか見てへんからな〜たまには別の夢見たいわ〜」

「リリカルクエストをとっと終わらせれば良いんじゃないのか？」  
等とツッコミを入れる力。

「まあええやん？飛鳥も世界のワインのぶどう農場の本持って寝たら夢見れて良い思いしたらしいで〜」

「まあ〜ぶどう素手で潰して果汁を飲むって言う粹な事やってみてえよな〜」

等という力。

「よっしや！！早速ウチの部屋から本のチヨイスや！今日も力君ちに泊まっていくわ！」

等といって南家の己の部屋にダツシユするはやて。

尚、何故八神家の部屋が南家にあるかという八神家の自宅は、はやてによる力へのお仕置きの為に破壊されることが多くその為改築時には建て直し中は南家に居候する日々が続いたため南家の何処かしらの部屋を占領していたのだった。

そして本日八神家は改装中である。

その夜

力の部屋

「まあ物は試しで」

布団敷いて枕元に料理本置く力。

「げっへっへっへ・・・こんなに食べきれるかな〜」

この男の場合は食い気しかないらしい。



料理本を枕の下に置いた力はそのまま就寝した。

夢

「あぐあぐ　ぴゅきゅ〜がつがつ!!」

円卓でおでん食べてローストチキン丸齧りしている夢を見る力。

そして出てきたのは・・・

「お！ステーキ　いったただっきま〜す」

そう言つてステーキ飛び掛ろうとした途端。

バチン　夢終了の音

現実

力の部屋に侵入したはやてが力の枕元から本を取り出していた。

「うつわ〜力君らしいわ〜・・・そうや〜ニヒヒヒ」

何かを思いついたはやては部屋から何かの本を持ってきた。

タイトル『女王様のエロ本』

「力君くムフフくな夢見んかいくけっけけのけく」

そう言っつて力の枕元にエロ本差し込むはやて。

再び夢

「・・・なんだここ？」

何かの臭いで目を覚ます力その先には・・・

「な!!！」

ピンポーン

ここから先は未成年に有害な描写になるためカットさせていただきます

現実

「うぎゃああああああああああああああああああ!!！」

近所に轟きそつな悲鳴を上げながら飛び起きる力。

「はあ!はあ!!鎖でビシバシやられる夢見たわ・・・ビシバシやつっていた人物誰だっけ？」

人物はスルーして呼吸を整える力。そして枕の下を確かめた。

「あれおっかしいなちゃんと本入れたのに・・・摩り替わってる」

本が摩り替わっていることに気づいた力。

「はやての野郎だなこんなことしやがったの」

目が据わった力。

南家ははやての部屋

「うつひゃっひゃっ」

はやてがベッドに持っているのは

タイトル・巨乳大全

早い話がエロ本である。

「いや〜この形ええなあ〜揉みきれるかな〜」

この辺りの発想はおっさんであるがとにかく枕の下に入れるはやて。

「それじゃ〜おやすみ〜」

就寝したはやて。

夢

「ええな〜ええな〜」

夢の中で乳揉みしまくっているはやて。物凄く鼻の下伸ばして  
幸せそうである。

「うっひゃっはっはは」

呂律の回らない笑いをしまくったその時

バチン 夢終了の音

現実

力がはやての枕元から本取り出す力。

「……エロ本って……女のくせにはしたねえ……ふっふっふ」

何かを思い懐からDVDを取り出す力。

タイトル・次元世界一恐いホラー映画

「こんな事もあるとかと楓に頼んで用意させておいたのだ。はやて  
ももの凄くく恐い思いしてもらおうかな」

はやての枕元にDVD押し込む力。

夢

「ん？どこやここ？」

何故か西洋的な墓地のど真ん中に立っている『丸腰』のはやて。

すると・・・

ブルーン

「ん？」

チェーンソーの音に振り返るとそこにはクリーチャー的なゾンビの  
群れがズラリと集結していた。その数60億人ほど・・・

「にげ！！ん！！」

『丸腰』の**はやて**が逃げようとすると足元からゾンビが現れはや  
ての足を掴んでいた。

そして

空中には妖怪まで現れクリーチャーゾンビは物凄く増えた。

それらが一齐に『丸腰』のはやてに襲い掛かった。

「ぎゃあああああああああああああああー!!」

ピンポン

こちら先、残酷な描写になるため心臓の弱い方の事も考慮してカットさせていただきます。

現実

「ぎゃあああああああああああああああああああー!!」

これまた近所に轟きそうな絶叫を上げながら飛び起きるはやて。

「何でゾンビがバズーカ持ってんねん!? て! 刀振り回すな!! く!! 返し討ちにするのも一苦労やったわ!!!!」

どうやら『丸腰』で襲い掛かってきたゾンビを返し討ちにしていたらしいはやて。中には宇宙怪獣もいた為素手で戦うのは苦労したら

しい。

ピンポーン

残酷な目にあっていたのはゾンビの方のようです。

「おつかしいな本・・・て摩り替わってるし・・・力君やなこんな事したの・・・ん？」

枕の下を確認したはやては力への怒りを奮闘させたその時、はやての髪の毛のアンテナが立ち力をキャッチした。

「何しとるんや？乙女の部屋で」

「いで！！」

脳天チヨップで力の頭を殴るはやて。

「いってえな〜馬鹿になったらどうすんだよ！？」

「心配しなくても力君はこれ以上馬鹿にならへん。何やこれ？」

力にDVD突きつけるはやて。

「それ言つならお前もこれ止めるよ」

はやてにエロ本突きつける力。

尚、両者物凄い言い合いの後。

「やるか!？」

「望むところや!」

いつもの喧嘩が始まってしまった。尚夜通しの騒動により多大な近所迷惑を起こしてしまい住民から苦情の嵐が来たのは言うまでもない。

そして力とはやては凄まじい睡眠不足のため授業中に居眠りしまくり先生に怒られまくるのだった。



### 第三十五話 夢騒動（後書き）

さつて次回は！俺の宿敵！頑固一徹熱血男！佐津田のおっちゃんとの抗争劇！普段俺が佐津田のおっちゃんからどうやって逃げるか！そして佐津田のおっちゃんが俺を捕まえるためのあの手この手の手段を一挙公開！！

次回！勇者指令ダグオンA's どんこい 力と佐津田の愛の逃亡日記

愛はいらねえよ！！！！

第三十六話 力と佐津田刑事の愛の逃亡日記

ある日の警察署

「佐津田君これどういうことかね？」

佐津田刑事が上司にガミガミ怒っていた。

その理由とは・・・

「天下の警察がこんな高校生一人逮捕できないなんて恥さらしだよ？」

そう言つて中指立ててアツカンベーしている力の写真を見せる上司。  
そう佐津田刑事が怒られている理由は力を逮捕に至らないことだったりする。

「しかし！あいつはいつも巧妙に逃げまして！！」

「だまらっしやい！さっさと彼逮捕してこないと君クビだよ」

「クビいい！？」

力の逮捕にクビがかかってしまった佐津田刑事だった。

第三十六話 力と佐津田刑事の愛の逃亡日記

警察署の駐車場で待機する佐津田刑事は怒り浸透している。

「ぬづづづづづづづ南力め!!」

力と関わりを持ってからロクな目にあってない佐津田刑事。いつも逮捕はするのだが『横暴だ』という空将の何かしらの圧力やらはやての土下座などもあり基本的に釈放されてしまう力。

「今度という今度は必ず逮捕してやる!!南力めえええ!!」

そうやってパトカー（後のガードスター）のハンドルと潰しかねないほどの握力で握っているのだった。

翌日

「あらよつと!」

ゲームセンターの道路に面した屋外のUFOキャッチャーで遊んでいる力。その風景は何処にでもいそうな唯の留年した高校生だが・

その日常風景は突如として壊された。

ピーポーピーポー

「ん？なんだ？」

何やらサイレンの音が鳴り響き全方位取り囲まれてしまった。

すると

「南力！逮捕だああ！！」

何やらコントローラーの様な物を持ってパトカーのボンネットの上に立っている佐津田刑事。

因みに力に身に覚えは・・・

「うーん・・・ありすぎてわかんない・・・」

毎度言っているように力は／＼

【人に恨まれるような人間】

である為心当たりが多すぎてわからないのと、恨まれる事などやり尽くしている為今更どうとも思っていない。

現に海鳴に住んでいる99.999999%の人間は力の事を嫌っている。

力の友達になろうとする人間は物凄く特殊か酔狂

な人物であろう。

「今日は貴様を逮捕する為に秘密兵器を持ってきたぞ!!」

「・・・なんだあれ？」

佐津田刑事がコントローラーを弄くるとパトカーの背後から巨大なアームを持った装甲車が現れた。

「・・・なんじゃあれ？」

「名づけて『南力キャッチャー』だ!!」

どう見てもUFOキャッチャーのアームが付いた装甲車。

それを見た力は・・・

「・・・ゲームセンターで思いついたのか？」

「喧しい!往生しろ!!」

「うぎゃあ!!」

等と言って南力キャッチャーに捕獲される力。

尚、近年佐津田刑事は力を逮捕するべくありとあらゆる秘密兵器を持ってくるようになった。

対南力用10連発発煙弾・対南力用武装スーパーパーパトカー・対南力用鳥もちゲル弾・対南力捕獲用パワードアーマー・対南力用特性ビ

ツクリ箱等・・・

尚この秘密兵器の開発費は警察の経費で賄っている為、経費を使い放題やっている佐津田刑事の行いに警察が物凄く涙目を見ているのはここだけの話である。

「くっそ！この！！」

何とかアームから脱出を図ろうとした力だが、自称『ドライアスが踏んでも壊れない特殊装甲』で出来ている為ダグテクターを装着でもしない限り物理破壊することができない。

尚今回の秘密兵器の開発費は佐津田刑事の年収分だったりする。

パワーアームがガツチリ力の事を離さない。

結果

「シャドー流！縄抜けの術！！」

竜から教わっていた縄抜けの術で脱出した力。

ピンポーン

縄抜けの術とは身体中の関節を外して脱出する忍法である。  
良い子は真似しないでね

「おのれ！南力！逮捕だ！！」

秘密兵器による逮捕を諦め物理的な逮捕に踏み切ろうとする佐津田刑事はコントローラーを投げ捨て手錠を持って力を追いかけ始めた。

尚、南力キャッチャーはすぐさま警察署の開かずのガラクタ置き場に投棄されたのは言うまでもない・・

「勘弁してくれ!!」

「とまれ!!」

足で逃げている力とパトカーで追っかける佐津田刑事。力はパトカーの追って来れないであろう裏路地などに逃げ込むと・・

「逃がさん!!」

どっからか乗り上げ片輪走行で細い裏路地入り込む佐津田刑事。

「て!おっちゃん!警察が法律を破っていいのかよ!!」

「やかましい!!貴様を逮捕する為なら手段は選ばん!!」

「うひゃああああ!!」

狭い路地を登って佐津田刑事のパトカーを回避する力。

「逃がさん!!」

パトカーを乗り捨て力を追っかけ始める佐津田刑事は力にかぎ縄を投げつけた。

「うぎゃああああああ!!」

かぎ縄で引つ張られる力は佐津田刑事に吊り上げられそうになると  
・  
・

「飛鳥曰く！捜査官は身体はどこかにナイフを仕込んでいる！」

そう言つて筆箱の中から工作用のカッターを取り出し縄を切つて脱出する力。

「貴様！カッターを持ち出すとは！銃刀法違反で逮捕だ！！」

「これはおっちゃんの冤罪だ！！」

そう言つて再び逃亡する力とパトカーに再び搭乗する佐津田刑事。

「これでも食らえ！！」

追っかけてくる佐津田刑事に向かつて竜からチョロまかした手裏剣を投げつける力だがパトカーに手裏剣は通用しない。

その時

「待て！この悪魔あああああ！！」

「げえ！死神！！」

上空から力を襲撃するべく降ってきたフェイト。もうフェイトに襲撃されなれたのか特にリアクションが無い力。

「悪魔！ここであつたが百年目！覚悟！！」



そう言つてフェイトが力に襲い掛かろうとすると・・・

「フェイト！貴様何をやっている！！？」

「ひ！広瀬海！！」

鬼の生活指導員・広瀬海の登場に驚いてバルディッシュを構えようとするフェイトだが・・・

「え？バルディッシュ？」

何故か手に無いバルディッシュ・・・フェイトの背後には・・・

「・・・探し物はこれか？」

「刃柴竜！！」

バルディッシュを持っている竜の姿が・・・

「バルディッシュ！いつの間に！？」

いえちよつと逃げ・・・いや奪われました

「今【逃げ】つて言ったよね！？【逃げ】つて！！」

「ぐずぐずするな！来いフェイト！！」

「あれーーーー！！」

そう言つて海に連行されるフェイト。

「バルディツシユの馬鹿くくく」

「Don't say four or five!!」

そう言つてフェイトの絶叫だけが響き渡つた。

「何しに来たんだあいつは？南力！逮捕だ!!」

「うわあああ!!」

再び追いかけられる力。高速道路を走り回つたり川を泳いだり地の果てまで逃げ回る力と追いかける佐津田刑事。

自分のクビがかかっている為か日ごろの恨みのせいか力を逃がさないと追いかける佐津田刑事。

どっかの荒れ果てた電線の近く

「はあ・・・はあ・・・」

国でも超えたんじゃないやねえかという様な荒れ果てた荒野に居る力。

「ここなら佐津田のおっちゃんも追つてこれない・・・それにしても今回しつこいな・・・」

その時

「!?!」

突如ライトアップされると全国の機動隊が集ったような光景が広がっていた。

「南力！貴様に逃げ場はない！さっさと捕まって刑務所に入れ！！」

「うわ・・・たった一人にオーバーな・・・」

流石に数に圧倒されそうになる力。

「さあ！逮捕だああ！！！」

力に逃げられまくって怒り狂った佐津田刑事はパトカーで突進した。

「うぎゃあああ！！！」

力が逃げるべく鉄塔に登ったその時佐津田刑事が鉄塔に激突した。

「うぎゃあああああ！！！」

「退避！退避！！！」

衝撃で鉄塔が破壊され機動隊の元に落下すると機動隊は戦術的撤退を開始し難を逃れた。

そして力も運よく機動隊の居ない場所に落下した為難を逃れた。

「じゃあな！おっちゃん！」

そう言ってどっからもち出したのか自転車で逃亡する力と破壊され

たパトカーの中からそれを見る佐津田刑事。

「おのれ南力め!!! いつか必ず刑務所に入れてやるからな!!! 覚えておけよ!!!」

そう宣言する佐津田刑事だった。

余談だが今回の佐津田刑事がお騒がせ事件を起こしたとして怒られまくったのは言うまでもない。

第三十六話 力と佐津田刑事の愛の逃亡日記（後書き）

はやて

「突然ですが・・・私・・・八神組の組長を引退する事にしました  
！！」

楓

「え？ちよつと待ってください！何を突然！？」

はやて

「もう力君たちの後始末なんて嫌や！！ウチは普通の女の子に戻る  
んや！！」

楓

「ちよつと待ってください！はやてさんが居なくなったら誰が私た  
ちを纏めるんですか！！」

はやて

「そりゃ〜ゲストの方やろっな〜今なら組長になれるで〜」

楓

「はやてさん以外に纏められる訳ないじゃないですか！！」

次回！勇者指令ダグオンA's どんこい あんたが組長！

楓

「て！八神組の組長になってくれるような酔狂な人なんて居ません  
って！！」

## 第三十七話 あんたが組長！

第三十七話 あんたが組長！

ミッドチルダのとある犯罪現場

「いけえ！我々の底力を見せてやれえええ！！」

陸士部隊が犯罪ロボット相手に奮闘しているが効果が無い。

その光景を後方から冷めた目で見ている八神組の姿が・・・

「何であんなロボットが暴れてるのに俺たち全員後方待機なんだ？」

陸士部隊の指令ではやてに応援要請が来てはやての【私物】である八神組が借り出されていたのだが陸士部隊からの指示は後方待機だった。

「何でも犯人を刺激しないようにする為だと・・・」

「あれ以上ヒートアップのしようもないような」

とりあえず炎も言い分を聞いていたのだが力のツツコミは正しかった。

陸士部隊の総攻撃に対し犯罪ロボットはミサイルやらマシンガンや

らを派手に撃ちまくっている。

吹っ飛ばされる陸戦魔導師たちと破壊される市街地。

「ていうか・・・何で頑なに俺たちの介入を拒むんだ？」

「そりゃあれじゃね？管理局にも派閥があるだろうから質量兵器に頼らないで空戦魔導師の鼻を明かそうとでも思ってるじゃないの？あたしらが出張ってあっさり解決しちゃあちらの面子は丸つぶれてわけよ・・・便宜上あたしたちに助っ人は頼んで・・・」

「てことは腹の中では邪魔としか思ってないわけ？俺たち目の上のタンコブ？」

「まっそんな所・・・管理局の輩でも陸士部隊は魔導師じゃねえ陸士部隊は存在する価値もねえなんて思ってる奴も居るし」

「そんなサラリーマンみたいなことが「邪魔だ！！」ありえそうですわ・・・」

楓を突き飛ばして暴走する犯罪ロボットに突撃する陸士部隊。

「陸戦魔導師って冷遇されてるんですね・・・」

ホロリとする楓。

一方前線では・・・

『進めええ！絶対に我々の手で逮捕するんだ！！』



拡声器を持ちながら指揮官が陸士部隊に対して指令を出しているが  
悉く返り討ちにあう陸戦魔導師ご一行様・・・

見かねたはやてが・・・

「あの・・・ウチの組員貸しましょうか？」

「ぐぬぬぬ！！砲撃用意！！」

意地になってはやての提案を蹴り事態の収拾を図ろうとする指揮官  
だが被害は広がる一方だった。

壊滅状態になる陸士部隊。

「一時撤退！！」

戦術的撤退する陸士部隊を呆れながら見ている八神組・・・

すると

「邪魔だ！」

「給料泥棒！！」

すれ違い様に暴言を吐かれる八神組。

尚この暴言がはやての逆鱗に触れ、犯罪ロボットに完全な八つ当た  
りをした結果事件は終結した。

管理局では勝手な行動をとったとして、何故かはやてが怒られまくった上に今までの力達が行かした後始末まで突きつけられるはやて。

「ふん！ふん！！」

自分のデスクで書類（主に始末書）に巨大な判子を押し捲っているはやて。滅茶苦茶機嫌悪そうである。

「いや〜はやてが居るから思いっきり暴れられるよな〜」

「うんうん」

はやてに責任を全て押し付けてお茶すすっている力たち・・・

すると

ブチ

「うおりゃあああああああああ！！」

「ああうー！！」

超久しぶりに、はやてから金平糖の一撃を食らう力。壁にめり込めます。

そしてはやてが主張した。

「もう！頭来たわ！！毎回毎回こんな後始末ばかり！！」

「いや・・・あんた組長だし」

飛鳥の意見にはやては・・・

「もうウチは八神組の組長を引退させていただきます！！」

「「「「なぬいいいいいい！！！！？」」「」」」

「うるせえんだよテムエら！！」

ガンガンガン！！

突然のはやての主張に絶叫する4馬鹿と騒いだことに怒りまくって発砲する北斗。

「毎回毎回！！あんたらの後始末ばかりもう我慢も限界や！！組長を辞めて！ウチは『普通』の八神はやてに戻るんや！！！！」

「ちよつと待つてくださいはやてさん！はやてさんが居なくなったら誰が私たちを纏めるんですか！！？」

組長引退宣言をするはやてを必死で止める楓。

しかし

「もう引退や！！！！」

こうして八神組の組長を引退したはやてはどっかの世界に旅立った。

結果

「で？・・・誰が組長やるの？」

冷静にはやての後釜を考える残りの組員達。

「・・・まあ・・・天下の暴れん坊の八神組の組長なんてなつてくれる酔狂な奴なんて居ないって」

飛鳥の意見ももつともである。

巷で極悪集団と悪名高い八神組・・・

誰が悲しくてこんなはみ出し者集団纏めたがるだろう。

「一人居た！」

「」「」「誰？」「」「」

飛鳥の心当たりは組員たちは質問すると・・・

「うちの妹！！」

飛鳥の心当たりはティアナだったりする。

結果

「なんで！私が組長ですか！？」

いきなり呼び出されて組長に就任してしまったティアナ。パニックに陥っています。

「あんだね！執務官になるんだったらあたしらくらい纏められないと〜」

「へ！？」

執務官という言葉に反応するティアナ。

「わかりました！！八神組を纏められてこそ私は最強の執務官になれるんです！！やりましょう！！」

「『『『『『おおおお！！』』』』」

飛鳥の誘導尋問にやる気出したティアナに拍手する力たち。

「それじゃこれよろしく！」

「え？」

飛鳥がティアナに出したのは今まで溜まりに溜まったはやてがこなしていた責任の数々だった。

1分後

「う〜んう〜ん・・・」

唸りながら担架で運ばれるティアナ。そのままガードレスキューに直行し病院に運ばれてしまった。

責任の多さにダウンしてしまっただけらしい。

「やっぱりダメだったか・・・後3分はもつと思っただけど」

腕組んでガードレスキューを見送る飛鳥。

「こうなりゃああ!!」

力が呼んだのは・・・

「何でうちやねん!!!!?」

恐らく一番迷惑をかけても怒られない影の守護者はやてを連れてきた力。

尚、ユウ達は面倒ごとを避ける為に笑顔で生贄に差し出された。

「大丈夫!!ウチと『同キャラ』だから出来るって!!」

「ええええええ!!ウチは替え玉の力カシかい!!!!?」

絶叫する影の守護者はやて・・・

そして今までの責任を押し付けられた結果

「うーんうーん・・・」

唸りながら担架で運ばれる影の守護者はやて。一応責任は取ったらしく後処理は済んだのだがノイローゼを起こしそのままガードレスキューに直行し病院まで運ばれた。

「どうしようか？」

「同キャラ・・・だったらDはやては」

チャキ

「ガキに何やらせようとしてんだテメエは？」

Dはやてに出動を頼もうとしたサイモンに銃突きつける北斗。

検証した結果

「俺が組長だ！」

仮面ライダーDの世界から呼ばれた飛鳥。紛らわしいので以下D飛鳥と表示させていただく。

「それじゃ〜早速活動内容の確認だけど〜」

力に出された【八神組の責任の重大さ表】・・・それを見たD飛鳥は・・・

「う〜んう〜ん・・・」

3ページ読んで事の重大さにぶっ倒れてしまった。

唸りながら担架で運ばれガードレスキューに直行するD飛鳥はそのまま病院に運ばれた。

「いつその事佐津田のおっちゃんにやってもらおうか？」

佐津田刑事に白羽の矢を立てると・・・

「うっんうっん・・・」

責任の大きさに倒れてしまった佐津田刑事は担架で運ばれ、本日何度目の出勤になるのかガードレスキューに病院まで運ばれた。

「佐津田のおっちゃんもダウンか・・・」

力が考えていると・・・

「熱血！闘魂！！」

不幸にも八神組の前を通り過ぎたトレーニング中の闘魂勇者ガイ。

「よ！あんたが組長だ」

「何だつて！！」

ガイを組長にすえる八神組・・・

「俺が組長になったからには肉体の強化を優先させるぜい！！」

何故か活動内容がトレーニングになってしまった八神組。



ガイのトレーニング量には付いていけないのだが・・・

「トレーニング以外何もやらんのかい!!」

トレーニング以外主に活動していない八神組だった。

「はやてさん!カムバツク!!」

楓がそう叫んでしまった。

その頃のはやては

「よっしや!!全員出動や!!」

影の守護者世界の機動六課で部隊長代理をやっているのだった。

その理由は影の守護者はやてがダグオン世界で入院してしまった為  
ミツキにより替え玉のカカシにされたのである。

「ちょっとはやてちゃん!その力任せの作戦何!？」

「いつものうち等のノリや!やったれ!!」

「えええええ!？」

いつもの力任せの適当なノリ大作戦で指令するはやてに混乱する機

動六課。

（あらゝ組長が八神組を纏められるのって本質が同じだからかしらねゝ）

等とミツキに分析されるのだった。

天野平和科学研究所

「そうですかゝはやてさんが組長を引退ですかゝ」

ドーナツ食べながら事情を聞く火鳥。

「まあ・・・迷惑を掛け捲ったしなゝ」

流石に反省する力。

すると

「何なら僕が組長をやりましたよっか？」

「なぬ！？いいですよ！いいですよ！！遠慮します！！」

「遠慮しないで下さい」

力の言葉に笑顔で答える火鳥。

しかし拒否する力・・・その理由は・・・

(火鳥さんが組長になったら余計に騒動が起きそうな・・・)

そう火鳥が組長になると後始末する側ではなく後始末される側になるからである。

「じゃあまず何からはじめましょうか？」

「ちょっと火鳥さん！もう組長になった気で居ないですよ」

こうして火鳥が組長になってしまった。

影の守護者世界

「いや〜悠々自適やわ〜」

物凄く寛いでいるはやて。すると・・・

「はやてさああああああん!!」

「なななな！何や楓!？」

寛いでいるはやての元に飛来した楓。楓軍団を総動員(無情にこき使い)してはやての居所を探し当てたのだ。

「どづしたん?」

「はやてさん！お願いですから帰ってきてください!!」

「ふん！嫌や！」

どうしても帰りたがらないはやてに楓は・・・

「はやてさん！はやてさんが帰ってこなかったら八神組は【善人】の集団になっちゃうんですよ！！！」

「なぬううううううう！？」

【善人】という言葉に絶叫するはやて。楓が動画を見せるとそこには火鳥を組長にすえ社会奉仕をさせられている八神組の姿が・・・

「あ！あかん！八神組は【悪者】であって【善人】になっちゃあかんのや！！！」

そう八神組ははやての主張するように【悪者のヒーロー】集団である。その理由は善人がやつちやいけない悪者にしか出来ない方法などをとるためや悪者ならではの方法を取れる為である。

「良いんですか！？八神組が善人の集団になっても！！！」

「そ！それだけはあかん！！！」

そう言っつて慌てて帰るはやて。

その後ははやては火鳥を説得し組長の座に再び着いたことにより八神組は元の【極悪集団】に戻り一件落着した。

そして八神組の組長を引き受けられるのは、はやてしか居ないと確

信する構成員たちだった。

余談だがその日八神組の代理組長を勤めた人間のせいで海鳴病院は満室になったのは黙っておこう。

第三十七話 あんたが組長！（後書き）

楓

「秋深し〜涼しくなってきたな〜って事で！私たち！キャンプに行くことにしました！！」

大地

「で？なんで俺が呼ばれたんだ？」

楓

「いや〜南家水入らずということで大地のキャンピングカー借りようと思って」

大地

「お前！俺の迅雷のコンテナをキャンピングカーにしてあるのか！？」

楓

「実用性を籠めて〜え？妖怪が住む山って？」

次回！勇者指令ダグオンA's どっこい 南家対幽霊軍団

楓

「南家に喧嘩売るなんていい度胸ですね〜」

## 第三十八話 南家対幽霊軍団

ある高速道路に一台のトレーラーの姿があった。そして側面にはこう書いてあった。

南家ご一行様水入らず旅行車

第三十八話 南家対幽霊軍団

車内

『うわあ〜!!』

迅雷のDVDプレイヤーでサスペンスドラマを見ている南家。

「いつも思っただけどさ」

「なに？」

今日は飛鳥が居ない為力の質問に相槌を打つ新次郎。

「ああいう最低男ってどうして森の中に逃げるんだらうな」

「なんで？」

「だってあんな人気のないところに逃げるから追いつかれた時に誰も助けにこれないんじゃない？ 第一なんであんな都合よく丸太が落ちてるんだ？ あれ振り回すの余程の腕力がないと出来ないぞ？」

「いやさ……それ言っちゃったら話が成立しないでしょ……」

力の視聴者の立場からの話をツツコム新次郎。

その横では

「大地くオレンジジュース」

「ああ……」

迅雷の運転席の大地にジュース出す楓。

更に

「いやく久しぶりの家族水入らずの旅行よね」

休暇が取れたため家族旅行を楽しんでいる透。

「お母さん！ ストレートフラッシュ！」

そう言ってポーカーで遊んでいることは。



その頃の八神家

「力君たちが旅行行ったやてえええ!？」

何やら絶叫してリビングで立ち上がるはやて。

「まあ・・・良いじゃないのたまには家族水入らずで旅行も」

涼しい顔しながらお茶飲んでいる飛鳥にはやては・・・

「何でこんな楽しそうなイベントにウチも誘わんのや!?!？」

はやての疑問にヴォルケンスは・・・

「そりやあゝあれよね・・・はやてちゃんと一緒に旅行行くと大概力君『死んじやう』からじゃない？」

「うんうん」「」

シヤマル先生の言葉に頷くヴォルケンス。そう・・・この話の中で力はやてと旅行に行くとか何かしら起きて死ぬパターンが多い・・・死ななかつた時のほうが珍しい。

「だからはやてちゃん、今回は大目に・・・え？」

シヤマル先生が振り返るとそこには旅行かばんを持ったはやての姿が・・・

「よっしや!ボルト!出発や!!!」

『いや・・・組長いくらなんでも』

何故か呼び出されたチームアルフェリスのボルトがはやてを乗っていた。更にはヴォルケンズも全員乗っている。

「いざ行かん！！力君ちの旅行へ！！」

「くくく・・・くくくくくくくく」

今のはやてに逆らったら恐そうなのでおとなしく言うことを聞いたヴォルケンズ。それを見ていたシャマル先生と飛鳥は・・・

「よっぽど娯楽に餓えてると見た」

「だな・・・それじゃ・・・行きますか？」

『馬鹿』と文字変換した湯飲みを置いてウィザーエヴォーラでボルトの後を追った。

キャンプ場

「よっせ」

テントを張っている南家ご一行様とバーベキューの用意をしている南家女性陣。するとことはの姿が見えないことに気づいた楓。

「そついえばことはは？」

「薪取りに行ったよ」

「え!?!どうしよう!最近この辺り熊が出るって噂が」

「なんでそんなキャンプ場借りたの?まあ、熊なんてそう簡単に出逢わないし」

「出逢っちゃった……」

森の中でデカイ熊と対峙する薪持ったことは。しかも先は崖と追いつめられている。

「逃げ場はない……だったらとるべき道は一つ……やるしかない!」

薪を置いて南家流喧嘩術の構えを取ることは。熊は立ち上がりことはを包囲した。

「お・おつきい……投げるのは無理かな……だったら打撃で!」

先に飛び掛ったのはことである。

「せえの!」

ことはの拳が熊の脳天にヒットするがあまり効いていない。

「嘘！宇宙人を殴り飛ばしたパンチなのに！！うわあああ！！」  
そのまま熊に投げ飛ばされることは。

「甘かった・・・宇宙人を倒したからって熊に勝てるなんて思い上がった・・・」

勝ち目がない事に焦ることは。

「負けるかああああ！！旋風脚！！！！」

ことはの回転し凄まじい蹴りを披露することは。

すると熊は大空の彼方へ吹っ飛ばされた。

「へ？・・・凄い・・・私！熊に勝った！！」

人間危機に陥ると底知れない力を発揮するらしい。

ことはは学校では大人しい良識人で通っているが、やはり南家の血筋のせいで喧嘩っ早い本性を持っているのだ。

そして夕食

呑気にバーベキューを楽しんでいる南家。

「それでね〜大変だったんだよ〜」

「へえ〜」

つい先ほど熊に襲われたばかりだというのにケロリとしていることは。

その話を聞いている透。

その一方では

「このスイーツ甘くなくて美味しい〜」

「ムカ」

新次郎の言葉に大地が反応した。

「おいてめえ・・・スイーツに何を求めている?」

「え?何って?」

「スイーツってのはな・・・洋菓子なんだ・・・洋菓子は砂糖があるんだよ砂糖は甘いんだよ甘くなくちゃ洋菓子じゃねえんだよ!!俺は砂糖を求めて洋菓子食べてんだよ!!お前は砂糖を求めてるんじゃないのか?」

「え?あ!その!」

あまりにヒートアップする大地に思わず引いてしまふ新次郎・・・その様子を見ていた力が楓に聞いてみた。

「なあ……あいつキャラ違わねえか？」

「ああ……大地ってね……顔に似合わずに甘いもの大好きの甘党なんだよ……そのせいなのか甘い物には異常なこだわりがあるんだ」

「ああ……そういえばウチにも居るよね……顔に似合わず甘いもの大好きな金髪の坊主が」

漁船

「へっくしょん!」

しかめっ面甘いもの食べながらこだわりの一本釣りやってる北斗。

「そういえばお前いい加減に彼氏の一人も出来ねえのか？」

「いや〜中々出来なくて〜」

力の質問に頭をかいて答える楓。

「楓姉ちゃん『顔だけ』は美少女なのにな」

「うん『顔だけ』はね・・・」

『顔だけ』と強調して冷静にツツコム新次郎とことはに大地は・・・

「顔よりみんな中身なんだろ」

「ふ〜ん楓姉ちゃんってどっどういう人が好み？」

「う〜ん男気のある〜ボスさんみたいな人」

「ええええええ！？」

楓の価値観に絶叫することは。それを見ていた大地は・・・

「ああ・・・こいつ顔より中身のタイプだから」

「そういえばこの間ボスさんにハグしてあげた時出血してたような」

「普段弾かれてるから免疫ないんだろうな・・・そう言うこと恥じ  
らいも無くやるから貰い手が無くなるんだろうが・・・」

大地のツツコミに楓は・・・

「むっか！良いもん！ダメならシズマに貰ってもらおうもん！！私の  
友達の中でシズマが一番男気あるから！！」

そう主張する楓。

その頃のシズマ

「へつくしょん！なんか凄く嫌な予感が……」

そう言っつて霧島園の犬小屋直しているのだった。

「それにしてもはやてが居ないから俺死なずに済んでるし〜良かったな〜」

大自然に囲まれながら悠々自適に思っていると突然誰かに肩を叩かれた。

「へ？」

力が振り返るとそこにはうっすらとした光り輝く落ち武者が……

「なに！？落ち武者！？何で？」

「兄ちゃん！！」

「は！？」

新次郎が指を指すと森の中から次々と出てくる落ち武者の数々……



「なんで!？」

「そういえば・・・こつて昔の合戦の跡地だったのよね?しかも武士は強い人に挑戦して生きていく存在だから・・・ことはの戦いを見て闘争心が沸きあがって挑戦しに着たんじゃない?」

「・・・ええええええええええええええええええええええええええええええ!!!!!!!!」

蘇った落ち武者に次々と囲まれる南家。

「うわゝB級ホラー映画のようなノリを・・・」

「どうしよう・・・落ち武者の闘争本能煽って蘇らしちゃったよ」

呆れる新次郎と焦ることは。

「しょうがない南家の鋼鉄の掟に従いましょう」

そう言っただち上がる透。

因みに南家の鋼鉄の掟とは・・・

「悪党とは徹底的に戦いましょう!!」

「」「」「おう!!」「」「」

そう言っただけ喧嘩の体制に入る南家と付いていけない子孫二人。

そしてワラワラと出てくる落ち武者軍団。その数は無双に等しかった。

「それじゃあ・・・一人50人は倒しなさいよ」

「はーい」

透の指令に落ち武者に襲い掛かる南家・・・それを見ていた子孫二人は・・・

「それじゃ・・・行きますか」

「だな」

「うおおおおおおおおおお！」「」

落ち武者に向かって襲い掛かる子孫二人。

3時間後

「着いたぞ」

・ポルトに乗ってキャンプ場に着いた八神家ご一行様が見たものは・・・

「ヘルプミー!!」

逃げ回っている落ち武者、そして悪党の落ち武者の幽霊を討伐した南家の姿だった。

「力君・・・とうとう幽霊にまで迷惑かけたんかい!!」

「うわ!無実だ!!」

そして力を粛清するはやて。

この光景を見ていた八神家は思った。

(ああ・・・南家って皆喧嘩強いんだ・・・)

等と思ったこの後八神家を交えてキャンプが再開されたのだが今回は力は死なずに済んだのだった。

めでたしめでたし

第三十八話 南家対幽霊軍団（後書き）

カ

「そついえばお前甲児さんのところに行つてたんだよな・・・何してたんだ？」

フェイト

「そりゃ〜日々の息抜きであ〜んな事やこんな事・・・そして特訓！！！」

カ

「お前甲一さんにバレなかったのか？」

フェイト

「ふ！私とはある勝つ方法を身につけて帰ってきたのだ」

次回！勇者指令ダグオンA's どんこい 入れ替わったフェイト

フェイト

「力で勝てないのなら頭で勝つ！」

### 第三十九話 入れ替わったフェイト

「ふう・・・しばらく休暇気分だわ」

のんびりと羽を伸ばし悠々自適な気分を味わうフェイト。

ここはDYNAMIC 世界でありフェイトはDYNAMIC フェイトに無理を言つて一ヶ月間入れ替わるといふ暴挙に走つたのだ。そして部屋から出た。

「ふ〜ゆつくり出来るからここはノーマル状態で・・・まあ平行世界だからバレは・・・」なんだあああ！？フェイトの偽者！！！！・・・いきなりバレてる」

頭を抱えるフェイトの目の前に現れたのは兜甲一だった。

第三十九話 入れ替わったフェイト

ブリーフィングルームでお茶を飲みながら事情を説明するフェイト。

「つまりあれか？入れ替わったと？」

「そゆこと」

「てめえ・・・まずフェイトは服を脱ぐときが違っし紅茶はスーパ  
ーの特売品をダーリンって間違っ時もあるし！」

DYNAMICフェイトとの違いを事細かく説明する甲一の姿を見  
たフェイトは・・・

（なんであなたがそんな事知ってるの？）

気色悪い通り越してウザがっていた。

「しばらくは我慢してやるからフェイトのイメージ壊したらただじ  
やおかねえぞ！！！」

「・・・それやくざか不良のやり口でしょ・・・」

力に対するいつもの姿勢と全く違うフェイト。

それもそのはず・・・力さえ居なければ凄くまともな性格であり  
力さえ存在しなければ普通なのだ・・・

つまりフェイトのあの性格が発動するのは力絡みの時だけなのだっ  
た。

そして早速事件勃発した。

現場は管理局の内部である。他と違って凄まじく血の気が多いDY  
NAMIC 管理局員達。その局員たちがデバイスのことでもめ始  
め等々実力の決着に走ったのだった。

そして現場に到着するフェイトとフェイトの監視役として同行して

いる甲一。

「喧嘩の仲裁か・・・私の得意分野だな」

「フェイトの評判落としたら殺すぞ」

「あの悪魔と関わってなければ私は普通なんです」

あくまでも力のせいにするフェイト。

「説得しないでとっとと締め上げれば良いだろうが！」

そう主張する甲一にフェイトは・・・

「万に一つも無いと思うけど局員同士で実力行使に出て逆に伸されてちゃ身も蓋も無いでしょ・・・冒険主義はいけないよ」

「なんだそれ？」

「簡単に言えば後はどうにでもなれの猪突猛進出たとこ勝負って意味」

にらむ甲一を他所にフェイトは拡声器を持ってきた。

『あゝ犯人に告ぐ・・・速やかに反抗を止めなさい』

「うっさい！今日という今日こそ決着つけてやる！！」

フェイトの説得を聞かずにデバイスを構えて臨戦しあつ局員A・B

『決着をつけたいんだったらデバイスなんて振り回さないで【己の力】のみでつけなさい・・・周りの迷惑を考えなさい』

拡声器片手に説得するフェイトに同員A・Bは・・・

「デバイスで拗れた事だったらデバイスで決着をつけるんだ!」

「女はすっこんでろ!!」

そう言っつてフェイトをけん制するとフェイトはため息を吐いた。

「はぁ・・・それじゃあ仕方ない」

「どうすんだお前？」

「・・・実力行使しますか・・・」

するとフェイトはバルディッシュを構え景気よく空に向かってサンダーレイジをはなった。

「!!」

同員A・Bがサンダーレイジに気を取られた瞬間首筋に何かが当たっているを感じた。

よく見るとフェイトがザンバーを突きつけているのだった。

「・・・どうする?・・・まだ下らない争い続ける?・・・それとも最後に遺言くらい聞いてあげようか?」



飄々と威圧するフェイトに観念する局員だった。

喧嘩の仲裁の手際の良さに啞然とするDYNAMICの管理局員。

更に・・・

「ハラオウン執務官！無罪にしるって！？」

「はい」

あるう事が喧嘩した局員AとBを無罪放免にしろというフェイトに啞然とする上司。

「わかりました・・・じゃあ責任とって一緒にクビになりましたよ  
か・・・大変でしょうね・・・これから高校受験を控えてる上官殿  
の息子さんと中学受験控えているお嬢さん・・・」

「な！何で私まで！？」

「何を言ってるんですか私と上官の首は一緒なんですよ」

（こ！この女狐！）

いつもティアナがやっている上官脅しを披露するフェイト。この後  
揉め事を起こした局員達は減法で済んだのだった。

その頃のDYNAMICフェイト

「いや ご馳走になっちゃって」

北斗の家でエリオとキャロと一緒に食卓を囲んでいると・・・

「あ！キャロ！僕のお刺身」

「^^^^」

（うつわ〜元気だなあ・・・お互いに遠慮の欠片もないし羨ましいよお）

何やらやりとりが一般的な子どものような事にホロリとするDYNAMIICフェイト。自分ではどうも気を使われている気がするのである。

すると

「意地汚ねえんだよテムエら！！」

「\$%&、’、&%\$#%&、’&%\$」

ガンガンガンガン！！！！

エリオとキャロのやり取りが北斗の逆鱗に触れ毎度おなじみ銃乱射すると机の下に緊急避難するDYNAMIICフェイト。

「な！なんなの！？毎日こんな食卓なの！！？へ？」

慌てるDYNAMIICフェイトをよそに銃弾の雨の中呑気にお茶すすっているキャロを見ると・・・

「へ！？なんでそんな涼しい顔してるの！？」

「いや〜もうなれちゃいまして・・・はう！」

毛先を撃ちぬく銃弾に若干驚くキャロを見たDYNAMICフエイトは・・・

「・・・この神経の太さの半分くらいは見習わせるべきなのかな？」

等と言って考え込むと傍ら景気よく銃弾の的になっているエリオ。

「お義父さん！止めてくださいって」

「・・・だからテメエにお義父さん呼ばわりされる筋合いはねえんだよクソ猿」

「え！？僕が猿なんですか！？」

北斗のたれ目にガン飛ばされながら猿認定されたエリオを見た紫は・・・

「いや〜じゃあ頭のわっかでも作ろうかな」

「・・・母上・・・俺にまた手伝わせるんですか？」

そう言って霧風をこき使ってわっかを作る紫だった。

## 次の事件

### 暴走ロボット事件

犯人は彼女に振られて泥酔状態で人質を取っている・・・現場に到着するフェイトと甲一。

「フェイトの評判落としたら殺すぞ・・・」

「はいはい・・・あゝ・・・犯人に告ぐ・・・大人しく抵抗を止めて出てきなさい・・・」

ガン飛ばす甲一を他所に拡声器持って説得を始めるフェイト。

「来るな!!近づくな!!」

フェイトの説得に耳を傾けない犯人。

「あのね・・・女なんて広い世間に腐るほど居るでしょ・・・」

「うるせえ!俺にはあいつしか居なかつたんだ!!」

『皆そう言つの・・・あいつと一緒になれない世の中なんて壊れてしまえば良いって俺って男をふった事を後悔するだろうって・・・けどね・・・それは間違えなの・・・馬鹿な男の馬鹿な死が新聞の三面記事の隅っこに載って・・・世間の物笑いの種になっている頃・・・その頃女は何してるか・・・別の男とくっついて・・・子どもポロポロ産んじやって・・・幸せな家庭を築いてるの・・・馬鹿馬鹿しいと思わない?』

『そ！・・・そりゃ・・・そうだけど・・・』

フェイトの説得に哀愁漂わせる犯人。

『だったらもう止めようよ』

『うるせえ！だったらあんたが誰か紹介してくれるのか！？それともあいつを探してくれるのか！？』

『あのね・・・そんな事したら恋人に逃げられた男はみ〜んな管理局に駆け込むでしょう？それにそう言う問題は結婚相談所に行きなさいって！管理局はそう言うことには介入しません！！』

拡声器片手でたれ目のフェイトの説得にやる気無くし始める捜査員たち。

この後フェイトの見もふたも無い説得で犯人はいたたまれなくなり自首をするのだった。

事件が終了し食堂に入るフェイトと甲一。はつきり言って喧嘩の仲裁しかやってないフェイト。

「お前・・・あんな喧嘩の仲裁何処で覚えた？」

あまりにも手際のいい喧嘩の仲裁に感心している甲一。

「そりゃあね・・・いつもいつも身の危険を回避するのに自然と身に付いたのよ・・・」

日頃のお仕置き以外で上司をごまかす為に八神組流の回避方法を覚

えたフェイト。

「・・・けどな・・・てめえフェイトのイメージ壊したら・・・」

「へえ そう言うこと言うんだ？ だったら言っちゃおうかな？ 机の引き出しの三段目のこと」

「な！ お前なんでそれを！！」

何か途轍もなく焦り始める焦り始める甲一。そう・・・フェイトは甲一の部屋を掃除していた時にたまたま机の引き出しの三段目を開けてしまったときに衝撃的なものを見つけてしまったのだ。

「力で勝てないなら頭で勝つ！」

何を見つけたかといえばただのエロ本だったりするがDYNAMI Cフェイトが見たらドン引きすること間違えないだろう。

「て！ てめー！」

「あとね・・・あたのストーリーキングの証拠だけど」

「ストーリーキングなんてしてねえよ！！」

「この衛星映像なんじゃ！！」

そう言ってフェイトが取り出したのはDYNAMICフェイトの監視映像しかもビデオテープで保存してある。

「・・・何ナノこれは？」

「フェイトに悪い虫がつかねえようにする為に決まってるんじゃないかねえか!」

あまりにもドン引きな内容にフェイトは・・・

「これ纏めてこっちの私に提出したらどうなるかな?」

「て! てめ! 俺を脅迫するのか!？」

「だったらんなしょうも無いことするな!」

「ちつきしよ!」

こうして数日間甲一はフェイトに脅迫されこき使われフェイトは悠々自適に過したのだが帰って早々DYNAMICフェイトが起こしたなのはとの一対一のデスマッチを繰り広げる羽目になり誤解が解けると再び力抹殺を誓い合ったのだった。

余談

一ヶ月が経過しDYNAMICフェイトが戻ってくると甲一がフェイトに散々こき使われたことを愚痴った。

「大変だったね甲一君」

「あの女・・・今度あったら覚えてるよ」

帰ってきたDYNAMICフェイトにそう呟く甲一だが・・・

「ところで甲一君これなあに？」

DYNAMICフェイトが出したのは甲一が隠し持っていたエロ本。

「な！あの女しゃべったのか！？」

「ごめんね、甲一君向こうの私の安全確保のために私が教えておいたんだ。」

「え！？フェイト！？」

「ところでこれなあに？」

更にDYNAMICフェイトが出したのは己の監視映像・・・これには甲一も反論できず・・・

「甲一君・・・ちょっとお話しようか？」

「ノオオオオオオオオオオオオ！！！」

そう絶叫した甲一がどういう運命で終わったか不明である。

後日のDYNAMICフェイトは・・・

「これ結構効くんだ」

手にへんな本を持っていたその本は・・・

兜甲一操作マニュアル 著者フェイト・T・ハラオウン



完全にタジタジになる甲一。

そしてDYNAMICフェイトに同員同士の喧嘩の仲裁が回ってきて迷惑したのは言うまでもない。

第三十九話 入れ替わったフェイト（後書き）

サイモン

「そういえばこの間何を見ても死にたい死にたいって言うてる人を見たなあ・・・」

リイン

「そうですね〜可愛そうだったです」

サイモン

「気の毒な人が世の中には居るもんだ」

リイン

「どうするです?」

次回！勇者指令ダグオンA's どころい サイモンの暗殺計画

サイモン

「気の毒だから俺がトドメをさしてやるっじゃねえか」

ヴィータ

「どうしておめえはそう言う発想になるんだよ!!!」

## 第四十話 サイモンの暗殺計画

ファイバード時代のある日のダグベースの楓の工房

楓が空中パネルを操って何か鎧の様な物の設計図を作っていた。

立体映像の為自分の腕に図面を重ね合わせる。

「このパーツは要らないか・・・」

そう言つて無駄なパーツを排除している楓それを見ていた力とケン  
タは・・・

「お前何作つてんだ？」

「これ？」

そう言つて図面を力に見せる楓。

「何だこれ？」

「This is 魔導アーマー」

「魔導アーマー？」

そう言つて魔導アーマーの図面を解説する楓。

「簡単に説明すると魔力を増強するアーマーかな」

「パワードスーツって奴か？」

「・・・スバルがメタルダグオンに合体した時の理論を応用して魔力の増強と魔力による肉体強化を機械的に再現したもので・・・まあ・・・これさえあれば融合合体の時ぐらいの力は出せるはずなんだ・・・補助ユニットとしてカートリッジ10発を背中に入れば30分間なら普通の人間でも動かせるんだけど」

その言葉に目を輝かせるケンタ。

「てことは・・・これを着ければ俺でも兄ちゃんと一緒に戦えるように強くなれるの？」

ケンタの言葉に楓はニンマリしていった。

「誤解が無いように言っておくけどパワードスーツって言うのは本来は【着ている人間の力を増幅させるもの】なんだから戦えるように鍛えておかないと意味が無いんだな」

「じゃあ・・・身体を鍛えれば俺も使えるの？」

「まあ・・・ね・・・」

子どもにあまり使わせたくない楓因みに力がデザインを見てみると・・・

「随分デカイな・・・ソルテックマンみてえだな」

等と思った。

第四十話 サイモンの暗殺計画

現代に戻って

道を散歩しているこの世に絶望したおっさん。

「せちがない世の中だな・・・死にたいよ・・・」

そして空を見ると・・・

「何であんなに空が青いんだろうな・・・死にたいよ・・・死にたいのに死ねないなんて・・・死にたいよ」

そう言っただけを見てても死にたいと言いつづけるおっさん。それをちょうど見ていたサイモンは・・・

「気の毒だな」

ちょうど文通友達に手紙を出しに行こうとしていた時にそのおっさんの姿を見てサイモンは・・・

「気の毒だから親切に殺してやるっ!」

等といらぬ親切心を起こすのだった。

どっかの建設中のビルの50階

「おっさんおっさん」

おっさんを屋上に連れ出したサイモン。

「なんだい・・・こんな所に連れてきてく死にたいよ」

「もうすぐその願いは叶うぞい」

そう言っておっさん突き飛ばそうとしたサイモンだが・・・

「あゝ目眩が」

いきなり立ち眩んでしまうおっさんにサイモンはスカしてしまい勢い余って・・・

「ぎゃあああああああああああああー!!」

自らが落ちてしまった。

「くそ・・・今度こそ・・・」

50階から落ちたのにピンピンしているサイモン。伊達に宇宙人ではないのだろう。

「今度は辻斬り作戦だ!!」

そう言つて時代劇の武士の姿になったサイモンが本物の日本刀を構えておっさんを待っていた。

「お！来た」

「死にたい死にたい」

死にたいと絶叫するおっさんに接近しようとしたサイモンが刀を抜いた。

「お命頂戴!!」

そう言つて刀を振り下ろすと・・・

「あら!!」

持っていた刀の刃が外れてしまいあらぬ方向へ飛んだと思いきやサイモンの顔面の近くに振ってきた。

おっさんそのまま素通りすると怯えていたサイモンは・・・

「やるな・・・次は！」

今度はおっさんをサスペンスドラマに出てきそうな断崖まで連れてきた。

「うんしょうんしょ!!」

「何してるんだい・・・死にたいよ」

おっさんの足に縄と錘をくくりつけているサイモン。

「んじゃ！おっさんアディオス！」

そう言つて1メートル位ある錘を海に沈めると段々縄が落ちていった。

「あ・・・蝶々」

突然おっさんは蝶々に気を取られてしまいどっかに往くと運悪く縄が解けてしまいそのまま海に引つ張られると間近に居たサイモンを絡め取ってしまった。

「あああああああああ！！」

再び落下するサイモンはそのまま深海まで沈んでしまった。ダイにより回収されたサイモンは八神家で着替えていた。

「ここまで殺そうとしても運悪く回避してしまうとは俺はもう投げ  
る」

等と言つて投げていると隣で宿題をやっていたラインが・・・

「ねえ〜ヴィータちゃん〜算数教えてよ〜」

「んなもん自分でやれ！中途半端に投げるのは良くないんだぞ！」

その言葉を聞いたサイモンは・・・



「そつだ！親びんの言つとおりだ！男が一度決めたら何が何でもやらねば！！」

等と言つてどうもずれた解釈をするサイモンはヴィータに質問した。

「なあ！親びん！」

「……何だよ……ていうか親びんじゃねえよ！！」

相変わらず親びんと呼ばれることがムカつくのか激怒するヴィータ。

「どうやったら人を殺せるんだ！？」

「お前！犯罪行為に走るのか！！おめえをそのまま簀巻きにして北斗の前に差し出してやる！んでもって銃殺されて来い！！！」

「そうか！その手があつたか！！！」

閃いたサイモンだがそのままグラーファイゼンで人間餅つきをされたのはいうまでも無い。

翌日

「うんしょー！うんしょー！」

「なななんだい？」

もう付き合いが嫌になつたのかサイモンを拒否するおっさん。するとサイモンはおっさんを北斗の家の前に来た。

「んじゃこれもって」

「え?」

いきなり包丁を持たされるおっさん。するとサイモンは大層機嫌の悪い北斗を呼び出し・・・

「おう!北斗!このおっさんがお前を殺しに着たぞ!それでも持つてお前を殺せば100人目だつて」

「・・・ほっ」

サイモンの口車に乗った北斗はおっさんに向かって銃を構えた。青くなり始めるおっさん。

「死ね!」

ガンガンガンガンガン!!

おっさんに向かって景気よく発砲する北斗。それを見ていたサイモンは・・・

「良かったな、願いが叶うぞ」

と満足げに帰ったがおっさんは・・・

「うわああ死にたくない!死にたくない!!」

あまりにも北斗がマジで銃撃してくるので心変わりを起こした。

この後このおっさんは北斗からマジで逃げ切り死に物狂いで生き残った結果人間死に物狂いになれば何でも出来ると確信し何を見ても生き抜くと決意したのだった。

一方

「……………」

何やら家の前で待っているルーテシア。セブンチェンジャーが尋ねてみると……

『お嬢……何してるんだ?』

「……文通友達からの手紙を待ってるの」

『ふーん……』

するとルーテシアの近くに突然矢が刺さった。

『な!何だ!?矢?』

矢には『友達のルーテシアへ サイモン』と書かれた紙が巻きついていていた。

『お……お嬢……何で……矢文が飛んでくるんだ?』

「え?日本の手紙の形式ってこういうのじゃないの?」

『誰だー!?お嬢に地球文化を誤解させた奴はあああ!?!?ていうか

！お嬢！まさか矢文なんてやってないですよね！！？』

そう言って絶叫するのだった。

## 第四十話 サイモンの暗殺計画（後書き）

ふうふう久しぶりに高校編だぜ〜今回は・・・何！？学校に殴りこみ  
つて地上最強の生物を倒す為学校の格闘部に伝わる秘宝を手にする・  
・・・で？誰だよその地上最強の生物って・・・えええ！俺！？

次回！勇者指令ダグオンA's どっこい 地上最強の生物対学校  
破り！！

勘弁してくれよ〜

## 第四十一話 地上最強の生物対学校破り

ある日の海鳴交番

「あぐあぐあぐ」

昼休みに炎が呑気にどでかい愛妻弁当を食べていると・・・

「たのもー!!」

「ん?どうした?」

突然交番の前に現れた黒いマントに身を包んだいかにも怪しい集団。これはこれで逮捕しなければならぬのだがとりあえず用件だけは聞こうという事で仕事サボるエビフライを加えたままの炎。

「で?何のよう?」

「この辺に地上最強の生物が居ると聞き尋ねたのだが・・・」

「あ?地上最強の生物?それならその角を曲がって3つ目のタバコ屋さんの角を斜めに行って4つ目の信号を右に回ってすぐの十字路を左に曲がって更にコンビニの信号を下に行って脇の道に入って」

「待った待った待った!!そんなのおぼえられん!!」

炎の長い案内を中断する怪しい男に・・・

「しょうがねえな・・・」

しぶしぶ地図を書いて怪しい男に渡すと怪しい男はそのまま地上最強の生物の元に向かうのだった。

その姿を見送った炎は・・・

「次元世界最強の生物もいるって教えてやればよかったかな」  
等と言って弁当を食べ始めるのだった。

#### 第四十一話 地上最強の生物对学校破り

征西学園高等学校 3年雪組

「ZZZZZZ」

休み時間に墮落した生活をしているダメ人間・南力。今日ははやてが風邪で休んだ為久しぶりに安息の学校生活を送っていた。

すると

「たのもー！ー！！！」

校庭から何かが叫び始めた。

「何だ？」

力が窓から校庭を見ると何やら黒いマントを羽織った凄まじく怪しい男が立っていた。

「この学校に居る地上最強の生物に挑戦する！たのもおー！！」

そう言っつて叫ぶ男にクラスメートの小此木が・・・

「呼んでるぞ南」

「え？俺が地上最強の生物なの・・・地上最強は」

「八神さんは次元世界最強の生物なの！行って来い！」

「あああれええええええええええ！！！」

そう言っつて小此木に窓から投げ飛ばされてしまう力。

「つぎやー！」

三階から校庭に叩き付けられてピンピンしている力。やはり並の間ではないのだろう。

「その強固な身体・・・やはり地上最強の生物のようだな」



「え？へ？」

何やら男が黒マントを脱ぎ捨てると何やら野球選手のような姿を現した。

「な？・・・なんだ？」

「我こそは格闘野球のエース！球磨きゅうま！地上最強生物にかつて我が格闘野球の素晴らしさを世界に広めるのだ！！」

「また奇妙なことを・・・」

球磨之言い分に呆れる力。すると・・・

「待て！」

何やら声がかかり振り替えると剣道の姿をした生徒の一人が・・・

「この学校で学園破りとは・・・この剣道部主将・剣崎が相手になつてやる！！」

そう言つて竹刀を構える剣崎。

「さあ！正々堂々勝負だ！！」

そう言つて部員達全員で球磨を取り囲む剣道部。それを見ていた力は・・・

「そののどろが正々堂々なんだよ」

呆れてみる力。すると球磨はボールを構えた。

「必殺魔球！大回転部鵜電車！！！」

そういつて構えるとボールから稲妻が走り剣道部員達を吹き飛ばした。

「ぐあ！馬鹿なあああ！！！」

倒れる剣崎。そしてその後も柔道部・合気道部・空手部・ボクシング部・カポエラ部・サンボ部・テコンドー部・キックボクシング部等と何故か格闘技の部活に充実した征西学園高等学校運動部の方々が挑んだが球磨に返り討ちにあったのだった。

「ふははは！！見たか！我が格闘野球の底力」

「てえい！！！」

「む！！！」

高笑いする球磨に力の蹴りが炸裂した。

「ほほ……やる気になったようだな。地上最強の生物」

「うるせえ！野球を喧嘩に使うなんて許せねえ！！！」

野球好きの力としては格闘野球を絶対に認めない。

すると校庭に四角いリングが設置された。そう力は普段から暴力事件ばかり起こしはやてに肅清される為、心置きなく被害がない決闘

場として学校が用意していたのだ。

学ランを脱ぎアンダーシャツで構える力に剣崎が・・・

「頼むぞ南・・・お前の肩に学校の未来が掛かっている」

「んな無責任な」

部活動とはいえ格闘技が全て負けてしまった為プライドがズタズタらしく力の肩に責任を全てかけた部長達。

「行くぞ！地上最強の生物！！」

球磨がバットをもって力に飛び掛ると力は球磨の一撃を避けた。

「な！！」

リングがめり込んでいる当たれば即死である。

「ふははは！これこそ伝説の武具の一つ破壊のバット！！これさえあればどんなヒョロヒョロ攻撃でも凄まじい破壊力になるのだ！！」

「反則じゃねえか！！」

そんな力の抗議をスルーし球磨はボールを持ち出した。

「なんだそれ！？」

「食らえ！怒りのボール！！」

そう言つてボールを投げる球磨。さらりと避ける力。

「へ！何処に向かつて投げ・・・うげは！！！」

なんと後頭部にボールが当たってしまった。起き上がる力だがボールは力を追尾するように当たり続ける。

「なんだ！？魔球か！？」

「怒りのボールとは・・・かつて・・・格闘野球に熱中し異性に持てなかつた者の怒りと執念が怨念となつて宿つたのだ！！！」

「・・・相当な怨みのようだな・・・うげ！ただの八つ当たりじゃん！！！」

冷静に突っ込みながらボールに撃墜される力。するとマットに沈み始めた。

「ふははは！！これで最後だ地上最強の生物！！！」

高々と笑いながら怒りのボールを力に投げる球磨・・・すると

「うおおおおおりゃああああああああ！！！」

咄嗟に覚醒し怒りのボールを受けとめる力。

「な！なんだと！？」

驚く球磨すると力は・・・

「ふん・・・てめえも一端に格闘野球なんて名乗るんなら・・・俺の魔球と勝負だ!!」

そう言つて怒りのボールを構える力。

「いいだろう・・・その魔球とやらを撃ち砕き引導を渡してくれるわ!!」

破壊のバットを構える球磨。

「行くぜ・・・X!!サンシャイン!!おりゃああああああああああああ!!」

ファイタースピリッツの必殺魔球Xサンシャインを投げる力。するとボールは巨大なXを描き球磨に向かっていく。

「ぬおおおおおおおおおお!!」

破壊のバットで魔球を捉える球磨だが・・・

バキ!!

破壊のバットそして怒りのボールは両者の力に耐え切れず粉々に砕けてしまった。

「な!これでは私は戦えない!!」

怒りのボールと破壊のバットが砕け散り戦闘不能になる球磨は敗北を認めてしまった。

「く！さすが地上最強の生物・・・今度あったときはもっと強くなつて貴様を倒し！私が地上最強の生物になるう」

「け・・・誰が地上最強の生物だ・・・ん？」

力がふと周りを見てみると何故かさつきまで居た野次馬が消えていた。そして空気が変わったのを感じ取った。

振り返ると・・・

「ぜえ・・・ぜえ・・・力君・・・なんやこれ？」

力の背後に居たのは点滴打ちながらも病気の身体を押し現れたはやてだった。

「・・・はやて・・・お前風邪ひいたんじゃ・・・」

「ウチがおらんかったら力君がまた暴れだすやろう・・・案の定・・・」

凄まじく怒っているはやて。

「うわ！はやて！話せば分かる！！」

「うっさい！問答無用じゃあああ！！燃え上がれウチのコスモよ！！ペガサス！流星拳！！！！」

「うぎゃああああああああああああ！！！！」

凄まじい連打を浴びる力があっさりと倒されてしまった。

それを見ていた小此木は……

「流石次元世界最強の生物の八神さん!!」

「こ！これが……上には上がった……私はなんてちっぽけ  
なんだああ!!」

絶叫する球磨。この後しばらくの間球磨に噂を流されたはやては次元世界最強の生物として腕の立つ者に付回されえらく迷惑したらしいが全員が返り討ちにあったのは言うまでも無い。

更に余談だがはやては自身の風邪をセブンセンスを発動させ治したらしい。

## 第四十一話 地上最強の生物対学校破り（後書き）

またまたやってきました！約20話に一回の法則でやってくる・・・  
南力抹殺大作戦！！て！今日はどんな手段で攻めて来るんだよあの  
二人は・・・何！？自分達じゃ勝てないからってはやてに俺を殺さ  
せるって勘弁してよ！

次回！勇者指令ダグオンA's どっこい 南力抹殺大作戦6

それ他力本願っていうんだぞ！！



## 第四十二話 南力抹殺大作戦6

ある日の南家

「・・・なんや？」

南家の玄関になにやら張り紙が張られている。

『春まで冬眠します 力』

「何下らんことやってんや・・・力君！学校遅刻するよ！！」

そう叫ぶはやてだが出てきたのは新次郎とことはだった。

「あ！新ちゃん！ことはちゃん！力君は？」

「兄ちゃん春まで冬眠するっていつて一階の客まで寝てるよ」

「アノドアホオオオ！！」

そう言っつて客間の布団を引っぺがすはやて。

だが・・・

「いない！？ん？・・・何やこの筒」

何やら床から突き出ている筒にはやてが布団をどかしてみると筒は

床に突き刺さっていた。

「てー！」

急いで湯かひっぺがえしてスコップ持って筒の出ている土を掘りかえすはやて。

そして……

「ぜえ……ぜえ……」

「ぐ……」

呑気に眠っている力を掘りこすのだった。

「こら力君どういっつもりやー!!」

「むぎゅむぎゅ……折角良い気持ちで寝たのに……だって冬眠すればあの砲台と死神に襲撃されることも無いし〜厄介事に巻き込まれることないし〜」

「それでまた留年するんかい……第一！何も食べなくて留年したら死ぬわー!!」

そう言われて助かった〜と安心する力はとつとと着替えて学校に行くのだった。

第四十二話 南力抹殺大作戦6

時空管理局

「おりゃあああああああああああああ！！！！！！！」

訓練モードレベルMAXで力型的を撃ち抜いているのは。

そして

「だあああああああああああ！！！！」

バルディッシュで力人形の首を狩っているフェイト。

その理由は……

「あの悪魔！絶対に殺す！！！！」

その力を殺す為である。今まで5回……他の作者様の所で4回襲撃したのにもかかわらず有耶無耶になったりして結局殺せていないので今度という今度は殺したいらしい。

ピンポン

くだいようですが力は『人に恨まれるような人間』です。

「今度という今度は特訓の成果を見せるの！！！！」

「だね・・・特訓に挫折しそうになった時は・・・あの悪魔の写真を見て闘志を燃やし修行に打ち込んだ」

ロケットを取り出し中から力がアツカンベーして中指を立てている写真を見つめるフェイト。

「フェイトちゃん・・・そんな写真をどっから仕入れてきたの？」

なのはの疑問をスルーするフェイトはある事に気がついた。

「あれ？そっぴやノアは・・・」

いつもなら居るはずのノアが無いことに気づくフェイト。

その頃のノア

「こら〜出せ〜くせえよ！！」

何やら漬物の壺に入れられているノア。

そこには

「・・・・・・・・・・・・・・・・じゅるるる」

涎垂らしながら壺持った畢の姿が・・・

「ふふふ〜いつも私を出し抜けると思わないでね〜ノア〜これも世の為人の為〜」



「どろじょじか・・・」

「これは画策するしかないの」

そう言ってなのはとフェイトはあれこれ画策するのだった。

### 征西学園高等学校

「　　」

昼休み、冬眠の為弁当を持ってこなかった為財布を出そうとするが・・・小遣いは全てはやてが管理している為・・・というよりもはやてから貰っている為500円ほどしか貰っていない。

「ん？なぬ！？」

財布を見て驚く力。

なんと有り得ない事に札が入っているのだ・・・それも千円や二千円ではなく一万円入っていたのだ。

「なんで？」

パニックになる力。

「ふふふ・・・実ははやてちゃんの財布から1万円を抜いてあの悪魔の財布に入れておいたのだ」

「ねえ・・・なのは・・・いつの間にそんな事したの・・・」

征西学園のどつかその辺の木の中から双眼鏡で力を見ているのはとフェイト。

尚その姿はばつちりくつきり征西学園の生徒にばれている。

征西学園の生徒は力が襲撃されているのをよく目撃している為か触らぬ神に祟り無しのも居ればなのはとフェイトが今度はどう襲撃するか見物する者も居る。

「これがばれたらはやてちゃん怒るの」

そう言うのはは、はやての髪留めに仕掛けた盗聴器で会話を聞く。

「力君・・・ウチの財布から一万円盗ったやろ？」

「・・・んなことしねえよ・・・」

弁解しようとする力にはやては・・・

「どうだか・・・力君ウチの貯金箱から三万円借りて踏み倒したからな」

（最低だあの悪魔！！！！）

そう思うのはとフェイトだった。

が・・・はやてが言葉を続けた。

「まあ・・・ウチも回収がてら力君の貯金箱から三万円と五万円貰ったからな」

（最低だあの邪神！！！！）

どうもこの二人持ちつ持たれつのもようであり力に至っては金銭関係などどうでも良いらしい。

こうしてなのはとフェイトは作戦が失敗し奥歯を噛んだ。

帰り道

「」

幸せそうに変な歌を歌いながら帰る力だが・・・

「！！！」

突然天啓が走り身構えるが・・・

「・・・何も来ない・・・」

いつもならここで天啓が閃くとピンク色の魔力が放たれまくりフェイトのザンバーの一閃を真剣白羽取りで受け止めるパターンになる。

9回も命を狙われていると習慣で慣れてしまったが今回は何も無い。



「くそ・・・思い過ごしか・・・はあ・・・今更あいつらが襲撃してきたところでもうどうとも思わねえし・・・はあ・・・人間の慣れって恐ろしい」

なのはとフェイトに命を狙われなれてしまったことに自分自身を呆れる力だった。

まあ9回も命を狙われればそうなるだろうこいつの場合は・・・

そこに

「おい力！高町教官とハラOWN執務官に狙われてないか！？」

本能的に巻き込まれると感じた飛鳥が力の元に駆けつける。

飛鳥も飛鳥で巻き込まれなれてしまったらしい。

「おい相棒・・・」

「なんだよ」

「何処からとも無く襲撃されそうだから一緒に行動しない？」

「奇遇だね・・・あたしもそう思った」

そう言って縦横無尽に警戒しながら帰路に入る力と飛鳥だった。

夜

「何とか無事だな」

「んだんだ・・・」

周りに注意しながら何とか八神家に着いた力と飛鳥。

ここなら襲撃はされないだろうと踏んだのだが・・・

「やあお二人さんお帰り」

「て！てめ！！」

何故か八神家に滞在しているのはとフェイトに咄嗟にダグゴマン  
ダーを構える力と飛鳥だが・・・

「まあ安心してくれたまえ・・・襲撃するつもりは無いから」

（絶対嘘だ）

経験でなのは嘘を見破る力と飛鳥。気まずい沈黙は続き時間ばかりが過ぎ退屈になった飛鳥はとうとう寝始めた。

すると

「お風呂入ってくれば？」

「は？」

なのはに風呂に行くように言われ何が何か化かされている感じがする力。

「まさか・・・あいつら俺が身包み剥いだところに襲撃しようなんてんじゃねえだろうな・・・まあ・・・飛鳥も居るし」

今回までに5回他の作者様のところでも4回・・・今回を含めれば合計10回も命を狙われて警戒しない力ではない。

今までは己の身体能力で戦ってきた為特に問題はないと思うが・・・

というよりももう襲撃されなれたのかいつでも応戦できるようにダグコマンドーだけ持って風呂に入ると・・・

「ん？」

「げ!!」

何故か風呂に入っていた真っ裸のはやて。

一方八神家のリビング

「ふふふ・・・作戦成功なの」

「うんうん」

何やら風呂場を盗聴しながら作戦が成功したことにダークな笑みを浮かべる。

作戦内容はこうだった。まず先に帰ってきたはやてを無理矢理風呂に入れ、はやてが風呂に入った後にははやての脱いだ服などを隠し誰も居ないと力に思い込ませ素っ裸のはやてと鉢合わせさせる作戦だったのだ。

「これではやてちゃんは間違えなく怒るの・・・そして」

妄想中

「この変態痴漢ダメ人間！！！！」

「ぎゃあああああああああああああ！！！！」

お星様になる力。

「てなつてはやてちゃんに葬り去られるの・・・けっけっけっけっけ！！！！！！！！」

「だっはっはっはっは」

高々と笑い力の葬式の時に着ていく喪服選び始めてるなのはとフェイト。

だが・・・

「あ・・・力君・・・なにすんねん・・・」

「「えゝ！」」

凄まじく嫌な予感がしたなのはとフェイト。

「・・・いや・・・力君・・・だめえ・・・らめえ・・・」

「「しまった！！！」」

一般的に見ればはやては超美少女である。よって力が手を出さないはずはない（少なくとも力の友達はそう思わないが・・・）。

「計算外なの！！」

「やっぱりあのクソ悪魔私達が殺しに行くしかない！！！」

そう言って完全武装して風呂場に殴りこむのはとフェイトだが・・・

「「このクソ悪魔覚悟・・・は！！！」」

「ああ〜ん力君〜そんなことあかんよ〜（棒読み）」

なのはとフェイトが風呂場に襲撃すると其処には騎士甲冑を装着したはやてと硬直して意識不明になった力の姿が・・・なお力の大切な部分はちゃんとはやてがタオルで隠している。

そしてはやての手にはなのはが仕掛けた盗聴マイク。

「まあ・・・こんなことやるつもりだったけど・・・どういう事やなのはちゃんにフェイトちゃん」

ブチっという音と共に盗聴マイクを握り潰すはやて。しかも物凄く怒っている。実は先ほどのやり取りは首謀者をおびき出す為の一人三文芝居だったりする。

「全く・・・これで謎が解けたわ・・・今日一日のみよう々な事全部二人のせいやったんやな・・・」

(「やばいやばいやばいやばいやばい」)

速く逃げないと命の保障が無いと感じたのはとフェイトだが・・・

「な!」

見えない壁にさえぎられた。楓印の空間遮断装置が発動していたのだ。

「そついえば・・・フェイトちゃん通信教育で北斗琉拳習ったんやて?」

「いや・・・その・・・」

「何ならウチの北斗神拳と勝負するか?なのはちゃんも一緒に?」

「「な!」!」

「北斗!剛掌波ああ!」!

「ぎゃあああああああああああ！あべしいい！！」

はやての気に吹っ飛ばされるのはとフェイトだった。

「さてと・・・」

風呂場の壁を見事に破壊すると風邪を引かないようにとつと力を回収して着替えさせるのだった。

「はあ・・・力君の丸出し見てもどう思わないとはもう慣れたんやろうな・・・」

嫌な慣れを感じてしまったはやてはとりあえず飛鳥たちを呼んで温かいものを出した。

「・・・それにしても・・・見事にカチンコチンだね・・・」

飛鳥が固まった力を小突いてみるとコンコンといういい音が鳴った。

「てか何でこうなったん？」

「大方お前のすっぱんぼん見てショックだったんじゃないの？・・・こいつ意外に純情少年だから・・・え？」

飛鳥が振り返ると力とはやての姿が無かった。

「何でウチの素っ裸がショックなんやあああああああああああ  
！！！！」

そう言ってお決まりのラグナロク・ザ・レインボーで力を大空の彼方にぶっ飛ばすはやて。

やっぱり最後のオチは外さないようである。

一方

「出遅れちゃった……」

力の襲撃に加担しようと思って完全武装してきたDフェイト。

全開のD飛鳥のことで仕返しに来たDフェイトだったが今回は知略作戦だった為武力行使の瞬間を逃してしまったのだ。

「くうう……この鬱憤をどうすれば」

そこでフェイトの目に留まったのは偶然通りかかった北斗だった。

「こつなったらやつあチャキ 拳銃突きつける音

「ほお……どうするんだ？」

Dフェイトが襲撃しようとしたのだが既に北斗は捉えていた。

「こ……子供相手に銃を向けるなんて大人気ないんじゃない……」

「……生憎俺にそんな出来た神経はねえよ……死ね!!」



ガンガンガンガン！！

そう言つてDフェイトに容赦なく発砲するたれ目の金髪。こいつは女子供であろうと容赦しないらしくDフェイトが逃げまくつたのは言つまでもない。

尚この話を聞いた力は自分の友達（北斗とシャマル）と知り合い（フェイト）にロクな金髪が居ないと思うのだった。

余談だが一年後

「なんだこれ？」

フェイトのあのロケットを捨つフェイトの生徒Aそして中身を見ると・・・

「こいつがフェイト先生が言つてた悪魔・・・」

「ゆるせねえ・・・あんなに優しいフェイト先生を・・・」

「フェイト先生の敵は俺たちの敵だ！！！」

そう言つてフェイトの生徒達から襲撃される力だった。

第四十二話 南力抹殺大作戦6（後書き）

おっす！！俺八神組のサイモン！！そういえば皆なんで俺がルーテシアと友達になったか知りたくねえか？え？知りたくねえって？そう言わずに聞いてくれよ〜そもそも俺がルーテシアとあったのはな〜

次回！勇者指令ダグオンA's どのこい 小さな友達

ご期待あれ！！

第四十三話 小さな友達（前書き）

立ち直ったのでアップします。

## 第四十三話 小さな友達

時はファイバードストリカーズ時代

「ようみんな！」

ダグベースでご機嫌のサイモン。

「な!どうした?」

セブンチェンジャーとの決闘でボロボロの北斗。

「どしたんだ?」

「セブンチェンジャーにやられたんだと・・・お前どうしてあいつと知り合いになったの?」

北斗の手当てをしながらサイモンに聞いてみる力。

「まあ・・・それはな・・・」

淡々と語り始めるサイモン。その事で怒りを買うことになったのはいうまでも無い。

## 第四十三話 小さな友達

久しぶりに地球旅行に来たサイモンとダイ一家。

「久しぶりだな」

『そうですね〜王子』

海鳴の町を歩いているサイモンとダイ。するとサイモンとダイの目の前に泣いている女の子が・・・

「ん？どうしたあの子？」

サイモンが女の子に声をかけようとすると・・・

「・・・うーセブンチェンジャーと逸れちゃったよ・・・このままじゃ悪い人や悪いロボットに声かけられて誘拐されちゃう・・・誘拐・・・誘拐」

（・・・声かけづれええ！！）

そう言っつて声をかけるのを躊躇うサイモンとダイだがここで泣いている女の子を見棄てていつてはサイモンの男が廃る。

「よづー！どうした!？」

腹をくくつて少女に話しかけるサイモン。

「・・・?」

泣きながらサイモンを見ると安心したのか再び泣き始めた。

「……ああ……こういう場合ってとことん泣いてもらって話しかけてくるのを待ってみよう……」

そう言うサイモン。楓流子供が話したくなるまで辛抱強く待ってみることにした。

そして少女が泣き止み自分から声をかけた。

「名前は？」

優しく聞いてみるサイモンに少女は……

「……ルーテシア……あなたは？」

「俺サイモン」

「……苗字は？」

「ああ……無いんだ……ラディ星人だからさ……」

サイモンの言葉にルーテシアは……

「サイちゃん……宇宙人なんだ……」

いきなりサイちゃん呼ばわりされながら宇宙人である事を知られるサイモン。だがサイモンの持つ奇妙な物腰の柔らかさに少しホツとするルーテシア。

「それじゃ……一緒に探すよ」

「え？・・・良いよ・・・」

「良いじゃねえか？袖触れ合うも他生の縁っていうだろ？いくぞ！」

そう言ってルーテシアを肩車してセブンチェンジャーとやらを探すサイモンとやれやれと言った表情で一緒に探すダイ。

「いねえな・・・」

「・・・うん」

見ず知らずのルーテシアの為に親身になるサイモン。やはり困っている子供は放っておけない性質のようだ。

するとルーテシアが・・・

「サイちゃん・・・その・・・」

「ん？」

『友達になってくれ』と言おうとした瞬間。

『お嬢！』

「へ！？」

いきなり上空から襲撃されるサイモンとダイ。上空から駆け付けたのはセブンチェンジャーだった。

『怪我は無いか!?!』

「へ?」

セブンチェンジャーのテンションについていけないルーテシア。

『貴様・・・今ここで叩き潰してやるっ!!!』

「セブンチェンジャー・・・これは・・・」

ルーテシアが事情を説明しようとするが、ルーテシアの話が聞かず  
剣を構えるセブンチェンジャー。その臨戦態勢を見たサイモンは・

「やれダイ!!」

『へ!?!王子!?!』

いきなり無茶を振られて驚くダイ。

『いや!王子!相手は勇者ロボですよ!!』

「お前!宇宙の伝説の勇者だろ!!何とかしろよ!!」

事ある事に『伝説の勇者』と言われて無茶を振られてしまう気の毒  
なダイ。

そして

『でああああああああ!!!!』



『うわうわうわー!!』

何だかんだ言っただけで対決することになったダイとセブンチェンジャー。セブンチェンジャーの攻撃を避けまくるダイ。

「・・・セブンチェンジャーは星の勇者なんだよ」

「ダイだって宇宙の伝説の勇者だぜ!」

『王子!そんなちっちゃい事で張り合わないで下さい!!くは!!』  
ダイは避けきれずセブンチェンジャーに蹴り飛ばされてしまっただった。

『どうした!貴様の实力はそんな物か!』

『王子』

セブンチェンジャーにボコボコにされるダイ。正直戦いたくないのでやる気が無いのだ。するとサイモンが奇策を用意した。

「ピンチの時はこれだ!」

そう言っただけでサイモンが取り出したのはでっかいカーテンの付いた箱の中から・・・

『父ちゃん頑張っただけ』

『やるぞおおおおお!!フルブラストモード!!』

息子と娘に応援されスーパースキル『父親パワー』が発動するダイ。ダイの力が発動した為何か嫌な予感がしたセブンチェンジャー。

『うりゃうりゃうりゃうりゃー!!』

『な!!』

急にダイの動きが変わりセブンチェンジャーと互角に戦うダイ。

だがダイは・・・

『ダイガトリングー!!』

腰のガトリング砲で煙幕を張るとダイはサイモンと子供たち、アリスを回収して撤退するダイ。これ以上は無用な戦いになるからだ。

『お嬢!怪我は無いか!!』

そう心配してルーテシアに駆け寄るセブンチェンジャーだが・・・

「・・・あっち行って」

『な!!』

折角友達に慣れそうだったのにセブンチェンジャーによって邪魔された事にご立腹になるルーテシアだった。

翌日

「いづくぞお!?!」

マンションが近くにある運動公園で草野球やってる五馬鹿。

その五馬鹿の姿を近くのマンションの窓からジーンと見ているルーテシア。

「・・・友達・・・か・・・」

そう呟いたルーテシア。

すると

「ん?」

野球をやっている最中に何かの気配に気づいたサイモン。

「とっ!」

「!?!サイちゃん?」

ルーテシアの視線に気づいたサイモンが公園からルーテシアの居る窓まで跳んできた。

「!?!」

あまりの事に驚くルーテシアにサイモンはガラスをノックして窓を開けるジェスチャーをする。

ルーテシアが窓を開けると笑顔のサイモンが・・・

「よ！さっきから見てどうしたんだ？」

「え？」

ルーテシアは驚いている。公園までの距離は10メートル以上はある。それを一っ飛びで来たのは流石は宇宙人の身体能力であろう。

「この間あつたじゃん一緒に遊べば良いのに・・・」

サイモンのテンションについていけないルーテシア。

「けど・・・知らない人についてっちゃいけないってセブンチェンジャーが言ってたよ・・・けどそれってセブンチェンジャーが誰も信じていないって事だよね」

ルーテシアの考えに感心するサイモン。

「ふ〜んルーテシア頭良いな」

「サイちゃんは馬鹿なの？」

「うん。うるへえ」

乗りツツコミ的に頷くサイモンが相槌を打つと抗議し始めたのでルーテシアはクスクス笑い始めた。

「やっと笑ったな それじゃ」

「サイちゃん……」

「ん？」

「メール欲しいんだけど」

「メル友って奴か？俺携帯電話持ってないんだ」

「じゃあお手紙」

「へ？」

「今度……手紙書いてほしい……友達になってほしい……」

そう言うルーテシアに対してサイモンは……

「わかった！じゃあ今度手紙書くよ！俺たち友達」

「……」

ピースして笑うサイモンと安心した表情のルーテシア。そしてセブ  
ンチェンジャーが来ないうちに力たちの元へ帰るサイモンだった。

翌日

「あ……」

何やらルーテシアの部屋のベランダに矢が飛んできた。それにはこ  
う書かれていた。

「……『友達のルーテシアへ』……サイちゃん……地球の手紙のやり方ってこういうのかな？」

そう言つて文通を誤解し矢に手紙をくくりつけるルーテシア。こうしてサイモンとルーテシアの文通が始まり進行が始まったのだつた。

ファイバードストリカーズ時代

この事が災いしセブンチエンジャーによって襲撃が繰り返されるのであり反省するサイモンだつた。

「ふゝ力達に悪いことしたかな？」

そう言つてビル街から帰路に着くサイモンが何かの気配を感じ取り廃ビルの屋上に向かつていた。

「ぐー!!」

屋上では買い物に出ているルーテシアが事件を起こしていたゾルを発見し後を付けていた途端気づかれてしまい襲撃されていたのだ。

「さつきから俺たちの後をつけてなんのようだ!？」

「うーくー!」

首を持ち上げられて宙吊りにされているルーテシア。ゾルの力では

このままでは折れてしまう。

「ぐっへっへっへっへ・・・死ねええ「やめろ!!」「ん?」

ゾルが振り返ると其処にはサイモンの姿が・・・

「誰だテメエ?」

「そこでなにしていやる!俺の友達を放せ!!」

「友達?・・・こいつがか?」

「そうだ!!」

「サイ・・・ちゃん・・・」

ルーテシアの首を持ち上げたままサイモンの素性を引き出そうとするゾルだが頭に血が上ったサイモン。サイモンの友達という言葉に嬉しさを感じるルーテシア。

「へへへ・・・じゃあ・・・欲しかったら取りにきなああ!あああああああ!!」

「止める!!」

「うわあ!!」

サイモンが向かって走った瞬間ゾルは屋上から突き落とされ滑り落ちるが、端ギリギリを咄嗟に掴んで持ちこたえるルーテシア。友達の玩具の様にされた事に怒るサイモン。

「てめえええ!!アクセス!!!」

飛びかかりながらタクティカルコマンダーでタクティカルスーツを装着するサイモンはゾルに蹴りかかった。反動でゾルの後ろを取ると自慢の怪力でゾルを殴り飛ばすサイモン。

「へへ・・・やるじゃねえか・・・」

「!!!」

「させるかあ!!!」

サイモンは一瞬の隙を突きルーテシアを救出しようとするがゾルが邪魔に入る。ルーテシアの手はしびれ始め手を放しそうになる。サイモンはとっととゾルを倒してルーテシアの救出に入りたい。

「く!!!」

「であああ!!!」

ゾルの拳に阻まれゾルを蹴り飛ばすサイモンはそのままゾルに連続のコンビネーションを食らわせ突き放した。ビルの端を掴んでいたルーテシアが力尽き始めている。

「くっ・・・うわ!!」

「!!!」

ルーテシアが力尽き手を放してしまった瞬間サイモンがルーテシア



の手を掴んだ。

「・・・サイちゃん」

「へへへ・・・う!!!」

ルーテシアを掴んだままゾルに踏みつけられるサイモン。ルーテシアの手を掴んだままの為か身動きが取れない。

「へ・・・いい様だな・・・だがそいつの手をはなさねえ限り二人仲良く真つ逆様だぜ」

「ふざけるな・・・友達の手を放すもんか・・・う!!!」

サイモンの脳天を踏みつけるゾル。ゾルに頭を踏みつけられながらもルーテシアの手を放そうとしないサイモン。

「へ! だったら二人まとめて地獄に墜ちな!!!」

「!!!」

踏みかかるゾルにサイモンが身構えた瞬間。

「!!!」

ルーテシアがサイモンの持っていたソードブレイカーを取りゾルを銃撃し後ずさらせた。そのスキにサイモンがルーテシアを引き上げた。

「ブレイカーモードG!!!」

ルーテシアからソードブレイカーを受け取り必殺形態にするサイモン。

「バスタードラッシャー!!」

「うおおお!!」

バスタードラッシャーを浴びるゾルに飛び掛り・・・

「ブレイカーモードS!ソードエンド!!」

「く!!」

サイモンの最大の技ソードエンドを薄皮一枚で間髪かわすとゾルは撤退した。

「ふう・・・」

「サイちゃん・・・その姿」

「ん?」

大人体系のタクティカルスーツから子供の姿に戻るサイモン。

「ありがとう」

「礼はいいって!友達だろ」

「うん!」

そう言って帰路に着くサイモンとルーテシアだった。

余談

「そういえばサイちゃんって彼女いるの？」

「おう！俺親びんと結婚するんだ！！」

その頃の親びん

「へつくしょん！……すつげえ迷惑で嫌な予感が……」

そう言って大層嫌そうにくしゃみする親びんだった。

第四十三話 小さな友達（後書き）

本日は八神組の飲み会。言いたい事を言い！喚きたい事を喚き！飲んで騒いでばつとやればつと！！

次回！勇者指令ダグオンA's どっこい 飲み会騒動

いやゝ飲んだ飲んだゝ

## 第四十四話 飲み会騒動

### 第四十四話 飲み会騒動

ここは海鳴のどっかのおでん屋。

若者とはいえ日頃の疲れや愚痴などをリフレッシュするべく馬鹿どもは集まったのだった。

「おう、おせえぞ、飛鳥」

「へいへい」

力に呼ばれておでん屋の席に座る飛鳥。

「竹輪とハンペンにガンモに熱爛」

「はいはい」

そう言っておでんとお酒手にして一杯飲み始める飛鳥。

「それにしても急にどうしたんだ？」

「まあ……日頃溜まりに溜まったグチなどもあるかね、っと思っ  
て……ま！言いたいことを言い……喚きたいことを喚き……飲  
んで騒いでばつとやねばつとー！！」

そう言う飛鳥。この飲み会を企画したのは飛鳥である。尚、未成年のサイモンと楓はひたすらおでんを食べているのだった。

「何ならばやてやシャマルさんでも呼ぶか？」

飛鳥の提案に北斗は・・・

「・・・女なんかこれ以上呼ぶんじゃねえ・・・酒が不味くなる・・・むぐ！」

「・・・ムカ・・・お前の顔見ながら飲むよりまだよ・・・帰って拳銃の弾でも磨いてやがれ」

北斗の毒舌に顔面に北斗のハンペン叩きつける飛鳥。するとニヤツきながら力を見る飛鳥。

「それにしても良いのかな？高校生が酒飲んで」

「・・・俺は二年間留年したから二十歳なの」

ぶつちやけ留年した事に触れて欲しくない力。

そしていい感じに酒が回ってきたところに力が重ね重ね聞いてみたかった事を酔った勢いで聞いてみた。

「それにしてもお前は二言目にはティアナはどこだ何してるとか言つちやてさ・・・お前が構いすぎるからティアナが一人立ちできねえんじゃねえか？」

「うるせえな・・・はやての尻に敷かれてるのはお前だろうが」

「なぬ？」

「正義の味方に女はいらねえとかほざいてたけどあれじゃ尻にしかれた亭主じゃん」

「てめえ・・・」

「おうやるか？」

ファイト

そう言っておでん屋さんで乱闘始める力と飛鳥。

すると

「ぎゃあぎゃあぎゃあぎゃああ煩えんだよテメエら！！」

ガンガンガンガン！！！！

とうとう逆鱗に触れ発砲し始める北斗だった。

一方未成年組は・・・

「う〜んこつてりの牛筋が美味しい〜」

「俺は断然竹輪部〜」

「ジャガイモも美味しいね〜」

「こっちの鳥ちゃんも美味しいぞ〜」

そう言っておでんの変り種を食べている楓とサイモン。

「ほら鍋焼きうどん〜」

何でおでん屋にこんな物があるのか不明だが鍋焼きうどん食べ始める楓達だった。

「そう言えばお前友達いないんだよな」

「ああ・・・」

力に対して大変失礼なことを言う飛鳥。

「そういえばお前にとっての友達って何なの？」

「あ？何で？」

「別に・・・聞いてみたかっただけ」

「まあ・・・悪口だろうが何だろうがお互いに包み隠さず言いたい放題言い合えて・・・それでも一緒に居てくれる奴が友達なんじゃないのか？」

「・・・ああ・・・良い所も悪い所も全部ひっくるめて認め合っつて奴ね・・・まあ・・・あたしら義理人情しかないからな」



「・・・だな」

そう言つて乾杯する馬鹿コンビ。

「あれ？北斗は？」

「あっち・・・」

「　　」

何故かマイク持ち出して楓たちの前でカラオケ歌い始める北斗。くどいようですがこいつは金髪坊主のように酔っ払いの度を超すと奇妙な行動に出るらしい。よっぽど鬱憤が溜まっていたらしく熱唱していたのだった。

「だっはっはっはっは」

「うっはっはっは」

何やら馬鹿馬鹿しくなってきたのか笑い始めて飲み疲れて眠ってしまったら馬鹿達は保護者に迎えに来てもらうのだった。

余談だが二日酔いでフラフラになっていたのは言つまでも無い。

第四十四話 飲み会騒動（後書き）

エリオ

「拝啓・・・僕には愛しの彼女が居るのですが・・・その彼女とフォーリンラブするにはとっても高い壁があります・・・その壁と戦って勝たない限りフォーリンラブできませんどうすれば良いでしょうか？」

リスナー

「うん・・・男を見せるのは大変ですね！そうだ！今世間を騒がせている連続銃撃犯を捕まえて勝ってみるってどうですか？」

エリオ

「え？・・・凄い心当たりがあるんですけど・・・」

次回！勇者指令ダグオンA's どっこい 連続銃撃魔対エリオ

エリオ

「お義父さん！お願いです自首してください！！」

## 第四十五話 連続銃撃魔対エリオ

あるダグベースの医務室

「こんにちは」

エリオがシャマルを尋ねて遊びに来たのだが・・・

次の光景を見て絶句した。

「ぜえ・・・ぜえ・・・」

「ぜえ・・・ぜえ・・・」

診療台で上半身裸で寝ている北斗とその北斗に跨って肩を取っているシャマル。

汗までかいてぶっちゃけとても妖しいので・・・

エリオの決断

「失礼しました!！」

「誤解だ(よ)」

ガシッと肩を捕まれ逃亡を阻止されてしまうエリオ。

事情を説明されると・・・

「整体？」

実は漁をしている最中に誤って肩をやってしまった為シャマルに入  
れてもらっていたのだった。

「・・・世話になったな・・・」

そう言つて入った肩を確かめながら帰る北斗。

「・・・はあ・・・北斗さん大変なんですね・・・」

「エリオもやってみる」

「へ・・・」

次の瞬間

バキ！！

「ぎゃうー！！」

ボキ！！

「ふがー！！」

ゴキ！！

「のおおおー！！・・・ん？おおー！！」

痛みに耐えた瞬間滅茶苦茶体が軽くなったエリオ。

「ところでシャマル先生何処で整体なんて覚えたんですか？」

「ああ……いつも力君の折れた骨逆に折ったりして治してるから自然と身に付いちゃった」

「……………」

恐ろしい理由で覚えた整体だったが効果が抜群であった為腕は確かなようだ。

この噂が口コミで広がり疲れた管理局員達で行列を無しシャマルが一時の巨万の富を得たのは言うまでも無い。

#### 第四十五話 連続銃撃魔対エリオ

##### 南家リビング

いつもの4馬鹿が呑気にワイドショー見ながらお茶を飲んでいた。

『ええ……ここ数日の連続銃撃魔ですが……負傷者の数は数え切れず』

「世の中は物騒だね」

爺臭くジュース飲んでいるサイモン。

すると

『連続銃撃魔の特徴なんですが・・・たれ目で金髪だったそうです・・・』

ドンガラガツシャンガン!!!

「「「なんだとおおおおおおおお!!!?」「「「

慌ててテレビ画面に釘付けになる力、飛鳥、サイモン、楓。

そして画面に移りだされた似顔絵は超見覚えのある顔だった。

「まさか・・・北斗の奴・・・」

「等々やっちゃったか・・・」

既に確信してしまった力と飛鳥。

「そういえば・・・北斗さんこの間っから、よくこの時間に出かけるような・・・」

楓の一発に状況証拠がそろってしまい確実に犯人になっていく北斗。

「て！動機は!?!」

「ああ・・・そう言えばミツキさんがこの間、手間賃込みで弾代ピロ撥ねしたらしい」

「で？憂さ晴らしに撃ってるのか？」

「北斗ならやりかねん・・・出てきちゃったな・・・動機」

既に北斗だからなのか信じるつもりが無いようだ。

「けどこんな事・・・紫ちゃんにどう説明するんだ？」

北斗にとって恐妻である紫。

「キヤロちゃんも居るし・・・」

「キヤロもキヤロで怒らすと怖いんじゃないか？」

普段怒らない人間が怒ったら怖いことはよく知っている力達。

するとラジオが流れた。

『次のお悩み相談はペンネーム赤毛猿さん・・・僕には愛しの彼女が居るのですがとっても高い壁があるのでフォーリンラブできません・・・いいアドバイスお願いします・・・うん難しいですね  
これは巷を騒がせている連続銃撃魔を倒してみては』

「不味い！！」

無責任なリスナーの発言に連続銃撃魔に襲い掛かってしまうかもしれない赤毛猿さんを救出する為に4馬鹿は急ぎ市街地に向かった。

市街地に向かうと何やら騒がしい人だかりが・・・

「なんだ・・・」

「・・・やっぱり」

人だかりの中心には案の定銃と魚を持った北斗とストラダを持ったエリオが・・・

「お義父さん・・・お願いです！自首してください！」

「・・・は？・・・なんで俺がんなことしなきゃいけないんだよこのクソ猿！」

既に北斗から猿認定されてしまったエリオ。ラジオの赤毛猿とはエリオのことらしい。

「・・・まあいい・・・ここじゃ迷惑だ・・・あつちに誰も居ない場所がある・・・そこで白黒つけてやるよ」

「・・・わかりました」

こうして海鳴の果ての【いつも決闘する原っぱ】に来た北斗とエリオ&見物人の力達。

「・・・お義父さん！人に怪我までさせて・・・今度という今度は



成敗します」

「・・・口で言っても聞かねえ猿め・・・やれるもんならやってみやがれ」

「ここであなたを倒してキャロを手にしてみせます!!」

「・・・事情はさんでんじやねえよ赤毛猿!!」

エリオの本音を聞いて決闘がアホらしくなってきた北斗だが売られた喧嘩は買うが主義なのか逃げるつもりはないらしい。

尚エリオは一般人ではないため銃撃の対象らしい。

「ち・・・」

エリオのスピードをまともに受け吹っ飛ばす北斗。

「・・・随分パワーが付いたな猿」

「当たり前です!あなたを倒す為に日々ユウさんや鉄也さんの地獄の特訓を耐えてきたんですから!!」

どうやら北斗を倒す為に密かに他の世界のキャラに特訓してもらったらしく動きが切れるエリオ。

「もっと速く!!」

そう言って北斗の正面を貫こうとするエリオだが・・・

チャキ

「へ？」

高速移動の最中動体視力と決断力が良いのかエリオの眉間に銃を突きつける北斗。懐に飛び込んだの仇となったのかガツチリホールドされているエリオ。実戦においては北斗の方が上手のようだ。

「だらだらだら」

このまま撃たれば確実にヒットする為絶体絶命のエリオ。

今の北斗ならやりかねないその時

「やめろ！北斗！！」

「？」

いきなり4馬鹿に羽交い絞めにされる北斗。

「北斗！これ以上罪を重ねるな！」

「？なに言っただてめえら？」

「ここは自首するか素直にエリオに成敗される！！」

力とサイモンが必死に説得するとラジオが・・・

『ただいま連続銃撃魔が逮捕されました。犯行も自供しました』

「…………へ?」「……」

ラジオのニュースに目が点になる力達。携帯のテレビに切り替える  
と犯人の似顔絵はスマートに描かれていたが実際の犯人は凄まじく  
福与かな体格をしていて北斗に似てもにつかなかった。

「ほほ……そう言うことがテメエら」

「北斗……ちゃん?」

「死ねえ! 貴様ら!!」

ガンガンガンガンガンガン!!!

「…………ひええええええええええ!!」「……」

怒りで我を忘れた北斗が力達に向かって盛大に発砲しまくって終結  
するのだった。

尚、エリオが北斗を倒す為に再び他の作品へ修行に行ったのは言う  
までもない。

余談

「遅いな……北斗の奴」

ビル街の裏路地で北斗を待っているシグナム。その理由は北斗から  
干物用の魚を買ったためだった。

実はここ数日北斗がこの時間に出かけていたのは売れ残った魚の在庫処分という形でシグナムに格安で引き取ってもらいに行ったのである。

シグナムの干物作りは度が過ぎてしまい八神家から魚購入禁止令を出された為干物用の魚を買えなく困っていたところ在庫処分に困っていた北斗を見つけ裏取引することにしたのだ。

シグナムにいたっては新鮮な魚が安く手に入り上等の干物を作れ北斗に至っては在庫がなくなって悪い気はしない。

尚取引場所が場所なだけに周囲から疑われていたのは言うまでもない。

「シグナム」

「ヴィータ・・・」

取引現場に現れたヴィータにギョツとするシグナム。

「帰るぞ・・・魚は禁止じゃ・・・」

「貴様！干物作りを否定されたら私はどうやって自分を表現したら良いんだ!？」

「おめえそつ言つ問題か!？」

こうして絶叫の最中シグナムが回収され取引現場を変更したのは言うまでもない。



第四十五話 連続銃撃魔対エリオ（後書き）

何！？最近野球を使って破壊活動する奴が出ただって！？この野郎・  
・野球を悪いことに使うなんて許さん！て！なんだあの変態仮面  
は！？後ろに走行するバイクの上で腕組んでやがる！！

次回！勇者指令ダグオンA's どっこい 力対ストライク男

ストライク男

「ぬあぁっはっはっはっは！！勝負だ海鳴の悪魔よ！！」

力

「どっちが悪魔じゃ！！」

## 第四十六話 力対ストライク男

ある夜の日だった

「　　」

呑気に警察自転車でパトロールしている炎。そしてのが渴き自販機で飲み物を買ったその時だった。

「なぬ!!」

炎の警察自転車がトゲの着いたボールに襲撃されパンクしてしまったのだ。

「なななな・・・なんだ!？」

「はあっはっはっは!!」

炎が空を見上げると月をバックに謎の覆面をかぶった男の姿が・・・

「お前は墨東署のお尋ね者・・・ストライク男!!」

「勤務中にも関わらずサボリジュースを飲むとは警察官の風上にもおけんやつめ!!この私の正義のボールを受けてみるがいいいいいい!!」

「な!!」

そう言つて炎に襲い掛かつてくる変なボールだった。

#### 第四十六話 力対ストライク男

とある家のキッチンで力とはやての姿があつた・・・

「ねえ・・・力君・・・今日秋音ちゃんにおうたよね？何でかな？」

包丁で生の魚を切りながら力に質問するはやて。

「ん？いや課題のグループわけでさ」

「この間もそう言つて麗華ちゃんと一緒にやったよな・・・なんでや？」

力は気付いた・・・はやてが火にかけている鍋に何も入ってなく焦げ始めていることに・・・

「はやて？どうしたんだ？変だ」「うるさい！！」「！！」

そう言つて包丁を振り下ろし魚の頭を叩き切るはやて・・・あまりの事に目を丸くする力だが・・・徐々に恐怖に満ちてきた・・・

「ねえ・・・力君は何で私以外の女の子見るのかな？ねえ・・・ねえ



「!!ねえってきいてんだよおお!!!!!!」

正気の失った瞳で力を見つめ力任せに包丁で魚を乱れ切りにするはやて・・・顔には血が飛び散っている。

「こっぴなったら・・・」

「何する気だ・・・」

「力君・・・永久に私の物になつて・・・」

「な・・・に・・・を・・・」

そう言つて金属バッドを持ったはやては力に向かつて振り下ろした。咄嗟に逃げる力。

「止める!!!!」

「はあ・・・はあ・・・はあ!!!!」

部屋中を追い掛け回され背中をやられたその時だった。

「やめる・・・はやて・・・助け・・・て・・・」

哀願する力にはやて凶器の笑みを浮かべる。

「・・・あは・・・あはは・・・その顔は私だけが知ってる・・・力君だからさあぁ・・・だからさあぁあ!!!!!!」

「うがあああああ!!!!」



ぎてしまった女が男を殺害し永久に自分の物にするというストーリーである。

キャストでは勿論殺される役は全員で力を選び、力を殺せるのははやてしか居ないのかメインヒロインははやてになった。

そして試作品の映像が出来上がり素直な感想を言う新次郎とことに意見を求めるはやて。

「今のがバイオレンスサスペンスホラー？」

「始めてみたジャンルだけど・・・」

「どう!? 恐かった!? 面白かった」「つまんない」「ええええ！ウチ頑張って練習したのに〜」

白黒はつきりくつきり即答して「つまらない」と言われた事にショクなはやて・・・

その理由は・・・

「・・・だって兄ちゃんがあんな棒っ切れ如きで死ぬわけないじゃん」

「うんうん」

新次郎の言葉に納得することは。

実はクラス内でも殺害方法でもめにもめていた。

それは征西学園の常識として力は何やつても死なないという事が骨の髄まで染み渡っており凶器のチョイスには苦労したらしい。

その結果撲殺シーンの撮影現場では

テイク1 角材

「いでえ!!」

殴られて頭を摩るが角材のほう折れてしまった。

テイク2 その辺に落ちている丸太

「ぎゃあ!!」

またもや折れた丸太。

テイク3 大根

「……舐めてんのか？」

全く効いてない力。

テイク4 鉄パイプ

「ぎゃう!一般家庭にんなもん置いてあるか!!」

ひん曲がる鉄パイプ。

テイク5 花瓶(本物)

「いててて・・・殺るなら一思いに殺れよ!!」

力が耐え抜いてしまった為NG。

こうしてヤンデレが使いそうな凶器を次々と使うが凶器のほう悲鳴を上げ破壊されてしまう。

尚、リアリティを求めはやては全て手加減抜きで本気で殴っている。

それは力の頭が石頭過ぎるのか？それとも、はやてがリアリティを求め手加減抜きで本気で殴っているせいで壊れているのか？

尚撮影で使った魚やら大根やらはその後皆で美味しく食べた。

「兄ちゃん殴り殺すならこれぐらい使わないと」

「いやこつちでしょ」

そう言つて母・透の部屋から透の族時代のありとあらゆる凶器を持つてくる新次郎とことは。

更に飛鳥たちが・・・

「いつその事バズーカは？」

「んなもん拳銃で撃てば一発だ」

「・・・てめえら人事だと思つて」

友達の行いに怒る力だが好きにやらせて放っておこうと外へ時間潰しに行った。

その後もトークは続く。

「けどこの映画恐くないよ・・・だって俺達からすればヤンデレシオンと台詞除けば日常生活と変わんないんだもん」

「ウチ普段そう言う目で見られてたんか・・・」

そう言っていていじけるはやてだった。

深夜のコンビニ

「　　」

夜中にアイスでも買って食べようとする力。そしてアイスを頭に当てる。撲殺で死なないのだがやはりダメージはあるらしく痛いらしい・・・

すると

「んぎゃー!」

突如後頭部に硬い物が当たった力。

「いってえな!!誰だよ!?!人に向かって砲丸投げたの!?!」

力が振り返ると其処には野球選手のような覆面の男が立っていた。

「学生の分際で深夜に出歩くとは言語道断！！この私が成敗してくれる！！！」

「なんだ？不審者か？」

夜な夜な歩く学生に比べりや凄まじく不審者のストライク男。そしてボールを力に向かって投げてくると殴り飛ばして防ぐ力。

「ふはははは！！やるな！さすが海鳴の悪魔」

「そりゃどうも・・・」

「ならば明日！征西学園のグラウンドで待つ！！逃げるなよ海鳴の悪魔ああむああはあははははは！！！」

そう言つてバイクのシートに立ちながら宣言して去っていくストライク男だった。

「何で立ったままなのにバイクは走っていくんだ？」

そう言つて呆れる力だった。

炎の我が家

「やっぱり襲われたか・・・」

頭に包帯を巻いた炎に事情を話す力。

「全く・・・妙な奴に好かれちゃいましたよ・・・何もなんですかあいつ?」

「ああ・・・墨東署に出没する変質者だよ・・・何でも正義の行いとか言って器物破損ばかりやってくんだよ・・・交通課が捕まえようとして躍起になってたけど結局捕まえられなかったんだよ・・・」

「へえ・・・正義の行いね」

「最近じゃ海鳴で暴力事件ばかり起こしていく奴を成敗しに行くとか言ってたけど・・・それがお前だったとはな」

呆れる炎。

翌日

ウザそうに登校する力。するとグラウンドがやけに騒がしくなっていて見てみるとストライク男の姿が・・・

「待ってたぞ！海鳴の悪魔め!!」

「はぁ・・・」

避けられない戦いと知った力は野球のグラウンドに向かった。

尚、力の決闘はもはや名物となっていて見物人が山ほど居た。



「で？勝負の方法は？」

「3球勝負！！」

どうやら野球で決闘するらしい。ピッチャーは勿論ストライク男でバッターが力。

「普段はピッチャーだから新鮮な気分だ」

「行くぞ悪魔め」

「来い！！」

ストライク男の第一球が投げられた。動体視力とリズムが良い力は捉える。

「もらったあああ・・・ああ！？」

バットを振った瞬間ボールが戻りストライク男の手中に納まった。

「なんじゃそりゃ・・・」

「ふははははははは！！」

よく見るとストライク男のボールは糸で吊られている。

「ヨーヨーかよ・・・て！そんなボールありかよ！！」

「まだまだいくぞ！！必殺！ウイニングブレイクボール！！！！」

ストライク男が投げたボールを捕らえる力。

しかし

ズツドーン!!

「んぎゃあああ!!」

ボールが爆発し力が黒焦げになった・・・ボールに爆発物を仕込んでいたらしい。因みにバットは折れた。

「くつそ・・・仰天野郎かおめえは・・・」

「ふふふふ・・・さあ・・・もう後がないぞ悪魔め!!我が必殺の魔球!!受けてみるおおおお!!」

「野郎」

力がバットだった残り半分を構えるとストライク男が振りかぶった。

「貫け!我が魔球よ!!」

渾身のストレート・・・すると力はバットだった残り半分を投げ捨てた。

「なに!？」

あまりの事に驚くストライク男。

「竜激打ああああああああああ！！！！」

ストライク男のストレートを殴り飛ばし大空の彼方へ消し飛ばした力。それを見た瞬間飛雄馬の如く沈むストライク男。

「くっそ・・・あのホームラン女に続き・・・悪魔にまで」

「最後の最後で通常旧を投げたのがお前の敗因だ・・・」

「く・・・己・・・次に会う時には必ず貴様を倒してやるぞ・・・さらばだ！！ホームラン男！！」

「勝手に人を変なあだ名で呼ぶな！！」

相変わらずどうという原理で動いているのか不明だがバイクに立ったまま走り去っていくストライク男。

「はぁ・・・たく朝っぱらから迷惑な話だ」

そう言うため息吐きながら登校する力であった。

余談だが自主制作映画はストライク男のボールを鉄拳で殴り飛ばしたシーンを流用され【はやてを倒さなければいけないアクション映画】にさせられてしまい力は苦労しまくったらしい・・・

第四十六話 力対ストライク男（後書き）

大地

「何で急にこんな事になったんだ？」

楓

「どづしたの？」

大地

「女の子とデートする羽目になりました」

楓

「ええええええ！！誰と!？」

大地

「んあ？読者投票で決まるんだと・・・」

楓

「ああ～お祭要素って奴ね～それにしても大地がデートか～お姉ちゃん嬉しいよ～」

大地

「・・・・・・・・・・なんでこんな事になったんだ？」

楓

「風の詩の流れで思いついたんでしょ～」

次回！勇者指令ダグオンA's どっこい 大地のデート

楓

「ちゅー！くらいはしてきなよ」

大地

「するわけねえだろ！超魂パワー！！」

楓

「あゝれゝゝ」

## 第四十七話 大地のデート

ある南家の朝

「こらあ！力君！ええ加減におきんかい！！」

そう言つて力の部屋のドアを開けるはやて。力にいたつては気持ちよさそうに寝ている。

「たく・・・なんちゆう寝起きの悪さ・・・」

「じゃあはやて姉ちゃんが添い寝でもしてあげれば・・・一発で目を覚ますぜ」

「あのなゝ新ちゃん・・・そんな事したら初心な力君はあの世に直行やる？まあ・・・どうせ死んでもすぐ生き返ってくるやろうけど・・・」

そしてはやての取つた行動は・・・

「はい！新ちゃんそつち」

「あいあいさ」

何やらノリノリで寝てる力の足の親指に電極繋ぐはやてと新次郎はそのままコンセントに刺した。

結果

「&、（）、’&%、（%）’、%&、’&%（&、’（&、’（&—!—!」

朝っぱらから感電する力。

本日の起こし方 電気ショック

#### 第四十七話 大地のデート

ある日の霧島園

「大地！デートしよつか!!」

いきなりスバルの難題を受ける大地は・・・

「・・・明日の天気は良いかな・・・」

「ちょっと！大地！デー」今日の夕飯はなんだ？」・・・」

あくまでも聞こえない振りをする大地にスバルは大地の耳をかつぽ  
じいて叫んだ。

「大地！デートしよつか!？」

「うるさい！聞こえてとるわい！何で俺がお前とデートなんかしなきゃならねえんだ!！」

「そりゃ！スキンシップだよ!！」

事情を話し始めるスバル。

ある日の消防署

「ていうわけです」

大地のことをガードファイヤーに相談するスバル。

「このままだと大地誰とも打ち解けないで孤立しちゃうよ」あのへそ曲がり輪をかけてるし」

その言葉を聞いたガードファイヤーは・・・

『そんなに言うならデートの一つでもしてやれば良いんじゃないかねえか?』

と冗談めかして言った。

すると

「おお！ナイスアイディアー！そうやってお腹割って遊べば仲良く



なれる！」

そう決意して現在に至る。

「なんちゅう単細胞な女だ……て根拠が全然わかんないよ」

「全部さらけ出して仲良くなるにはこれが一番……！」

「て！そりゃお前だけの理屈だろうが……！」

「と！言うわけで！明日の12時！段取りとか宜しく！初めてのデートだから楽しみ〜」

「え！？おい！俺はまだやるとは言ってな……」

大地の意見を聞かずに準備に行ってしまうスバルだった。

目が点になって啞然とする大地。

### ダグベースの雑談場

他に相談する相手が居ないので楓を含めたら馬鹿に相談する大地。

「どうすればいいんだ俺は？」

「まあ……折角スバルが誘ってくれたんだから……無碍には出  
来ないんじゃないの？」

実の姉の無責任な発言に腹を括った大地。

「で？デートコースは・・・何これ？」

大地の無い頭で考えたコースに啞然とするサイモン。

「何で遊園地なんだよ・・・こりゃバツだな・・・」

「何で？」

「あのな・・・遊園地つてのはな待ち時間があるんだ・・・親しくない限り会話が续かなくて気まずい沈黙が起きる・・・それで耐え切れなくなり破局する」

「別に付き合うつつもりねえし・・・」

次に北斗が・・・

「何？博物館？スバルが博物館好きな玉かよ」

「大方大あくびして寝ちやいそうだよね」

大地よりスバルとの付き合いが長い力たちはうんうんと頷き結論は・  
・

「ここは無難に映画とかにしておいたほうが良いんじゃないの？」

「まあ・・・映画見てるだけで済むからな」

それで納得する大地。

「で？お前何着ていくの？」

「は？・・・そんなん普段着」

「あのな・・・スバルに恥かせないように気を使えっての」

呆れる飛鳥。実は大地も本質は楓と全く同じでありオシャレ等には超が付くほど無頓着であり、普段着は汚れてもいいジーパンにアンダーシャツにジャンパーといった通称楓ルックをしている。

「ここは・・・」

そうやって楓が呼んだのはファッションが得意そうな友達的面々であった。

「ヘルプミー！！」

大地の叫びだけが響き渡るのだった。

結果

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

凄まじく嫌そうな顔で待ち合わせ2時間前に訪れている大地。

尚時間前に行けというのは楓の指令だったりする。

尚、大地は力と違い待つ行為は苦にならないらしく順番待ちによく  
こき使われている。

「て・・・何でこんなかつこしてデートなんぞせにやなんのだ・  
」

等とぼやいていると・・・

「お待たせ〜!!」

何故か速めにやってきたスバル。

「待った？」

「・・・お前一時間前になんで来てんだ？」

「いや 遅刻したら悪いと思って〜」

「・・・意外と義理堅いんだなお前」

「あははは・・・ん？」

「あ？何周り見てんだ？お前」

「いや こう言うのって大体関係者が後を付けたりするからな〜」

「・・・あいつらにそんな趣味はねえよ」

大地の言うとおりであり、意外に義理堅いのかそろって野暮な事は

一切無しと言う事では適当にやらせることにする八神組だった。  
と言うよりも他人の恋路など興味ないらしい。

「それじゃあ 本気でやるよ〜えいや！」

「!!!」

何故か大地の腕に組み付いたスバル。

「・・・何のつもりだお前・・・」

「いや デートってこうするって漫画に書いてあったから」

スバルの漫画知識に大地は・・・

「離せ・・・」

「へ？なんで？」

「・・・良いから離せ」

何故かスバルを見ないでそう呟く大地。

その理由は顔に似合わず力の血を色濃く引いているらしく照れているのだ・・・というより恋人でもなんでもないのでスバルのバストが当たっていたりするので気が気じゃない大地。

「あ〜照れちゃってる〜おりゃ!!!」

「ぎゃあああああああああ！！」

状況を悪化させるスバルに周りが振り返るほどの悲鳴を上げながら倒れそうになる大地。

力・新次郎にも同様のことが発症する為南家の男は全員超絶的初心である事が分かった瞬間だった。

という訳で映画館に来た大地とスバル。

「ねねねね！どれ見る！？」

「どれでも良いよ……」

映画館には着たが見る映画を決めてなかった為適当に選ばうとするのだがスバルは……

「ダメだよ〜ここは大地の見たい映画にしないと〜」

「お前どういう理屈だよ」

「いや〜大地ってただのツンデレだと思ったから〜どういのが好きかな〜って……」

頭かいてそう言うスバル。どうやらスバルもスバルで考えたらしく、大地と仲良くなると言う名目で大地の趣味を知ろうということらしい。

「んじゃあれ」

「お！」

大地が指差したのは『ウルトラマンタロウA's』であった。

「お〜ナイス！あれ見たかったんだよ〜」

「ふんそうなのか・・・」

あんまり興味ないらしいがスバルが喜んでいるならそれ良いと思っている大地だった。

ポップコーン食べながら映画を見ている大地とスバル。

『ありがとう・・・けど・・・俺は子供との約束は絶対を守るんだ  
！！！！』

映画の主人公東光太郎の言葉に思わずうつろつとするスバル。そして大地も顔には出さないが共感していた。

映画が終わり

「いや〜面白かった〜」

「・・・悪くない・・・」

「つまり面白かったって事だよね」

「・・・通訳するな」

スバルの言葉に照れる大地・・・最近大地の扱いが慣れてきたスバルだった。

「ねえ！今度はこっち行こう！！」

「は！？ちょっと待て！ゲーセン！？うわああ！！」

手を引つ張られて連れまわされる大地。

「いえ〜い！」

ダンスゲームやっているスバル。大地にいたっては既にへばっている。その理由は先ほどから体感ゲームをやり続けている為であり更にスバルのバイタリティに押され続け流石の大地もへばってしまったのだ。

「もう！これくらいでへばるなんて情けないぞ！」

「ほつとけ！おめえ見てえな体力馬鹿じゃねえんだよ！！」

「あ！女の子にそんな事言うんだ〜酷〜い最低」

「て・・・てめえ・・・人の弱みに付け込んで・・・」

思いつきりスバルの前で形無しになる大地は意地になりスバルと極限まで張り合った・・・やはり扱いなれたらしいスバル。



喫茶店

「はぐはぐはぐ」

スバルと同等の量を食べる大地に驚くスバル。

「うわ〜よく食べるね・・・さすが楓の弟」

「うるせえ・・・」

あまり楓と比べられることにいい思いをしない大地にスバルはメニューを見て・・・

「あ〜店員さん！8リットルバケツパフェ2個お願いします！」

「二個？・・・お前16リットルもパフェ食べるのか？」

「何言ってるの！？一個は大地のに決まってるじゃん！」

「て！何言ってるんだお前は」

「甘党・・・」

「ぐ〜！」

大地の甘党趣味を知っているスバル。ある日大地の部屋を訪れると大地の甘党趣味を見てしまったのだった。

尚大地は恥ずかしいから黙っとけと言ったが交換条件に美味しいスイーツの店を紹介しろとして茶飲み友達になってしまったのだ。

そして

「お待たせしました」

8リットルバケツパフェが来ると食べ始める大地とスバル。

「あま〜い!!」

「・・・悪くない」

「つまり「いちいち通訳するな」

大地の様子にケラケラ笑うスバル。大地も友達付き合いも悪くは無  
いと思った。

そして喫茶店から出た大地とスバルにお決まりのイベントが発生し  
た。

「よ〜か〜のじよ」

「俺達といいところ行かない？」

複数の恐そうなお兄さん達が大地とスバルを取り囲んだ。

「へ!?!なに!?!」

「・・・・・・・・・・」

パニックになるスバルと興味なさそうな顔の大地。そんな二人に構わずお兄さん達はスバルを強引に連れ出そうとした。

「え！？ちよつと！何すんの！？」

「いいじゃんいいじゃん」

突然のことに手を出そうしてしまうスバルすると・・・

「離せよ・・・」

大地が重い口を開いた。

「なに！？」

「聞こえなかったのか？・・・離せよ・・・」

「聞こえねえな！彼氏さんよお」

あくまでも粹がるお兄さんに大地はやれやれと言った表情ではつきり言い切った。

「そいつは俺の女だ・・・てめえにやれねえよ」

「ちようしこいてんじゃねー！！」

お兄さんがナイフを取り出し大地に向かって振り下ろすと大地はじやんけんのチヨキで挟み込んで受け止める。

「な！」

大地の指からナイフを外そうとするがあまりの力で外すことができない。そのまま大地がにやりと笑うとナイフの刃を押し折った。

「……………」

そして人を殺しかねないオーラを放ちながら相手をにらむ大地。その姿にお兄さん達は……………」

「お！覚えてるおおお！！！」

「忘れてやるよ」

よくありがちな捨て台詞を残して逃げさるお兄さん達にそう言っ  
てナイフを正規の処分方法で処分する大地。

するとスバルが……………」

「大地……………その……………さっきの言葉」

妙に赤らめているスバルに大地は……………」

「あ？あれな……………爺さんが婆さんに言った告白の言葉だよ」

「え？それって……………」

「勘違いするな。あの時はああ言うしかなかったんだよ」

「あ……あははは……だよね……ちょっとぐっとききちゃったけど……ん？」

ふとスバルが大地を見ると大地の額から血が出ていた。

「うわ！大地！」

「なんだ？かすっただけだ……心配ない」

「化膿したらどうすんの！？」

そう言っただけの大地の額にバンダナ巻きつけるスバル。

「なんだ？まるつきり天空じゃねえか……」

「いいじゃん！似合ってるじゃん！！」

満足そうな顔をするスバルに苦笑いする大地。

「さーデートの続き！」

「おいおいおい！！」

こうして今日一日大地はスバルに振り回されまくるのであった。

第四十七話 大地のデート（後書き）

リンディ

「ええ．．．二人に集まってもらったのはほかでもありません」

なのは・フェイト

「．．．．．」

リンディ

「今日で二人は．．．クビになってもらうことにしました」

なのは・フェイト

「ええええええええええ！？なんで！？」

リンディ

「だって最近二人とも遊んでばかりじゃない．．．だからクビ．．

」

なのは・フェイト

「そんなあああああ！！」

次回！勇者指令ダグオンA's どっこい なのはとフェイトのク  
ビ騒動

なのは

「どっしりよじろ！クビはやだよー！！」

第四十八話　なのはとフェイトのクビ騒動（前書き）

今回の話で不快に思われた方は自己責任でお願いします

第四十八話　なのはとフェイトのクビ騒動

南家の朝

「ZZZZZZZZZZ」

「こらゝ力君！起きんかい！！」

相変わらず幸せそうに寝ている力を起こしに来たはやて。

「ここで正攻法で起きないから・・・新ちゃん」

「あいあいさゝ」

そう言ってノリノリで何か用意するはやてと新次郎。

結果

「ぶはああああああ！！！！」

顔面にかけてられたコタツや電気アンカ蹴り飛ばしながら起きる力ちゃん。

本日の起こし方　熱責め



「くっそ・・・砂漠で野たれ死ぬ夢見た」

そう呟いた。

#### 第四十八話　なのはとフェイトのクビ騒動

突然リンディの部屋に呼び出されたなのはとフェイト。

「ええ・・・本日二人に来てもらったのは他でもありません」

「・・・ゴキユリ」

何やらリンディの神妙な顔に息を呑むのはとフェイト。

そして

「・・・クビよ」

#### 突然の宣告

「そっか！フェイトちゃん！クビか！！」

「え！？ちよつと！待ってなのは！！」

「私が呼び出されたという事は・・・私が公認の執務官なの！！」



「「そんなあああああ!!!」」

## 結果

力達が悲しくなった時に行く土手

「うづう・・・寮まで追い出されるなんて酷いの・・・」

絶望しながら佇んでいるのは何か雑誌読んでいるフェイト。

「ん？フェイトちゃん何、求人広告読んでの？」

「・・・いやあ・・・とりあえず再就職の先決めておこうかなあ・・・  
と」

「フェイトちゃん現実見過ぎなの!!!」

思いっきり現実を見るフェイト。

「ふむふむ・・・企業の受付嬢か・・・これなら」

「・・・フェイトちゃん・・・忘れてるかもしれないけど私達『ミッドチルダ的』にはエリートだけど『地球的』には中卒なの!!!」

「は!!!」

「だから企業への就職は絶望なの!!!」

「学歴社会の馬鹿ああ!!」

そう言つて絶叫するフェイト。するとなのはが思いついた。

「そつだ!実家で雇つてもらえばいいの!!」

「おお!ナイスアイディア!!」

そう言つて翠屋に向かうのはとフェイトだが・・・

「桃子さん。娘さんは元気かい?」

「ええ。今はお仕事しています」

「へえ・・・若いのに立派なもんだ」

「ええ〜自慢の娘です」

「か!帰れない!!」

店の玄関に手をかけようとした瞬間母と客の会話を聞いてしまい帰るに帰れなくなったのはとフェイト。

まさかクビになりましたなど見つとも無くて言えない。

再び悲しくなつた時に行く土手

「どうするのなの！？頼みの実家にも帰れないよ！！」

するとなのはが次に思いついた手は・・・

「そうだ！結婚すればいいの！！」

「へ！？」

「私には愛しのユーノ君がいるから結婚すればいいの！！そうすれば寿退社という面目で帰れるの！！」

「ちよと待つて！！彼強くない私はどうすればいいの！？」

そんなフェイトを放っておいてユーノに今すぐ結婚を申し込むのはだが・・・

『ただ今司書長は電話に出ることが出来ません』

留守番電話が鳴っている。

「しまった！ユーノ君発掘調査に行ったから1ヶ月は帰ってこないの！！」

そう言っつて絶望するのは・・・

「どうしようフェイトちゃん・・・このままじゃ私達この土手に一  
国一城を構えることになるの・・・」

ピンポン

警告 不快に思われる方はスルーしてください。それでも見て不快に思われた方は自己責任でお願いします。

「ふう・・・冬場の河川敷は堪えるの・・・」

分厚いコートなどを着込んで河川敷でドラム缶で火を焚いているなのはにフェイトが・・・

「なのはあまり物もらってきたよ」

そう言って袋に入ったパンなどをもってくるフェイト。

「おお！今日はパンなの！」

「ちゃんとジャムは入ってるよ」

「ジャムはご馳走なの」

想像終了

「嫌だー！ー！そんな生活！ー！」

そう言って頭を抱えるフェイトなのは・・・

「もうこの手段しかない!!」

「何する気……え……」

なのはがやっているのは泣きながらドデカイ石に『なのはの墓』  
フエイトの墓』と彫って地面に大穴を掘った。

#### 結論

「ちよつとなのは!諦めないで!!」

「フエイトちゃん……もうダメなの……石乗っけて」

泣きながら穴に入ったなのはは『なのはの墓』の石を乗っけるようにフエイトに要求するが……

(落ち着け……落ち着くのよ私……数々の犯罪者を倒してきた私に出来ること出来ること……は!!!)

何かを思いついたフエイト。

「そつだ!あの悪魔を逮捕しよう!!」

「……え?なんで」

「あの悪魔を逮捕すれば大手柄になって私達の必要性をアピールできる!!」

「おお!ナイスアイディア!!で?あの悪魔がいつ犯罪を犯すの

「？」

「そんなの頼んでやってもらうに決まってるじゃない!!」

「フェイトちゃん・・・それって『癒着』なの」

なのはのツツコミをフェイトはスルーし力の家に行くのだった。

南家

「おう！砲台に死神！管理局クビになっただって？」

はやてから知らされて既に知っている力に事情を説明するのはとフェイト。

事情を知った力は・・・

「なるほど・・・事情は分かった・・・よし！人との付き合いは大事にしろって父さんが言ってたから何か起こしてくるか!!」

「「おお!!」」

ノリノリの力に拍手するのはとフェイト。

「で？何やるの？」

「これから銀行でも襲ってくる!!」

実は管理局主催の銀行強盗訓練の時力が犯人役に選ばれ管理局と真つ向勝負し見事に1300万円を奪って逃走し管理局の面子を潰し



たという恥じた経歴を持っている力。

勿論奪ったお金は訓練終了時に返し同時にはやてからやり過ぎだとお仕置きを食らったのは言うまでも無い。

## 結果

「どうせ襲うなら海鳴で一番でつかい銀行にするか！」

力となのはとフェイトが来たのは『海鳴の一番の大銀行』という看板の書かれた銀行だった。

「んで？ちゃんと釈放してくれんだろうな？」

「もちのろん介！！」

「よっしゃ！！」

フェイトの言い分に答え包丁にマスクにグラスサンに帽子という80年代の強盗スタイルで海鳴の一番の大銀行に入る力。

「おう！手上げる！金出せ！俺は強盗だぞ！ついでに10件くらい殺人も犯してるぞ」

そう言って嘘八百並べて脅す力。

「チャンス!!」

「今だ!!」

なのはとフェイト子強盗退治をしようとしたその時だった。

「ぎゃああああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

なのはとフェイトが踏み込む前に力の断末魔の叫びが響き銀行の玄関に入るところで止まってしまう。

すると

「・・・力君・・・うちの目の黒いうちはそないなことさせへんて・・・」

気絶した力を引き摺りながら出てくるはやて。

そう、運悪くはやてが貯金を下ろしている所を襲撃してしまい返り討ちにあってしまった力だった。

尚パンチ一発でKOしたらしい。

「さあ力君・・・どうなるか分かってるんやろうな・・・」

物凄く怒っているはやては力をダグベース開かずの間まで引き摺っていた。

その後力がどういふ運命で終わったかは想像にお任せする。

そして

「どつしよおお！もう手段が無いの！！」

頭を抱えるなのは……

「なのは……もうダメだよ……石乗っけて……」

「フェイトちゃん諦めるなって言ったのはフェイトちゃんなの！！」

泣きながら穴に入ったフェイトは『フェイトの墓』と書かれた石を乗っけるようになのはに要求した。

「こうなったら……この手で行くの！！」

「なのは……こうなったらって何回あるの？」

「最後の手段なの！！」

なのはの最後の手段とは……

「リンディ提督！とくくっても反省してますから！クビは取り消して欲しいの！！」

「母さん！お願いします！！」

リンディに泣き落としで謝るのだった。

二人の必死な光景を見たリンディは・・・

「まあ・・・この数時間何があったか知らないけど・・・物凄く必死なようだし・・・反省したようだから・・・今回は許しましょう」

「「あでがとつござばず！！！」」

こうしてなのはとフェイトは管理局のクビをとりあえず取り消され返り咲くことに成功した。

余談だが物凄い減法をされたとか・・・それは置いておこう。

第四十八話　なのはとフェイトのクビ騒動（後書き）

リイン

「ねえヴィータちゃん・・・」

ヴィータ

「・・・なんだ？」

リイン

「昨日のご飯は？」

ヴィータ

「・・・干物」

リイン

「その前は？」

ヴィータ

「・・・干物」

リイン

「その前と前と前と前と前は・・・！」

ヴィータ

「全部干物だ・・・！」

リイン

「もう飽きたです!!」

ヴィータ

「しょうがねえだろ!いつも処理する新次郎が家出したんだから!  
!」

リイン

「こうなったら・・・シグナムに干物作りを止めさせるしかないで  
す!!」

次回!勇者指令ダグオンA's どのこい シグナム干物製作阻止  
大作戦

シグナム

「貴様!干物作りを否定されたら私はどう自分を表現すればいいん  
だ!!?」

## 第四十九話 シグナム干物製作阻止大作戦

第四十九話 シグナム干物製作阻止大作戦

八神家の食卓

「……………」

「…………ガツガツガツ」

何やら不満タラタラで食卓を囲む八神家の面々……

「ねえ……ヴィータちゃん」

「なんだ？リイン？」

「昨日の晩御飯なんだっただけ？」

「…………干物…………」

「その前は？」

「…………干物」

「その前と前と前と前と前は……！」

「うるせえ！ぜえんぶ干物だ……！」

ラインのしつこきに机をバンツと叩きながら立ち上がるヴィータ。

「もう飽きたです!!」

絶叫するラインにヴィータが・・・

「これを見る!!」

押入れを開けると其処にはいそいそと干物作っているシグナムの姿が・・・

「ん？」

「シグナム・・・おめえが干物ばかり作ってるから夕飯が干物ばかりになるんだろうが!!」

その原因は全てシグナムだったりする。北斗からの横流し（売れ残りを格安で引き取る）された魚を干物にしているうちに溜まりに溜まった干物の数々。

尚、シグナムの作った干物は不味くはない・・・むしろ美味なほうなのだが量が量だけに飽きてきてしまった。

唯一平らげた（というより処理させられていた）のは力の弟である新次郎だけなのだが、流石の新次郎も発狂してしまい家出してしまったのだった。

この為シグナムの干物処理は八神家及び南家、更にはご近所に配るなど対策を練ったのだが新次郎が処理しなくなつた為かはたまたシ



グナムの作る比率が上がったのか減る所かむしろ増えている。

「・・・シグナムもうええ加減にせえよ・・・」

「主・・・私の趣味なので・・・」

「ああた！バトルマニアやろ！バトルやってりやええやん！！」

絶叫するはやて。流石にはやても毎日毎日干物では飽きてしまったらしい。

そこではやてが出したのは・・・

「シグナム！！干物制作活動禁止や！！」

「な！！」

処刑宣告に近いことを言われてしまうシグナムは演目『生涯の嘆き』のポーズをとってしまふ。

「主！それは私に死ねというのですか！？」

「な！そこまで言うてへんやろ！！」

「主！干物作りを否定されたら私はどう自分を表現したら良いんですか！！？」

既に生活の一部と化した干物製作を絶つというのは処刑宣告に近かった。

「問答無用や！みんな！！家宅搜索と北斗への横流し禁止令や！！」

「「「おお！！」」」

「やめてくださああああい！！！」

流石に毎日干物は飽きたらしく八神家全員で干物制作活動阻止に至ったのであった。

一方新次郎はというと・・・

キャピトラの隠れ部屋『弟友の会』会場

年上の兄やら姉の愚痴を魚に盛り上がる弟友の会に参加していた。

参加条件は『弟であること』それだけだった。

「俺・・・毎日毎日シグナムさんの干物食べさせられてんだよ！！」

「・・・まあ・・・大変そうだな」

新次郎の愚痴を聞きながらメザシ食べているユウ。ユウも鬱憤が溜まっているらしく大地と新次郎だけで始められた弟友の会に参加している。

尚、兄・姉に言えないような事を言い合って盛り上がる会の為隠れ家で行っているのだ。

部屋の前では畢が番犬代わりに立っていたりする。

ところ変わって本日の八神家

「ふう久しぶりに食べた〜」

シグナムの干物地獄から開放された八神家はシグナム以外のメンバーが久しぶりに外食でもしようと言う事になり外で食べてきたのだが・・・

「ん?」

何やら包丁で切る音が聞こえる。

「まさか・・・シグナム・・・うちらが外出している間に魚買ってきて・・・」

「行くわよ!!--」

そう言うってはやてとシャルマルがシグナムの部屋に急ぎドアを開けると・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

夢遊病患者のように部屋で干物作りの仕草を見せるシグナムを目撃したはやてとシャルマル。シグナムの目がかなり死んでいた。

「は・・・はやてちゃんこれって・・・」

「あ・あかん・・・禁断症状や」

干物製作に中毒性を見出したらしく摂取を断ったため発症したらしい。

「ん?・・・」

死んだ目をしたシグナムに見つけられ焦るはやてとシャマル。

「これはいい魚だ・・・」

「うわ!シグナム!こちらは魚やない!!」

「シグナム落ち着いて!!」

「・・・」

「ぎゃあああああ!!」

危うく干物にされかけたはやてとシャマルは急ぎダグベースに非難した。

ダグベース

「さあ・・・どうするかいな・・・」

危うく干物にされかけたはやてがブリーフィングルームで作戦を練っていた。

因みにシグナムは・・・

「ムー！ムー！！！」

ほったらかしておくのと凄まじく危ないので縄とバインドでグルグル巻きにされた拳句猿轡噛まされていた。

「どうしようはやてちゃん・・・事態が悪化しちゃったわよ・・・」

流石のシャマル先生も頭を捻っている。現代医学に精通しててもシグナムの干物中毒には効果が無いらしい。

「こうなったら最後の手段！！・・・ダグベース起動や！！！」

そう言うてはやてがダグベースを起動させ何かを起こした。

翌日

シグナムの部屋

「ぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ・・・」

干物製作禁止令を受け目元に影を落とし唾液たらしながら唸るシグナムに・・・

「シグナム」

「ぐぐぐぐ・・・？」

部屋に入ってきたはやてが持ってきたのは上等の魚だった。

「……主？」

「ごめんな……もう干物作ってええから……」

「主！」

はやての突然の変化に驚きを隠せないシグナム。

更に

「おまげや！」

「ムー！ムー！！」

そうやって持つて来れたのは縄とバンドでぐるぐる巻きにされ猿轡噛まされた新次郎だった。

シグナムの干物を全て平らげられる者は世界大と言えど新次郎だけである為、八神組はダグベースの総力を上げ新次郎の居場所を突き止めたのだった。

「んじゃこれ置いてくから心置きなく干物作ってええでえ〜」

そうやって新次郎を生贄に差し出しシグナムの部屋から出るはやて。

シグナムに解放された新次郎は凄まじく嫌な予感がした。

「な！なして俺が！！」

「……さあ新次郎……食べる……」

「え？……シグナムさん？……それ干物……ぎゃあああああああああああああ！」

干物片手のシグナムに詰め寄られ新次郎の絶叫が響く。

こうして新次郎に干物製作等の欲望の限りを尽くしたシグナムは禁断症状から開放されたという。

第四十九話 シグナム干物製作阻止大作戦（後書き）

ヴィヴィオ

「お姉ちゃん……お願いがあるんだけど……」

楓

「え？何？」

ヴィヴィオ

「私を八神組に入れて!!」

楓

「ええええええええええええええええええええええええ!!!!ダメだよ!!!!」

ヴィヴィオ

「何で!？」

楓

「だって!八神組は『悪者』の集団なんだよ!!『善人』のヴィヴィオちゃんになれるはずが!!」

ヴィヴィオ

「悪いことをすればいいの?」

楓

「ちよつと!早まんでよ!!」

次回!勇者指令ダグオンA's どっこい ヴィヴィオ!八神組へ



の挑戦

楓

「とっつしお爺ちゃん…！」

カ

「うん…っは適当に理由付けて諦めてまじっか」

## 第五十話 ヴィヴィオ！八神組への挑戦

それはある日突然の出来事だった。

「お姉ちゃん！私を八神組に入れて！！」

### 第五十話 ヴィヴィオ！八神組への挑戦

「へ？何をいきなり？」

ヴィヴィオの突然のお願いに目を丸くする楓。

ファイバード時代で久しぶりにダグベースの点検を行っていた楓の元に現れたヴィヴィオ。

その突然の宣言について行けない。

「え？なに・・・どつきり？」

「どつきりじゃない！ヴィヴィオは本気だよ！！本気なの！！」

ますます頭を抱える楓。

「え？ヴィヴィオちゃん・・・頭でも打ったの？この指何本に見える？」

「3本・・・て！ヴィヴィオは正気だよ！！」

脳みそは正常な用であり・・・

結果

「何で俺たちを呼んだの？」

カ・飛鳥・北斗・サイモン4馬鹿を集め作戦会議する楓。

「第一脈絡が全然分かんないよ・・・」

そりゃそうだ会って早々世間を騒がせている極悪集団八神組に入りたいと言つヴィヴィオの気持ちか・・・

「あの〜何でヴィヴィオはあたしら八神組に入りたいのよ？」

飛鳥が聞いてみると・・・

「だって！八神組は正義の味方でしょ！だからヴィヴィオは皆のお手伝いしたいの！！あの大地さんだって入ったんだから！！ヴィヴィオも入る！！」

その言葉に5馬鹿は・・・

(どうすんだよ!? ヴィヴィオの奴完全に誤解してるぞ!!)

(八神組は正義の集団じゃなくて『悪』の集団なんだぞ!!)

(・・・第一あいつ宇宙警備隊に入ってるだろうが・・・)

(・・・本心があるのかも?)

力・飛鳥・北斗・サイモンの順に会話が起ころ。何故ここまで『悪』の集団ということを主張するのは不明だが、天下の暴れん坊の八神組に入ることなど父・火鳥勇太郎が許すはずは無いだろう・・・

(どうする?)

(ここは適当に理由付けて諦めてもらうしかないか)

飛鳥のアイディアに異議なしで答えると・・・

とりあえず正攻法での説得を試みた。

「良いか? ヴィヴィオ・・・八神組はな・・・悪い集団なの・・・善人のヴィヴィオちゃんがなれるわけ「悪いことすればいいの?」なぬ!？」

説得の途中で腰を折られてしまった力。ヴィヴィオのいう悪いことに焦りを感じる力たちは思い切って聞いてみた。

「悪いことって・・・何やるの?」

「えっと・・・信号無視とか?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

悪いことというよりマナーの問題である。

するとヴィヴィオが・・・

「ダメかな・・・なら！家庭内暴力に走る！！」

「ちょっと待て！！何処でそう言うことを覚えてきた！！？」

ヴィヴィオを止めながら再び作戦会議。

（で？どうする？）

（こうなったら絶対に出来ない試練を与えて諦めてもらうか？）

（そうだ！？走ってくる10トントラックを素手で受け止めるってのは！？）

（サイモン・・・そりゃ前にあんたがやったから出来ると思ってヴィヴィオが実行したらどうすんだ？）

（なら俺の銃から逃げるのは？）

（・・・それ普段からキャロがやってるだろうが・・・）

（んじゃ〜地球の平和を守る為に生身で宇宙怪獣と戦うのは！？）

（そう言うときに限って本当に出てくるから止める）

ヴィヴィオを諦めさせる方法を揉めに揉めている5馬鹿。

(こうなったらあれしかない!!)

力が思いついた手段は・・・

「ヴィヴィオ」

「？」

「はやてと決闘して勝ったらいいぞ!!」

八神組内で確実に不可能であることを提示してみる力。

そうこの物語の中でははやてに勝てる者は居ない。

だがヴィヴィオの場合・・・

「わかった！それで良いんだね!!」

「へ？」

恐れることなくむしろやる気満々ではやての元へ向かった。

機動六課はやての隊長室

「ふ〜平和や〜」

呑気に紅茶をすすっているはやて。

するとドアがバンツと開きヴィヴィオが入ってきた。

「はやてさん！はやてさんに決闘を申し込みます！！」

「ぶつづつづつづつづつ！！」

そう言っただけで果たし状をはやてに突きつけて宣言するヴィヴィオに紅茶を盛大に噴出すはやて。

「ななななな！何を藪から棒に！？」

「おじちゃんに言われたんです！八神組に入りたかったらはやてさんと決闘して勝てて！！やっぱり八神組に入るにははやてさん並みに強くないとダメだからだと思って！！」

頭を抱えるはやて。

「あんなヴィヴィオ・・・それ」

「？」

ヴィヴィオの果たし状を指差すはやて。

「字、間違つとるで」

ヴィヴィオの果たし状には『葉たし上』と書いてありはやてが正しい漢字を教えた。

「間違えた……なら！書き直してくるから待っててね！！」

ヴィヴィオの決意は固いらしく果たし状を書き直しに行ってしまった。

そして

「おんどれは何を吹きこんどるんやああああ！！」

「ぎゃああああああああああ！！！！」

ヴィヴィオが去った後、はやてに盛大にお仕置きされる力。

尚、武器は拳である。

「ふむふむ……兎にも角にもヴィヴィオちゃんの組員入隊を阻止せんとな……」

はやても加わりヴィヴィオの八神組入隊の挑戦を阻止しようと作戦会議が再開された。尚、力ははやてにより片腕を骨折し吊っていた。

何故ここまでヴィヴィオの入隊を拒むのか……

それは未来ある子どもを悪の道に進ませてはいけないのと、入隊させたことが火鳥にバレたら怒られまくるのが目に見えているからだ。

「はやてさん！勝負！！」

ヴィヴィオが再びはやてに挑戦しに現れた。



そこではやてが・・・

「ヴィヴィオちゃん！海鳴タワーの頂上から地上に飛び降りたら八神組に入れたるわ！！」

「え！！！！」

「ウチは組長やからな！！！！組長が一番偉いから組長が言うことは間違え無しや！！」

嘘八百並べながらそう宣言するはやて。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

流石に200メートルの高さを誇る海鳴タワーからは飛び降りることなど出来ないしやらない。

ヴィヴィオも焦りの表情を見せるとはやては・・・

（・・・・・・・・しめしめ・・・・・・・・流石にビビツとるわ・・・・・・・・これで諦めるやろっ・・・・・・・・）

と高を括るのだが・・・

「それで本当に入れてくれるの？」

「へ？」

「！！！！」

何かを決意しダグベースから走り去っていくヴィヴィオ。

1分後

『ニュース速報です!! 謎の少女海鳴タワーの頂上アンテナの上に立っています!!』

「「「なんだとおおおおおおおおおおおお!!?!?!?!」」」

絶叫する八神組。テレビのニュースに映る海鳴タワーの頂上に立っているヴィヴィオ。どうやってダグベースから1分で海鳴タワーまで行ったのか不明だが・・・

海鳴タワー

「すう・・・はぁ・・・」

海鳴タワーの頂上で深呼吸するヴィヴィオの元へ・・・

『ヴィヴィオーーー!!』

『早まるなああああ!!』

八神組の良心チームアルフェリスの戦闘機であるビルガーとデルタが駆けつけ、コックピットには力達に乗っている。

『ヴィヴィオちゃん！何やっとなるんや！！』

デルタの外部音声マイクでヴィヴィオに向かって叫ぶはやてにヴィヴィオは・・・

「あ！はやてさあん！今飛び降りるからちょっと待ってて〜」

物凄く度胸をすえたヴィヴィオ。

このままでは本当に飛び降りかねない。

そしてはやては・・・

『わかった！！ヴィヴィオちゃん！！！！うちの負けや！！！！合格や！！！！！！』

「へ！？けど飛び降りてないよ？」

『ヴィヴィオちゃんの度胸を試したんや！！！！』

必死に誤魔化すはやて。

『それじゃあ〜一緒に降りようか〜』

「はい」

そう言ってビルガーがヴィヴィオを掴んで下降する。

この後お騒がせ行為により全員に誤りまくったのは言うまでも無い。

「これで私も八神組の一員だね」

「ああ・・・うん・・・」

これ以上試練を与えてもヴィヴィオは実行してしまいそうな為試練による入隊拒否を断念する八神組。

「あのさ・・・ヴィヴィオちゃん・・・」

「ん？」

「なんで八神組に入りたかって思ったの？」

楓が質問してみるとヴィヴィオは・・・

「だって・・・お姉ちゃんが凄い心配なんだもん！！お姉ちゃん無茶苦茶して身体大事にしないし！ヴィヴィオが付いてないと！！」

「・・・おめえが原因じゃねえか！！」「・・・」

ヴィヴィオの手前スリッパやハリセンで袋叩きに合う楓。本当なら凶器を使いたいが子どもの教育上自重したらしい。

「ヴィヴィオちゃん・・・あくまでも仮入隊やからな・・・正隊員になるにはまだまだだよ」

「はい」

はやての言葉にそう答えるヴィヴィオ。

この後八神組はヴィヴィオを脱退させる為のあの手この手を頑張つて計画するのであった。

そしてヴィヴィオが八神組に残留したかは読者様のご想像にお任せしたい。

第五十話 ヴィヴィオ！八神組への挑戦（後書き）

大地

「それにしても・・・最近は大変だったな・・・」

新次郎

「そうだな・・・」

大地

「ここは日頃の愚痴をこぼしまくるか」

新次郎

「いいねえ」

次回！勇者指令ダグオンA's どんこい 弟友の会

大地

「年上の愚痴を魚に盛り上がるか」

新次郎

「参加条件は弟だぜ！」

## 第五十一話 弟友の会

ここはある密会所・・・日々のストレスを秘めた弟たちの溜まり場であつた。

「ああ・・・また来てるね」

「うん・・・そうだね」

キャピトラのカウンターで何かを思うスバルと光太郎。

その奥では・・・

「でさ・・・この間シグナムさんが俺の口に干物捻じ込んできた」

「そりゃひでえ・・・」

新次郎の話を聞いている大地。

そうここはキャピトラ奥の間で行われる密会・通称『弟友の会』

## 第五十一話 弟友の会

凶悪な兄である力を持つ新次郎と破天荒な姉を持つ大地。

二人がキャピトラで愚痴を言い合っていた時に光太郎が「誰にも聞かれないなら奥でゆっくり話せば」と言ったことがきっかけとなりキャピトラ奥の間で盛大に愚痴りあったのを皮切りに二人だけのささやかな会として勃発した会。

そして何処から話を聞いたのかコウが参加し、蓮が参加した。

尚、邪魔が入らないように物凄く協力で凶悪な番犬を用意している。

更に弟友の会に入る為には通行料を払わなければならない。

「お待たせ！」

「お！蓮！来たか」

弟友の会に訪れる蓮。尚手作りケーキを持参していた。

「大兄好きだよね」

「.....」

ぶつちやけ恥ずかしいので甘党を隠している大地。だが何かに気付いた。

「!!--」

ケーキにハリを刺す大地。すると中から出てきたのは発信機だった。

「え？なんでこんなのが？」



「大方八神が入れてたんだろ」

「はや姉……」

涙目になる蓮。

「そついえば……今日はユウの奴遅いな……」

と腕で組んで考えていると……

「遅くなつた！」

「ユウ」

遅れて登場したユウ。

「悪いな〜スバルたち巻くのに手間取つた……」

「相当参加したいのかあいつら」

実はユウが弟友の会に参加していると情報を聞いた影の守護者メンバーが参加を目論もうとしたのだが、弟のみのささやかな食事を邪魔されたくないのユウは逃亡を図っているのである。

「ま・いいや・ほいよ参加料のチョコだ」

「おお！待ってました〜」

ユウ特性チョコを頬張り始める大地たち。

この会はノンアルコールであり甘い物やらで騒ぐ会でもある。

「おう！待たせたな〜」

「ん？シロー！」

兜甲児の弟兜シローも参戦した。

「ほれ！クリームブリュレだ」

「おお〜焼プリンとどう違うんだ？」

「さあ〜」

そう頭を捻る新次郎。

その一方で……

「う〜ん……よっぽどストレス溜まってるのかな？言えば良いのに」

「スバルちゃん。男には男同士じゃないと言えないこともあるの。野暮は無しだよ」

「む！光太郎さん！女性差別！」

そう言ってブウたれるスバル。紛らわしいのでライダーズバルと表記する。

その理由は……

「ねえ！光太郎さん！ユウ兄知らない！？」

突然現れる影の守護者スバル。

「知らないよ〜」

すっ呆けてみせる光太郎を見た影の守護者スバルは怪しみ。

「ああ！怪しいんだ！奥調べちゃうー！！」

別に止めない光太郎。そして影の守護者スバルがキャピトラの奥に入ると・・・

「ぎゃあああああああああー！！」

「ガウガウガウガウー！！！！」

番犬・畢に思いつきり吠えられる影の守護者スバル。

「な！なんて凶悪な番犬なの！！！？」

「グルルルルルルルル・・・フウ・・・」

野生本能むき出しで再び奥の間に行く畢だった。

そう大地達は灰汁の在る姉や兄に対して對抗するべく凄まじい凶悪な番犬である畢を飴玉3つで雇ったのである。

尚、通行料とは畢に食べ物を渡せば通れるため食べ物持参しなけれ

ばならないのだ。

「そつだ！ノアを連れてくれば！ノア」

ノアを探しに行く影の守護者スバルだった。

「んでよシグナムさんが・・・」

「いいじゃねえか。シグナムさんのボインがお前のになるんだから」

そう言つて茶化すシローだが・・・

「いらねえよ！あんな役に立たない無駄乳！！」

「うわシグナムさんの存在否定したよ」

「え？シグナムさんの存在意義つて胸だけなの？」

シローの言葉に目を丸くする新次郎。

一方

「大兄はや姉が僕の事抱き枕にするんだ」

大地に向かって泣きつく蓮・・・すると

「だったらお前が八神を抱き返してやれ」

「へ？なんで？」

「積極的な女は突然の奇襲に弱いぞ・・・ウチのクソ姉がそうだった」

「なるほどなるほど・・・」

メモする蓮。

するとユウが厭らしい目で大地を見てきた。

「お前、スバルと何時結婚するんだ？」

「な！なななに言っただお前！？」

「スバルにほの字なんだろ？スバルにもらったバンダナ今もつけてるし〜憎いね〜このこの」

「俺の場合は一方通行なの。第一とある事情でウチの作者 *striker's* のキャラクターに勝手なことできねえし」

「あっそ」

「そついつお前はアルトとどうなんだよ？」

「あ！その・・・」

恋路の話になるとヤキモキする弟たち。

一方

「いい！？畢ちゃん！これこれ」

「ムー！ムー！！」

ミツキによって生贄に出されたノアを持ってきた影の守護者スバル。尚、ノアはミツキのよってバインドを施されていた。

「いつくよ！それ！」

「ムグググ（スバル teme ー！！）」

「フカー！！！」

まるで捕って来いの如くノアを劣りにした影の守護者スバル。畢が捕獲しようとドアの前から離れた隙に弟友の会会場に入ろうとする影の守護者スバル。

しかし

ガシ

「え？」

既にノアを捕獲している畢に捕まれている影の守護者スバル。そして畢がノアに送るような熱い視線を送っている。

「ジー……」

「まさか……いやあああ！！」

この後、影の守護者スバルがどういう運命で終わったかは不明である。

そしてもう終わりは近づいていた。

「はい！特性のキャラメルブランデーケーキだよ」

光太郎特性のキャラメルブランデーケーキで閉めることにした大地たち。

「いや〜美味しいな〜」

「なんだ・・・」

「光太郎さん・・・これ兄さんにお土産に持ってって良い？」  
等と好評である。

ケーキを食べて年上に言えないような愚痴を言い合い日々のストレスを解消する。

こうして弟たちのささやかな集まりは続くのであった。

おまけ

「でな〜」

飛鳥のBARフェニックスではお姉ちゃんの会というものが行われていた。

「ええかはやてちゃん・・・押しダメなら・・・押し倒してまえ！！」

「おお！はやて姉さん！ナイスや！！」

「ガキに何吹き込んでんだあんたは！！」

そう言つて飛鳥にハリセンで引つ叩かれるはやてだった。



第五十一話 弟友の会（後書き）

はやて

「なあっはっはっは！腰はハロウィンや！今年という今年こそは力君に盛大な悪戯をしてやるんや・・けどな」前回みたいに力君がお菓子用意してたらあかんしな」ここは

次回！勇者指令ダグオンA's どんこい はやての悪戯大作戦！

はやて

「力君のお菓子作りを邪魔したるんや！！」

## 第五十二話 はやての悪戯大作戦！

ある日の八神家

「ふっふっふっふ……今年も来たで〜」

カレンダーを見ながら不気味に微笑むはやて。

本日は……

「ハロウィンヤー！！」

第五十二話 はやての悪戯大作戦！

「ふっふっふ……今年のハロウィンこそ力君に悪戯したるんや！！」

やる気満々のはやて。2年前に力とハロウィンをやるようになって以来力へのいたずらを目論んでいるのだが大体不発に終わっている。

「主……まだ懲りてなかつたんですか？」

「なに言うてるんやシグナム！今年という今年は力君に絶対に悪戯したるんや！！」

そう言うってはやてが用意したのは力への悪戯の道具の数々……

「拷問車!?!」

「ギロチン!?!」

「……回転式逆さ張り付け台」

「……地雷」

相変わらずヘンテコな悪戯アイテムに呆れる八神家の面々。

「……主これでどんな悪戯するんですか？」

「ていうか……毎回毎回これどっから仕入れてくるんだ？」

悪戯の内容に疑問を持つシグナムに道具の出所に疑問を持つヴィー  
タ。

「これでウチが一生忘れられないような悪戯したるんや!?!」

「それじゃ〜はやてちゃん既成事実でも作っちゃえばいいです」

ラインの反物質爆弾発言にはやては……

「うわああああん!?!?!」

絶叫しながら逃亡を図った。

「リン……」

「はい」

「相変わらずえげつねえ事言つな」

そう言つて呆れるヴィータと婆さん座りでお茶飲むリンだった。

そしてはやては……

「力君のせいやああああ!!!」

「だから俺が何をしたあああ!!!?」

はやての金平糖から逃げ回る力ちゃん……盛大に八つ当たりされているのだった。

795

ハロウィン当日

「ふっふっふ……準備できたで〜」

思いつきり不気味な笑みを浮かべながら全ての悪戯の道具を南家全  
てに仕掛け終わったはやて。

だが2年間の経験は伊達じゃない……

ここでこのまま終わっては2年前と同じ結果で終わるからだ。

「……ふ……魔導師に一度見た技は通じないんや!！」

それは聖闘士である。

南家の厨房に行くはやて。

そこにはハロウィン対策のお菓子を作っている力の姿が……

「さあて……どうやって邪魔したろうか……」

既にこの時点で悪戯ではないかと思われるだろうが変身魔法でミニ化したはやて。そのまま台所にまぎれると何やら砂糖に細工を施している。

「……これでどうや……へっへっへ……」

そう言っていていそいそと砂糖から離れるはやて……すると……

「うぎゃあああああああ!！」

ドーン

砂糖が爆発したのだ。はやてが細工し粉塵爆発を起こしたのである。

尚、力は体が丈夫な為ちゃんと生きているが南家の台所は悲惨である。

「けっけっけ……これでどうや」

お菓子をすることは不可能である。因みに力の財布ははやてが確保してあるため買ってくることも不可能だ・・・しかし・・・

「あゝあ・・・やっちゃまった・・・しかたねえな・・・昨日兄さんのところで作り貯めしたで頑張るか・・・」

「!!!」

既にキャピトラダグオン店でお菓子を大量に作っていた力。

お菓子作り阻止作戦が不発に終わってしまった。

「・・・こうなったら」

作戦を切り替えたはやて。

2時間後

「それじゃあゝ」

「気をつけてね」

光太郎から作り置きしていたお菓子を受け取り八神家に向かおうとするが・・・

「今度こそ・・・今度こそ・・・」

50メートル離れたビルの屋上で何故かライフルのデバイスを構えて狙撃体制に入るはやてとシグナムとヴィータ。

「これでお菓子を撃ちおとすんや・・・」

やる気満々で構えるはやてにシグナムは・・・

「主・・・そこまで悪戯したんですか？」

「よっぽど鬱憤がたまってるみたい」

そう思うシグナムとヴィータだが逆らったら恐そうなのでとりあえず合わせるのだった。

すると

「!?!」

力が持っていた紙袋が打ち抜かれた。

「誰だ？また砲台か？てことはこの後は死神の追撃？ダメだ！気配が全く読めない!!相手は只者じゃない!!」

いつもビンビンに感じるどす黒いオーラを今日は感じないという事は未知なる敵の遭遇に思えた力。

力を襲撃する人間は恨みをこめてなのは達のような襲撃をするのである。

「うわあああああ!?!」

謎の狙撃から逃げまくる力。長年にわたる襲撃で養われた勘が全く働かない為あるときは狙撃にあたりある時はお菓子を撃ちぬかれた。何やかんだで八神家まで到着するのだが・・・

「誰だ！こんなことをした奴は！！」

持ってきたお菓子の山をほとんど破壊されてしまい絶叫する力だった。

「うっひゃっふあっひゃ！！これで堂々と力君に悪戯できる！！」

高笑いするはやて

そこまでしてはやては力に悪戯したいのだろうか・・・

そしてハロウィンパーティ

コスプレをした八神組のメンバーがお菓子やらを持って魔法の言葉を言い合っていた。

「大地（トリックオアトリート）」

魔女のコスプレをしたスバルに強請られる大地は・・・

「・・・ほれよ」

手作りのお菓子の家を差し出す大地。



ビスケットの屋根にチョコレートのペイントでぱつと見たらお店で売っているような物を出す大地。

「うっひゃ〜これ食べたかったんだよね〜」

そう言つて屋根からバリバリ食べるスバル。とても美味しそうに食べている。

「ありゃ〜最近お菓子作りに凝つてるって言つてたよね〜蓮君と一緒に光太郎さんのところに通つてるって・・・」

「てめえ・・・なんで知つてんだよ・・・」

楓の言葉に怒る大地。ぶつちやけ恥ずかしいと思つている為参加していることは黙つているのであつた。

「お姉ちゃんは大地のことなら何でも知つてるんだよ〜」

そう言つて飄々とする楓。

そして新次郎が・・・

「ねえシグナムさん」

「なんだ？」

「シグナムさんつて子供できるの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

言葉に詰まるシグナム。

「いきなりどうした？」

「いや、ぶつちやけ長年の疑問だったから」

「産んだこと無いから知らん・・・」

「あつそ・・・ん？・・・！！！！！」

何故かシグナムに押し倒される新次郎。そしてシグナムが耳元でささやいた。

「・・・何なら貴様が試してみるか？・・・」

「あゝ・・・」

失神する新次郎。

「・・・冗談のつもりだったのだが・・・南家の男は皆色仕掛けに弱いのか？」

等というシグナムだった。・・・最近ギャグに目覚めたらしい。

一方

「お姉ちゃん！トリックオアトリート！」

カボチャの帽子を被ったヴィヴィオが笑顔で楓にお菓子をねだると・・・

「はいヴィヴィオちゃん」

「・・・・・・・・ムギユ・・・・・・・・」

あっさり渡す楓に面白くなさそうなヴィヴィオ。実はヴィヴィオも楓にいたずらしたかったりする。

「カ。トリックオアトリート」

「ほいよ・・・・・・・・」

飛鳥に力ちゃん特性クッキーを渡す力。だが数が少なく飛鳥に配ったのが最後らしい。

其処に狙い済ましたかのようにはやてが魔王ルックで・・・

「力君、トリックオアトリート」

力に魔法の言葉を言ってみる。これで昨日から仕掛けた悪戯の道具をフル稼働で動かせるのだ。

そして力は・・・

（しまった！お菓子が切れた！！）

狙い通り弾切れを起こした力。はやてのダークな黒笑みの中、力は苦し紛れにポケットを探ってみるが・・・都合よくあるはずがないのだが・・・

「……!!……ほれ!!」

「!?!」

ポケットを必死にまさぐった力が偶然後で食べようと思っていた煎餅を持っていたのだ。

「どうした……」

「ぐ……ぐ……」

力がお菓子を渡した為に魔法の言葉が成立しない。

「ちきゅしょおおおおおおおおお!!」

こうして今年もはやての悪戯作戦も不発に終わった。

その深夜

南家の庭でシクシクと泣きながら一人スコープと金属探知機を持ち埋めたものを撤去するはやての姿があった。

第五十二話 はやての悪戯大作戦！（後書き）

力

「何！？はやてが暗殺されるだって!？」

飛鳥

「どっいつつもりだ？」

北斗

「まさか頭の命をとって俺達八神組を潰そうって腹か？」

サイモン

「ところで暗殺ってはやての奴どうやって殺されるんだ？」

力・飛鳥・北斗・サイモン・楓・大地

「「「「「うん……」「」「」「」

次回！勇者指令ダグオンA's どっこい はやて暗殺大作戦！八神組全員集合！

力

「絞殺か？」

飛鳥

「いや首チヨンパだろ」

北斗

「蜂の巣だ」

楓

「毒殺とか？」

大地

「・・・みじん切りだろ」

サイモン

「いやここは首ぶつた切つて内臓すずくつて」

ティアナ

「面白がつてる場合じゃないでしょうが！！！！！」

## 第五十三話 はやて暗殺大作戦！八神組全員集合！！！！

ある日のダグベース

「「「「「「「「「「わいわいがやがや！！」「」「」「」「」

本日ダグベースに集まったはやての以外の八神組構成員全員・現八神組・楓軍団・初代ダグオン・勇者特急隊・レジエンドラの勇者・聖勇者。

「ふっふっふ・・・集まったようだな八神組」

ダグベース内で何やらジャンゴが装置を仕掛けていた。

第五十三話 はやて暗殺大作戦！八神組全員集合！！！！

「ところで、炎さん何でダグベースに来たの？」

「いや、今日はパーティやるからって招待状がさあ」

ブリーフィングルームでそう言って炎を含めた八神組全員が招待状を見せると・・・

「え？そんなことしねえよ？」

するとブリーフィングルームが暗くなり巨大モニターにジャンゴの映像が写った。

『ぐわっはっはっはっは！！』

「ジャンゴ！」

『八神組！貴様らを集めたのはこのわしじゃ！』

「なんだと！？」

ジャンゴの突然の言葉に啞然とする八神組。

「てめえ！何のようだ！？」

『目的は！八神はやての暗殺！！』

「な！！」

啞然とする八神組・ジャンゴの今回の目的は八神組の壊滅でありあるう事に八神組組長であるはやての暗殺を目論んでいるのだ。

「はあ・・・それでジャンゴはここ最近ダグベースでここそそしてたのね〜」

「そうですね〜」

腕を組んで納得するシャル先生と楓。



ジャンゴに進入されて気付かないほどダグベースの警備は策ではない。何か仕掛けるだろうと思いい泳がせていたのである。

「で？本心は？」

飛鳥の質問にシャル先生と楓は・・・

「面白そうだったから」「

完全に行動が筒抜けであることにあんぐりかえるジャンゴだが気を取り直して・・・

『ぐむむ・・・八神はやてが死ねば貴様らバラバラになる！よって貴様らを拠点のダグベースに閉じ込めたんじゃ！！がっはっはっはっは！！！！』

高笑いするジャンゴ。

『そのまま八神はやてが暗殺される様子を指を銜えて見ているがいい！！！！』

「・・・暗殺」

凶弾に倒れるはやてを想像する力。

「・・・いやこうかも」

背後から来た何者かにハリで首筋刺されて倒れるはやてを想像する飛鳥。

「……んなもんこうだろ」

正面に立ちはだかられ銃で蜂の巣になるはやてを想像する北斗。

「……こういうのもあるぞ」

首チヨンパされるはやてを想像するシグナム

「案外縦だったりして……」

縦に切られるはやてを想像するヴィータ。

「木っ端微塵バラバラっていうのもありかも」

爆死するはやてを想像するシャマル。

「毒殺とか……」

身体中斑点だらけになって死ぬはやてを想像する楓。

「まさか……みじん切りか？」

残酷すぎる死に様を想像する大地。

「いやここは首ぶった切って内臓ずずって啜って」

完全に面白がっているサイモン。

「いや！もしかして途轍もない矢が刺さるとか（ドキッドキッ！）」

ドキドキしながら矢で風穴が開くはやてを想像するスバル。

「摩り下ろすとかは？」

「いや、暗殺といたら辻斬りでしょ」

「いやいやここはギューっと絞って内臓どぴゃーって」

「面白がってる場合じゃないでしょうが！！！！」

既にはやての死に様が話の盛り上がる種と化した為組員達にティアナが檄を飛ばした。

組長が殺されそうだというのに全く心配していないのである。

『な！なんという緊張感の無い奴らじゃ！！ええい！そこで指を加えてみているがいい！わしが貴様らを足止めしてやる！！』

そう言っつてモニター画面を消すジャンゴ。

「はあ、それじゃあ・・・助けに行きますか」

「そうだな・・・」

ジャンゴがモニターから消えた瞬間やる気無さそうに救出作戦を始めようとする力と飛鳥。

「ちょっと待ってください！何でそんな緊張感無いんですか！！」

力と飛鳥の余裕にぶち切れそうになるティアナ。

「あのな～はやてがそう簡単に殺されるタマかよ逆に相手のほうが  
返り討ちにあうわ・・・相手を救いにかねば」

【うんうん】

全員が頷く。

この物語で最凶の戦闘能力を持っているはやての事等微塵も心配し  
て無いらしい力。というよりも信頼しているのだろつ。

すると飛鳥がティアナに聞いてみた。

「ん？あんたいつから八神組になつた？」

「私だつて八神組みたいなもんです！！」

そう宣言するティアナ。佐津田刑事が居たら嘆いているであろつ。

「とにかく行くぞ！！」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

すぐさまダグベースから出撃を試みようとするが何やら順路を行け  
ない。

「何処だここは！！？」

ダグベースの順路を進んでいたはずなのに何故か格納庫に出てしま  
ったサイモン達。

そして倉庫に出てしまった力と飛鳥と楓。

「何だここは!!」

パニックになる力。便利人間の楓が何かを取り出し周囲を検索した。

「・・・なにそれ？」

「自作の空間サーチユニットです」

「あっそ」

別に驚かない力。もう楓が何を作れようが驚かないらしい。

「うわ・・・これ空間捻じ曲げられちゃってますね・・・」

「いつの間にダグベースにこんなもん仕掛けた・・・」

ジャンゴの用意周到さに驚く力。何処か別の空間に出てしまう力ちやんだった。

「ふふふふ・・・この空間遮蔽装置で永久に彷徨うが良い」

高笑いするジャンゴ。

一方

「ん？」

八神組一行動力機動力と機動力に長けている竜がダグベース内を散策しているが何処にどう行くか分からない為かなり梃子摺っている。

一方で

「ヤツホー」

「いえ〜い」

「うわ〜い」

タクヤ・カズキ・ダイが空間移動で遊んでいた。落下すると下の空間移動先は真上になっている。その為無限ループになっていた。それを見ていたヴィヴィオは・・・

「ねえ！みんな！遊んでる場合じゃないでしょ！」

「んな硬いこと言っなよ〜 ヴィヴィオもやるうぜ〜」

「むう・・・えい」

ヴィヴィオも遊びに加わってしまった。

落下で遊んでいるヴィヴィオはゴルドランのメンバーにかかると子どもになるらしい。

一方

コ  
コ  
コ  
コ  
コ  
コ  
コ  
コ  
コ  
コ  
コ

「うわああ！壁が迫ってきたー！」

空間移動の壁が迫ってきたことにパニックになるヴィータは・・・

「おりゃー！」

「えええー！ちょっと親びん殺生なー！」

サイモンをつつかえ棒にした。

「ふう・・・これで安心だぜ」

「よくねえよー！ダイー！ダイー！ダイー！ダイー！ダイー！」

都合が悪くなるとダイの名前を連呼するらしいサイモン。

一方

チャキ

「ちよい！ダーリン！何をやる気？」

拳銃を構えてる北斗を止める紫と動向をみるキャロ。

「んな屈折した空間なら・・・こいつでぶち破る」

ガンガンガン！！

弾丸をジーつと見る北斗。

「あれ？何かこっちに跳んでくるような・・・」

耳を済ませてみるキャロ。

すると

ヒュンヒュンヒュン！！

「「”#\$%&’（）#”#\$%&’」

北斗の撃った弾丸が巡り巡ったのか180度反転して帰ってきたのだ。咄嗟に避けまくる北斗さん一家。

「んな分けのわかんねえ結界で足止め食うとは・・・！！」

「わああ！ダーリンストップストップ！！」

怒り狂う北斗を宥める紫だがここでキャロが魔法の言葉を言った。

「お義父さん、いい加減にしないと『パパ』って呼んじゃうよ」

「ゾクゾク！！」

必殺。パパ尊麻疹でとりあえず大人しくなる北斗だった。

「これいい手かも」

北斗が暴れそうな時はキャロに居てもらえば良いと思った紫だった。



更に

「ちくしょお！おりゃああ！！」

「シズマが居てよかつたかも」

シズマが木刀で次元を切り裂きながら舞人と共に前に進んでいる。

そして

『うおりゃああ！！！』

格納庫のロボットハウスにいるチームアルフェリスが空間を飛び越えようとするが勇者ロボ達は隔離空間に入れられたらしい。

その他の動向については構成員が多すぎるため省略させていただきます。

「空間閉鎖を直すには・・・ジャンゴの空間遮蔽装置を破壊するしかないですね」

そう宣言する楓。

すると

「うわー！！」

空間を付きぬけ出てきた大地。

「お！大地！」

「姉貴」

ぶつちやけ気まずい大地に楓がこの空間に対する対抗手段を考えていた。

「この空間は絶妙なエネルギーバランスを構築している・・・だってそれ以上のエネルギーをぶつければ・・・」

「どうするんだ？」

「な～に私には最大の切り札が居るから」

「あ？」

何やら超嫌な予感がした楓の切り札の大地。

「さあ！大地！Dコマンダー持ってハイパーモード！武装ー！！天空！って言ってみて」

超嫌そうな大地だがこの状況を打破する為に・・・

「武装ー！天・空！！」

隠しコマンドを入力しDアーマーのハイパーモードが起動すると得意な変化を遂げるDアーマー。

すると帯のようなエネルギーが大地の身体を包み込み鎧が構築される。

「!!!!!!」

鎧武者のような姿になり巨大な弓を構える大地。

「よっし!これがDアーマーの最強フォーム!天空の鎧!」

「……………いつかやるだろうと思ってたよ」

そう言つてこの展開を予想していた大地は特に驚いた様子も無く(というより楓の弟をやっているとちよつとやそつとの事じゃ驚かなくなるらしい)つべこべ言わず弓を構え魔力という名の超魂パワーをこめた。そのまま飛鳥が直感で指した方向を

「超弾動……超魂!真空波!!!!」

大地の放ったエネルギー波が空間を貫いた。

「うおりゃあああ!!」

大地の開けた空間に飛び込む力は見事にジャンゴの元に辿り着いた。

「やいジャンゴ!!」

「ふふふ……良くぞここまで来たなダグオン……これでも食らえ!!」

何やら巨大な光線銃を力に浴びせるジャンゴ。

「く!何だこの光線!!」

「がっはっはっは！！この光線は人間の一番弱い部分に作用し破壊するんじゃない！」

高笑いするジャンゴ・・・すると力に耳から肌色の何かが流れてきた。

「な！なんじゃこりゃ！？・・・まさか・・・俺の脳みそ！！！」

力の場合は頭が一番弱いらしくその為脳みそが破壊されているらしい。

「あゝあ・・・なけなしの俺の脳みそ・・・」

ただでさえ少ないのに流れ落ちることに脳みそが流れていることを嘆く力。だがダメージは無いらしく鬱陶しいとは思っていないらしい。

「ぬああっはっはは！！脳が破壊されればダグオンは終わりじや！！！」

その時

「ん？」

耳から脳みそが流れるのがとまった力。という事は脳みそが無くなり頭の中がスツカラカンになったのだ。流れた量が少ないことから力の脳みそは本当に少ないらしい。

「よっしゃ！！これで気にしないで暴れられるぜ！！！」

やる気満々の力ちゃん。

この男脳みそが無くても平気らしい……

「んな馬鹿な!!」

流石のジャンゴも脳みそが無くなって正常に活動している人間を見るのは度肝を抜かれるらしい。

力の大暴れによりジャンゴの空間遮蔽装置が破壊された。

『くうう!!こうなったら実力で相手になってやるわい!!』

・  
そう言ってロボットに乗りダグベースの前に現れるジャンゴだが・

『気合入れるのは良いけどよ……お前一人でこの人数に勝てる自信あるの?』

『な!!』

ジャンゴは忘れていた今ダグベースには、はやて以外の八神組全員が居ることに……

既にグレート化もスーパー化も済んでいる全ての八神組の勇者に睨まれるジャンゴ。

『よっしゃ!みんな!手加減するな!!』

『うわ！待て！袋叩きは卑怯じゃ・・・あああああああああああああああああああ！！！』

ジャンゴがどういふ運命で終わったかはご想像にお任せする。

そしてその足で急ぎはやての元に向かう構成員達。

「ん？何や？皆して」

「はやて！良かった無事だったか！！」

はやてが無事なことを確認した力達は急ぎ防衛策を張った。

オフィスに居るはやてを囲むように全員がダグテクターを装着し更に他のメンバーは戦闘服を装着し完全武装して構える。

「さあ！ドライアス！来れるもんなら来てみやがれ！！」

「飛んで火にいる夏の虫とはこのこつた！！」

完全に臨戦態勢に入っている力達。

だが

「あ？今日だったか？」

呑気に昼寝していたゾルとシュラ、どうやら暗殺決行は明朝だと思っ  
っていたらしい。

「き！貴様ら！！・・・くう！これじゃ作戦失敗じゃわい！！」

こうして作戦がばれた事によりジャンゴの計画は失敗に終わったのであった。

その夜

「なあ・・・みんな何時までその格好でおるんや・・・」

「もう少し」

なかなか襲撃にこないドライアスご一行様をダグテクターや戦闘服のまま夜通し待つてみる力達だった。

尚、力が寝ている間に楓が注射器で出てしまった力の脳みそを注入したらしい。

第五十三話 はやて暗殺大作戦！八神組全員集合！！！（後書き）

はやて

「うん……どうしたんやろ……最近洋服は入らなくなったなあ……体重計に……ぎゃあああああああああああ！！！」

次回！勇者指令ダグオンA's どんこい はやてのダイエット大作戦

はやて

「痩せるぞ！ん？飛鳥は普段どうしてる？」

飛鳥

「何もやってない」



## 第五十四話 はやてのダイエット大作戦

第五十四話 はやてのダイエット大作戦

ある日の南家

「はぐはぐはぐ……」

相変わらず健康的に食べているはやて。【この物語において】は健康的に良く食べるキャラらしい。

「相変わらず良く食べるな……」

「見てるだけで胸焼けしそう……」

はやての食べる量に唖然とする力と新次郎。すると新次郎がある事に気づいた。

「はやて姉ちゃんちょっと丸くなった？」

「へ？」

新次郎の素直な言葉に衝撃が走るはやては青い顔をしながら急ぎ風呂場に行くのであった。

「新次郎……」

「何兄ちゃん」

「おめえデリカシーって奴はないんかい」

「南家の男にそんな出来た神経はない」

「まあ・・・女の禁句を平気で・・・今頃はやての奴キヤーとか言  
つてんじゃ」「うぎゃああああああああああああああああああああ  
ああああ！！！」あの雄叫びはただ事じゃないぞ！！！」

突如ご近所中に響き渡りそうな雄叫びを上げるはやてに対しマジで  
心配しながら急ぎ声のする方角・風呂場に向かう力だが・・・

「おい！何があつた！！？げええ！！！」

「このドスケベ！！！」

「あおう！！！」

突如すつぽんぽんのはやてを目撃してしまい蹴り飛ばされ壁に首が  
めり込む力ちゃんだった。

### 3分前の出来事

「あは・・・あははは・・・そーいや最近服がきつうなつたような・・・

「  
死んだ亡霊のような足取りで風呂場に入ったはやては体重計に乗っ  
た。」

すると

「60トン!!!!?なんでやあ!!!!?.....あ!!!」

絶叫したはやては急いで服の中から何かを投げ捨てた。

ガチャーン!ボテボテ!!パラパラ!!ウィーン!!

服の中から次々と出てくる対力用お仕置き武器の数々・・・

こんな物を身に纏ったまま体重計に乗っちゃ流石に重い。

尚、体重計が壊れないのは楓が自作した物であるからと思っていた  
だきたい。

「次こそは.....」

とても服に隠しきれない量の対力用お仕置き武器を全て外し再び体  
重計に乗るが.....

「なぬ!!!」

普段の体重よりオーバーしていた。

「そつや!服着とるから重いんや!!!」

無駄な抵抗を試みるがそんな事をしたところで体重は減らない。

「うぎゃあああああああああああああああああああああああ

「！！！！」

と雄叫びを上げ現代に至る。

「こうなったらダイエットや・・・ダイエットするしかない！！」

そう熱く燃え上がるはやては壁に首がめり込んだ力を放置したまま夕食に行った。

今日の献立

「・・・何これ・・・」

栄養剤だけである。

流石にあんぐりかえる南家と八神家・・・

「これだけでええんや！栄養取ってればこれでええんや！！」

「アホかあ！！食事は腹いっぱい食べるのが八神組の掟だろうが！  
！大体！食べ盛りに何考えてんだお前は！！？」

「文句があるなら出てけええ！！」

「ぎゃあううう！！」

文句を言った力だがはやてに蹴り飛ばされ我が家なのに追い出されてしまった。

結果

「しくしく……」

公園のベンチで新聞紙被って眠る羽目になるのであった。尚、翌朝の食事は飛鳥の家にたかりに行ったらしい。

翌日

「ふうー！ふうー！！」

ひたすらサウナに入って汗を流すはやて。もうかれこれ8時間は入っている。

「あ……」

そして無茶がたたり目を回して救急車で運ばれるはやて。

昼

「……」

ひたすら食べずに空腹と戦っているはやて。どうも手っ取り早く食べないダイエットをするつもりらしい。

「はやてちゃんどうしたの？」

なのはが心配そうに見つめるがはやては何も答えない。

すると目の前のなのはが・・・

「ローストチキンや・・・」

「なぬ！？どうしたの!？」

「は！あかん幻覚や・・・」

目の前のなのはがローストチキンに見えてしまったのであった。流石のなのはも別の意味で身の危険を感じていた。

尚、任務だというのにフェイトがカツ丼に見えたりシグナムのおっぱいが肉まんに見えたりしたはやては任務に支障をきたしまくり自宅謹慎を食らってしまう。

そして体重計に乗ってみるが・・・

「何でや・・・全然体重がへらへん・・・」

再び目が死に始めるはやて。

本日こつそりと八神組でスタイルのいい飛鳥に体重のことを聞いてみるが・・・

「飛鳥は普段何やってるん？」

「特に何もやってない」

「ムカ!!」

特に何もやってないのにスタイル抜群の飛鳥に嫉妬するはやて。やっぱり足を使って捜査するから凄まじい運動量なのであろう。

南家

「おゝいはやてゝ極上の焼肉だぞゝ」

昨日っから何も食べてないはやてに対し力はただでさえ少ない小遣いをはたいて極上の焼肉の肉を買い七輪ではやての目の前で焼き始めた。

というよりこのままでは家庭崩壊(?)に発展し力は毎回新聞紙で寝ることになるからだ。

「ぐ!ぐぐぐぐぐぐ!!」

肉自体であまりのいい匂いに悶絶しまくっているはやて。

「はやてよお・・・なれないダイエットなんて止めて腹いっぱい食べなよゝお前さえよければいつでも腹いっぱい食べられるんだぞゝ」

「力君・・・悪いけどウチはどうしてもやせなあかんねん・・・」

「ていうか・・・お前痩せてるって言うよりもやつれている道を順調に歩んでいるぞ・・・」

現在のはやてはスリムの道というよりかなりげっそりしている。

「力兄、秋刀魚買ってきたよ。油たっぷり乗ってるからいい匂い出るよ。」

そう言っただけを利かせて蓮が秋刀魚を買ってきた。

「はやく意地を張ってないでさあ……え？」

何故か立ち上がったのはやて。その姿はマンモスのような雰囲気を出している。

そして

「うっさあああい!!」

「うぎゃー!!」

怒りまくったのはやてに殴られ壁にめり込む力。

その光景を見たヴォルケンスは……

「不味い……主の戦闘力が落ちている」

冷静に分析するシグナム。

「え？ちよつと待って……はやく姉さんの戦闘力はいつもと変わらないよな……」

「甘いな蓮……いつもならな……」



いつものパターン

「このー！おおぼけがああああ！！」

「うぎゃあああああああああああー！」

はやての拳で家の全ての壁を貫通して外に吹っ飛ばされる力。

「とうとうように毎回毎回風通しの良いことになる・・・何度大工さんに入ってもらったことか・・・」

既に大工さんは立て直したほうが速いんじゃないかと言いつつ放った。

この話を聞いた蓮は・・・

（はや姉・・・絶対に真似しないでね・・・）

開いた口が塞がらず切実にそう願うのであった。

「う・あ・・・ああ・・・」

既に白目をむいているはやてを目の当たりにしたヴォルケンは流石に焦りまくっている。シグナムと筆頭に作戦会議が始まった。

「うん・・・どうやって主の戦闘力を戻すかな・・・」

「相当ストレスたまつてそうね・・・ん？飛鳥さんはストレスたまつてなさそうな生活送ってるわよね」

「ここは力をいじめまくってもらえば・・・」

「そうか！ストレスが解消されれば痩せるはずだ！」

と言っわけ・・・

ダグベース開かずの間

「て！人権無視だああ！酷えよ！みんな！！」

開かずの間の張り付け台に括りつけられている力。

「ごめんね〜力君」

「すまん・・・私達も昨日から何も食べていないのだ・・・」

シヤマル大先生とシグナムにトドメを刺されながらヴィータがやつれたはやてを連れてきた。

「さあさ！思う存分虐めるはやて・・・」

「ああ・・・あああ」

栄養が回らず血色が悪く完全にやつれているはやて。

すると力があることに気づいた。

「ん？はやて胸でつかくなつてね？」

「「「は？」」」

力の突然の爆弾発言に拍子抜けするヴォルケンス。

「貴様！苦し紛れに言い訳を！！」

「そうだ！男なら男らしくはやてに虐められる！！」

シグナム・ヴィータの見も蓋も無い発言にシヤマル先生は・・・

「ちよつと失礼・・・あゝ本当だわおつきくなつてるよ・・・」

「なぬ！！？じゃあ服が入らなくなつたのは・・・」

「発達した胸囲が邪魔したんじゃないの？力君が揉んだわけじゃないけど」

シヤマル先生の無責任な言葉にはやての血色はだんだん戻っていき・・・

「そつやつたんや・・・体重が増えたのは胸が大きくなつたからなんや・・・そつだつたんや・・・そつだつたんや！！」

「良かったなゝはやてゝんじゃこれ外し・ガチャン・・・え？」

はやてが立ち直つたことに安心する力は張り付け台から外すように言うのだが・・・ここで終わらないのがこの作品のオチである。

「　　」

超満面の笑みのはやてが指関節ボキボキ鳴らしながら迫ってくる。

「え？なに？はやて！何するつもりなの？ねえ！冷静に話し合おうよ！……！！」

「ヒャッホオオオオオオ！！！」

「ぎゃああああああああああああ！！！」

こうして溜りに溜まったストレスを力にぶつけまくるはやて。

「……こりゃ相当ストレス溜まってたみてえだな」

「……いつもの戦闘力の数百倍はあると見た」

「はやてちゃんのストレス溜めない方法って結局これなのよね……」

啞然としながら力の血祭りを見届けるヴォルケンズであった。

第五十四話 はやてのダイエット大作戦（後書き）

大地

「ええ・・・何故が知りませんが・・・再びデートすることになりました」

スバル

「いいじゃんいいじゃん！また遊びに行こうよ」

大地

「おめえよ・・・ん？今回は誰か付いてきてる・・・」

スバル

「おお！お決まりのイベント!？」

次回！勇者指令ダグオンA's どっこい 大地のデート2 お邪魔虫撃退大作戦

スバル

「行け行け!」

大地

「・・・俺・・・どげんしたらよかと・・・」

**第五十五話 大地のデート2 お邪魔虫撃退大作戦（前書き）**

今回、左近遼さんのリクエスト話です。

第五十五話 大地のデート2 お邪魔虫撃退大作戦

またまた突然の出来事であった。

「あのさ・・・大地」

「あ？」

「また・・・デートして欲しいんだけど・・・」

「え・・・」

目が点になる大地。

第五十五話 大地のデート2 お邪魔虫撃退大作戦

「・・・断る・・・」

「ええ！何でよー！！」

「スキンシップならこの間やっただろうがー！！」

正直身が持たないと思っっている大地はスバルとのデートを嫌がっている。

「ちよつと！今回は私にも事情があるんだって！！・・・実は」

## 回想

「スバル！今度食事会があるからお前も来い」

「え！ちよつと待って！お父さん！私仕事が！！」

「なあにフルコースだからな！ギンガはやる気になってたぞ！正装しないと行けねえからな準備しておけよ」

「てな事になつて・・・私テーブルマナーとかよくわかんないし！正装なんて持つてないよ！」

「だから何で俺なんだよ・・・」

「だって大地が一番詳しくそうだから・・・」

「まあ・・・人並みには・・・断る」



「えええ！教えて教えて教えて！！」

「ぐええええええ！！！！」

大地の首根っこ掴んでガクガク揺さぶるスバル。

結果

「はあくどれが良いかな？」

正装を買いに行くべく付き合わされる羽目になった大地。正直嫌そうである。

「そんなにつまんない」

「女の買い物は長いから嫌いなんだよ・・・」

「む！それ偏見！！」

ぶつきら棒に言う大地に反論するスバルだが、ショーウィンドウの中のドレスに目が行った。

「うわ・・・あれ良いなあ」

青を基調としたショートドレスを見るスバル。

「サイズは大体合ってるな・・・けどな・・・高いな・・・欲しいなあ・・・」

頭を悩ますスバルに大地はため息を吐きながら店に入った。

10分後

「ほれ」

「へ？」

スバルが欲しがっていたドレスを買って渡す大地。

「え！ちよつと！え！」

「ん？欲しかったんだろ？」

あまりの突然の事に気まずくなるスバルに大地は続けた。

「それじゃあ頑張れ！・・・これで帰れる・・・」

「ちよつと待った！！」

ドレス渡してとつと帰ろうとする大地を引き止めるスバル。

「ねねね！ドレスだけあったってどうすんの！？テーブルマナー教えてよ！！」

「んなもん家でやりゃ良いじゃねえか！！」

「本番になれときたいの！！」

スバルの強引な誘いに断りきれず結果。

「はぁ・・・」

P M 4 : 0 0

待ち合わせ時間3時間前の海鳴総合デパートに居る大地。

「まだ時間があるな・・・流石に早すぎたか・・・」

まめな男なのかただ気が早いだけなのか缶ジュース飲んでる大地は  
何かに気付いた。

「はぁ・・・それじゃ・・・」

ため息吐きながら近くにある運動公園で時間を潰そうとする大地。

運動公園にて

「こちらボス・・・ターゲット応答しいや・・・」

「こちら影の守護者スバル！視界良好！」

「セインだ！」

「ウエンディっす!!」

「・・・ノーヴェだ」

ある気配たち・・・すなわち組長一人と友達一人にナンバーズ三人が公園の林の中で待機していた。

実は大地のデートを聞きつけたはやてが面白半分であとを付けてやろうとアホな事を考え誘いに乗ったセインとウエンディ止め役にノーヴェ・さらには興味本位で同キャラの影の守護者スバルまで呼んだのである。

野暮一切無しの五馬鹿と違い・人間らしからぬ態度の大地のからのネタにしようとした組長が友達引き連れて現れたのであった。

という訳で大地の恥ずかしい映像を洗いざらい撮り捲ろうと暗視スコープつきカメラを構えたセインが後を付けた。

尚、大地は今公園のベンチでジュースを飲んでいた。

「まだアクションはおきないか・・・あ移動した」

茂みの中を移動しながら大地を追いかけると・・・

ガサ

「ん？何か踏んだような・あああああああああああああああ  
！！！！」

何かを踏んだセインはそのまま足元からロープを引っ掛けられ逆さ吊りに吊り上げられてしまった。

「うわあああああああ！！下ろしてええええ！！！！」

木に逆さ吊りにさせられながら叫ぶセインはじたばた暴れまわっている。

「さあって・・・デートの予行練習」

そう言って林を移動し始める影の守護者スバルだが・・・

「ん？うわあああああああああああああああ！！！！」

上から降ってきた縄網に捕らえられてしまう。

ここでその光景を見ていたはやては・・・

「あ・・・あかん・・・肝心なこと忘れとった」

ここで落ち度に気付くはやて。

そう大地は【楓の弟】である。

よって楓仕込のえげつない【楓罨】を習得していてもおかしくないのだ。

「ふふふ・・・」

何故かおもむろに広げられた綱縄を見つけたウェンディ。

「どづっせここに乗っかったらわあー！って引き上げられる仕掛け

っすね〜」

そう言って足でツンツンと縄を突っついてみるウエンディ。

「ほら〜罨にひっかかったっすよ〜な〜んちゃって〜うぎゃああああああああああ！〜！」

そのまま縄網ごと真っ逆さまに深さ50メートルほど下に落ちるウエンディ。

「ぎゃ〜！上だと思ったら・・・下だったっす・・・無念・・・」

落とし穴にはまってしまいがっかり沈んでしまったウエンディ。

「ん？」

またしてもおもむろに縄網がしかれているのを発見するノーヴェ。

「こっとなったら・・・引っかかった振りを」

ノーヴェが縄網に飛び込み縄網が引きあがる瞬間避けた。

「よつと！〜！うげええ〜！」

避けた先からゴミを捨てるなど書かれた看板に顔面を強打するノーヴェ。避けたら飛び出るように仕掛けが施されていたらしい。

「・・・二重の罨とは・・・無念」

そう言ってばったり倒れたノーヴェだった。

「は！よ！といー！！」

茂みの中からトラップ木製の矢が放たれまくり避けまくるはやて。

「く！流石楓ちゃんの泥棒避け罠・・・こうなったら・・・最後の手段やー！！」

はやてが拳に魔力を溜め始めた。もう面倒くさくなつたのか力的解決手段・・・力技で強引に解決しよう・・・を始めようとするはやて。

だが

「ん？誰や・・・げー！！」

周りから騒ぎを聞きつけたパトカーの群れが海鳴公園を取り囲んでいた。

さらに大地はとつとトンズらしていることを想定すると大地が通報したらしい。

「ここは・・・逃げるが勝ちやー！！」

逃亡を図るはやてに1日組員達は・・・

「「「ちよつと！！レスキュー呼んでよおおおお！！！！」」」

そう言つて楓罠にはまつたまま助けを呼ぶのであつた。

約束時間1時間前

「はぁ・・・これで邪魔者は居なくなつた」

慣れないタキシードに身を包んだ大地がつまらなさそうにスバルを待っていた。やはり14歳ではタキシードなどお増せなのか緊張しまくる大地。

「お待たせ」

「・・・・・・・・」

買ったドレスに身を包んだスバルが来た瞬間顔を背けてしまう大地。その姿に少し戸惑うスバルは大地に聞いてみた。

「その・・・変かな・・・」

「いや・・・その・・・馬子にも衣装だな・・・」

凄まじく照れているので素直に言えないダメな男・・・流石ダメ人間の子孫である。

「あはは・・・そのほめ方ちょっと傷つくかな・・・」

「ほめてねえし・・・」

大地の性格を読んだスバルは苦笑いしながら突っ込むと大地は否定した。



「それじゃあ、連れてってもらいましょうか？」

「はあ……かしこまりましたお嬢様……」

スバルをエスコートしながら正装でしか入れないレストランに入る大地とスバル。

「……流石ミツキさん推薦……ちゃんとしてやがる……」

実は当日予約で一杯であった為、ミツキに手ごろな店を紹介してもらったのである。

「え？なに？あ！スープだ！」

そう言つてスバルがスプーンを選ぶと……

「……それはデザートスプーンだ……こっち」

「あ！ありがとう！」

大地にスプーンを手渡され間違いを直すスバル。

「ナプキン置けよ……て！そう置くなつて」

マナーを注意され訂正しまくるスバル。こうして徹底的に大地にテーブルマナーを教えられるスバルであった。

そして会食は終わり・・・

「それじゃあな」

「うん」

スバルを駅まで送ると大地は上着を脱ぎ肩に引っ掛けながらある場所に向かった。

### 海鳴公園

夜風に吹かれながら大地が立ち寄ったのは公園の屋台ラーメンである。

「らっしゃい！よう！今日はデートか？」

「似たようなもんだ・・・おやつさんいつもの」

「あいよ」

そう言つて店主がラーメンを茹で始めた。席に着く大地は上着を置き一息ついた。

「んなかつちりした服着て良いもん食べてきたんじゃねえのかい？」

「あんなんじゃ食べた気がしねえよ・・・」

実は大地の場合階級と収入の割にはああいう肩の凝りそうなレスト

ランが苦手でこういう場所でひっそりと食べるのが好きなのである。

「おいよ！チャーシュー大盛！」

「いただきます！」「おじさん！私にも同じの！代金こちらさんに付けといて」・・・なんでおめえがいるんだよ・・・」

ドデカイ丼チャーシュー麺を食べようとした大地の隣に何故かいるスバル。

「いやあく私も実はお腹空いちやってさくそしてら屋台があつて大地もいるじゃん」

「はぁ・・・たく折角の行為を・・・おやつさんこちらさん量倍で・・・」

「あいよ」

そう言つて折角のタキシードとドレスなのに無作法で食べる二人は楽しそうに帰つていったのだった。

余談だが大地の苦労でスバルはテーブルマナーを間違えることなくゲンヤの会食は旨くいったらしい。

第五十五話 大地のデート2 お邪魔虫撃退大作戦(後書き)

シグナム

「そういえば……世間ではデートが盛んだな……」

新次郎

「そつすね……」

シグナム

「私達もやるか」

新次郎

「うんうん……ええええええええええええ!!」

次回！勇者指令ダグオンA's どっこい 新次郎のデート

新次郎

「なして俺がこげなことせいかなのよ!!」

第五十六話 新次郎のデート（前書き）

R2さんのリクエストです！

## 第五十六話 新次郎のデート

ある日の南家でサイモンの頭でごろ寝しているリイン。

「むふふやっぱり気持ちいいですこの頭もフモフモフしてるし」

よっぽど座り心地が良いのかくつろぎまくっているリインと何やら神妙なサイモン。

「……………」

「ん？サイモン君どうしたんです？あ！！」

サイモンの頭を徘徊していると10円髡げを起こしていることに気付くリイン。

「どうしたです！サイモン君！まさか悩みが！？」

「……………ああ……父さん……俺どうすればいいんだ？」

「どうしたです？全部言っつてスッキリするです！！」

「ああ……父さん……んじゃ言っけどさ……俺ある子と絶交しないといけないかもしれんだ」

「……………また思い話題です……………」

「いやさ・・・俺の友達がその友達の友達のせいで傷ついてさ・・・俺がその友達と友達になつたばかりに皆が傷つけられてさ」

「けど・・・絶交するのはやりすぎなんじゃ」

「俺だつて絶好なんてしたくないよ・・・けどさ・・・俺とその子が友達のせいで俺の大切な友達が傷つけられる・・・どっちかなんて選びたくないよ・・・友達だし・・・」

「その友達の友達と話し合ってみれば・・・」

「向こうは取り付く島もないの・・・俺たちにとっては言いたいことを言い合えてお互いの良い所も悪い所も全部ひっくるめて認め合つてそれで一緒に居てくれるのが本当の友達だと思つてるんだ」

「・・・まあ・・・確かに認められないんじゃ難しいです・・・ましては相手は認めようとしてもしないんじやなおさら・・・」

流石のリインも悩んでしまう。

「だったら俺が居なくなつて関係を断ち切れれば皆が傷つかなくて済むかなつて・・・徹底抗戦状態を続けられるんじやそうするしかないよ・・・絆を作るのは大変だけどそれを壊すのは凄く簡単なんだ・・・絆を信じてない奴から絆が大切って言われたり、平気で人を傷つける奴が人を傷つけるなつて言つても説得力無いよ・・・」

「まあ・・・それはそうですね」

「・・・けどありがとう父さん。言つてみて何となく吹っ切れた」

相当悩んでいたらしいサイモンはリインに明かしたことによって安心しそのまま昼寝をするのであった。

## 第五十六話 新次郎のデート

ある日の南家

『ここ！海鳴水族館は人気の海の生き物達がいっぱい！お友達や家族と一緒に是非いらっしやっってください！！』

テレビ見ながらため息を吐く新次郎。その様子を見ていたシグナムが話しかけてきた。

「ん？どうした？新次郎？」

「いや・・・さ・・・これ」

新次郎がシグナムに見せたのは一泊二日の温泉旅館ペアチケットである。

「どっしたんだそれ？」

「さっき福引で当てたんだ・・・男女ペアじゃないといけないらしくて・・・一緒に言ってくれる人なんて居ないし・・・」



しよゑる新次郎。そう新次郎は家の行事で旅行などに行ったことがほとんど無くたまに温泉に行ってもすぐに帰ったりしてゆっくり出来ない。たまには一人旅でもしたいのだが中学生にそんな収入など無い。

そして運よく福引が当たったのだが条件が男女で行くというのであった。

それを聞いたシグナムは・・・

「なら私と行くか？」

「へ？」

目が丸くなる新次郎。

そして夜中

「はぁ・・・」

部屋でため息を吐く新次郎。シグナムと出かけるというのに大層嫌そうである。

「・・・考えてみたら・・・デートなのか？・・・うわあ！俺はどうすればいいんだ！！？」

シグナムとデート？に絶望する新次郎。南家の男は全員デートが苦手らしい。

しかも男女の一泊二日の旅行。

初心な南家の男にとっては破壊力抜群である。

翌日

新次郎とシグナムは温泉旅館に向かうバスで景色を楽しんでいた。

「こんな山奥に温泉か・・・」

「シグナムさん・・・名湯って言うのは山奥にあるって相場が決まってるんすよ」

新次郎のうんちくに納得するシグナム。

だが

「時間までかなりあるな・・・」

温泉に着いた新次郎とシグナムだがまだ日は高い温泉に入るムードではない為近くの名所といえる場所を聞きそちらに向かった。

近くの小さな水族館

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

珍しい魚が泳いでいる姿を堪能する新次郎だが魚の集団を見たシグナムは・・・

「新次郎・・・どの魚を干物にしたら美味しいと思う？」

「シグナムさん・・・水族館でそういう目で見るとやめて・・・」

水族館の魚を干物にすることを考えたシグナムに呆れる新次郎。いつその事漁港にでも行けばよかったのではと思うのであった。

「なあシグナムさん？」

「ん？」

「楽しいか？」

「たまにはのんびりするの悪くはない・・・折角のデートだしな」

「デートって言うか・・・兄弟？」

「私が母親か？」

「それ親子!!」

珍しいシグナムのボケを突っ込む新次郎。

クタクタになりながら水族館から出てきた新次郎はアイスを買いに売店に行きシグナムは近くのベンチに腰を下ろした。

すると

「……ん？」

何故かイケメンの集団に囲まれるシグナム。

「何かよつか？」

「かゝのくじよ俺たちとデートしない？」

「生憎だったな……今デート中だ」

イケメンの誘いをあつさり断るシグナムに面白くなさそうな顔を  
するイケメン。

すると

「シグナムさくん」

「ああ来たか」

アイスを買に行った新次郎が戻ってくるとシグナムはベンチから  
立ち上がりその場を去ろうとするとイケメンが……

「なんだよ？ガキじゃねえか！？シヨタかよ」

明らかに馬鹿にした言い方をするイケメン。

「少なくとも貴様程度の男よりは何百倍でしたがな」

「なんだと！てめー！！」

イケメンがシグナムに殴りかかろうとする。シグナムにとってはあっさり避けられるパンチだがそれを見ていた新次郎が・・・

「ムカ！」

シグナムに手を上げようとしたイケメンを蹴り飛ばした。

「何すんだ！このガキ！！」

「うるせえ！女の人殴るような男は最低だって兄ちゃんが言ったぞ！！！！」

イケメンに噛み付く新次郎だがシグナムは・・・

（こいつ・・・私を女扱いするのか？）

奇妙な人間も居るものだと思底思うシグナムだが新次郎の猛攻が始まってしまった。

「この野郎！」

「ぐは！」

イケメンを蹴り飛ばす新次郎はそのままマウントポジションを取り殴りまくった。

「この！この！この！！！！」

完全にグロッキーになるイケメン。新次郎に殴られすぎてイケメンの面影が無くなってきていると新次郎にビビり他のイケメンたちは

とつとと逃走した。

「トドメだ!!」

新次郎がトドメを刺すべく拳を振りかざしたその時新次郎の拳をシグナムが止めた。

「それまでだ・・・新次郎」

「シグナムさん？」

「強い男は弱い者虐めはしないものだ・・・違うか？」

「・・・わかったよ」

シグナムの腕をぶつきら棒に振りほどくとイケメンをその場に残し旅館に向かった。

再び旅館に向かうバスの中

「新次郎・・・何故あんなことをした？」

「へ？」

「私はお前より戦える・・・お前が戦う必要はないだろう」

シグナムの言葉に新次郎は・・・

「だって女の人守るのが男だろ？」

「は？」

凄まじく単純な動機の新次郎に目が点になるシグナム。

「男は女の人を守る為に強くなれ・・・兄ちゃんがそう言ってたぞ。あんな兄ちゃんだけど・・・俺だって兄ちゃんみたいに女の人守れるように強くなりたいんだ」

「頭の作りは力と同じで単純そうだなお前・・・けど私を女扱いするのはお前くらいだぞ」

「だってシグナムさん女だろ？」

新次郎のアホな言い分に武人はため息をついたのであった。

## 旅館

「よ！」

「は！」

温泉に入った新次郎とシグナムは卓球をしていた。

凄まじいラリーが続いている。

力の弟であるためかシグナムに毎日苛めの様に鍛えられているせい

かシグナムと互角に卓球する新次郎。

「食らえ！紫電一閃！！」

「負けるか！！必殺！卓球打法ブライブロックドリフト！！！！」

必殺スマツシュが激突しあう中、新次郎が押し負けてしまった。

「ふう・・・いい汗かいたな」

「そつすね」

すると厭らしい顔をしたシグナムが新次郎の肩を組んだ。

「新次郎・・・私は汗を流す為にもう一風呂入る・・・度胸があれば来るが良い」

「！！！！！！」

シグナムの一発に真っ赤になる新次郎。

そんな新次郎を他所にシグナムはとつと風呂に行った。

（まあ・・・冗談なのだが・・・新次郎にそんな度胸は無かるう）

そう思いながら手ぬぐいを持っていくシグナム。

「どどどどど・・・どうしよう俺！！！！」

シグナムの冗談を真に受けてしまいえらくテンぱっている新次郎。



すると

「おい小僧……」

「え？」

何故か卓球場に来ていた変なおじさん。

「……お前さっきの姉ちゃんに誘われたのか？」

「へ？」

「悪い女だ……そう言うのが手なんだよ……お前が一緒に入っ  
た後『キャ！』って言って回り中警官に囲まれてお前は豚箱で1日  
過す……」

「そ！そんな事って！！」

パニックになっている為おじさんの言葉を真に受ける新次郎。

尚もおじさんは話を続ける。

「……女なんて猫と同じだ……近寄ろうとすれば避け放つとけ  
ば擦り寄ってくる……」

「そ！そんなんですか！？」

「……お前に残された道は一つだ……」

「はい！」

「度胸があれば来いと言われたか？」

「言われました！！」

「ならば迷うことなくお前の道を突き進め！一生のチャンスを棒に振るような真似はするな・・・いざ突撃だ！！！」

「わかりましたあああああああ！！！」

超慌てふためきながら卓球場から出て行く新次郎。それを見送ったおじさんは・・・

「ああいう小僧は煽っていると面白いや・・・」

そう言ってマッサージ器に座るおじさん。

だが新次郎は温泉に煮詰まるほど入り部屋でとっとと寝たらしい。

こうして新次郎とシグナムは無事に何事も無く帰還するのであった。



第五十七話 カちゃんのデート(前書き)

蛇さんのリクエストです！

## 第五十七話 カちゃんのデート

ある日の南家

「いいなあ・・・スバルとシグナム・・・」

スバルとシグナムが曲がりなりにもデートしたという話を聞いて羨ましがるはやて。

「まあ・・・ウチの相手になってくれそうなのは・・・」

「ZZZZZZ」

呑気に居眠りしているカちゃんを見つめるはやて。

「ねえねえ！カ君！！」

「ん？なんだよ・・・」

眠そうにしている力にはやてが尋ねた。

「どっか連れてって！！」

「え？」

突然の振りに目が点になる力。

第五十七話 カちゃんのデート

「何故にこんな事に」

南家の男は相当情けないのかデートにうろたえている。

旅行にいこうにも月のお小遣いはやてに貰っている身の情けないカちゃんにそんなお金など無い。

そして旅行に行ったら大概死んでしまうので行きたくもない。

精々行けるのは近くの健康ランドくらいである。

健康ランド

「ふう〜ひ〜」

とりあえず大浴場に入っている力とはやて。この健康ランドでは男女水着混浴が配備されている為プール感覚で風呂に入ることが出来る。

「力君、お背中お流しましょうか」

「やめてくれ・・・俺が死ぬから・・・」

はやての申し出を断固拒否する力。今の状況はただでさえ刺激的なのにそんな事したら鼻血の出血多量で死んでしまいかねない。

「もう情けないな」

「ほつっておけ」

「じゃあ、力君背中流して」

「断る!!」

はやての頼みを突っぱねる力ちゃん。以下同文。

尚はやては力の反応を見るのが面白いから言っているだけで力にそんな度胸は無いと自覚している。

「くそ・・・ぶっ殺してやりてえよ混浴なんて考えた奴!!」

心底そう思う力だったりする。

「ぶ、いいお湯だった」

脱衣所でレンタルの浴衣に着替えるはやて。

すると・・・

「浴衣が無い!!」

はやての籠に入っていたはずの浴衣が無くなっていた。

誰かが間違えて持って行ってしまったらしい。

「そつや!さっきの服・・・は!!」

着てきた服もグシヨグシヨに濡れてしまっていた。どうも服の入ったはやての籠がひっくり返ってしまい濡れた床に散ってしまった為ダメになってしまったようだ。

「どないしょ!折角お風呂に入って綺麗になったのに!また水浸しなんて!」

考え込んでしまうはやて。誰だって風呂上りに濡れた服は着たくないだろう。風邪を引いてしまう。

「こつなったら!!」

慌ててしまったはやては血迷った行動に出たのだった。

結果



「ばかあ！胸押し付けんな！！」

「しょうがないやるこの前おつきくなつたんやから！！そつちこそもつと向こう行け」

「出られるか！！」

力の浴衣の中にテレポーターションし強引に二人羽織りをするはやてだった。

「売店までの我慢や！辛抱しいや！！」

「俺にとつちや破壊力抜群なんだよ！！大体もつと良い手あつただろつが！！」

「仕方ないやろ！これしか思い付かなかつたんやから！！」

流石のはやても絶体絶命のピンチに頭が回らなかつたらしい。

そして売店で即興で服を買いトイレで着替えるのであつた。

「まあ〜どうぞ一杯」

「ジュースだけだな・・・」

食堂ではやてにお酌され刺しつ刺されつしながら食事する力とはやて。

「へえ〜冷やしうどん？」

「こりゃたぬきうどん？」

はやての習性を利用して食べる力とはやて。

その光景は恋人にはとても見えない。

ぶっちゃけ今の力は心労がたたりまくりぶっ倒れそうである。

何せいきなり何処か連れて行けと言われ拳句の果てには一緒に風呂とは……

このアホたれにそんな度胸などないであろう。

そして帰宅するのであるが……

「寒い……」

「だったらブレイブエラゴで来れば良かったやん……」

「街中でパトカー乗り回すと目立つでしょ……」

二人乗りで自転車に乗っている力とはやて。

ピンポン

自転車の二人乗りは危険ですので止めましょう

「うゝ冬やから寒いわゝ」

「風邪引くなよゝ」

「力君の子とが心配すぎて引いてる暇ないわ・・・へっくしょん！」

力の自転車の後ろに座っていたはやてがくしゃみしてしまったその時・・・

「うわ！」

突然バランスを崩してしまった力がハンドル操作を誤ってしまった。

更に・・・

「うぎゃあああああああああああ！！！」

運悪く避けた道が階段でありはやてがどき真つ逆様に階段から落下する力ちゃん。

この男の不幸は底が知れない。

結果

「災難でしたねゝ」

グニャグニャになってしまった自転車を溶接して伸ばしている楓。

「大変でしたね〜自転車君」

「大変だったな・・・自転車・・・」

「災難だよね・・・自転車」

「自転車より俺を心配しろよ!!」

仲間達が力の操作ミスで犠牲になった自転車君に同情しまくりながら直していると両手にギブス巻いている力が抗議した。

実は階段から自転車で見事に落下した結果両手が複雑骨折してしまいギブスを巻く羽目になったのだ。

尚シャマル先生は・・・

「あれやって欲しかったのよね〜」

とニヤニヤしながら力の骨折を治そうとしない。

その視線の先には・・・

「はい力君あ〜ん」

はやてが力のご飯を食べさせようとしている。力にいたっては初心な為超嫌がつている。

「何で・・・こんな事しなきゃいけないんだよ・・・腕がダメなら  
足で食べるもん」



第五十七話 カちゃんのデート（後書き）

サイモン

「悩みに悩みぬいたけどさ……ルーテシア……俺……お前と別れなきゃいけなくなった……皆を守るために……わかってくれ」

次回！勇者指令ダグオンA's どっこい さよならルーテシア

サイモン

「被害を受けないためには……俺が消えればいい……」

## 第五十八話 さよならルーテシア

第五十八話 さよならルーテシア

「……………」

何やら物凄い決意を固めたサイモン。その顔は重く冷たい空気を秘めていた。

「ルーテシア……俺……お前と絶交しなきゃいけないことになった」

そう決意するサイモン。

その理由は……

『むっ！』

セブンチエンジャーは、ルーテシアがケンタとハルカと一緒に天野平和科学研究所で勉強していると嫌な気配を感じた。

直ぐにルーテシア達にばれない様にジェット機で嫌な気配の方に行く……………」

「必殺八神スペシャルウウウウ！！！！」

はやてが何時もの様に力に制裁しようとしていたがその制裁が来る地点が天野平和科学研究所だと理解した。

そして！

ドカーン！！！！

「な！何だ！？」

力は、正面から行き成りビーム砲が来てそのまま押し戻されてしま  
う。

「へ？な！何や！？」

そのままはやてまでビーム砲が来た。

そして

「ギヤアアアアアッツツ！！！！」

そして二人は、しばらく頭が真っ黒焦げになって目を回していた。

しばらく八神組がルーテシアに悪い方に来ると八神組が謎の被害があつたの言うまでもない。

そして八神組が捜査しても一切原因不明で終わる。



なお、なのはやフェイトにも被害が及んだのは言うまでもない

更に

『むっ！』

またまたルーテシアが天野平和科学研究所でケンタ達と勉強していると何処からか「こんな所に見たらし団子が！」っと言う声が聞こえると楓が出て来ようとした。

次の瞬間

ドシーン！

セブンチェンジャーが魔方陣から出ようとした楓を踏み潰して未来に強制送還させた。

またまた数日後

『むっ！』

「一度死んでみるか？」

ルーテシアが買い物をする海鳴町の商店街でしているとハルカと会い話をしていると北斗が魚屋の店主に銃を向けていた事に気づき。

「言いたいこ……ドシーン！

目には見えない速さでセブンチェンジャーは、北斗にオーバードラ

イブシュートして空の星になってしまった。

それがきっかけで北斗とセブンチェンジャーのデスマッチがルーテシアの知らない所で行なわれていた。

ちなみにルーテシアのピンチの時や悪影響を与えられる時にセブンチェンジャーは、通常の戦闘力の1000倍になりどんな相手でも勝つスキルがある事は、言うまでもない

以上のことに激怒しセブンチェンジャーに説教をした後丸く収まったと思いきや・・・

ある日の事

「そうだったの・・・セブンチェンジャーがごめんなさい。セブンチェンジャーは、根は良い子だけと思ひ込みが激し過ぎて。」

ルーテシアは、飛鳥達をセブンチェンジャーの所に案内した。

『お前達は？』

「セブンチェンジャー。この二人は、私のお友達でね。セブンチェンジャーと仲良くなりたいらしくてワックス掛けて掃除したいって。」

『そうか、わかったお嬢。』

セブンチェンジャーは、飛鳥達に洗車されて気持ち良さそうだ。

「何でさ。セブンチェンジャーってそんなに八神組に対してあんな事するの？」

『奴等がお嬢に悪影響を及ぼすからだ。今でも断固攻撃に入るがな！だがお前達はお嬢の友達だ。洗車ありがとう。決して意地悪しないからな。困った時は俺を呼んでくれ。』

それを偶然聞いてしまったサイモンは……

「……結局そうなのかよ……」

言葉には大きな責任を伴う。ましてや勇者の言葉なら尚更だ。

そしてサイモンは悩んだ。

「どうすりゃいいんだよ……結局あれじゃよお……」

流石にここまでされた拳句あの態度を貫き通されるともう交渉の余地などなくなってしまう。

悩みぬいた末サイモンの答えは……

「ああ……わかった……簡単なことじゃん……俺が消えればいいんだ」

自分がルーテシアの前から消える事を選んだ。

夜

ビルの屋上にルーテシアを呼び出したサイモン。

「ねえサイちゃん・・・どうしたの？・・・！！・・・」

次の瞬間ルーテシアの額に銀色の何かを貼り付けたサイモン。すると銀色の何かは溶け込みルーテシアは気を失った。

倒れるルーテシアを受け止めるサイモン

「・・・これで良かったんだよ・・・」

サイモンがルーテシアに打ち込んだのは記憶変換装置である。ルーテシアの中にある自分がいる記憶の扉を開かなくする為の鍵である。これでルーテシアはサイモンの事を忘れ完全に関係は無くなり、セブンチェンジャーとも関わらなくなり力達がセブンチェンジャーに攻撃されることは無い。

そして眠ったルーテシアを天野平和科学研究所の玄関に寝かせるとサイモンは何も言わずに去っていった。

『王子・・・これで良かったんですか？』

ダイが心配そうにサイモンに尋ねるとサイモンは笑って答えた。

「ああ・・・後悔してないって言えば嘘になるけど・・・力達を傷つけないようにする為にはもうこうするしかないかなかったんだよ・・・仲間だしな・・・それに俺はルーテシアのことを覚えている・・・どっかで繋がってるかもな」

そう言うサイモン。

もって考え抜いたら別の方法があったかもしれない。

それを考えられず一番簡単な方法をとってしまっただけかもしれない。

追い詰められてしまった人間は後の無い行動に出してしまうのである。

そしてダグベースにセブンチェンジャーの識別反応を記録し、八神組はセブンチェンジャーの反応があったら出撃すらしらないことになるのであった。

ダグベース裏

「・・・・・・・・・・」

何も言わずルーテシアとの手紙を焚き火にくべているサイモン。ラディ星の文化では文通する友の手紙を燃やすことはその友との永遠の別れを意味していた。

翌日

学校から帰る途中のルーテシアとケンタ達。

それを見かけたサイモンを見つけたルーテシア。

「ルーテシア・・・あの人誰？」

ケンタがサイモンを指差してそう言うがルーテシアは・・・

「うっうん・・・知らない人」

そう言うってサイモンの横を通り過ぎてしまふ。

ルーテシアは完全にサイモンの事を忘れたようだ。

それを見たサイモンは・・・

「・・・元気だな・・・ルーテシア・・・」

その言葉だけを残しルーテシアの背中を見送った。

サイモン達は二度とルーテシアとセブンチェンジャーの前に現われる事は無かった。

第五十八話 さよならルーテシア（後書き）

そういえば、ことはがこの間将来の夢の作文を書いたなあ〜んで？将来何になりたいんだことはあ〜？へ？母さん何泣いてんだ？

次回！勇者指令ダグオンA's どっこい ことはの将来の夢

私は将来お母さんのように1万人の子分を力で纏め上げた暴走族の総長になりたいですって・・・こんなこと書いたら母さん泣くに決まってるだろうが！！

## 第五十九話 ことはの将来の夢

ある日の南家

「よーとー!」

「この!このこの!」

居間で対戦ゲームをしている力と新次郎。仲睦まじい光景であるが・

・

「ことはあああああ!」

「ななななな!なんだ!」

突如響き渡った母の怒声に驚きまくる兄弟だった。

第五十九話 ことはの将来の夢

南家透の部屋



「何があつた何があつた……」

力達が透の部屋に到着すると……

「お母さんのわからずやあああ!」

そう言つて透の部屋から飛び出してくることは。それを見ていた力は……

「お前あつち……俺こつち……」

「あいあいさ〜」

力に敬礼してことはの部屋に行く新次郎と透の部屋に入る力。各々の事情と主張を聞こうとする南家会議をしようとその為の情報収集をするのだ。

「母さん? どうした?」

透の部屋に入る力。すると何故か涙を流している透。あの透が泣いているという事は余程の事があつたのだろう。

「力……実はことはが将来の夢つて言う作文を書いたんだけどね……」

「うんうん」

百聞は一見にしかずで読んでみる力。

「私のお母さんは優しくして強くて女で一つで私達兄弟を育ててくれ

ました・・・私はそんなお母さんを誇りに思っています」

ここまでは何処にでもありそうな普通の作文である。

「私も将来はお母さんのように・・・」

次の文を見て仰天する力。

ことはの部屋

「一万人の子分を束ねた暴走族の総長になりたい!!?」

ことはの将来の夢に仰天する新次郎。

「なんで!? 看護師さんとか保母さんとかもつと女の子らしいのあ  
るだろう・・・」

新次郎の言葉にことは・・・

「だってお母さん格好良かったんだもん!! 私お母さん好きだもん  
!! お母さんみたいになりたいんだもん!!」

そう主張することはに新次郎は在りし日の現役バリバリの透の姿を  
想像した。

透の部屋

「・・・」

在りし日の透の写真を見ている力。その姿はロン毛の金髪と赤毛の二毛で鉄パイプ片手に特攻服に身を包んでいた。

完全にグレている。

「……母さん……何でグレたの？」

「……若い頃には色々あるのよ……」

遠い目をする透。

「……まさか楓のダグビークルがバイクなのって母さんの血を引いてるからか？」

等と我が子孫の特性を勝手に想像する力だった。

ことはの部屋

「ことは……お前暴走族に入るって言ったって暴走族も今大変なんだぞ……」

「私だって伝説の暴走族の娘だもん！！喧嘩の腕だって今から鍛えまくってるし！今から入れてもらうところも決めたし！免許の勉強もしてる！！自転車で腕磨いてるんだもん！！！」

「……おめえよ……」

ことはの主張に呆れる新次郎。ここ最近ことはの自転車の扱いが荒くなったのはこういう事だったらしい。

するこ

「甘いわよことは!」

「お母さん!」?

ことはの部屋に力と共に入ってくる。

「私は3歳の頃から三輪車で腕磨いてきたのよ!」

実はバイクのスタントマンにならないかという話まで来た透。

(筋金入りの族だな・・・)

我が母ながらおっかないと思う二人のせがれと目を輝かせる娘。

「それじゃあ・・・あの伝説の暴走三輪車もお母さんだったんだ!」

「え?」

ことはの一発に固まる南家。

「暴走族の間で有名だよ!」あいつは凄まじい暴走族になるって

「!」

「.....」

凄まじい嘆きのポーズになる透。

それを見ていた力と新次郎は・・・

(・・・母さんが嘆く理由が分かった気がする・・・)

更に・・・

「それじゃ！今日は集会があるからいつてきまゝす！！！」

「お前族に入ったのか！！！」

父・新吉譲りの行動力にあんぐりかえる南家。

結果

パラリラパラリラ！！

海鳴公園で集会を開いている暴走族。其処に参加してゐることは。

「リーダーも物好きだねえ〜んなガキ入れるなんて」

ヘッドの集会に参加していることは他のメンバーがからかってい  
ると・・・

「ことはー」

「あーお母さん」

昔の族仲間から集会の情報を聞いて駆けつけた透がことはを連れ戻しに来た。

それを見たヘッドは・・・

「んだよ〜結局ままのおっぱいが恋しいのかよ」

「・・・」

挑発に乗らないようにする透だが・・・

「なんだよ・・・なんか言えよ！ババア！！」

「・・・ババア」 目覚めた族の血

すると近くにあった暴走族のバイクを透は持ち上げ叩き壊した。その光景にびびりまくる暴走族たち。

「族が一般人に手えだしてんじゃねえよ！！！！族の相手はマツポだろうが！！！！！！」

「け！！いつの時代の族の・・・は！！！！」

透の顔を見た瞬間ヘッドがいきなり土下座し始めた。

「りーリーダーー！どうしたんだ！！？」

「馬鹿！お前らこのおば・・・いや！！！！このお方はあの伝説の暴走族総長！！南透さんだ！！！！」

「「「「「！！！！」」」」」

透の素性を知った瞬間ビビり始める暴走族。

「こ！この方が！！？」

「一万人の荒れくれ者を全員拳で黙らせて統率していた・・・」

「・・・喧嘩相手でも300人を相手に1人で・・・しかも素手で  
圧勝した・・・」

「公道レースで200キロで突っ走って無敵を誇ったって・・・」

「若気の至りよ」

暴走族の間で有名な伝説を語られ一蹴りする透。

「第一よ・・・てめえなんだその態度は！！？」

「へ？」

土下座しているヘッドに対して透が激怒した。

「ヘッドがおばさんに舐められてどうすんだ！！？ああ！！！！」

既に族の血が目覚めたせいで完全に暴走族モードの透。

「勝負しろ！！」

「く！！上等だババア！！」

やる気満々でジャブするヘッドに透はやる気満々で構える。

が

「!」

「・・・・・・・・」

「!」

「格好付けて・・・・・・・・のたんびに遠くに行こうとしてんじゃねえ!!」

どうも前評判が悪すぎるせいで喧嘩にならないので透が出した結果は・・・

### 海鳴山の公道

「・・・・・・・・」

結局族らしく走りで決める事にした透とヘッド。尚、透の伝説の走りを見れるという事で族OB軍団が詰めかけこった返していた。

それを見ていたことは・・・

「・・・お母さんってこんなに人気だったんだ」



因みにバイクは透が趣味の範囲で持っていた物である。

「走り決めようじゃねえか・・・コインが落ちたら勝負だ!!」

「へ!・・・へへ!!ロートルのババアの走りにまけつかよ!!」

「おつおつ族らしいこと言うようになったじゃねえか」

コイントスをしコインが地面に落ちるとスタートする透とヘッド。  
コースはカーブの多い山道である。

「お先に!!」

先に前に出たのは透である。

(すげえ走りだ・・・あのカーブにスピードを緩めないなんて・・・  
な!!150キロ!?)

連続コーナーを150キロ出しながら突っ走る透に驚きを隠せない  
ヘッド。

そしてストレートの一直線に入ると・・・

(な!!メーターを振り切っちゃがる!!)

自身のバイクのメーターを見ながら必死に透に食らい付くヘッド。  
だが透は・・・

「ふわ」

余裕ぶっこいて足でハンドルを操作しながら鼻くそほじくっていた。その光景を見てしまったヘッドは格の違いを実感し……

「あう……」

気絶してしまった。

「んげ!!」

気絶してしまった。

しかもこの先カーブである。

それ見てしまった透は……

「げ!!」

急いでバイクを180度ターンさせヘッドを走ってくるバイクから片腕で持ち上げ脱出させた。

無人のバイクはそのままがけ下に真っ逆様に落下し爆発した。

「うわぁ……久しぶりにはじけちゃったかな……」

気絶したヘッドを片手に流石に反省する透。

そしてことは共に解散を見送りながら呟いた。

「わかったでしょ……暴走族になるもの大変だって……」

「うん・・・じゃあ・・・自分で作る!!」

「ええええ!!」

どうもことは透の走りを見て惚れ直してしまったらしく暴走族への夢は膨らんでしまうのであった。

透の悩みの種が増えたのである。

第五十九話 ことはの将来の夢（後書き）

ビルガー

『ええ〜ここは銀河連邦〜』

ボルト

『俺たち八神組なのに影薄いよな〜』

デルタ

『しょうがないですよ〜俺たちロボだし〜人間相手の絡みはむずいんしょ〜』

ガンザー

『おおい皆〜』

ビルガー

『どうした?』

ガンザー

『どうも地球の凶悪集団を捕まえる為にチームビーストが動き始めたぞ』

次回！勇者指令ダグオンA's どっこい 襲来！銀河連邦

ビルガー

『凶悪集団ね・・・凄い心当たりがあるぞ』

## 第六十話 襲来！銀河連邦（前書き）

ビルガー

チームアルフェリスのリーダーで宇宙拳法の達人。宇宙を放浪していた時に拳法の腕を見込まれ銀河連邦にスカウトされチームリーダーとなる。宇宙を旅してただけあって伝説の勇者であるダイよりも宇宙の知識に博学であり宇宙の知識に乏しい八神組にとってはブレイン的な存在。思いつきの良さと決断力は八神組で1・2を争う行動派でもある。尚、4合体時の人格がビルガーなのは4人中で1番信念を突っ走ることが出来るからである。

ボルト

宇宙忍者の末裔。宇宙一とまで言われた忍者軍団の一人であるが性格がおちゃらけたお人よしという事で忍者らしくない性格から浮いた存在だったがはみ出し者集団のチームアルフェリスにスカウトされた。おちゃらけた性格だが面倒見がよく霧島園で忍法を披露して子どもを喜ばしている。尚、曲芸代わりに忍法を使っていることから宇宙忍者の中では罰当たりと言われている。

ガンザー

全宇宙レスリングで優勝経験がある宇宙レスラー。八神組の中ではサイモンに匹敵するほどの剛力の持ち主であり堅物で心優しい。一人称は『自分』。ビルガーとボルトの止め役である為気苦労が耐えない。格闘レスラーの癖にパワーを生かした重火器による射撃・砲撃が得意など手先が器用であり八神組の内職を手伝うと影では一番働いている。上記のように止め役である為八神組の仲裁を全てやる羽目になった。

デルタ

銀河連邦の新米隊員だが入隊した時の成績がビリの為はみ出し者チームであるチームアルフェリスに配属されるという屈辱的な入隊を果たすが、気楽な隊風である為、本人はむしろ喜んでいた。尚、成績がビリだったのは筆記試験だけで入隊が決まるからであり肉体の訓練は入隊した跡に徹底的に行われるからである。尚、デルタは肉体労働で突っ走るタイプである。全体を見ることが出来る脅威の空間把握能力と強靱な精神力を活かし合体時はサポートに徹する。メインを張ることの多い八神組の中では貴重なサポート要員でありサポートをやらせたら八神組で1番である。若い物が物腰が柔らかくチームアルフェリスの中では丁寧な性格のため上官や先輩・格が下でも年上への礼儀をわきまえ、『先輩』や『さん』付けで呼び自分の事も呼び捨てにさせるなどしている。尚サポートがメインの為に全体の状況の読みが鋭い。

## 第六十話 襲来！銀河連邦

ここは宇宙の果て銀河連邦

銀河連邦とは宇宙警察、宇宙警備隊、宇宙警察機構とは別組織であり少数チームのスペシャリストの集まりである。

『ふう・・・終わったあ・・・』

報告書を纏めたデルタが一息つくべく休憩スペースまで向かった。

『おいアルフェリスのデルタ』

突然背後から呼ばれたデルタが振り返ると鯨が立っていた。

『あ・・・あなたはチームビーストのシャーク隊長・・・』

『チエンジ！』

鯨から変形し人型になるとチーム業績ナンバー1チーム。チームビーストのリーダーシャークが現われた。

銀河連邦では担当部署になった星を検索しその星に適した姿をあらかじめ決めておくのである。

擬態するものは好みにより別れ攻撃力と柔軟性を求め動物に擬態す

るものも居れば、チームアルフェリスのようにパワーと機動力を求めマシンになるものも居る。一度擬態すると元に戻すのは非常に困難である為、基本任務が終わらない限りその姿で居続けるものが多い。

## 第六十話 襲来！銀河連邦

チームアルフェリスのデスク

『で？何を聞いたんだお前』

ビルガーが雑誌を読みながらデルタに聞くと・・・

『いや〜聞いてくださいよ先輩』

デルタがシャークに聞いた話を言い始める。

## 回想

『デルタ君！チーム内でビリの成績を誇る君達に特別に教えてあげようではないか！！我々はこれから地球に行こうと思ってるんだ！』！



『いやシャークさん・・・地球は俺たちの担当部署なんで』

『凶悪な集団一人逮捕できないなんて流石はビリの検挙率を誇るチームアルフェリスだな!!』

『で?どういう奴なんですか?』

『何でも地球ヤクザって名乗っててな!!凶悪な宇宙人と潰し合いをやってる上に地球を乗っ取るうとしてるんだ!!』

(ん?どっかで聞いたことがあるような・・・)

『何でも一番強いのは邪神らしいぞ!!』

回想終了

『それって俺達の事じゃねえか・・・』

ビルガーの言葉に頷くボルトとガンザー。

『俺もそう思いました・・・』

『不味いな・・・チームビーストは強引に解決しようとして有名だからなあ・・・』

いくら八神組とはいえ銀河連邦を丸ごと敵に回せば・・・

『銀河連邦が壊滅させられるかも・・・』

『全面对決はやばいぞ・・・』

八神組より銀河連邦の心配をするチームアルフェリス。

はつきり言って地球で最悪の極悪集団である八神組がその気になれば恐ろしいことになるのは目に見えている。

所属しているからこそ言える事である。

『じゃあ・・・やる事は・・・』

『はい・・・』

急いで銀河連邦から出撃するチームアルフェリス。

地球

『遅かったか・・・』

既にチームビーストが八神組と交戦を始めていた。

「げえ！げえ！何だこの鮫！！」

人間状態でシャークと戦う力の姿が其処に降りてくるチームアルフェリス。

『おお！待っていたぞチームアルフェリス！銀河連邦の恐ろしさを

「見せてやるっ！！」

そう言うシャークに力はビルガーの目を見た。

「何でこうなってんだよ……」

「とつとつ銀河連邦がお前らに目をつけちゃったんだよ」

「お前らの仕事に貢献してるんだろっが」

「お前らの日頃の行いが悪いんだろっが」

「所属してるお前らが何を言うか！第一銀河連邦だから説明しろよ  
！！」

「この人話の通じる人じゃないの……」

等と目で語り合う力とビルガー。

ピンポン

この会話はお互い無表情で目だけで成立しています。八神組構成員になれば奇抜な付き合いが長くなるので八神組内でこういう事が出来るようになります。

『ええい！地球の悪共め！』

とりあえずビルガーが前口上を述べ頑張ってみるが……

「くー！っ！」

(何やってんだお前?)

いきなり泣き始めた力ちゃん。

「うう！実は俺には腹を空かせた家族が居て無職の俺は家族を養っていかないといけないんです」

泣き落として誤魔化そうとしているらしい力ちゃん。

それを見ている付き合いの長いチームアルフェリスが・・・

(( (絶対嘘だ) ))

断言する付き合い長い銀河連邦チームアルフェリス。

だが

『ぐす！そうかああそうだったのかあ・・・』

シャークが泣き始めた。この人泣き落としに弱いらしい。

『あ！そうそう！こいつなあとー！ー！ー！でも恐ーい嫁が居てな』

『殺されそうになったことなんて山ほどあるんだぜ』

『日々の小遣いも500円しか貰えていません・・・我々も同情して逮捕に躊躇しまして』

ビルガー、ボルト、ガンザーの順番にありそうなのだが根も葉もな

い嘘八百ならべてシャークを誤魔化す。

それを見ていたデルタは・・・

(・・・先輩・・・組長に知られたら殺されますよ・・・)

等ツツコミを入れシャークを見ると・・・

『お〜っいお〜っい』

『シャークさん・・・あなた鯨だからってさめざめ泣かなくても・・・』

『デルタ・・・洒落てる場合じゃないだろ』

ボルトのツツコミをスルーしながらデルタはシャークを見る。

『そうかあそうだったのかあお前にもそんな事情があつたんだな・・・今日のところは見逃してやるっ!!』

そう言つてシャークは鯨に変形し泣きながら宇宙に飛び去つていった。

後日

「なあ・・・力君・・・この宇宙最強の恐妻家男つて見出し何？」

頭に筋浮かべながら笑顔で宇宙で一番人気のゴシップ誌『ギャラク

『シースポーツ』を突きつけるはやて。

実はシャークが新聞に同情話として新聞に垂れ込んだらしく力とチームアルフェリスが言った嘘八百が全宇宙に報道されてしまったのだ。

「これ見た人みんなウチのこと恐妻って言うんやろうなあ」

「てえ！お前嫁じゃねえっだろ・・・アルフェリスの皆は？」

「みんな火星で任務がある言うて行ったわ・・・」

「逃げやがった・・・」

「さあ〜力君覚悟は出来てるんやろうなあ〜」

「ぎゃあああああ！〜！」

この後力がどういふ運命で終わったかはご想像にお任せする。

第六十話 襲来！銀河連邦（後書き）

リイン

「……最近サイモン君の頭を狙っている小さな生き物が多すぎるです……サイモン君の頭はリインの物です！！」

サイモン

「まあ……小動物に好かれる頭らしいからな俺……」

リイン

「あのフカフカな頭は高級ソファー顔負けの座り心地です！あつたかいです！という訳でその座を賭けて決闘です！！」

次回！勇者指令ダグオンA's どっこい サイモンの頭争奪戦

リイン

「小さい生き物達勝負です！！勝負内容は電流デスマッチです！！」

サイモン

「父さん！人の頭で遊ぶな！！つか！そんな下らんことの為にわざわざレスラーのコスプレするな」

リイン

「ブー！！」

サイモン

「ぎゃああー毒霧だああ！！えげつないよ父さん！！」





## 第六十一話 サイモンの頭争奪戦（前書き）

南透

力の母。力の問題行動を抱える苦勞人だがかつて一万人の子分を力で束ねていた暴走族の総長であった。実は力の身体能力が高いのは父・新吉の血筋もあるが透の血も色濃く引いているからである。南家の嫁は強くなければいけないのは旦那の暴走を止めなければいけないためである。力よりも強い新吉を止めてきた為その為か実力は今の力よりも強く邪神化したはやてとも互角に戦える為はやての頭が上がらない人物である。

一万人の子分を束ねていた暴走族の総長であった為かカリスマ的な指揮能力があり力の6馬鹿を引つ張つていく統率力は彼女譲りである。

新吉と死別してもめげることなく子分達の伝を頼りにして再就職しまくり3人の子供を育て上げた肝っ玉母さん。

最近の悩みの種は新次郎とことはが力と同じようになってきてしまった事。

南新次郎

南家の男の中では良識がある方である中学生。態度には表さないが力を尊敬している為行動が力に近いが今のところ情状酌量の余地がある為逮捕はされてない。そのたんびに何故かシグナムが謝りまくっている。防御の為に力が喧嘩を仕込んだ為、力同様腕っ節は強く喧嘩なら今のところ負けたことは無い。女性は大切にしろという力の言葉に従いフェミニストであり力同様超絶的な初心だが思春期相應の感情は持ち合わせている分、力よりは女性に対する抵抗力はあ

る。昔囃まれたことがある為犬が嫌い。

不本意ながらシグナムに実戦形式で鍛えられてしまった為単純な剣術なら魔力補正の無い木刀のシグナムとなら互角に戦える。その理由は力のように戦う本能に優れてしまった為シグナムの剣術の良い部分を身体が自然に盗み取ってしまったからであり自称『無敵の新ちゃん剣法』である。長いものがあれば剣代わりに使うことが出来る為順応性が高い。

ほぼ毎日シグナム特製の干物を食べさせられている。

日本人の名前でひらがな5文字は呼びづらいということとシグナム限定で愛称を『新』にされてしまった。

南ことは

南家で一番ダークな小学生。一步間違えたらジョークにならない爆弾発言が多い上に南家で一番頭が良い為南家のブレインとも言える。力が父・新吉、新次郎が力を尊敬しているように、ことは母・透を尊敬している為将来の夢は透のように一人の子分を力で束ねる暴走族の総長になりたいと思っている。新次郎同様、力に喧嘩を仕込まれた為腕っ節は強く熊や宇宙人を素手で倒した事がある。ある意味で命知らずで無謀・度胸は据わっている。はやてに義姉になつてほしいらしい。南家で一番身軽な為ピョンピョン飛び跳ねる空中技が得意であり力が無い分は落下の重力で力増しを図る戦法を取る。

## 第六十一話 サイモンの頭争奪戦

ある日の南家の食卓

トントントン

相変わらず料理番でこき使われているはやて。

「はやて〜お腹空いたよ〜ご飯作って」

「はいはい今作りますよ・・・て！人を古女房みたいに言うな」

エプロン姿で大根切りながらリビングで寝転がっている力にそう言うはやて。

するとことはが・・・

「はやてお姉ちゃん面白くないよ」

「我慢せんかい」「子ども作って」「ぎゃあああああああああ！！」  
ことはの爆弾発言に指切ってしまったはやて。傷口から大量出血している。

「うわ！！シャマル大先生！！」

「はいはい」

今日もシャマル先生の回復魔法のお世話になる一行であった。

「おい新もうちよっへ行儀良くしろ」

「シグナムさんね」

シグナムに作法を言われる新次郎。

「いやあ〜ね奥さん新だつて」

「ねえ〜」

シャマルとことには指摘されまっ赤っ赤になる新次郎。

## 第六十一話 サイモンの頭争奪戦

「モフモフしてるです〜」

相変わらずサイモンの頭でくつろいでいるリイン。

くどいようだがサイモンの頭は非常に小動物に好かれるようにできているらしくリインにとっては高級ソファ顔負けのすわり心地であり超高級ベッド顔負けの寝心地らしい。

サイモンにいたっては諦めたらしくリインの事を『父さん』と呼ん

でいた。

「おい息子」

「なんだい父さん……」

等と言って遊んでいると突然カサリという音がした中を見ると・

・  
「お菓子の食べかす……」

食べた覚えの無いリイン。

そのままサイモンの頭に潜ってみると出るわ出るわでゴミが不法投棄されていたのだ。

「誰です……リインの頭にゴミを置いたのは」

考えてみるリイン。

「分かったです!!!」

そう言って心当たりを見てみると……

「よう!サイモン!」

「やっぱりノアです!!!」

お菓子の袋持って現われるノア。

「1」の「ミ」。ノアのです!」

「ああ!悪い悪いつい寛いじまって」

そう言つて頭をかくノア。ノアも気に入つたらしい。

「で?こっちは・・・」

ノアが自分のではないお菓子の箱を見てみると・・・

「私です!」

そう言つて現われるジエイダー。

・・・更に

「キュル」

サイモンの頭に止まるフリード。

その事で物凄く狭いサイモンの頭。

「む!サイモン君の頭はラインのです!」

「良いじゃねえか!ケチケチすんなよ!」

「そうですそうです!」

「キュルキュル!」

そう言つて3人と1匹はサイモンの頭で揉め事を起こし始めた。

その結果・・・

「人の頭で・・・」

「「「「「？」」「」」」」

「遊ぶなあああああああああああ！！！！」

先程から我慢まくっていたサイモンにより吹っ飛ばされてしまったリイン達。

だが驚いた反動で重度の凍傷を負ってしまったのであった。

「ふゝむ・・・」

困ってしまった小動物たち。このまま争いが続けばぶち切れたサイモンによって頭禁止令が出されてしまう。

そうならない為にも合法的に・・・

「体力測定です！！」

そう考えた末に出した結論は体力勝負をすることであった。

体力測定では自信のあるリイン。

結果

「いくです・・・」

「おう！」

「いつでも！」

ミツキが組んだ体力測定を始めるリイン・ノア・ジエイダー。

「よおい・・・ドン！！！」

審判のミツキが合図をすると一斉にスタートするリイン・ノア・ジエイダー。フリードは棄権したらしい。

理由は・・・

「持久走です！！！」

そう・・・体力の限界が尽きるまで走り続けるのである。勝者はサイモンの頭で一休みできる権利があるのだ。

3時間後

「ぜえ！ぜえ！！！」

「ひ！！ひ！！！」

何やら必死に走っているリインたちその後方には・・・

「じゅるる・・・」



涎たらしながらリイン達を追いかける畢。どつやらミツキが悪ふぎ  
けを起こし飴玉2個で呼び寄せたのだ。

目の前に美味しそうな？小さな生き物が居ること目を輝かせる畢。

「逃げるです！」

「いやだあ！！」

「畢ちゃんに食べられるのだけはいやです！！」

熱い視線の畢から逃げまくるリイン・ノア・ジエイダー。

目的が180度変わってしまいもはや畢から逃げる事が決着にな  
ってしまった。

尚、3人は無事に畢から逃げ切ったという。

余談だがサイモンはしばらく悠々自適な生活を送ったらしい。

第六十一話 サイモンの頭争奪戦（後書き）

力 「またまた来ました！毎回恒例のこの企画！南力抹殺大作戦！！またしても恨みを買ってしまった俺！もう恨まれることなどやりつくしてるから一々覚えてない！！なぬ！あの死神の生徒が暴徒になって襲ってきた！？」

新次郎

「ちよと待て！何で俺まで襲われるの！？」

ことは

「お兄ちゃんの馬鹿・・・いくらなんでも子供相手に戦うわけには」

力

「新ちゃんことはちゃん！俺に力を貸して！こうなりゃ！南家総当りじゃ！！」

次回！勇者指令ダグオンA's どっこい 南力抹殺大作戦7

力

「対戦カードは俺対砲台！飛鳥対死神！楓対ノア！新次郎対Dフェイト！ことは対Dはやてだい！」

新次郎

「ちよつと兄ちゃん！俺一般人よ！」

ことは

「というか飛鳥さんだけは相棒だから外せないんだ」

第六十二話 南力抹殺大作戦7

ある日のファイバードストリカーズ時代

「うひゃああああ!!」

何故か逃げ回っている力。

くどいようだが力は人に恨まれるような人間である為、海鳴の住民は力の命が狙われようが気にしなくなっただけらしい。

が

今回の相手は……

「この悪魔！フェイト先生の敵は俺たちの敵だ!!」

フェイトの生徒だった。

第六十二話 南力抹殺大作戦7

それはある日の事だった。

「あ」

フェイトが落としたロケットを拾った生徒。

中には力の写真が入っていた。

それをフェイトは慌てて回収した。

「いい！この悪魔だけは絶対に関わっちゃ駄目よ！！」

そう生徒に忠告していくフェイト。

本編から3年経っているのだが未だに因縁は消えていないらしい。

それを見ていたケンタは・・・

「フェイト先生・・・普通ロケットには恋人の写真を入れるんじゃない・・・」

自分の闘争本能を煽る為に憎き力の写真を入れているフェイト。アツカンベーをしてお尻ペンペンをしている写真である。

フェイトはこんな写真をどこから入手したのだろうか・・・

とにかくこんなものを見ていれば自ずと闘争本能は上がるだろう。

これを聞いた生徒達は・・・

「許せねえ・・・フェイト先生を困らせるなんて・・・」

「この悪魔野郎・・・ただじゃおかねえ」

フェイトのファンはどうあがいてもフェイトが絶対正しいと思うらしく。

「フェイト先生の敵は俺たちの敵だ!!」

「」「」「おおおおおお!!」「」「」

桑やら何かで武装したフェイトの生徒達に襲撃される力だった。

流石に子供相手に戦うわけには・・・

「食らえ!!」

いかにくない悪のヒーロー南力。素手で桑やらを叩き割る力だが何分数が多い。子供に直接手は出さないが武器破壊を行っている。

そこに・・・

「お兄ちゃんどうしたの?」

ちよつと学校帰りのことは。聖祥大付属小学校の制服に身を包んでいる。

「おーことはちゃん!ヘルプ!」

「え?」

「悪魔の妹だ!やっつける!!」

そう言うことはに襲い掛かるフェイトの生徒達。

するとことは……

「がっはっはっは！こんな事もあるのかといつもちゃんと準備しておいて良かったー！」

上着をバツと広げるとそこにはギッシリ積まれているガススプレー。

「えいや」

迷う事無く投げることは。するとガススプレーは爆発を起こし靄を噴出した。

「どう　ことはちゃん特性の煙幕弾は？」

自作したらしいことは。

「お前……いつの間にそんなもんを作った」

「こんな事もあるのかと危険物取り扱いの免許はとっておいたのだ」  
「！」

「どうやって！？それ有効なんだろうな！？」

そう言うって煙幕に隠れながら逃げる力とことは。この後生徒たちはフェイトに危ないことをしないようにと怒られまくったらしい。

尚、フェイトは……

「・・・あの悪魔・・・よくも私の生徒を・・・」

携帯電話を取り出して『南力を殺し隊』に連絡を取るのであった。

翌日

「　　」

呑気に道を歩いている力ちゃん。平和そうである。

だが

「覚悟おおおおおおお！！」

「死ねなのこの悪魔あああああ！！」

いつもと違いディバインバスターとザンバーの同時攻撃を受ける力。

「真剣白羽取りiiiiiiii！！」

真剣白羽取りで回避しながら器用にディバインバスターを避ける力。いつもに比べて攻撃が凄まじらしく因縁は強くなるばかりである。

「ち！！」

「ち！！かよ！！お前魔法少女がそんな口聞いて良いと思ってるのか！？」

「あんただけは言われなくなかったわあああああああああ

「！！！！」

ザンバーを握り締めているフェイトの手が強くなり徐々に沈み始める力。

「死ね死ね死にやがれなの！悪魔！！」

「うぎゃああ！！」

デイベインバスターの連続攻撃を避けまくる力。相当恨まれているらしい。

3年経つても因縁は消えるどころか益々悪化しているらしい。

既に3年間で襲撃された回数など数え切れない。

「何か・・・週に1回は襲撃されているような・・・は！？」

力が油断していると3つの力が飛んできた。

咄嗟に避けると其処に居たのは・・・

「力いい！楓を出せええ！！」

「やっぱりノアか・・・」

予想していた相手と・・・もう一人居たのはDフェイトとDはやてだった。

「うわぁ・・・まさかはやてに命を狙われるとは・・・」



「この悪魔・・・よくも私の物（D飛鳥）を・・・」

「覚悟は出来てるんだろぅなグズ・・・」

DフェイトはノーマルらしいがDはやては様子が変らしい。とうとう別世界のフェイトや別世界のはやてにまで恨まれてしまった力ぢやん。

「何かウチで言っいぶきが居るような・・・うわああ!!」

シュベルトクロイツをはやて仕込の棒術で振り回すDはやて。そして後方からDフェイトが斬りかかってくると咄嗟にバルデツシュを蹴り飛ばし回避した。

「逃げる!!地の果てまでも!!!!」

「『待てええええええ!!』」

逃げる力を殺すべく『南力を殺し隊』は襲撃をするのであった。

尚これを聞いた住民は・・・

「入ってて良かった『なのフェイ保険』」

なのフェイ保険とはある保険会社がなのとはフェイトの損害保険の為に立ち上がったものであり保険の出所は管理局の自腹であるらしい。



そしてパターンどおりの事になりいつも暴れる町外れの荒野にむかうのであった。

その途中

「あ！兄ちゃん！」

「お！新次郎！ちよつと来い！！」

学校帰りの新次郎をとつ捕まえて・・・

「あ！お兄ちゃん！！」

「ことは！ちよつと来い！！」

同じく学校帰りのことはをとつ捕まえた。

道中新次郎とことはに事情を説明する力ちゃん。

「まあ・・・兄ちゃんは人に恨まれるような人間だけど」

「ここまで恨まれるとは思わなかった」

実の兄貴に向かって身も蓋も無いことを言う弟と妹。

「こつなつたら！南家総当りじゃ！！」

そう言っつてなんやかんやいっつても決闘する荒野に来た力たち。

結果いつものように決闘が始まってしまった。

「食らえこの悪魔!!」

「うわあああ!!」

なのはが魔法を放つ瞬間力がレイジングハート蹴り飛ばし照準を強引にずらして回避した。

「く!この悪魔・・・今日こそ!!」

「来るなら着やがれっつ!!」

そう言っつていつもと違い喧嘩をふかっける力だった。

「は!!」

飛鳥の蹴りとフェイトのバルディッシュが交差する。

「ハラオウン執務官・・・いつもより恨みを感じるのですが・・・」

「私の生徒に手を出すなあああ!!」

「仕掛けてきたのは生徒ですっつて!!」

そう言いながらフェイトの攻撃を避ける飛鳥。

更に・・・

「勝負だ楓!!」

「ノアちゃん！！いい加減に諦めてよおお！！」

突撃してくるノアを竜巻で身を包み弾き飛ばす楓。

「風の結界か・・・ならばち破つてやるぜええ！！」

己自身を回転して楓の竜巻を破ろうとするノア。

「秘儀！ノアボンバー！！」

「うぎゃあああ！！」

ノアのトルネードアタックに耐え切れず竜巻ごと吹っ飛ばされる楓。

「行くぜ！新必殺技！！ローリングブレイザー！！」

腕を振り回しながらチャージしたエネルギーを楓に放つノア。

「レイソニックウェーブ！！」

ノアの新必殺技を超必殺技でかき消す楓。そこに・・・

「うげえええ」

背後からノアに蹴り飛ばされてしまった楓。実はこの技は見せ球だったらしい。

一方

本日初参戦の新次郎。

「ぎゃああああ!!」

持っていた竹刀でDフェイトの一閃を避ける新次郎。普段シグナムと実戦さながらの稽古をさせられている為戦いなれをしている。

「せいやああ!!」

「う!!」

バルディッシュを竹刀で受け止めようとするが・・・

ボキ・・・

「て!竹刀でんなもんに勝てるか!!」

粉々になった竹刀を投げ捨てる新次郎。

「何か無いか・・・何か無いか・・・あつた!!」

そう言つて木刀を取り出す新次郎。武器は頼りなさそうだが・・・

「そこだああ!!せいや!!」

Dフェイトのスピードを利用した攻撃をするDフェイトだが・・・

「うわ!お!とああ!!」

人間の目で捉えられないスピードの攻撃を避けまくる新次郎。シグナムに鍛えられまくったせいとか力と同じ血のせいとか魔導師相手でも防戦くらいなら出来るらしい。

「えつと・・・多分こう来るからこうよけれ・・・ば!!」

力と同じ戦闘に対する勘をフル稼働して攻撃予測をして動きを先読みしている新次郎。やはり並の人間ではないらしい。

そして・・・

「隙あり!!」

Dフェイトが油断した隙に一撃を加えようと懐に飛び込むが・・・

「甘い!!」

「ぎゃああ!!」

Dフェイトのバルディッシュの一閃で持っていた木刀をバラバラにされてしまい吹っ飛ばされた新次郎。

「く!相手が木刀じゃなかったら危うく一撃を加えられてしまうところだった・・・」

新次郎の身体能力に素直に感心するDフェイト。

武器無しで万事休す。周りには剣になりそうなものは無い。

その時

ヒューン

「え？」

「な！」

突如新次郎の目の前に空から降ってきたシグナムのレヴァンティン。

「え？使っているの？」

新次郎に因應るようにレヴァンティンがピカピカ光るとレヴァンティンを構える新次郎。力も無いのにDフェイトの対戦相手をさせられている事に同情したのか来てくれたらしい。

「よっしゃ！剣術なら自信があるぜ！！無敵の新ちゃん剣法みせたらうじゃねえの！！！」

「ほお・・・武器が強くなっただけでその自信・・・覚悟」

何故か時代劇のような背景になり剣戟を披露する新次郎とDフェイトだった。

一瞬両者が浪人姿になっていたのはスルーしていただきたい。

一方

「うひゃああああああ！！！」

「待て！逃げるな！グズ！！！」



Dはやてから必死で逃げまくることは。

だがここで終わらないのが南家で一番ダークなことはである。

「!！」

小屋の中に逃げ込むことは。Dはやても追いかけて小屋の中に入るが・・・

「なぬ!？」

いきなり小屋の中に仕掛けられていた起爆装置に驚くDはやて。すると小屋の四方八方から煙幕が噴出した。

「げげげほ!! 奴めいつの間にトラップを・・・ん!？」

視界が悪くなっているのにいきなり足元に爆竹とねずみ花火が放り込まれたことに気付くDはやて。

「うぎゃ ああああ!!！」

投げ込まれたものが爆発を起こして小屋の中でパニックになりまくるDはやては小屋を吹っ飛ばした。

「さあ！隠れるところは無いぞ!!！」

だが・・・

「むむむ...!!！」

何故か上から降ってくる金たらい。小屋を吹っ飛ばしたら振ってくるように仕掛けたい。

どうやってあの短時間でトラップを仕掛けたのである。

「おのれ!」

Dはやてが駆け出そうとすると・・・

「ん?」

何故かワイヤーに引っかかってしまったDはやて。すると四方八方からロープが放たれ身体中を絡め取られてしまった。

「く!!!あの小娘絶対に殺す!」

ことは仕掛けた数々のトラップに翻弄されるDはやてだった。

一方

「ええつと・・・あと何のトラップで戦えばいいのかな・・・」

Dはやてから逃げ回りながら仕掛けるトラップを考えていることはいった。

「ぜえ・・・ぜえ・・・」

「ふう・・・ふう・・・」

両者血塗れで構える力となのは……だが……

ガシ

「え？何！？」

何やら巨大なものに摘み上げられるのはとフェイト。

振り返つてみると……

『久しぶりだな……小娘』

「……だ！ダイノガイスト！！」

蘇るトラウマでダイノガイストを見るのはとフェイト。

それを見た力は……

「ちょっと待て！！ダイノガイスト！お前死んだんじゃないのか！？」

『気にするな……貴様ら……はやてに迷惑をかけているようだな……来い！』

「……うぎゃあああああああ！！」

そう叫びながらダイノガイストに摘み上げられるのはとフェイト。

更に……

「フカー!!」

「うぎゃあああああ!!」

突如現われた畢に動体を加えられるノア。

「ノア」

「ミツキ!？」

目の前でダーク化したミツキがノアの額を人差し指で

「いつも言ってるわよね、しばらく反省してなさい……」

「ぎゃあああああ!!」

畢の口の中にノアを押し込んだ。

尚ミツキが畢を呼び出した方法はケーキで釣ったらしい。

更に……

「新次郎! ことは!!」

「母さん!？」

新次郎とことはの目の前に現われた透。

「あんだ達まで力と同じことやってどっつするの!?!?!」

「うわあああ離せば分かるよ!!」

そう言っつて連行される新次郎とことは。

因みにDフェイトとDはやては・・・

3分前

「あたしの息子と娘に何すんだああ!!!!」

「「キユウウウウウ!!」

と暴走族モードの透に怒鳴られて気絶していた。

そして決まっつてこのオチ

「力君、どうしてこんな事になっつてるんや?」

どうやっつてここまで来たのか不明だが凄まじく怒っつている邪神モードのはやて。

そしていつもの如くりミットブレイクが発動し・・・

「これが押しおき八神スペシャルじゃあああああ!!」

「ぎゃあああああああああ」

そう言っつてモザイクにされる力であった。

めでたしめでたし・・・

第六十二話 南力抹殺大作戦7（後書き）

本日！管理局の為に防犯訓練をすることになった俺たち6馬鹿！ついでに言っちゃうと銀行強盗らしいぜ！よっしゃ！真っ向勝負で1億円を奪った成績を更新しちゃる！！

次回！勇者指令ダグオンA's どっこい 管理局防犯訓練

勝負だ管理局！

## 第六十三話 管理局防犯訓練

クラナガンで一番大きな銀行

【わいわいがやがや・・・】

人だかりが出来ていると何やら黒ずくめの怪しい六人組が入ってきた。

すると懐から銃を抜き・・・

「強盗だ!!!」

容赦無く発砲した。

## 第六十三話 管理局防犯訓練

「・・・始まったか」

銀行の外で待機している佐津田刑事。実は銀行強盗は力・飛鳥・北斗・サイモン・楓・大地である。



管理局の制圧訓練と銀行の避難訓練をする事になり管理局のスーパ  
ーコンピュータが犯人役に力達八神組の六馬鹿を選んでしまっ  
たのだ。

「今度こそ俺たちが勝つ！！」

リベンジに燃える佐津田刑事。

実は前回も同じ事を行ったのだが力達は完全包囲網の中から見事に  
1800万円奪って逃げ切ったという経験があり管理局に屈辱を  
与えてしまったのだ。

因みに奪ったお金は訓練終了後にちゃんと返したので問題は無い。

因みに管理局では・・・

「さあ！はったはった！！一口千円からやで！！」

モニターで中継されながらはやてを筆頭に盛り上がっていた。

尚、ミッドチルダのお金の単位が日本円であることはスルーして  
いただきたい。

「管理局に千円！」

「管理局に二千円！！」

次々と次々と管理局員に賭けていく局員達。その理由は相手が六馬

鹿である為本腰を入れたらしく・某砲台と死神を切り札として雇い更には新兵器まで用意したのである。

「管理局に二万円」

「管理局に今月の給料・・・」

シグナム・ヴィータも管理局に賭けていく。

「何や・・・皆管理局に賭けるんかい・・・シャルルは？」

するとシャルル先生は紅茶をすすりながら・・・

ドン！！

「・・・八神組」

そうやってアタッシュケースにある今年のボーナスと年収を全て賭けるのであった。

管理局が踏み込むタイミングは防犯ブザーを押した時であるのがルールである。

「強盗だ！みんな一緒に集まったれや！！」

そうやってカウンターに立ち両手で銃をバンバン撃つ力。

因みに力が撃ってる銃は楓が違法に作ったショック弾である。

ショック弾とは簡単に言えば当たったら気絶するだけの弾で人体に

は無害の弾である。

「手え上げる!!!」

飛鳥がノリノリで銃を撃ちまくっていると・・・

「・・・そお・・・」

銀行員Aが防犯ブザーを押そうとすると・・・

「おっと・・・そんな動きじゃ其処にブザーがあるってわかつちまうぜ」

サイモンによって銃を突きつけられ通報を阻止されてしまう銀行員A。

更に・・・

「!!!」

大地が監視カメラを破壊しまくり中の様子を分からなくした。尚、ルール上管理局が設置した演習中継モニターは壊してはいけないので壊していない。

「ちょっとお爺ちゃん・・・これじゃ誰も通報できないんじゃ・・・」

「何言っただ最近の強盗はこれぐらいやるぞ!!!」

「お爺ちゃん銀行強盗に鞍替えしたほうが良いんじゃない・・・」

等と言って汗を流す楓。

力達が迫真の演技をしている為銀行員達もマジでやらなければいけなくなりどう外との通信手段に四苦八苦している。

「金庫開ける・・・」

「え？これ訓練じゃ・・・ガンガンガン！！・・・ぎゃは！！」

口答えした支店長に向かって発砲する北斗。

「・・・貴様本物の銀行強盗が手加減してくれると思ってるのか？あくまでもリアリティを追求する為に銃で脅して金庫を開けさせる力たち。」

「よっしゃ！金詰める！！」

「えっさ！ほいさ！！」

用意したアタッシュケースに金庫からお金を積み始める六馬鹿。

・・・まるで本物の銀行強盗である。

「・・・後でちゃんと返してくださいよ・・・」

汗を流す銀行員。

一方管理局チーム

「おのれえええ!!まだか通報は!?!」

怒鳴る佐津田刑事に局員は・・・

「それが・・・六馬鹿の奴ら巧妙に通報できないようにしてるんです」

「おのれえええ南力!!」

怒りが頂点に達する佐津田刑事。尚砲台と死神も今か今かと出番を心待ちにしている。

すると

「佐津田刑事!ハッキングです!!」

「なぬ!?!」

突如管理局チームのデータベースがハッキングされ始めた。

銀行

「ええつとこれとこれ・・・」

楓が端末を繋いで管理局チームの戦力のデータを引き出し始めた。

「飛鳥さん・・・良いんですか・・・これルール違反じゃ」

「相手の状況を知る！今時の銀行強盗はこれくらいやるぞ」

「どうなっても知りませんからね・・・」

そう言って楓にハッキングまでさせる飛鳥だった。

するこ

ピー！！

今回の勝負の司会であるノルウェールがホイッスルを吹いた。

「ハーフタイム！」

あまりにも六馬鹿が用意周到さらに巧妙に通報できなくするので訓練にならないという事になり今の状況から通報されたという事にして再スタートする事になった。

ハーフタイム終了

「突撃！！」

手っ取り早く強行突入に出た管理局であつたが・・・

「ん？」

エントランスで何かのワイヤーを引つ掛けた管理局員A。

すると

ブシューウウウウー！！

「げっほげっほ！！煙幕！？」

周りから煙幕が吹きまくつた。

実は力がことには頼んで特性煙幕と特性起爆装置を自作させ管理局員を翻弄する作戦に出た。

因みに裏口では・・・

「くそおお！なかなか外れんぞ！この電子ロック」

裏口から突入するべく電子ロックを外そうとする局員。

裏口では・・・

「うわあ！この人速いよ！！」

端末を繋いでパスワード等を必死にリアルタイムで更新している楓。電子機器の扱いは八神組で右に出るものはいない。

更に・・・

ジビビビビビビビビ！！！

「スパーク！！」

正面突破部隊が煙幕でパニックになっている管理局員の床下に高圧電流式床電流を敷き局員達を痺れさせた後・・・

「ん！？」

ヒュンヒュンヒュン！！

床電流が作動したら大地が仕掛けたトラップである鳥もちが作動をし管理局員を絡め取った。

結果

「退避！退避いいいい！！」

早々に玄関から退散していく局員達。だが罠にかかった局員数名は人質に残ってしまったのだ。

「くそおお！奴らめいつの間にあんな罠を仕掛けた！！」

怒り浸透しながら指揮を取る佐津田刑事。強行突入に失敗した拳銃人質を増やしたのだ。

「貴様ら一般人に何を梃子搦っている！？」



「佐津田刑事やつらを並の人間と一緒にしないでくださいよ……」  
そう言つて呆れる佐津田刑事に……

『逃走用の車用意しろ!』

犯人側が要求に出たのである。

人質構えながらのその姿は完全な悪人である。

そして佐津田刑事の見解は……

「こつなつたら要求に応える振りをして時間を稼ごう」

メガホンを構える佐津田刑事。

『要求は!?!』

『車だ! スポーツカーで目茶スピードが出る奴だ!!!』

飛鳥の要求に佐津田刑事は……

『それじゃあサエグサモーターズのミツキスペシャルVZあたりで  
どうだ?』

『いいねえ!! ついでにレザーシート完備でな!!』

飛鳥の無理難題の要求に佐津田刑事は感じ取った。

「これは罠だ！？奴らこつちの時間稼ぎを利用して時間稼ぎをするつもりだ！！」

佐津田刑事達の時間稼ぎを逆手に取った飛鳥たち。

その時だった。

「佐津田刑事まだるっこしいの！」

「そろそろ私達の出番です！！」

砲台と死神が重い腰を開け殺る気満々の両者が指ばっちんしながら何かを持ってきた。

『戦車砲撃てえええ！！』

そうやってやってきた装甲車から発射される戦車砲にパニックになる六馬鹿とその他エキストラの銀行員の皆様。

「げげげほ・・・ちよつと待て！！管理局が質量兵器使って良いのかよ！？」

爆撃されながら抗議する力。

ピンポーン

ミッドチルダ的には正論である。

『やかましいの！！お前達の逮捕に手段は選んでられないの！！』

『ルール無用だ！次！！』

フエイトが指令を出すともつとやばい物が現われた。

「ちょっと待て！ミサイルランチャーにバルカン砲まで持ち出して戦争でもおっぱじめるきか！？」

『やかましい！ミサイル全弾発射！！』

ミサイル撃ちながら迫りくる装甲車に・・・

「ああ爽快！そっちがその気ならばこつちも！カモン！！」

六馬鹿が呼ぶと空から4つの影が降ってきた。

『おりや！！』

チームアルフェリスのビルガーによって蹴り飛ばされ横転する装甲車。

そしてボルトが手裏剣を構えガンザーが大砲とバルカン砲をフルオープンして構えデルタが状況を読み取った。

するとビルガーが汗を流しながら言ってきた。

『なあやってから言うのもなんだが・・・良いのか？俺たちが出てきて・・・』

流石にロボットののみでありながら魔導師とはいえ人間と戦つのは良心が痛むらしい。

「なあに言っただけだ！最近のミッドチルダの強盗はロボットくらい持って来るぞ！」

『あ……そ……』

もはやこの世界では何でもありなので気にしない事にしたのであった。

結果

「くう……なんて事なの……」

「ルール無用じゃこっちが不利だ……」

瓦礫被りながら状況が悪化したことに嘆くのはとフェイト。

尚佐津田刑事も焦げている。

その時

「いえええいいい！！」

何故かアタツシケースを持って正面から出てきた力達。後から銀行員も出てきた。

「ちゃんと後で返してくださいね」

手を振っている銀行員。

「貴様！何故犯人を逃がした！！」

佐津田刑事が銀行員の胸倉を掴むと・・・

「だってこのまま立て込まれちゃったら銀行が破壊されそうぞ・・・」

すでになのは達のミサイル攻撃で半壊している銀行。

「く！追っぞー！！」

「それが・・・」

「何！・な！！」

佐津田刑事が陣地を見ると見事に乗ってきた車両が破壊されていたのだ。

原因は・・・

「高町！！フェイトおおお！！」

なのは達が持ってきたものが爆発して車両を巻き込んでしまったのだ。

結果

力達は見事に逃げ切ってしまい追跡不可能になった。

「はぁ・・・勝負ありですね・・・八神組の勝ち」

会長ノルウェールのホイッスルと共に試合終了が宣言され管理局側の敗北が決まった。

尚、力達が奪っていったのは3億9千万円と前回の記録を大幅に更新してしまったのはスルーしていただきたい。

ピンポーン

ちゃんと全額返しました。

管理局の恥たる歴史が更新されたが破壊した銀行も楓が責任を持って直しました。その結果警備がえげつなくなってしまったのは言うまでもない。

因みに管理局では・・・

「ひのふのみ・・・」

賭けで一人勝ちしたシャマル大先生が大量の札束を数えていた。

「ふう・・・これで当面のはやてちゃんの破壊活動の弁償代は大丈夫だわ・・・」

そう言つて八神家では暖かい冬を過せたのだ。

因みに後日の銀行では本物の強盗が現われたのだが六馬鹿に比べたら全然苦戦しなかった為全て返り討ちにあつてしまったという。

第六十三話 管理局防犯訓練（後書き）

力

「突然俺たちの目の前に倒れていた赤い人・・・この季節に赤い人・・・まさか！あんたはサンタクロス！？何！？ぎっくり腰になっただと・・・ええええええ！！俺に代理サンタやれだど！！？」

次回！勇者指令ダグオンA's どっこい 力の代理サンタ

力

「今年も迷惑かけましたが！人の役に立ってみよう！！・・・とこるで・・・どうやって民家に入るんだ？」

飛鳥

「そりゃ〜開いてる窓からこっそり後は鍵あけて」

楓

「それじゃ泥棒じゃないですか！！」

## 第六十四話 力の代理サンタ

ある日の南家

「よっと!ほいっと!!!」

南家の前で雪かきしている力。昨夜雪が降って積もったらしく当たり一面が雪景色なのだ。

「うんしょ!!ん?」

道路沿いまで雪かきが終わると何かにぶち当たった。

「・・・嘘」

力の目の前に居たのはトナカイとソリ更に・・・

「・・・マジ?」

倒れている赤い服を着た男あった。

第六十四話 力の代理サンタ



「粗茶ですけど」

「どうも」

南家のリビングでお茶をすすする赤い人。トナカイは庭に止めている。

流石に尋ねるには勇気がいるが尋ねてみた。

「もしや・・・お前・・・サンタクロースじゃ」

そう言う方に男は・・・

「いかにも俺はサンタクロースだ」

「嘘だあああー!!」

絶叫する力その理由は・・・

「だって！サンタクロースとお爺さんだろうが!!」

目の前のサンタクロースはどう見ても20代の男である。

普通に見ればバイトのアンちゃんくらいにしか思わないだろう。

だがサンタクロースの反論は・・・

「失敬な・・・お前サンタクロースが一人しかいないと思ってるのか？」

「なぬ!?!」

「俺は新米サンタクロース若サンタだ！」

「へ？サンタクロースって一杯いるの？ていうかどっから来た！！？」

力の質問に答える若サンタ。

「俺はこことは違う世界・・・サンタの世界から来たんだ！！！」

「ああ・・・そう言えば次元世界って一杯あるよな・・・サンタの世界があってもおかしくない・・・それにしれも・・・サンタクロースって実在したのか」

納得する力ちゃん。

若サンタの説明だとこの世界とは別にサンタの世界があり毎年クリスマスになると各地域に向かって派遣されるという事であるらしい。

若サンタは海鳴担当らしい。

因みに力は悪い子なのでプレゼントは貰ったことが無い。

「ていうか・・・お前なんで俺んちの前に倒れてたんだ？」

「いや・・・前方から車が来てな・・・避けたらひっくり返った」

「そうかあ・・・サンタクロースも大変だな」

「これも夢を失わない為だ・・・んじゃ世話になったな・・・ぞいや

「!!」

若サントが仕事に戻ろうとしたその時腰に違和感があった。

「どした!？」

「どうも・・・こけたショックでぎっくり腰になったらしい」

「なぬ!!」

聖夜の夜にピンチ襲来。

「なんのこれしき・・・これでサントクローズが勤まるかってんだ・・・んぎゃ!!」

立ち上がるうとする若サントだがぎっくり腰は超痛いらしい。

「おいおい本当に大丈夫か!？」

「くう!このままじゃ長老サントに合わす顔が無い・・・そうだ!」

力の顔をジーンと見る若サント。

「何だよ・・・」

「お前体力ありそうだな・・・頼む!変わってくれ!!」

「なんだとおおおおおお!!!!」

結果

「等々お前はサンタクロースとも知り合いになったか・・・」

こういう時にこき使われる相棒・東飛鳥さん。

ついでに体力担当という訳で北斗・サイモン・楓・大地などが呼び出された。

「では担当地域だが」

若サンタのリスト表を受け取りながら位置を把握していく六馬鹿。

「うわ・・・広いよ・・・」

「ここ全部回るの?」

楓とサイモンが目を回している。

「・・・」

しかめっ面の北斗。

因みに北斗が参加した理由は・・・

「やってくれないと『パパ』って呼んじゃうよ」

娘の魔法の言葉であった。

最近強請る時によく使っらしい。

「うわあ！うち本物のサンタクローズにあったの始めてや！！」

若サンタにサインを強請るはやて。

そしてサンタクローズの掟という本を読みながら・・・

その夜

「よっし！準備できたぞ！」

はやての用意した赤いサンタ服を着て白いひげを装着した力・飛鳥・北斗・サイモン・楓・大地。

すると楓が手を上げた。

「あの〜なんで私だけミニスカ？」

「ウチの趣味や！！」

きっぱり言い切ったはやてに呆れてしまう力達。

白い袋を担ぎトナカイは若サンタの言う事しか聞かないため大地の迅雷でソリのプレゼントを積み出発する六馬鹿であった。

とある民家

「さあって・・・どうやって入ろうか」

民家への進入方法を考える六馬鹿サンタ。

「えっと・・・絵本によるとサンタクロースは煙突から入るんですよね」

だが

「残念ながら日本の民家に煙突はありません・・・」

絵本で予習した進入方法が不可能となり不測の事態が判明した。

結果

「ええっとこうしてこうこう」

周りを警戒しながらドアをこじ開けようとする飛鳥。

「しっかり見張ってるよ・・・通報されかねん」

「これって泥棒じゃないですか・・・へっくしょん！」

突っ込みを入れながらくしゃみする楓。

「どつした姉貴？」

「真冬にミニスカは寒いよお・・・て私スカート嫌いなんだよお」

嘆きながら寒がる姉を見棄てる弟だった。

何やら揉めていると・・・

「終わった・・・」

民家一号へのプレゼント配達が終わりちゃんとドアの鍵を描け次に向かった。

「ぎゃああああー!!」

庭に入ったサイモンが何かから逃げ回っていた。

それは・・・

「ガアアアオ!!!」

・・・ライオンだった。

この民家は途轍もなく広く庭でライオンを放し飼いにしているようであった。

「・・・俺嫌いだな・・・こついう金持ち」

「右に同じ」

力と飛鳥が外を見張っていると北斗が帰ってきた。

「どうだった・・・何で気功銃が火を噴いてるんだ」

「これだ」

北斗が持ってきたのはサンタクロースの格好をした男であった。

早い話が毎年恒例のサンタ泥棒らしい。

「て！撃ったのかお前!？」

「・・・サンタクロースを舐めた罰だ」

そう言っつてサンタ泥棒を捕獲する北斗。

一方

「!!!!!!%&%&%&%&!!」

必死に北斗が弾丸で開けた穴を塞いで塗装し新品同様にして誤魔化している楓。

伊達にダグベースのメカニックを一人で担当しているわけで凄まじく仕事が速かった。

サンタ泥棒は迅雷の中に閉じ込めておき次の家に向かった。

一方

「うちの出番はあらへんのか？」

サンタクロースの格好をして待機しているはやて。

「主・・・ああいう体力のある事は力達に任せたほうが利口です」

「そっやな・・・しもうた!!!」



「どうしたんです主?」

「ウチのプレゼントを強請るの忘れた!」

行動の遅さに愕然とするはやてだった。

尚、若サンタはラインからサンタの国についての質問攻めにあっていた。

「・・・へえ・・・へえ・・・後3件」

「早くしないと夜が明けるぞ」

夜明けまで後30分ほど・・・

方法が雑なせい警察に通報されながらも必死に代理サンタをやっている力達。

「・・・ていうか若サンタの奴毎年これを一人でやってんのか?」

「・・・すげえ重労働だな」

「一晩で終わるかなあ」

サンタクロースの体力を素直に称える力達である。

シグナムが決闘を挑みたいという理由も分かる。因みに手負いの者は襲われないらしく若サンタは見逃したシグナム。

そして最後の家に入った。

「さあって・・・ここは・・・は？」

何やら警戒嚴重そうなお屋敷である。

「えっと・・・若サンタのメモによると脅威の防衛システムのおうちらしいです」

「めんどくせえ・・・さっさと行ってさっさと片付けよう」

力が庭に侵入した途端。

「うぎゃああ!!」

レーザー砲に襲われた。

「どどどど!!どう言う事だ!?!」

「ああ・・・これ泥棒避けですね」

「納得した解説するなあああ!!」

レーザーに襲われながら必死に民家まで辿り着く力。

「よし!ドアを!!」

開けようとするが高圧電流が流れまくり焦げた力ちゃん。

「かつほかつほ！何だこりゃー！！」

トラップを仕掛けられまくっている嚴重な家を進入しながら頑張っ  
て眠っている子供のところへプレゼントを届ける力。

そして

コケコッコー！！

朝が来た。

「セーフー！！」

六人で頑張って海鳴の子供たちにプレゼントを配り終えた六馬鹿。  
気分は晴れやかで迅雷であったかい紅茶を飲みながらクリスマスマスを  
祝った。

海鳴警察署

「ふあ〜」

夜勤明けで帰ろうとしていた佐津田刑事の目の前に……

「何だこりゃあああー！！」

積み上げられているサンタクロースの山。

「何々・・・警察の方へメリークリスマス・・・」

どうやら六馬鹿はサンタ泥棒を大量に捕まえてしまったらしく警察に捨ててきたらしい。

こうして佐津田刑事の残業は続くのであった。

南家

「世話になったなあ」

ぎっくり腰が治った若サンタは力達に感謝しまくっている。

因みにぎっくり腰は・・・

「うりゃ！」「ぐええ！」「おりゃ！」「があ！」「でりゃ！！！」

シヤマル大先生必殺の整体で元に戻したらしい。

「悪かったな〜煙突式渡さないで」

「要するに壁抜け装置ね・・・良いつて良いつて・・・それにしても・・・俺もサンタクロースと友達になれるとは思わなかった」

「今度サンタの世界を案内するよ それじゃあな！！！」

そう言つて若サンタはトナカイと共に元の世界へ帰っていった。

そして

「しまったー！ウチのプレゼント貰ったの忘れてたー！」

とはやてが絶叫していたらしい。

第六十四話 力の代理サンタ（後書き）

力

「無事に聖夜が終わったなあ」

はやて

「何言うてんやクリスマスはこれからやで！」

力

「ふ〜んで？何やるの!？」

はやて

「ここはクリスマスパーティーって相場が決まっとるやろう!！」

次回！勇者指令ダグオンA's どころい 八神組のクリスマスパーティー

力

「お！兄さんも来るのか！」

## 第六十五話 八神組のクリスマスパーティー

ある日の出来事

影の守護者世界機動六課で同じ顔が滞在していた。

「やあ部隊長元気かあ？」

「やあ組長元気かあ？」

一人は我らが組長八神はやてもう一人は機動六課部隊長八神はやて  
(以降影の守護者はやて)

「組長こんなところまでどうしたん？」

影の守護者はやてが聞いてみると・・・

「いやあ～部隊長騎士甲冑交換せえへん？」

「は？」

脈絡の無い事に付いていけない影の守護者はやて。

「何で？」

「いやあ～来年のデザインを見てみたいんや」

そんなに変わらないデザインだと思いがとりあえずセットアップして  
みて交換してみるダブルはやて。

「なあこれ変わらないんじゃないんじや」

影の守護者はやての言葉を他所にはやてが・・・

「これで久しぶりに身体が軽くなったわ」

「え？ぎゃあああああああああああ！！」

ズボ！！

地面に沈んでしまったはやて。

実は我らがはやての騎士甲冑は力お仕置き用に身体を鍛える為重量  
が1億倍になっているのである。そして力お仕置き用の武器もそっ  
くりそのまま影の守護者はやてに渡してしまった為合計120トン  
以上はあるのだ。

そんな物を普段から来ているはやて・・・恐らく力との付き合いが  
長くなつたせいで身体能力が伝染したのであるう。

「ふう〜これでこの間の仕返しは出来たわ〜んじや騎士甲冑今日一  
日借りていくわ〜因みに解除できへんように細工しといたからなあ  
」

影の守護者特別編での仕返しを終えルルン気分で帰っていくはや  
てに影の守護者はやては・・・



「・・・おい誰かたすけてえな」

と埋まったまま呟いていた。

それを見ていたミツキは・・・

「面白そうだから放っておきましょう」

「んな殺生なあああ!!」

## 第六十五話 八神組のクリスマスパーティー

八神家

「~~~~~メリークリスマス!!」~~~~~

本日はクリスマス！八神組で集まりクリスマスパーティーが始まった。

光太郎も誘ったのだが仕事が忙しい為キャンセルになってしまった。

「て！この七面鳥はおれんだ!!」

「パスタはあたしんだ!!」

馬鹿コンビはパーティーメニューを取り合っていた。

「・・・きゃ！キャロ・・・メリークリスマス！！」

エリオが緊張しながらキャロにクリスマスプレゼントを渡している  
とある警戒をしていた。

「あれ？いつものパターンならここで『死ね！クソ猿！！』って言  
つて銃弾が飛んでくるような・・・」

警戒するエリオにキャロが・・・

「ああ！もしかしてこれの事？」

懐から北斗の気功銃を取り出した。

「え？・・・それどうしたの？」

「お義父さんにクリスマスの夜くらいは銃は止めて〜って言って没  
収したの」

「北斗さんがよく渡してくれたね」

キャロの度胸に感心するが・・・

「銃渡してくれないと一生パパって呼んじゃうよおって言ったらあ  
っさり渡してくれたよ」

魔法の言葉に目が点になる八神組。

(・・・キャロの奴北斗の扱い相当慣れてきたな)

(ダーリンもパパって呼ばせてあげればいいのにね)

力と紫が心中そう思うと・・・

「・・・くだらねえこと言ってんじゃねえよ」

しかめっ面で睨みつけてくるたれ目の金髪。

「やあ〜い銃の無いお前なんて恐くねえぞ〜!!ぎゃう!!」

サイモンがそう言った瞬間飛んできた北斗の第二の武器巨大ハリセン。銃に比べたら安全の為キャロに没収されなかった。

一方

「ほれ新クリスマスプレゼントだ」

「わ〜い」

シグナムからプレゼント貰って喜ぶ新次郎だが・・・

「干物・・・」

クリスマスプレゼントまで干物だったことに嘆く新次郎。

「なんだ？不服か？」

「いや・・・良いです」

引き下がる新次郎。このままこねたら大変なことになりそうだからである。

がオチは変わらなかった。

「んじゃ〜シグナムがリボンつけて〜私がプレゼント〜とでも言うてあげれば〜」

シヤマル先生の爆弾発言に・・・

「そうかそれも良いかもな」

ノリノリのシグナム。

そして

「あ〜・・・」

失神する思春期の新次郎。

「・・・冗談のつもりだったんだが」

真顔でそう呟くシグナム。

するとことはが・・・

「・・・新兄ちゃんのばあか」

と呑気にオレンジジュースを飲んでいた。



南家の男は全員超絶的な初心であるらしい。

更に

「はぐはぐ」

イチゴ大福を美味しそうに食べる舞人。甘党であるらしい。

更に更に・・・

「んじゃ次はおいらだ！うりゃ！！」

タクヤ・カズキ・ダイ・ヴィヴィオが双六で遊んでる。

「うひゃ〜1回休みだ〜」

双六は盛り上がっていると庭で・・・

「ライトアップ！！」

楓が自作したクリスマスツリーがライトアップされる。巨大な為盛大に輝いていた。

「~~~~」

サイモンが場を盛り上げる為にサックスでクリスマスソングを演奏している。伊達に流離のサックス奏者で通っていない。

飛鳥の作ったアルコールカクテルとノンアルコールカクテルを飲んでいると演目変わって力達によるコントが始まった。

「たっだいま〜・・・んだよ力カアの奴寝ちまったのかよんだああ  
よ」

酔っ払った力が家に帰ってくると・・・

「じー」

茶の間に座っているエプロン付けたはやて。

「んだよ！驚くじゃねえか！！」

「今何時だと思ってるんや・・・」

「何時だ〜」

「十一時や・・・しかもそんな酔っ払って・・・」

超呆れた目でジーンと力を見るはやて。

「全く・・・遅くなるならなるで連絡しいや・・・連絡無しで遅くなる  
と心配で心配でしょうがないんや！！うっうっ！！」

いきなり泣き始めるはやてに上が移った力は・・・

「そうか！すまなかったな「嘘や」「ずこー！！」」

はやてのフェイクにずっとこけるのだった。

「悪魔の心配はしてもあんたの心配はせえへんで」

「テメー!!われ!!……まあいちゃ……飯「無い」へ!?!」  
気を取り直して

「飯「だから無いって」へ!?!」

「ご飯無い事に怒る力。」

「お前!亭主が帰ってきたら飯の用意するのが女房の役目じゃねえのかいって!!」

「家に帰ってくるなり飯だ飯だ!うるさいんや!」

夫婦喧嘩していると……

「つまんない!!」

「いつもとやってる事変わんないじゃないか!」

ポップコーンやら何やらを力に投げ付ける八神組。

「ちょっと待て!何で俺だけ」

「お前な……はやくにやったら後が恐いんじゃ!」

ウンウンと頷く八神組メンバー。

力へのお仕置きの恐怖は骨の髄まで染み渡っているらしい。



そしてパーティ名物プレゼント交換に入った。

プレゼントを渡したメンバーはい省かれると・・・

ティアナから飛鳥へ・・・

「はい飛鳥さん」

「お！これいいグラスじゃん」

飛鳥にウイスキーグラスを渡すティアナ。デザインが相当凝っている為物凄い高級品である。

そして力からはやてへ

「ほいよ」

今回は洒落てイヤリングを渡す力。

「うわ〜力君にしてはセンス良いわ」

イヤリングに見とれるはやて。

すること

「ん？」

何かに気付いた。はやてに向かって何かを求める両手を出している







第六十五話 八神組のクリスマスパーティー（後書き）

はやて

「ふう〜寒い日はラーメンやなあ」

カ

「そういえば大掃除だな」

はやて

「もう大晦日やでんじゃ今度は」

カ

「だな」

次回！勇者指令ダグオンA's どんこい 八神組の大晦日

はやて

「御節の材料こうてきて〜」

## 第六十六話 八神組の大晦日

本日大晦日

というわけで南家・八神家では年を越す為に奮闘していた。

第六十六話 八神組の大晦日

「ちよつと力君！窓ふきい！」

「何でいまさら大掃除するんだよ……」

はやてに怒鳴られながら窓を拭いている力。そして……

「買いだし終わったぞお」

新次郎とシグナムが御節の材料を買ってきたと同時に御節作り始めるはやて。

「はぁ……毎度の事ながら気合入ってますね」

「まあ良いじゃん美味しい御節食べられるんだから」

飛鳥に言われてしかめっ面する力。実は御節好きであり一年分のパ

ワーは御節によって決まるといっても過言ではない。

「ぐびぐび」

何故かブラックコーヒーを飲みまくっていることは。

「ことはちゃんどうしたの？」

「ああ……うん……今年こそ除夜の鐘を聞こうとおもってドーナツを……」

毎年毎年除夜の鐘を聞きそびれていることは今年こそと言ってリベンジに燃えていた。

すると

「……おい……持ってきてやったぞ」

北斗がしかめっ面をしながら正月に食べる鯛を持ってきていた。

「サイモン！速く家具どけろ！！」

「親びん人使い荒くないけえ？」

ヴィータに宇宙人特有の剛力でこき使われるサイモン。家具の奥に溜まった埃を取るのだ。

更に

「お飾り！」

「それは鏡餅だボケエ・・・」

玄關の正月飾りを鏡餅の飾りにしてしまふ楓に突っ込みを入れる大地。

「もち米取れました」

ダグベースの畑からもち米を持って来るザフィーラ。完全に農夫である。

「ええっと・・・年賀状は出したしお年玉も用意した・・・後は年越し蕎麦や!!」

そう言うてはやてが電話をかけたのは・・・

「は〜いキャピトラダグオン店です」

キャピトラだった。

「あ!光太郎さん!お蕎麦の出前頼めますか!?!」

「え?いいけど」

「ほんならお願いします!!」

そう言うて電話を切るはやて。

その後も畳をひっぺがえしたり熱いお茶を飲んだりして休息し



夜

「毎度〽キャピトラで〽す」

岡持ち片手に蕎麦を持ってきた光太郎。八神組の六馬鹿に対しては温かい蕎麦が好きなため掛け蕎麦になった。

「毎度おおきに」

「それじゃ。これから新田さんちにも行かないといけなんだ・・・その後は深夜の初詣に行かないと」

そう言つて岡持ち持つて帰る光太郎を見送つたはやては光太郎に手を振り・・・

「奥さんと娘によろしゅうな」

「奥さんじゃないよー！ー！！」

何処かで奥さんの電波が聞こえた気がしたがスルーした。

「んじゃ今年も御苦労さんやつたなあ」

年越し蕎麦を持ってお膳を囲む八神組。

「ずるずる・・・美味しい・・・さすが兄さん」

「何だろうな料理人で食つていけそうだな」

光太郎の蕎麦を食べながら絶賛する力と飛鳥。

「かつおだしか？」

「うわぁ・・・コーヒー屋さん侮りがたし・・・」

北斗とサイモンも絶賛し楓は・・・

「ガツガツガツ!!」

「意地汚く食ってんじゃねえよ!!」

大地の鉄拳をお見舞いされるのだった。

「まあお一つ」

「あ?どうも」

熱燗で一杯やるものもいる。

相変わらず元気のいい組員にほっこりするはやて。

そして

ゴーンゴーン!!

除夜の鐘が鳴り響いた。

「今年も一年良い年になりますように」

その願いはやてであった。

第六十六話 八神組の大晦日（後書き）

新次郎

「はぁ・・・世間では正月と言っているなぁ・・・年賀状は・・・あ？何だこの落書き？」

シグナム

「ああ・・・これはベルカ文字だな」

新次郎

「何々？この悪魔決闘を申し込む・・・なんで新年早々兄ちゃんは決闘申し込まれるんだよ・・・しゃあない・・・俺が行くか」

次回！勇者指令ダグオンA's どっこい 新年の決闘

新次郎

「何だ？フェイトだっけ・・・毛の色が青いな」

## 第六十七話 新年の決闘

### 新年の南家

「「「「あけまして！おめでとございます！」「」「」

八神組で集まり盛大な新年会が行われた。

### 第六十七話 新年の決闘

「まあ、今年も一つよろしゅうな」

晴れ着姿のはやてによってお酌される力。

一方

「えっと・・・これは俺・・・」

年賀状を調べている新次郎。

すると奇妙なことに力宛に3枚の年賀状が来ていた。

「うわぁ・・・兄ちゃんに年賀状が来てるよ・・・誰からだ？」

興味津々の新次郎が読んでみると・・・

『今年こそお前を殺してやるの！・・・高町なのは』

『今年こそお前の命を貰う！・・・フェイト・Ｔ・ハラオウン』

新年早々物騒な物を送りつけられた力。

「ていうか・・・何であの二人俺んち知ってるんだ？」

別に招待した訳じゃないし住所を教えた訳でもないのに奇妙な事もあるもんだと思った新次郎。

そして最後の一枚を見ると・・・

「何だこの落書き？」

何故かハガキに落書きが書いてあったのに気づいた新次郎は・・・

「捨てちゃえ・・・」

年賀状と書いてないので捨てちゃった新次郎。

命あつてのものだねと言う奴であろう。

そして部屋に帰ると・・・

「さぁ飲んで飲んで」

「んぐんぐんぐー!!」

新年早々お酒飲んで出来上がっている力。

ピンポーン

力は留年している為20歳です。

「・・・良いのかな」高校生が酒飲んで・・・」

年齢的にはセーフである。

「もう一杯」

「正月早々飲みすぎや!!」

正月早々はやてに鉄拳を食らい頭蓋骨にヒビが入る力ちゃん。

その後もはやての作った御節食べながら盛り上がり元旦は終了した。

翌日

「ふああ〜」

再び朝早く年賀状を調べる新次郎。するとまたハガキが・・・

「何だこの落書き・・・捨てちゃえ」

再び捨てちゃう新次郎。

その日も初詣などで盛り上がり帰りに蕎麦食べて盛り上がった。

更に翌日

「ふああ〜」

また郵便受けを見に行った新次郎は再び落書きを見つけた。

「何だコリヤ？」

いい加減ウザくなってきたのでシグナムに相談してみると・・・

「ああこれは果たし状だな・・・」

実はハガキに書いてあった落書きは古代ベルカ文字だったらしい。

新次郎にベルカ文字など読めるはずが無いので落書きだと思っていた。

「このクソ悪魔貴様を倒して飛鳥にナデナデしてもらおうのだ・・・  
という訳で海鳴スタジアムに会い・・・だと・・・力に対する挑戦  
状だったようだな」

シグナムに読んでもらい理解する新次郎。

「で？新、力に言うのか？」

「え？兄ちゃんに新年早々決闘させちゃ可哀相だよ・・・ただでさえ先約多いんだから・・・」



くどい様だが力は大層人に恨まれている為決闘の申し込みが後を絶たない。

「ほつとこつよ」

「そつだな」

そう言つてシグナムがお茶を飲み部屋を離れると・・・

「かと言つて放つておく訳にも行かないし・・・しょうがない」

そう言つて源三特性の木刀を持つてチャリンコに乗り込み海鳴スタジアムに向かう新次郎。

「はぁ・・・兄ちゃんの弟やつてると苦労するよ・・・」

必死こいてチャリンコを漕ぎ、市街地を抜け、都心部を抜け、ビル街のど真ん中にある海鳴スタジアムに不法侵入した新次郎。

スタジアムのグラウンドに降りた新次郎はあたりを散策し始めた。

「えつと何処に?・・・ん?」

後方から鋭い気を感じ取つた新次郎は咄嗟に横に跳んで避けた。

「何奴!?!うわ!?!」

新次郎に襲い掛かる青い閃光は新次郎に纏わり付くように動き回ると新次郎の目の前に実体化した。

「・・・なんだ？」

光に翻弄され目を回した新次郎の目の前に現われたのはDフェイトだったが毛の色が違った。

「何だ？ハラオウン？いやあつちじゃテストロツサか？・・・けど毛の色が違う・・・何もんだ！？」

Dフェイト？は振り返るとデバイスを構えた。

「ボクは・・・レヴィ・ザ・スラッシャー！！どうだ！！かつこいいだろ！！」

フェイトと明らかにテンションの違うレヴィを見た新次郎は・・・

「（・・・ああ・・・親戚なんかか）で！！正月早々何の様だ！！」

本題に戻るとレヴィは・・・

「うるさい！あの悪魔は何処だ！？3日も待たせて！あの悪魔をやっつけて飛鳥にナデナデしてもらうんだ！あの悪魔は！？」

「兄ちゃんの代わりに俺が来た！」

そう言って木刀を構える新次郎。

「君じゃ役不足だぞ！・・・えいや！！」

新次郎に襲い掛かるレヴィだが源三特性の木刀で咄嗟に受け止める新次郎。

「へえ〜ボクの攻撃を受け止めるなんてね〜唯の人間の割りにねばるじゃん！！」

「うるせえ！お前の相手なんてこの俺で十分なんだよ！！」

「言っねそりゃああああ！！」

「うわ！！」

鏢迫り合いの状態から木刀ごと投げ飛ばされる新次郎は空中を舞いスタジアムの実況席の屋根に叩きつけられた。

咄嗟にしがみ付いて落下を防ぐ新次郎。

「う！すっげえ力だ！！・・・く！！」

屋根の端にへばり付きぶら下がっている状態から懐から鉤縄を取り出し引っ掛け、安全に降りていく新次郎。

だが

「え！？」

「うっしりゃ！！！！」

空中を降りている新次郎の真上にレヴィがやってきてロープを叩き斬った。

「ぎゃあああああああ!!」

当然重力に逆らえず落下する新次郎は観客席の地面に叩きつけられた。

「痛つてえ……」

途中まで降りていったおかげで致命傷にはならなかったが相当痛いらしい。

……まあ力の弟だから身体は頑丈なのであるう。そこに降り立つレヴィ。

「やるじゃん……だったら！ボクも手加減しないよ!!」

デバイスをフェイトで言うザンバーにするレヴィに対し新次郎は……

「こう言う時は後ろに向かって走る!!」

逃走を図った。

「待て！逃げるな!!男らしく勝負しろ!!」

「やなこった！俺は兄ちゃんと違って頭は柔らかいんだ!!正攻法で戦つかよ!!」

そう言ってマキビシをばら撒く新次郎。

当然追いかけてきたレヴィは踏んでしまった。

「痛っ！！もう怒ったぞ！！！」

涙流して青い光を放ちながら新次郎を追いかけるレヴィ。新次郎も足は速い方であるが魔力加速しているレヴィから逃げ切れるはずもなく。

目の前は壁になった。

「追い詰めたぞ！！」

レヴィが壁際に追い詰めるが・・・

「おりゃあああ！！！」

新次郎は勢いを殺さず壁を駆け上がりそのままレヴィの背後に回った。

「しまった！」

後ろを取られたと思うレヴィだが新次郎は・・・

「！！そりゃ！！！」

懐からもう一つの鉤縄を取り出しスコアボードに向かって投げ付け引っ掛けターザンの要領で向かい側の観客席に飛び込もうとすると・

・

「せいっや!!」

そのままロープを放し壁に向かって跳ぶと両手の平に鉤爪を装着し今度は壁伝いに下りた。

「むっかああ!ちょこまかと!!」

先程から正攻法で戦っていない新次郎に対し怒りを露にするレヴィ。だが力と違って普通の人間である為か本気を出しては大人気ないと何処かで思っている為明らかに手加減はしているレヴィ。

グラウンドに降り立った新次郎は木刀を構えレヴィを迎えつつ体制に入った。

「もう怒ったぞ!!正攻法で勝負だ!!」

レヴィがザンバーを振りかざすと新次郎も木刀で受け止める。ザンバーの攻撃を受け止められると言う事は源三が凄いチューンを施してくれてるからであろう。

「えいや!といやあ!!」

「う!!ぎゅ!!」

レヴィの攻撃を受け止め続ける新次郎。魔力補正を切っているとはいえ凄まじい剣術に翻弄されていく。

「はぁ・・・はぁ・・・おめえの剣・・・ただデカイだけじゃないん

だな」

「梃子摺らせて・・・だったら・・・決め技を出せば?・・・ボクもね!!」

青い光を放ちながら構えるレヴィに新次郎は一旦木刀を納め精神統一をした。

「!!!!!!」

一気に木刀を引き抜き肩に担ぎ、歌舞伎の様な構えを取る新次郎。

「真つ向両断!!」

レヴィの脳天に向かって木刀を振り下ろしたその時。

「いづくぞおおおお!!雷刃封殺爆滅剣!!」

脳天に向かってくる木刀を払いのけ凄まじい突きが新次郎に降りかかった瞬間。

「んぎゃ!!」

木刀が碎かれ新次郎の足が貫かれた。

「く!!」

左足のももを貫かれ激痛が走っているが折れた木刀を構えている新次郎。

「うつわあゝ闘志満々だねゝ勝負を諦めない人の目って奴か・・・  
それじゃあ・・・とどめ!!」

レヴィが斬りかかるうとした瞬間。

「ん?ぐえええ!!」

突然首に蛇腹剣が巻きつかれ回収される新次郎。

そこにいたのは・・・

「し!シグナムさん」

「アホか・・・貴様が奴に勝てるわけが無いだろう・・・とつとと  
帰るぞ」

「ぎゃあああ!!」

レヴィをスルーして新次郎を連れとつと帰るシグナム。

「逃げたか・・・それじゃあボクの勝ちだ!!」

そう言っただけで喜ぶレヴィ。

「強いぞ!凄いぞ!かっこいいぞ!!いえゝい」

その時

「ん?」



何やら頭からサラサラしたものが流れていることに気付いたレヴィは拭ってみると・・・

「ん？ち！ちちち・・・血だああああ！だだだだだだだだだだ！  
！」

パニックに陥るレヴィ。どうやら新次郎の真つ向両断が掠ったらしく切ったらしい。

「あゝ・・・」

レヴィは目を回して気絶してしまった。

南家・新次郎の部屋

「ちきしょう！あの野郎！」

左足に包帯巻いて布団で横になってる新次郎とそれ見て呆れまくっているシグナム。

「お前な・・・奴の突きは正確だった・・・あと少し深かったら足が飛んでたぞ・・・お前の木刀が砕け散った・・・相当の威力だろう」

「くっそ！けどあの弾道は見た！俺に同じ技は二度効かないんだ！」

「お前は聖闘士か・・・」

「今すぐリベンジに行つて・・・」足治してから言え「ひゃう！」

風穴の開いた足バシンと叩かれ痛い思いをする新次郎。

「それにしても・・・正月早々足に風穴開けてきて」

「シャマル先生が必殺ハンドパワーで治してくれらあ！」

「シャマルの奴正月は働きたくないと言つてたぞ」

1週間に1度くらいの割合で力の致命傷を治していれば嫌になるであろつ。

「んじゃ！シグナムさん松葉杖代わりになつてくれよ」

「ん？良いぞ？学校まで送り迎えしてやる」

「嫌だあああああ！！」

嫌がると思つて言つた言葉で墓穴掘る新ちゃん。

この時新次郎はレヴィィに対するリベンジを頑なに誓つたのであつた。

「次は俺が（ボクが）勝つ！！」

第六十七話 新年の決闘（後書き）

激

「おう！どうした！？なに！？犬が居なくなっちゃじゃと！？探してやりたいのは山々なんじゃが・・・ああもう分かったわい！ダグオンは犬の一匹や二匹くらい探してやる！！一般人の笑顔を守れんで何が勇者じゃ！！」

次回！勇者指令ダグオンA's どっこい 犬探し

激

「なに！？見つからんじゃと！？なら八神組全員出動じゃ！！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3304r/>

---

勇者指令ダグオンA's どっこい

2012年1月5日00時52分発行